第三種郵便物認可
毎月一回五日發行

女學世界



第四巻第十四號

口繪

漁村の天長節　五彩畫
陣中生活
乞巧節　毛筆畫
爵菊花

記事要目

愛國婦人會評議員會
東郷海軍大將の家庭
捕虜慰問の記
婦人と新聞記者
清浦子爵夫人
木越中將夫人
嫁の選ばれ方
家政二十四時
社會百生活
顔の話
秋の農家




東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕るべく候尙註文御案內書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店內一面に陳列致し置き候に付き御立寄り御縱覽被下度候

女學世界 第四巻第拾四號 目次

觀察……二

捕虜慰問の記……國分操子

婦人と新聞記者……原田豐次郎

座右十銘

社交

清岡子爵夫人……中村鈴子

木越中將夫人……中村鈴子

廣岡淺子夫人

家庭雜感……巖谷小波

家庭……三三

嫁の選ばれ方……嘉悦孝子

家政二十四時……河西璞

家政のくさ／＼……

素人療法……

氣欝症治療法……

育兒實驗……落葉女史

家庭のいろ／＼……さだ子

家庭の内職……

子供と貯蓄心……

輕便パン燒機械……

秋季總菜の取合……

馬鈴薯調理いろ／＼……

秋の庖厨……

衞生顧問……女醫者

姙婦の養生……

トラホームの話……

衣服の衞生……松岡義質

海外事情……九一

婦人界逸話……紅陵生

百生活……九七

牧師の平生……武田監涯

屬吏の生活……彌生女史

東北婦人の生活……齋藤鹿山

琴の指南所（家庭英語）……鶴々生

史傳……一二七

支那史上の婦人……大町桂月

珍書解説……一三六
通俗源氏物語(若紫)……水原翠香
科學……一四五
顔の話……糸左近
科學の智識……佐藤鴻南
雜組……一五九
女學生と結婚……雨谷一栄
今の女學生……中川愛氷
婦人と理想……高瀨文淵
時局彙聞……一六六
高輪御殿の御近況
郡司大尉の夫人
悲劇の極
冬衣の新柄
彙報……一七三
女子大學秋季運動會外十件
才媛詞藻……一七五
和歌(天長節、菊、秋の行路)
小説……一八五
離縁娘の一生……堀内新泉
秋の江……菱花女史

習畫手本
漁村の天長節、陣中生活(水彩畫)……三宅克己
天長節、爵菊花(毛筆畫)……跡見花蹊
消息文……三宅花圃
詩句、和歌……跡見花蹊

口繪
▲愛國婦人會小集
▲谷子爵の家庭
▲小笠原子爵の家庭
▲東郷海軍少將の家庭
▲樫村軍醫正の家庭
▲清岡子爵の母堂
▲婦人會の繃帶製作
▲深山幽谷

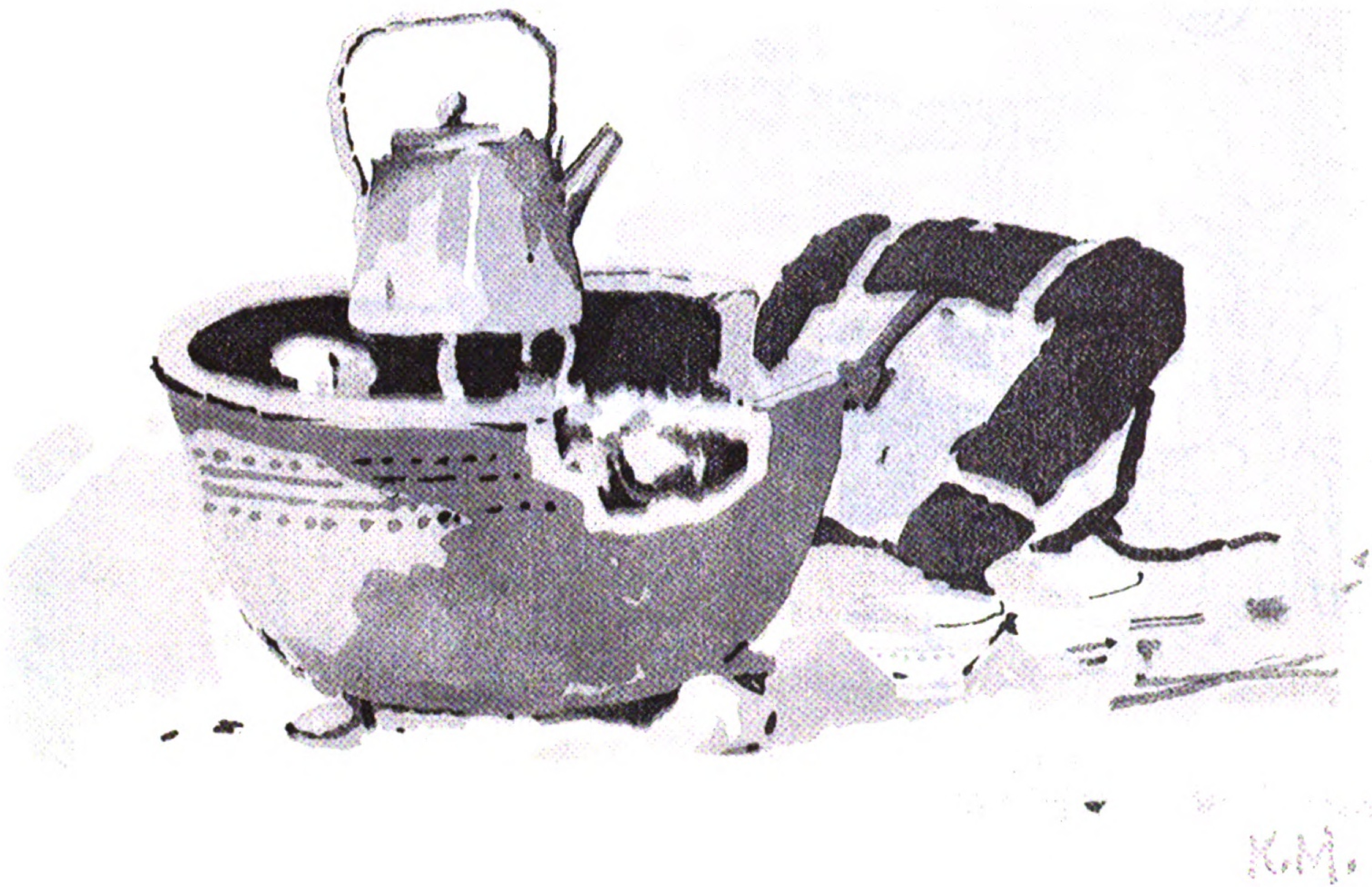
卷中插畫
東京各女學校の寫生……福田麥仙
秋の農家……田内千秋

漁村の天長節

三宅克己氏筆



陣中生活



三宅克己氏筆

爵菊花

跡見花蹊女史筆



天長節



跡見花蹊女史筆

てまゐらせ候も此ころはなか
これあまりの筆すさみ御笑ひ下され
筆とり候へて一筆まゐらせ候
みなみなさまへもよろしく御伝へ
まゐらせ候便よりあら／＼かしこ

[illegible]

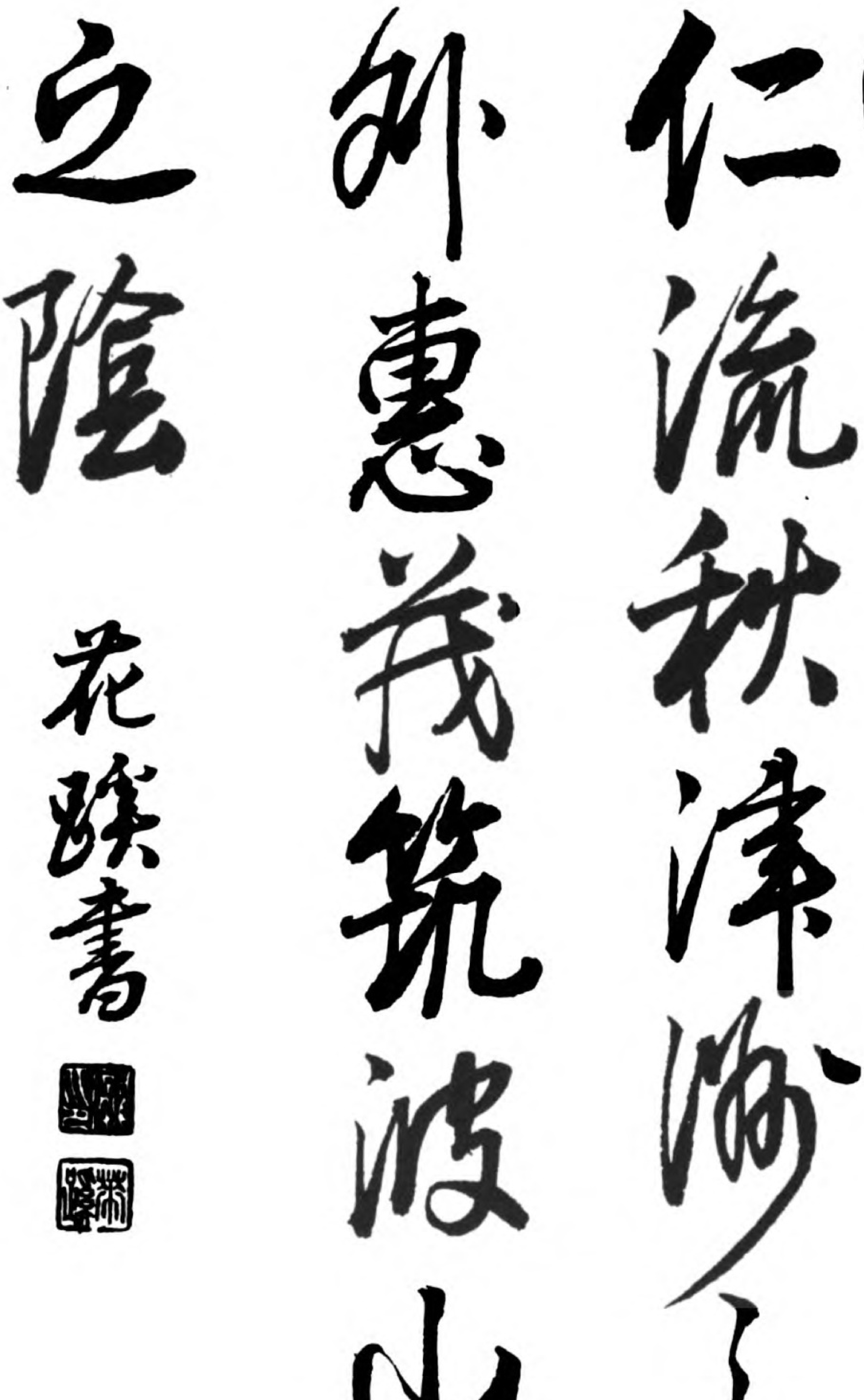
[illegible]

[illegible]

書[illegible]とつ[illegible]学の[illegible]

[illegible]の[illegible]

跡見花蹊女史筆



跡見花蹊女史筆

祝

よみ人しらす

萬世とみのりのやすけき
よろこふあるしの御代のまつりこと
たのしかるらむ

最も高評なる
最も正確なる
最も便利なる
最も經驗ある

卅八年 博文館 當用日記 懷中日記 發賣廣告

明治三十八年 當用日記

●紙數 中形大形共五百四拾餘頁 小形五百卅餘頁

大形 菊判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ●正價金五拾錢 郵税拾四錢

中形 四六判 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入） ●正價金五拾錢 郵税拾貳錢

中形 四六判 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ●正價金三拾五錢 郵税拾錢

小形 菊判半截 上製（舶來洋紙總クロース金字入） ●正價金三拾錢 郵税八錢

特色

用紙 何レモ海外製紙會社ヘ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ

印刷 秀英舍新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ

製本 弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス

趣向 （當用日記） 日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、七曜、干支等ヲ録シ天氣、寒暖、受信、發信等ヲ記入スベキ欄ヲ設ケ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記録タラシムルニ適セリ附録トシテハ紙數十二頁ノ補遺金錢出納

(甲の二)

全書新刊

第百拾七編

文學士久保天隨君著

日本儒學史

(製本既成)

「戰國時代朱學の泰斗桂庵玄樹禪師、示寂の後正に四百載、南信兜城の處士久保天隨、其稀世の學德を追慕するの餘り謹んで此書を撰し、聊か蘋藻の勇に代ふ」これ著者が本書卷頭に題せし辭にして其用意の周到なるを知るべし、一卷三百餘頁、先づ「應神以前漢籍傳來の有無に起し、王朝の學者を傳し、次いで五山戰國に及び、禪林俊髦の事蹟を審にし「藤原惺窩の南航」「南學の弘布及革造」すに至る、敍述詳悉、考證精確、從來尋常史家の困却せし隱伏せる事實を抉剔すること極めて夥多、まことに破天荒の一大撰述たるに負かず、本館特に請ふて本叢書中に收むる所以、固より徒爾ならざるなり。

上製 五拾五錢
郵稅 拾五錢
並製 四拾錢
郵稅 八錢

第百拾八編

彥根第三佛敎中學校敎頭 文學士石原即聞君著

日本佛敎史

(製本既成)

佛敎の初めて我國に傳來せしは今より一千三百五十二年の昔の事なり、其間時に弊害なきにあらざりしも我國の精神的幷に物質的の文明に貢献せし處實に尠しとせず、斯く我國の文明に多大の關係を有する一大宗敎の傳來起原若くは敎義の研究に心を用ゆるは少くとも現代學者の義務なり、彥根第三佛敎中學校敎頭文學士石原即聞君夙に玆に着眼し今や本書の著あり、由來我國佛敎史に關する書少からずと雖其多くは專門家の手に成り、一般人士の解しがたきもの多し、然るを本書は此缺陷を補ひあらゆる諸書を參酌して沿革的系統を立て最も平易に其變遷を敍述せられたれば日本佛敎の歷史を知らんには無比の良書なり

上製 五拾五錢
郵稅 拾五錢
並製 四拾錢
郵稅 拾錢

本町三丁目 博文館

(甲の五)

内閣總理大臣伯爵桂　太郎君題辭
内務大臣子爵芳川顯正君題辭
司法大臣波多野敬直君序文
内閣法制局長官法學博士一木喜德郎君序文

増訂 現行 日本法令大全

博文館編輯局編纂

全壹册洋裝
背皮金文字
入紙數約三千七百餘頁

▲正價五圓 小包一貫二百目 送料金四十錢
本年十一月卅日限り迄の注文に限り豫約價參圓五拾錢 外に要送料

法規を類聚せるもの、中に於て最も精確なるものとして好評を博したる本書は玆に十三版を發刊するの盛運に會せり輯むる所の法規は維新以來今明治卅七年十月に至る三十六年十ヶ月間に發布せられ現に其効力を有するものは大小新古を問はず殆と之を網羅したり類を分つ二十有餘、類中更に篇、章、節、款に分ちて序次整然、加ふるに目次には總目次あり又類別編年の諸目錄ありいろは引索引ありて其搜索に便せるが上に今回よりは新に爪掛見出を附したるを以て輯むる所の法令約一万に逹せるに拘らず搜索に時を要せざるは編者數年の經驗上得る所のものにして本書の誇とする所なり其校正は事務の整頓と敏腕家の集合とを以て名ある東都第一の工塲秀英舍の擔當せる所にして誤植脫字のなきも亦本書の一特色とす其他製本は堅牢にして繁き使用に耐へ體裁は高尚にして机邊の裝飾たるに適す請ふ發售の日を待ち購求を賜へ

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の八)

愛國婦人會評議員會小集



第一列右より(2)細川侯爵夫人 (3)谷子爵夫人 (4)鍋島侯爵夫人
(5)岩倉公爵夫人 (6)毛利公爵母堂 (7)前田侯爵母堂
第二列右より(5)千家男爵夫人 (6)松前子爵夫人 (8)伊集院夫人
第三列右より(1)濱尾夫人 (5)奥村女史 (6)山脇夫人
(7)佐藤夫人
第四列右より(3)鳩山夫人 (4)棚橋刀自

谷子爵の家庭



令孫儀一氏（近衛第二聯隊少尉）令息龍蟠氏

令孫守人氏令孃滿津子

小笠原海軍中佐の家庭



子爵小笠原長生君　長男長隆君　長女武子



子爵夫人秀子　夫人令妹（松平伯爵令嬢）梅子

東郷海軍少將の留主宅

令息安氏　令嬢德子



令嬢廣子

松方伯爵題辭　井上伯爵序文

十五銀行頭取園田孝吉君著

赤心一片

（十一月中旬發行）

全壹册洋裝菊判
紙數約三百頁
正價
郵稅

日露戰爭は帝國空前の國難にして國家存亡の繫る所なり、此秋に方り國民たるもの貴賤貧富を論せず堅忍奮勵大に軍資の供給を圖り出征將士の忠勇義烈と相俟て以て國家最終の目的に達するを務めざるべからず此書は園田氏が軍資の供給其他政治經濟社交風俗等に關する赤誠餘情にして松方伯は本書に題するに言々愛國の四字を以てするもの偶然にあらざるより讀者乞ふ一本を座右に備へ以て軍國に處する國民たるの精神を養ふべきなり

目次

●緒言●軍資應募と國民の覺悟●戰時經濟●戰時經濟と時弊矯正●軍資供給と經濟の維持●戰時の經濟●戰勝國民活動の準備●戰局の遷延と財界●戰捷國と弊害矯正●戰時の金融●戰時の二大急務●帝國の危機●時局と經濟界●日英米三國懇親會●日進春日歡迎會●黃禍說の奇●日英商人の長短●日米同盟の約束●日本の進步●條約改正諷刺●國狀吹聽の必要●俱樂部の効力と社交上の注意●歸朝後の所感●東西銀行事情の相異●銀行の業務●公債と國家の信用●商工業者の德義●青年實業家に望む●交際の具●英語演說片々●感謝の辭●出征軍人を送るの感今昔の感

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

(132)

理學博士石川千代松先生校閲
東京美術學校教授和田英作先生挿畫
武田櫻桃君
木村小舟君合著

少年動物画談

製本既成

▲全壹冊洋裝美本紙數約二百頁極彩色石版口繪及精密標本畫三十一枚挿入 正價廿五錢 郵稅六錢

哺乳動物は固より昆蟲社會に至る迄平易簡單に説明し家庭に於ける幼少年諸君が動物研究の一助たらしむる目的で編んだのがこの書でありますが著者は永年少年文學に從事して此種の著作は手に入つて居るのですから其筆緻がよく幼少年諸君に理會し易きは固より學理に偏せず高尚に流れず娛樂談笑の間知らず／＼智識を得らるゝ樣に出來て居ますから大方の幼少年諸君は是非共一讀の上新智識を得給へと申す。

池田米太郎君著 ●日曜の植物採集 正價十五錢 郵稅二錢

池田米太郎君著 ●日曜の昆虫採集 正價十五錢 郵稅四錢

木村小舟君著 ●春夏秋冬 理科手引草 正價三十八錢 郵稅八錢

木村小舟君著 ●理科春秋 正價二十錢 郵稅四錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

法學士武田千代三郎君著

●心身鍛練 少年競技運動

正價十八錢＝郵稅四錢

本書は室外教育の理法に通曉せる武田先生の宇内近時の大勢に鑑み、近き將來に於て世界に覇たるべき天運を有する我帝國少年の爲めに、如何にせば能く其身心を訓練して大國民に缺くべからざる實力を養ひ得べきやの問題を極めて簡明平易に解説せられたる空前の良書にして戰時の讀物として、毎家庭に一本を缺くべからざる寶典なり、江湖の父兄諸氏子女の家庭に於ける敎養を忽諸に附せざらんと欲せば必ず本書に依らるべし。

破竹居士著 ●健康と遠足 正 郵

遠山熙君著 ●馬術 正 郵

發兌元 東京本町 博文

(乙の六)

報告（寫）

依頼者 東京市日本橋區本石町三丁目十八番地 合資會社博愛堂

第百七十七號

一植物性滋養食料（MARMITE）壹種

水分、ペプトン
アルブモーゼン
蛋白質、總窒素
鑛物質の定量

右試驗の爲め當所へ差出したる品は黑褐色の「エキス」狀物質にして溫湯には殆ど澄明に溶解し酸性反應を徵し氣味佳良なり今之に付き定量分析を施行するに本品百分中に含有する主成分の分量左の如し

總窒素量	五、八二三
ペプトン	三、九三〇
アルブモーゼン	二、四三〇
蛋白質	〇、二八三
鑛物質（灰分）	一九、三六六
水分	二六、八〇三

明治三十七年九月十五日

內務省
東京衞生試驗所長
衞生試驗所技師 藥學博士 田原良純 ㊞
主任 衞生試驗所技手 杉方東之助 ㊞



肉エキス、ペプトンよりも、數倍の効能ある滋養品

マーマイト

滋養品の大關

▲マーマイトは植物の精を抜きて製造したる最新發見の滋養品にて肉製のそれよりも貴重なる滋養分を多く含蓄せり

▲マーマイトは左の時期に於て最も奇効ありリユウマチス、胃弱性、胃腸病、貧血衰弱症　産前産後、老衰、病後の快復期等

▲マーマイトは他の滋養品に比し價格最廉効能最大なり

▲マーマイトは如何なる氣候に於ても腐敗の憂なく長く保し得べし

▲マーマイトは其味佳良なるを以て歐米にては衞生日用品として百般の料理に應用し一日も欠くべからざる貴重の滋養品なり

▲マーマイトは驚くべき消化力を有す

▲マーマイトはは何品に混和して用ゐるも効を奏す

▲マーマイトは牛乳スープ鷄卵茶等の飮料に混和して用ゆれば最妙也

▲マーマイト百般の料理には適宜の分量を用ゆべし滋養と風味の目的を達す

定價表

小管	八錢
一オンス罎入	三十錢
二オンス罎入	四十五錢
四オンス罎入	七十五錢
八オンス罎入	一圓四十錢
十六オンス罎入	二圓五十錢
一磅罐入	二圓

小包料

八オンス迄	十錢
八オンス以上	十五錢

滋養強壯品マーマイト製造元

英國倫敦 マーマイト會社

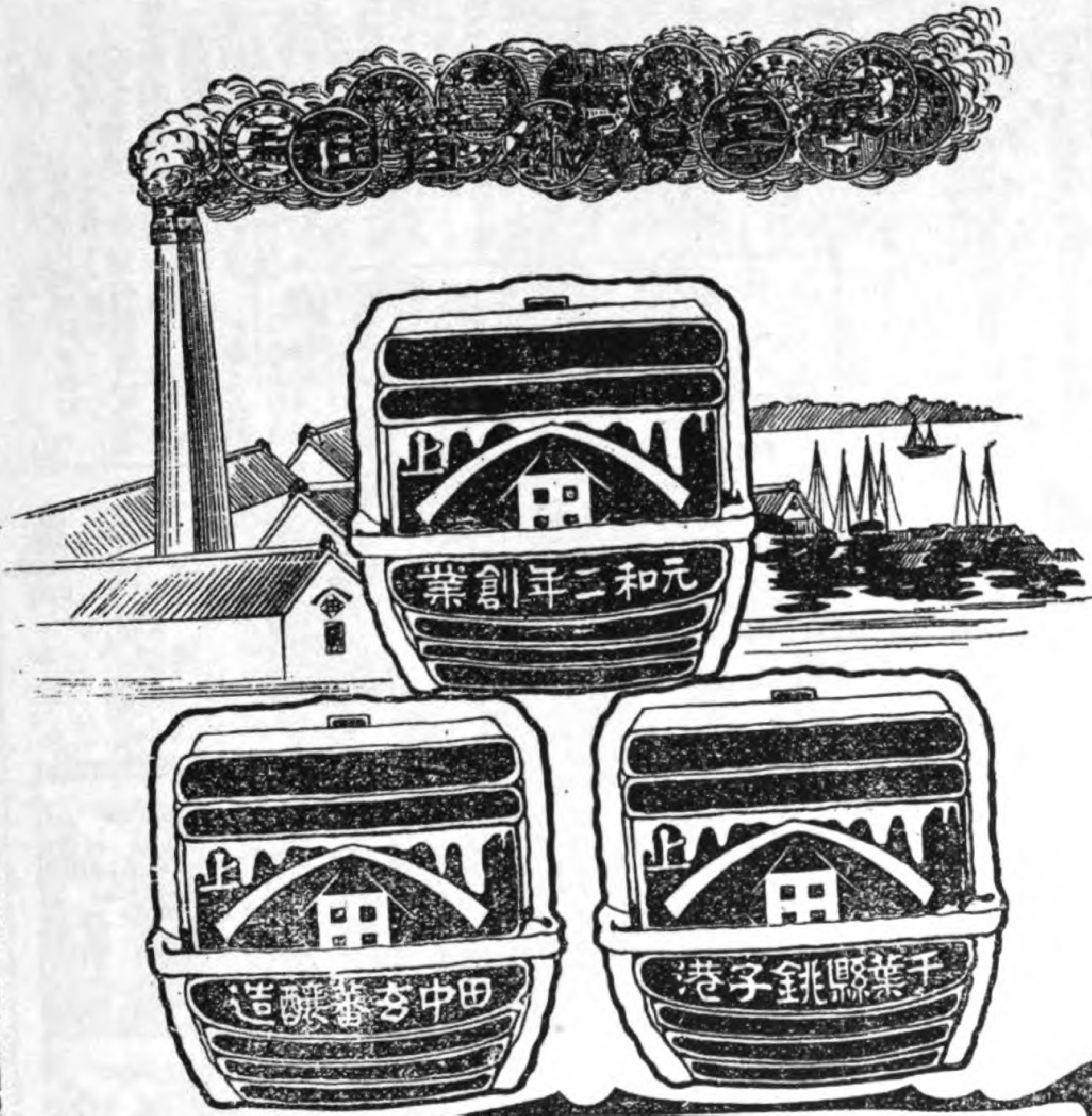
直輸入東洋一手販賣元

東京市日本橋區本石町三丁目十八番地

合資會社 博愛堂藥店



（乙の七）



(乙の八)

樫村一等軍醫正の家庭



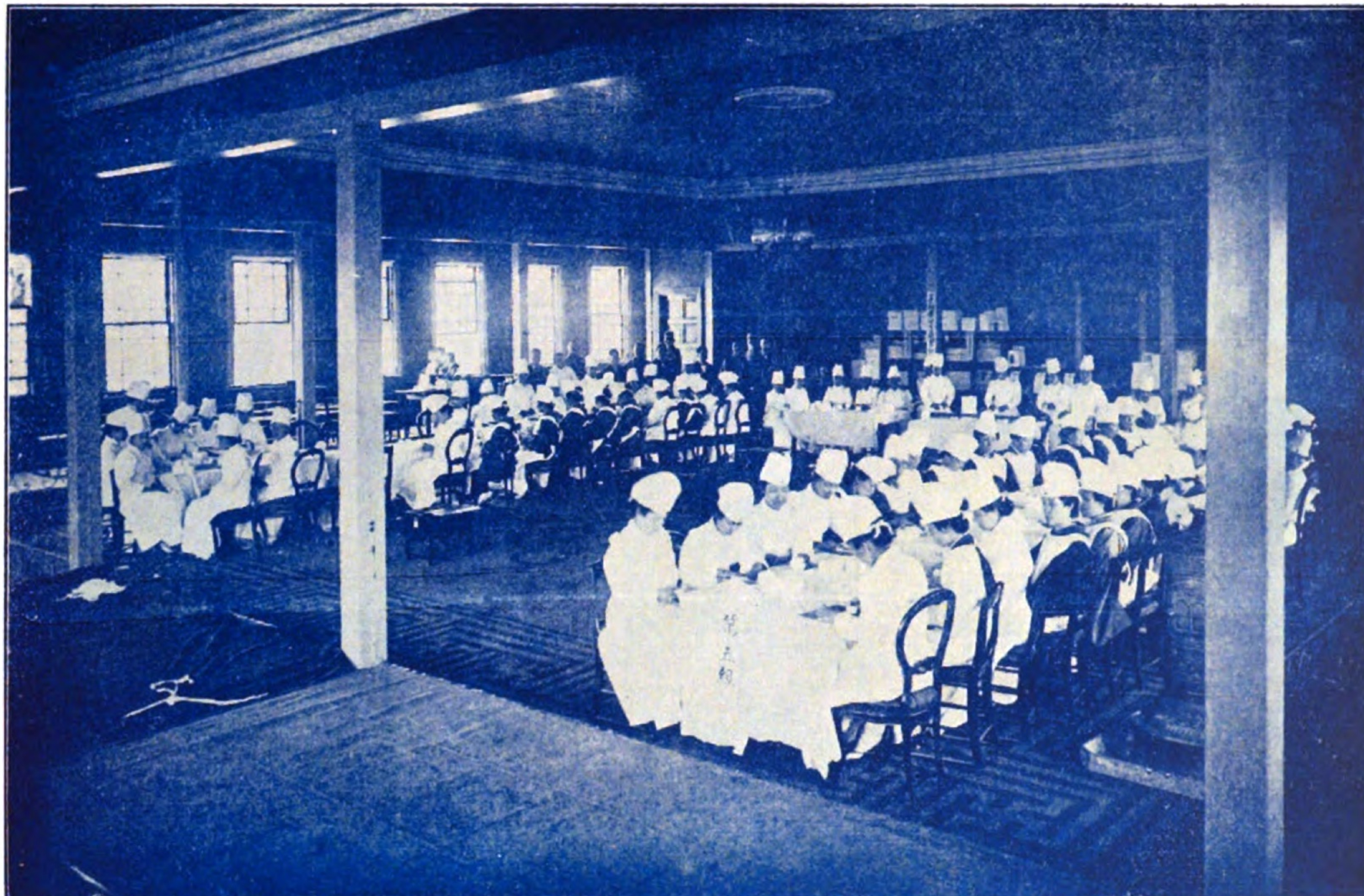
清岡五明氏と其母堂





（記事參照）

繃帶製作



赤十字福井支會篤志婦人會製作の實況

深山幽谷



遠江國磐田郡久根銅山

（丙の一）

美術繪葉書

日本葉書會發行

第一編 海戰之部（第一輯） 木曜會圖案

●石版極彩色（六枚） 正價十五錢

目次
日の出の我軍艦　露艦の火災　舷頭日章旗飜
露艦の沈没　旅順港内敵艦の自仭　露艦の敗竄

第二編 陸戰之部（第一輯） 木曜會圖案

●石版極彩色（六枚） 正價十五錢

目次
征露義戰紀念　騎兵の奮鬪　露營
軍人の精神軍旗　歩兵の射撃　赤十字事業

第三編 旅順之海戰 山中古洞畫

●寫眞彩色（拾二枚） 正價十二錢

目次
旗艦三笠と東郷司令長官　軍艦朝日と山田艦長　軍艦富士と松本艦長　軍艦出雲と上村司令長官　軍艦淺間と八代艦長　軍艦日進歡迎と大井上艦長　附録旅順海戰之軍歌
軍艦初瀬と梨羽司令長官　軍艦敷島と寺垣艦長　軍艦八島と阪本艦長　軍艦嚴手と武富艦長　軍艦常盤と吉松艦長　軍艦春日歡迎と竹内艦長

第四編 在韓之我陸軍 日本葉書會撰

●寫眞彩色（拾二枚） 正價十二錢

目次
入韓先鋒　皇師無敵　軍曲鏘々　懸軍萬里　一視同仁　輸送船來
月尾島上陸　仁川停車場　鐵騎翩々　雪中進軍　大使參内　文士觀戰

此葉書購求者へは岡部文學士作討露軍歌無代進呈

第五編 海戰之部（第二輯） 渡邊審也畫

●石版極彩色（六枚） 正價十五錢

第六編 陸戰之部（第二輯） 和田英作畫

●石版極彩色（七枚） 正價十五錢

目次
敵砲塞を燒く　水雷の發射　水雷艇の爆發
露艦の全滅　敵艦水雷に罹る　氷上器械の鐵道

目次
歩哨　夜營　突貫　日本刀
偵察　騎兵の突進　負傷

●旅順陷落紀念 中村不折君畫

●石版金銀極彩色（六枚） 金十五錢

目次
大和魂　騎兵の格鬪　金州城占領
猛鷲の殺戮　ペトロパウロウスク爆沈　艦上敵將と戰ふ

（千部限）再版せず……賣切ぬ内購求を望む

●東京名所繪葉書 上下各六枚一組

●コロタイプ彩色刷頗美麗 定價十三錢

上目次
宮城二重橋　四ツ目の牡丹　不忍の蓮
上野公園の櫻　日比谷公園　隅田川端艇の競走

下目次
芝公園の靈廟　堀切の菖蒲　團子坂の菊
龜井戸の藤　淺草凌雲閣　兩國川開

●今様美人はがき 六枚一組

●コロタイプ彩色刷頗婉麗 定價十三錢

目次
洗髪　秋波　洋裝
女學生　彈曲　令孃

近刊

花鳥繪葉書　野口小蘋　跡見花蹊女史筆
遼陽占領紀念　太田南岳君圖案
時局漫畫はがき　北澤樂天君畫
花と美人　寺崎廣業君筆
女學生　武内桂舟君筆
日本美人　水野年方君筆

發賣元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（丙の二）

（丙の四）



女學世界

第四巻第十四號



坐右十銘

▲小事常事に罵り怒るものは決して大望ある男子にあらず。

▲功名手柄を喋々するものは決して淑徳ある婦人にあらず。

▲汝は口に蜜ある男子に注意せよ、彼は腹中に斧を藏す。

▲世に美貌の捕虜となりし男子ほど憐れむべきものはなし、彼れが終世の勞力は擧げて妻の化粧道具となつて終らん。

▲少婦は恰も蛾の如し彼は唯光り輝く方に飛び廻りて身を果すのみ。

▲志堅き男は容易に移らず。

▲石の床に寢たる女にあらざれば人情の微を悟らず。

▲庖厨に黴ある家は内房に病人あり。

▲婦人の雄辯は銀の聲のごとく、然れども其の沈默は黄金の光の如し。

▲沈默は愚人も猶よく之を成す、然ども沈默を破は賢者も猶難しとす。

觀察

捕虜慰問の記

東京女學館講師　國分みさ子

九月二日讃州高松支部、丸龜支部、善通寺支部の篤志看護婦人會員一同、丸龜なる西本願寺鹽屋別院に於ける捕虜を慰問せらる、おのれは旅の身なれど、さる便ありて、一同に從ひて、共にものしぬ。別院は丸龜の市街を去る數丁の、海岸の漁村中に在り、前は名にし負ふ瀬戸内海にして、鹽飽七島其の前面に棊布し、海岸は一帶の鹽田にして、藻鹽燒く烟の、彼方彼方に立ち昇れる光景たとふるにものなし。語らんと欲するも、言葉も及ばず。まして、拙き筆は、いかでか之を記るすを得む。かゝる風景を朝な夕な、心の儘にながむる捕虜は、如何なる幸福ぞや、とそゞろに羨敷さへ覺えぬ。

門には二十名ばかりの衛兵あり、かねてより慰問の通知なしありたれば、直ちに休憩所に案内せられぬ。暫時ありて、案内に從ひて本堂に至りしに、彼等は皆鼠色の服を着け、姿勢を正して整列せり。守衛隊長より、通譯を以て、篤志看護婦人會員一同慰問の意を述べ、且、烟草二千本、團扇三百五十本、造花一臺贈られし旨を語られしに、彼等は、一同に熱心なる感謝の意を表しぬ。おのれも、人々の後より見渡せば、正面には、聖母マリアの畫像を安置し、前には、草花及び今日の贈物なる造花を供へたり。鼠色の服は、我國にて給與されし

ものにて、さまで汚れたるは見えねど、肌着類は凡て持越のまゝのよしにて、一種の臭氣堪へ難しとは、同伴の夫人の話なれど、おのれは風邪にて、更に其の惡臭を感ぜざりしは、却て幸なりき。守衛士官の話によれば、彼等は皆九連城得利寺に於ける捕虜にて、此處に初めて收容せしは七月廿一日なり。人員は曹長二名、軍曹伍長合せて三十三名、卒三百十五名、合せて三百五十名なり。その內の最年長者は四十四歲、最年少者は廿一歲なりとぞ。曹長ミシン、サノルークは、北淸事變の時、從軍して勳功ありし者のよしにて、胸間に勳章及び從軍記章を懸けたり。この者はいつしか「お早う」「有難う」などの日本語を覺えて、使用しつゝありと、さて一同朝は七時に起き、夜は九時に臥す規定にて、食事は彼等の唯一の樂とする處なるが、朝は八時、晝は正午十二時、晩は午後四時半なり。今其食事の有樣を聞くに、炊事常當番二名あり。その他に、日々六名づゝ交替して、之を助く、一人一日の食料はパン二斤と肉及野菜若干づゝにて、朝食はパン半斤に紅茶、晝食と晩食には、殘りのパンに、肉と玉菜玉葱馬鈴薯等の野菜にて一所に煮たる者を、バケツに入れて、十人に一つ位づつの割合にて分配するなり。收容以來、每日同樣なれども、更に飽きたる樣子なし、時々魚肉を交へてはと勸むれど、一切之を用ひずといふ。

入浴は冷水浴のみにして、溫浴を好まず。又多人數一所なるも、人の見て居るも、更に厭はず。

洗濯場は設けあるも、餘り之を成さずといふ。おのれらの見舞ひし時には、二三人ばかり、襯衣ズボン下等の洗濯を成しつゝあるを見受けぬ。

此の地に收容せし初には各鄉里に書面を出せしかば檢閱官は、爲めに忙殺せらるゝ程なりしが、其の文面は、大抵同樣にて、何れもこの地の暮しよき事を述べ、次には小使錢の送附を乞へり。さて其の金額は、悉く二三圓のみなりしといふを以ても、其の生活の程度の低きを知るべし。

又彼等の無教育なるは、實に驚くばかりなり、其の一例を擧ぐれば、先頃逃走を企てたる、一年志願兵ピヨートルマルクヤーノウイッチ及卒二名ありしが、其追捕せられて尋問を受けし時のピヨートルの答いと可笑し。曰く、小舟に乘りて、神戸に渡り、夫より陸路直ちにサガレン島に至り、以て本國に逃るゝ心算なりき。と意氣昂然として、述べたる由。兵士の如きは、たゞ退屈に堪へ兼ねし折から、勸められたるまゝに、何の成算もなく逃走せしなりといふ。而して、何れも一錢の貯も無かりきといふによりて見れば、神戸よりサガレン島まで、わづか半日か一日にて旅行し得る者と思ひしならむ。

かゝる物語の内に、早くも正午になりぬれば、一同別を告げて立出でしに、折しも捕虜の晝の祈禱の程なりしかば、庭に立ちて、しばし見て居れば、幾度か指を以て、胸に十字架を畫きつゝ、讃美歌を歌ふこと約十分ばかり、やがて終りしと見えて、各今日の寄贈の團扇を片手に持ちつゝ、我れ勝に馳出せり。何すと見れば、行く先は皆炊事場なりき。

マリアの聖像に供へありし草花は、四五日前、高等女子師範學校生徒五名慰問せし時、贈りし物なりといふ。

婦人と新聞記者

法學士　原田豐次郎

予頃日米國に遊び、親しく米國の新聞事業を觀察し、又た累次米國婦人新聞記者と邂逅して、共に其議論を上下するの機會を得たり、想ふに米國婦人の社會に於ける活動は吾邦婦人の其れと大に其趣を異にし、勇往邁進

の資を以て社會の風潮に投じ、有髯男子と共に鎬を削つて其輪贏を爭はんと欲するもの滔々皆な然らざるはなし、其意氣の壯なるや、吾人をして覺へず案を擊て快哉を呼ばしむるものあり、彼の米國婦人が新聞記者として文壇に雄飛活動し、却て男子をして後に瞠若たらしむるものあるが如きは即ち其の一なり。

曾てニューヨルク市に於て米國婦人新聞記者の大集會を開催せしことあり、此時に當りシカゴ市の婦人新聞記者某女史は慨然として起ち、婦人が新聞記者として新聞事業に代表され反映されざるべからざる所以を評論せり、其中の一節に曰く

若し夫れ新聞紙にして社會に必要欠ぐべからざるものならんか、婦人も亦新聞紙業に欠ぐべからざるものなり、抑も近世の新聞紙は其天職を盡し其機能を全からしむる爲めに必ずや社會の凡ての利害を代表し、又た之を反映せしめざるべからず。而て其社會の利害は社會の進步發達と共に益々複雜し錯綜するものなり、妾等は婦人が男子より更により適當なる新聞記者たるべきことを要求するものにあらず――無論婦女子も或點に於て男子よりも適當なる新聞記者なりと雖も――然れども妾等は婦人が男子と同等ならんことを要求せんと欲するものなり、抑も婦人も亦人類ならずや、而て婦人も社會に於ける利害は男子の利害と比して何の異る所なし、果て然らば婦人の利害も亦婦女子により、新聞紙に代表されざるべからず。

婦人の職業の增加するに從ひ婦人も利害を感ずること益多く、而て婦人の活動も亦愈々其必要を感ずるや切なり、苟も利害を感ずるものは何人と雖も理想を有し、希望を有し而て要求を有するや論なき所なり、之等の利害は必ずや近世の新聞紙に依て反映され解釋されざるべからず、之れ婦人をして今日の新聞紙業の一要素たらしむる所以ならずや。

と嬌舌滔々慷慨の氣眉宇の間に溢るが如し何ぞ其の壯なるや、然るに論者或は說をなすものあり、曰く婦人は

新聞記者たるべからず、婦人は新聞記者として成功する能はず、何となれは婦人は新聞記者として成功すべき機會なければなりと、然るに事實は全く之に反せり、米國に於ける婦人新聞記者を見るに彼等は啻に新聞記者として失敗せざるのみならず、却て大に成功せるもの多し、試に米國に於ける婦人新聞記者と男子新聞記者との成敗利鈍に付き彼是相對照比較せよ思半に過ぐるものあらんと信ず。

見よエルラ、ホ井ーラー、ウイルコックス夫人は米國婦人記者中に於て其牛耳を執れるものなり、而して同夫人を以て彼の滔々たる無數男子記者に比較せよ果して同夫人の如くに成功し或は同夫人よりもより善く成功せし男子記者ありや、又たドローシーデックス女史は婦人記者として米國文壇に錚々たるものなり、然るに有髯男子記者にして果して女史よりもより速かに成功し而も其地盤の鞏固なること女史の如きもの夫れ幾人かある

ヘレンワーターソン孃が始めて紐育市に來るや、新聞記者としては僅かに一週二十弗を得るに過ぎざりしなり（一週二十弗とは本邦にては少なからざる報酬なれども米國にては生活の程度高きを以て決して多大の收入と云ふべからず）而て前途有望なりと稱せられたる青年の男子記者にして孃と共に其時を同くして紐育の操觚社へ現はれしもの一にして足らず、然るに此有望なりし幾多の青年記者は依然として其の舊地位にありしに反して、孃は嶄然として其頭角を現はし、忽にして一週六十弗の報酬を得、更に又た幾何もなくして一週百弗の巨額を享くるに至れり、又たアンオーハーガン女史も亦た新聞記者として成功せるもの丶一人なり、女史が往往嬌慢不遜の陋態あるは私に同女史の爲めに之を憾しむと雖も、新聞記者として女史の名聲の嘖々たるは男子記者多數の遙かに及ばざる所なり。

エリザベス、ジヨルダン孃の如きも優に濟々たる有髯記者を凌駕し今やハーパースバサー雜誌を主宰し其の富有と其名聲とは等しく萬人の羨望する所ならずや、アンニー、ローリーなる假名を有する婦人記者あり、予は

不幸にして未だ其何女史なるやを詳知せずと雖もアンニーローリーなる婦人記者が米國大平洋沿岸の文壇に飛躍して其文名の遠近に顯著なるは人の普く知悉する所ならずや。

之を要するに米國に於ける婦人新聞記者の成功せるや實に此の如きものあり、然のみならず、米國に於ける婦人記者の勢力は年々歳々着々として其武歩を進め、徐々として其翼を伸ぶるもの丶如し、而て今ま米國に於て婦人が新聞記者として適當なりと承認されつ丶ある理由を列擧せば凡左の如し

一、新聞紙は同情に富み誠實ならざるべからず、而て婦人は男子に比して更に多くの同情心と誠實とを有す

一、婦人は男子よりも綿密にして而も周到なり

一、婦人は會話に長ず故に新聞紙上に於ける會話体の文章に成功し易し

一、男子記者は其業課後或は酒色に耽り或は賭博遊興に時を移すこと多きを以て種々の弊害を生ずること多しと雖も、婦人は此の如き傾向なき爲めに此の如き弊害なし。

然り而して近頃聞くが如くんば吾國に於ても亦た東京に大阪に婦人にして新聞記者として操觚の業に從事するものありと之れ吾が巾幗社會の爲めに慶賀すべきことならずや、予は吾國の婦人が新聞記者を以て男子の獨占物とならしめず、勇往邁進して以て男子と馳驅角逐し、大に吾操觚社會に活躍飛動するあらんことを望むや切なり、若し夫れ然らんか、獨り吾國巾幗社會の特色を發揮し婦人の地位を改善するのみならず、又た以て吾新聞事業にも寄與貢献する所大なるものあらんと信ず。



社交

中村鈴子

清岡子爵夫人

故清岡公張子の夫人覺子は舊幕臣にして明治の頃二千石たりし澤簡德氏の次女なり安政二年を以て生れ明治六年を以て嫁し八男二女を擧ぐ人と爲り明敏端正にして趣味豐富子女の訓育寛嚴宜しきに適し當主龍氏以下賢良多く滿洲の野に奮戰して櫻子嶺に名譽の戰死（七月三十日）を遂げたる五明氏は實に其五男たりしなり

「神となりて御國を護れいとし子よ哀れ滿洲野の露と消ゆとも」の一首を戰死せられた令息陸軍中尉五明氏の靈に手向けられて雄々しき御氣象にも、燒野の雉子、夜の鶴、流石に愛情の羈絆絶ち難く、我身一つの秋にはあらねど千々に物ごそと、朝に夕に名香の烟を露深き袖に包まれつゝ、ある清岡子爵母堂を訪問致したのは、淡く曇つた十月二日午後一時頃でありました。赤坂第一聯隊に隣れる靜かな横道を突き當ると、樫の生垣こんもりとした中に門燈と門柱の見ゆるのが子爵の御住居で、進み入れば兩側崖に亂れ咲た萩幾叢、如何にも優しく美しいので、これを眺めつゝ迂回すると、眼界忽ち廣濶となつて、遠く氷川神社の森の樹梢少しく色付けるを望み、近く菜園の芋の葉の相領くを見るなど、一幅の名畫を展べた心地しつゝ高い棕櫚を控えたかつゝた日本風の御邸一構を見て、左手の洋風御玄關に伺ひ、簀子を敷きつめて卓子と椅子六脚列べある應接室に導かれたのです。入口の正面には、故五明氏の寫眞、筆蹟、戰死實況を報知された聯隊長書簡等を一纏めにした額を掲げ、左側の壁に露國東方經營地圖を下げられ、書棚の中には花瓶數種と馬、雁などの精巧な鑄物が置かれてあり。窓外の廣庭は、自然を曲げぬ千草の色取面白く、松、櫻、竹、芭蕉、百日紅など構はずして位置整ひ、一叢茂れる白萩のもとに、絶間なく喞く蟋蟀の聲は、何とも言ひ表はすとの出來ぬ感を催しました。軈て徐々と出で來られし母堂は、八丈の袷にフランネルを重ね、御納戸縮緬の

襦袢の襟を僅かに現はし、黒紬の三つ紋付いた被布を召され、切髮の後室姿氣品淸秀な鼻目、水際立ちし御頸元も、今日此頃の御悲しみに幾分が憔悴れ給ひしと察し上げましたが、流石は多勢の公達の母君、其御態度は凛然として犯し難い中に、眞摯の情感を流露せられ、少しも隔てなき御話振りは、記者の敬慕を一層高められました。記者は吊辭を申し上げ且つ御名譽を稱へましたので——

▲五明氏の名譽

何で御坐いますか家の者は全然存じませんでしたが、今〇〇方面へ輜卒隊の少尉で出征して居る大浦英太郎と申す人は、五明と幼い時から友達で、毎日宅へ遊びに參つて私を母樣〳〵と言つて居りますが、昨年頃でしたが、私に『僕が此家へ親しく出入することを知らぬ人が、僕に向つて第〇聯隊の淸岡少尉は若年ながら後來望みのある人物だと大層褒めて居ましたよ。僕との關係を知らぬ人が褒めたのだから宜いでせう、チエ母樣。』と申して喜んで呉れましたが、一體優しい氣象で部下に深切で御坐いました。彼は十歳まで下が無かつたので、私も末子の積りで甘やかしましたから、十歳位になつても未だ負んぶして私の乳房をいぢつたり致した位、其上非常なあばれ者で雷獸と綽號された程でしたけれども、士官學校へ入つてから、ガラりと人間が變つて落ち着いて參り、何を致しても性質が良い上に負けぬ氣象で、士官になつてからでも忙しい務を終つて歸宅すると、直に飯田町の曉星學校へ佛語を習ひに參り、非常な勉强家になりましたので、我子ながら賴母しいと存じて居りました處、斯ういふ事に爲りまして、覺悟の上とは申しながら、親子の煩惱は仕方のないもので御坐います。名譽の戰死名譽の戰死と人樣が仰しやつて下さると、自分でも名譽の戰死だ〳〵と自分を煽てゝ慰めては居るものゝ、惜しい兒を失つて何の樂みも無くなりました。併し此度は畏れ多い方々にまで御尋ねを受けまして、鍋島令夫人なども直に御出でになつて御深切に御慰め下され、德川家達樣からも御使者を賜はりましたので、私共舊幕臣の故か一

層難有く感じました、普通の病死などなら、如何して夢にも斯樣な事は見られないのにと、召使とも話して感涙に咽んだので御座います。

▲何樣な死狀を致したか

御出で下さる方々が名譽の御戰死〱と御褒め下すつても、未だ其時の悉しい樣子が判らぬうちは心配で耐りませんでした。戰場で終てれば戰死に相違は無いが、實際何樣な死狀を致したのか、谷へでも轉がり込んだか、なぶり斬りにでも遭つたか、万一其樣な醜しい死狀であつたなら、皆樣に對して何樣顏向がならうぞと、悲しみは偖置き唯だそれのみが心配で、八月三日に戰死の報知が參つてから、十四日に詳しい報のあるまで、トント食が喉へ通りませんでした。十四日に聯隊長の許から彼の額に入れてある手紙が參つて、胸部を貫通されながら、陛下の万歲を唱へて立派に相終てたと云ふ事が判り漸と安心致したので舌のタイが取れました。二月二十日に出征致してから、七月三十日の戰死までに丁度二十五通書面を寄越しましたが、其度に私の事を案じて書いて御座いました。

▲敎育は母堂の手一つ

四年前に沒しました主人は、餘り子供にかまはぬ風の人で、何でも子供は各々自分で自分の目的を立てるが宜い、親の命令を待つて考へるやうでは仕方がないと申して、全然放任して置き、一切私に任せきりで御座いましたから、八人の男兒と二人の女子の世話に隨分骨が折れましたが、干涉されぬだけに私の思ひ通り自由に仕込まれて、都合が好い塲合も御座いました。併し大抵年子で、後から〱世話の燒けるのが出來ますので、迚も他家樣のやうに子供が何月目に立てたとか步いたとか覺えて居る餘裕は無く、最早五月蠅くて〱何時立てたのか步けたのか、判らぬうちに無茶苦茶に成長して了つたやうな次第でした。里に遣らうかとも存じましたけれども、私が小さい時里に遣られた爲め家へ歸つてから馬鹿に遠慮して育つたのに懲りて居ますから、一人も里に遣らずに了つたのです。海水浴なぞに連れて參ると、白キヤラコの帽子に赤い布

で日の丸を縫ひ付けて置き、海の中の日の丸を銜へて、始終氣を付ける樣に致して居りました。

▲同胞の親睦

仕合に私共の子供は、仲が睦じう御座いまして、以前主人が正月の休に子供を連れて大磯へ參りました時、福岡(孝弟子)さんも丁度御出でに成つて、私共の子供達の兄弟仲の宜いのを御覽でしたが、清岡さんは實に幸福だと仰しやつたさうです。主人も私も人樣に言はれて初めて左樣か知らんと存じた位で、別に際立つた敎育を致す次第でもなく、自然世話なしに仲よく育つたので御座います。但私は多勢の同胞に對して、食物でも衣類でも何でも分け隔てを致しません。兄と弟とは互に尊卑の別を守らねばなりませんが、親の目から視れば何の兒も同じであるから、假令シャツ一枚筆一本でも、決して異つた物を與へないで、悉皆平等に致して居りましたのが睦じい原因になつたのだらうと存じます。食事も同じ樣に盛り分けて、大食卓へ列べて遣りますので、大槪何の兒かの御友達が一人二人來合せて一緒に食事しますから、毎晩宛然宴會のやうな騷ぎで御座います。菓子など多い時でも極少い時でも、一樣に公平に分けて遣りますので、子供の腸胃を惡くしたこともありませず、菓子を腐らしたことも御座いません。

▲母堂の刑法

御友達をイクラ呼んで暴れても、唯だ暴れるのに小言を申したことはありません。併し如何かすると多勢で騷いで根太を拔くことがありますから、其樣な時には私が儼然容を正して、『根太を拔いたのは汝方が故意した事でなからう、必ず足の所爲であらう、其足を罰するから、各自此處へ足を持つて入らつしやい、若し持つて來ずに逃げて居れば、私が出張して罰する、出張すれば二度宛つねる、此方へ來れば一度で許す、サア如何だ〳〵。』と申します。スルト一同が『誠に恐れ入りました。』と閉口致して、各自に私の前へ來て足を出し、一捻り宛の刑を受けますので、友達までも同じく足を出すには困りました。併し友達のは捻らぬと云ふ次第

に參りませぬから、是れも同じく捻つて遣りましたが、互に足を擦つて君は何の位痛かつた僕も隨分痛かつた杯と話し合つて居りました。又幼い同志が喧嘩でもすると、私は『兄は弟を御する德がなく、弟は兄に服する禮が無いから起るとで、互にイクラ辯解しても、喧嘩兩成敗に定めてある。』と申し渡して、兩人を一捻り宛捻つて遣はせましたから、互に苦情なく服して了つたのです。

▲五明氏の克己心

子供の時は何れも慶應義塾の幼稚舍へ通しましたが、五明は三四歳の頃から、『僕は陸軍大將西郷隆盛だ。』と申して、戰爭の眞似ばかり致し、十二歳の時是非兄の眞杢と一緒に成城學校へ通ひたいと申して止みません。其頃は芝公園の住居でしたが、市ケ谷まで一里半の道程を車に乘らないと約束し、病氣の外は一日も缺席致しませんでした。冬の朝は暗い内から出て參るに、私が未だ寢床に居ると、母樣行つて參ります〳〵と返辭するまで申して居りました。或日大雪で餘り可愛相と存じましたから、今日は負けて車を許さうと申した處、母樣何を仰しやいます、豫ての御約束でもあり、斯樣な雪の日にポツ〳〵と蹴つて歩くと何樣に面白いでせう、車なんぞに乘つては情いぢやありませんか、と申しますので、私も成程左樣かと存じたのです。私は子供に字を好く書かせたいのが道樂で、學校放課後に敎師を聘んで習字を致させたのですが、五明は遠路を歸つて參つて、直に他の兒と一緒に机に向ひ筆を執るのに少しも筆蹟が亂れません。敎師も大層愛して居りましたが、今回の戰死を聞いて一日一夜泣き明したさうで御坐います。一躰小さい時から家で遊ぶのが好きでして、或る休日に餘り多勢で五月蠅いものですから、今日は天氣も好しチト何處かへ遊びに行つては如何だと申した處、『母樣私共は每日暗いうちに家を出て、日暮に歸つて參り、我家の庭も善く見たとは無い位です、家の庭は實に樂みなものですから、偶の休日には緩りと庭で遊ばして頂きたいのです』と五明が申したので、私も熟々可愛相になつて、それから子供を

逐ひ出さぬ事に定めました。

◀眞彦氏の友愛

成城學校へ通ふ時分、兄の眞彦が五明を連れて行つて呉れると思つて居りました處、近頃になつて眞彦が『五明が小さい時分遠方を通ふのに、僕の後ばかり跟いて來ますから、何時までも兄が當にしては不可と思つて、わざと先へズン〳〵歩き振り返つて見ると、せつせと呼吸を切つて追つ掛けて參りました、可愛相だとは思ひましたが、今日克己心の強い人間になつたのも、一つは是等の爲めでせう。』と申したのです。眞彦は同胞の中でも五明を殊に愛して居りましたので、矢張出征致しては居りますが、方面が違うので暫く弟の戰死を存じませんでした。此度寄越しました手紙は、實に痛い歎き方で讀まれぬ位で御坐います。嗚呼々々子供のない方ぐらゐ御幸福な事は御坐いません。私は初めて此悲しい思を致すのですが、多勢子供を失ふと慣れて平氣になると仰しやる方も御坐いますけれども、子を失つた悲みに慣れると云ふこともあるものでせうか……

母堂は感極まつて御聲も顫はれ、ハンカチーフに御顔を埋められましたので、記者も貰ひ泣き致し、數分間談話が途切れたので御坐います。

◀母堂の御趣味

ハイ私の趣味と御尋ね下すつても、別に御話し申すほどの事も御坐いません。但だ出來ない癖に何でも好きで、始終漢書や和文の講義を聽いて居ります。私は朝に道を聽いて夕に死すとも可なりと云ふとが好きなので、和歌も小さい時から横好ですし、畫も是れから少し習つて見たいと思つて居ります。花も好きですが中絶してサッパリ出來なくなりました、樣々の花を自分で植ゑて樂んで居るばかりです。私の一番好きと申したら御茶で御坐いませう、ハイ流儀は千家の裏で、是まで始終釜を掛けて居りましたが、此家に引移てからは、西洋室ばかりで不都合ですから、餘り致さなく爲りました。演劇も筋によつては觀に參りますので、忠臣藏だとか春日の局などは、子供から下女達を連れて

親に參りました。演劇は女子供に見せては惡いと云ふ說も御座いますが、私は一口に申されないと存じます、狂言の筋さへ善いものなら、無學の下女共にはあの位早分りのする教育は無いでせう。音樂も自分は出來ませんが、何でもそれ〳〵面白く感じまして、決して仇に聽き流すとはありません。唯だ西洋音樂は善く判りませんが、其他は何でも好きで御座います。其中一番好きなのは上方唄です、臺廣の三味線で上方唄を靜かに唄ふのを座敷で聞くと、實に心が落ち着いて宜いものです。五明の尺八で御座いますか、あれは五年前肋膜炎を患つた病氣上りに、何か氣保養にと存じて、五明の伯父（澤海軍少將）に學はせたのですが、質が餘程よい上に大層熱心でして『母樣僕は銃劍を持つて居て、手指が堅くなつて居るから、暇さへあれば尺八の練習をして居ます。』と申して、始終兩方の指先を動かし笛孔を閉開する眞似をして居りました。出征の門出に御懇意の方が寄つて下すつた際、長唄の上手な人が居合せて、五明は其人と合奏を一曲致し、それから私の側でチヨツト横になつて、直に出立致したので御座いました。

▲座敷と庭

庭は御覽の通り殺風景で御座いますが（勿論御謙遜の御言葉。）私は石などをコテ〳〵列べたのは大嫌ひで、天然の儘が好きで御坐います。座敷も西洋室は大嫌ひで、此樣な室には何も飾る氣になりません、それで彼方へチヨツト日本造りに普請致しかけましたが、唯今見合せて居ります。手狹な住居で子供は皆一緒に二階に起臥するのですから、五明などは一室欲しかつたで御座いませう。無事で歸つたら、別に一室造つて遣らうと存じて居つたのです。

▲紀念品に困る

私共では元から質素な主義でして、子供は綿服ばかりとしてあります。五明が士官になつた以來彼にも先にも銘仙を一重拵えた切りですから、今度の紀念分配にも木綿絣ばかりで實に困りました。尺八も古い粗末なので吹いて居つたから、よく皆さんが數寄少尉と

仰しやつて下さいますけれども、青葉の笛もないので御坐います。軍刀も未だ返つて參りませんし、何も御覽に入れる品が御坐いません。

母堂は斯く仰しやりつゝ後の硝子戶を開かれ、五明氏の祭壇を見せられましたが、同じく名譽の戰死を遂げた友人及び從卒の寫眞を諸共に据ゑられ、心を籠められし御供物は菓子皿に堆く、立ち騰る名香の煙は榊の葉末を繞つて、故中尉の靈在ますが如く、

記者は恭しく拜みました。

戰死致す朝、從卒に香を焚けと言ひ付けて出たさうですが、此方を出發致す時に、私に好い香を下さいと申して、持つて參つたのですから、何か自分に考があつたと見えます。それで私は每日香を絕さず焚いて居ります。

▲愛　猫

五明が獸類を愛することは、一通りで無かつたのです。『母樣生物は只撫で摩りするばかりちあ何にもなりません、食物が一番肝心です。』と申して、自分で深切に食物の世話を致しましたから、其慕ひ方は一通りでなく、駒と云ふ猫は此祭壇を設けた當分、机の下に寢たぎり何も食べずに居りました。獸類でも不思議なもので御坐いますね。

此時母堂に御寫眞拜借を願ひましたが丁度實直氣な老婆が御茶を持つて參りました。母堂は此老婆を優しく一瞥せられつゝ、

これは泣虫で御坐います。五坊の生れぬ前から最早足掛二十九年も居る者ですが、親兄弟に別れたより辛いと申して泣いてばかり居ります。

▲小包繃帶と手紙

五明は何時の戰爭に出ますにも、『僕は花々しく戰死する積りだ、決して半殺しの目に遭はぬから、小包繃帶は携へない』と申して居つたのです。敵丸に胸部を貫通され、　陛下萬歲を唱へて立派に終てたのは、實に本望で御坐いませう。是れは五明から部下の北原と申す者の父へ送つた手紙です、

謹啓五月廿四日付消毒符入の御書面洗手拜讀候却說

過日は靈驗天下に比なき諏訪大軍神の神符御送被下今回は又不肖の爲め健勝の祈願をさへ被成下候御高志實に難忘只々感涙之外無之次第何とも御禮之申上樣も御坐なく候皇軍向ふ處如何なる天險鐵壁も破れざるなく天祐と相俟て到る處連戰連勝の好結果を得たるもの獨り作戰計畫機宜に適したるのみにあらずして實に熱誠湧くが如き國民の聲援與て大に力あり出征の將士が勇往邁進して後顧の憂なきものは是れ全く忠君愛國必然らしむる所とは申しながら又内に後事を托すべき親愛なる我同胞あるを思へばなり

貴下等能く萬里遠征の士家郷を想ふは之れ人情の然らしむる所なることを察せられ告ぐるに壯烈の擧あるを以てし與ふるに千古無二の靈符を以てせらる其深意其勤勞は益々我々をして奉公の大義を思はしめ笑を含んで死に就くの念を一層堅からしめ候

笑を含んで死に就くと云ふ言葉が一番私の氣の入りました。遺族が愚痴を言ふべき場合では御坐いません。母堂は斯う申され、凛然容を正うし、讀み續けられたのです

御令息鞠藏殿には如何なる御緣にや出征以來不肖の小隊に編入せられ何時もなから御精勵には感賞の外なく必竊かに御親父方の育成尋常にあらざる事を思はしめ候如此部下を得たる不肖の心中御賢察被成下度盲龜の浮木に遇ひし思も斯く計かと存候先は右不取敢御禮申上度如此に御座候謹言

六月十七日　陸軍少尉　淸岡五明

親の慾目でせうが、部下に親切な情が此手紙に表れて居ると思ひます。

▲赤十字社への御出勤

萬分の一にも及びませんが、切めて出來るだけの御奉公でも致さなければ成りません。伜が戰死致したとて怠りましては、相濟まぬ次第で御坐いますから……。

これが戰勝國の位置であるから宜いもの丶、萬一戰敗國の位置で鐵砲の音を聞くやうであつたならば、却々枕を高うして寢られませぬ、これと申すも陛下の御

稜威と出征方々の御骨折に依ると思へば、如何して如何して無爲居ることが出來ませうかと、皆様と善く御話し致すので御坐います。

母堂の御話は一言一語悉く眞實で、戰死せられた令息に向つては悲々惻々の情を注がれ、國家に對しては奉公の大義、忠君愛國の精神を傾けられ、實に賢母の典型であります。若し骨肉の死を少しも悲まぬ婦人あらば、矯僞の人か冷血の人でもつて、甚だ頼母しく無いのです。記者は母堂が一身一家の悲みに耐へられ、奉公の責務をも盡さるゝを見て、欽仰敬服に堪へませぬ、實に感謝の涙を禁じ得ませぬ。

木越陸軍中將夫人

中村鈴子

夫人てい子は長野縣士族柳田直平氏の二女なり明治四年十一月を以て生れ二十八年を以て今の陸軍中將木越安綱氏に嫁す人と爲り明慧淡泊にして良人に事ふるに忠貞を以てし義子を待つに寛厚を以てし下僚の家人に對するに謙讓を以てするの德あり良人が出征前大村旅團長たりし時夫人が婦人社會に階級的習俗多きを慨して務めて之を打破したる如きは同旅團佐官以下の夫人が感歎する所なりと云ふ。

遼陽は既に占領したりと傳へ、敗殘の敵兵が僅かに抵抗を繼續しつゝありと傳へて、何人の脳裏にも〇〇萬の貔貅が遼陽の三面より壓迫吶喊して猛射痛撃し、彼處此處に火災起りて塵煙天に漲り、煙硝臭き風に軍旗の勇しく飜る樣を描ける九月四日の午前九時頃、記者は市ヶ谷加賀町に木越夫人を訪問致しました。丁度夜來の陰雨カラリと晴れて、朝風肌に心地宜く、遼陽は確かに占領せられたと殆んど無意識に感じつゝ、御尋ね致す夫人の御良人は第一軍中にも最先に出發せられ瓜生艦隊か仁川の敵艦ワリヤーグ、コレーツを撃破し或は爆沈せしむるや否、直に上陸して北進せられ、九連城其他に幾回か奮闘せられ、今は遼陽の大兵と十餘日間休む間もなく激戰せられて、天晴偉功を奏し尚ほ追擊し居らるゝやう想はるゝ木越陸軍中將なので、記者の鈍い神經も何となく電氣に打たれた樣に爲り、中將の御邸どしては割合に質素な御玄關にも全身ブルブ

ルと顫へて、御免下さいませの聲が急に出ませんでした、今夜こそは、今朝こそは、今午前こそはと遼陽占領の公報のみ待詫び居らるゝ夫人の心鏡に、夢にも待ち設けられぬ記者の映つるのは餘り心ない業と思ひましたからです。此一刹那眼に映つたのは、掃き清められた御庭に落葉三片四片初秋の趣を添へた物靜かさで忽ち耳に響いたのは床しい軍歌が令息令孃の愛らしい喉から歌はれ出る聲でした。記者は此軍歌に勵まされたのか、浮されたのか、何時の間にやら案内を請ひて何時の間にやら夫人と對坐して居たのであります。夫人は久留米飛白の單衣に黒繻子と更紗の晝夜帶を締められ、もみあげの長い水際の立つた黑髮を華美やかならぬ束髮に結ばれ、中高で色の飽くまで白い眉の秀でた御顔、限りなき愛嬌を眼元と口元に漲ぎらされ、少しも隔てを置かれませぬが、沈着いた御話振りは、却却の品位を備へて見上げられました。さて御話は――

▲令息令孃

長男は近衞の方で第一軍に附いて參つて居りますが、同じ一軍でも父の所とは餘程隔たつて居ますので、二度とか會つた限りだと申し越しました。次男は名古屋の中央幼年校に寄宿して居り、次は十二歳の女子で宅に居ります。それから私の持ちましたのは、八歳の女子、六歳の男兒、當年四月生れし女子と三人で御坐います。ハイ小學校は愛日學校と云ふのへ通はせますので、師範學校附屬の小學校へでも通はせば宜しいのですが、主人が極平民主義の人で、學校は平民的でなくちや可けぬと申しますので、學校へ通はせて置きます此の通り子供が多勢で御坐いますから、終日子供の守を致して居るばかりで……、それに皆私の乳ばかりで育てますから少しも外へ出歩く次第に參りません。當節は皆樣が赤十字其他で大層御働きで、誠に結構な事だと存じますけれども、私は右の次第で一向働きも致しませず相濟まぬ事で御坐います。

▲大村の御生活

大村には三年ほど居りました。當節は餘程開けたやうですが、參りたては隨分不便な處で、少し良い物は長

崎まで買ひに出なければ用が足りませんでした。併し私共の住居は餘程海の側て、丁度海が庭の泉水位でしたから、眺望も佳く、海へも始終入りますので、衛生上には至極宜しう御坐いましたが、子供の教育といふ點に少し困りました、田舎ですから一帯に質朴ではありますが、行儀と云ふ事を更に構ひませんから、宅の子供なども少し本を讀んだり温和かつたり致すと、大層感心のやうに褒められたり、又學校で良く出來もしない習字に丸ばかり付いたりすると云ふ風で、自然と子供に傲慢の心を起させはせぬかと心配して居りました。生活の方は餘程暢氣で、野菜は馬丁に畑を世話致させて新らしい物ばかり用ゐましたし、御魚は先づ東京の半分直で御坐いませう。一圓位の鯛は實に大きな物で御坐います。其代り赤い御刺身を食く次第には參りません。鯛、平目、鰡位ですが、單だ目の前で取れたのを直買つて料理致すとの出來ますのが、愉快なので御坐います。

▲長崎と名古屋

長崎へは然う度々も參つて見ませんが、外國人を有難がる風が盛で、國家といふ觀念が一般の人に乏しいやうに思はれます。ハイ名古屋には暫く住居ましたが、彼處も餘り感心致しませんネ。チヨツト大工が晝休みをするにも、薄茶を沸て丶飲むと云ふ風で、茶の湯活花などは進歩して居りますから、總體に優美のやうに見えますけれども、女の子は學校へ永く遣るより藝者にした方が大臣の奥方にでもならせるに捷徑と云ふ考へを持つ者が多う御坐いますよ、お手本が出て居るからでせうネ。それですから高等女學校が振ひませんで、三度ばかり維持が難かしう爲りましたが、近頃は漸く盛運に赴いたさうで御坐います。

▲夫人の通學時代

私の參つたのは一ツ橋の高等女學校ですが、十七歳（明治二十年頃）で卒業しましたので、初ての卒業生は矢田部の姉（矢田部良吉氏未亡人）の組、石本の奥様が第二期の組、私は第三期の組で御坐いました。彼の頃は算術や理科などを餘り獎勵しませんでしたから、唯今子供の算術を見て

遣りますのに困り切ります。爾うして彼の頃は漢學や英語より和學の方を主に致し、體操も唯今のやうに優美なのでは無く、男子と同じやうな眞似を致したのです。私は不器用で何も出來ませんが、學課の中で一番和文が好きで御坐いました。イエ和歌も一向出來ませんが、唯だ佳い景色などに出逢つた時、昔の歌書の中から好い歌を搜して讀んで見たり致すのが、樂みなので御坐います。

▲新聞雜誌

小說も以前は好きで讀みましたが、唯今では子供が見ますと不都合ですから、宅へ置くことは御坐いません。少女界とか少年世界とか、子供の見ます雜誌をチヨイチヨイ讀みますばかりです。新聞は時事と日々を取るのですが、大村に居つた頃は、新聞の配達が遲いので大阪朝日も取つて居りました。

▲中將の嗜好

良人は武骨一遍勤務一方の人で、これぞと申す嗜好もないので御坐います。衣服なども極構ひません方ですから、家内中綿服で暮して居りますが、良人では殊に着換るのが不精で何處へでも平常の儘で出掛けます。先ア役所から歸つて參つて、軍服と和服とを着換へるだけ位なもので御坐いませう。運動は好きで、少しの間もジツトして居りません。朝御飯前や御夕飯後には必ず其邊を散歩して參り、時々子供を拉れて出掛ける位が樂みの一つなので……。ハイ子供の事は戰地から便りの度に善く氣を付けるやうに申し越します。食物も贅澤な事は好みませんが、國風の料理の注文が出まして薩摩煮などを拵へることが御坐います、時としては自分で鳥を料理へ鍋を取り寄せて煮焚致します、肉類は天麩羅などが好物で……。御酒は可なり頂きまして御客の御相手に如何程飲みましても、醉ひ潰れることは御座いません、麥酒も獨逸へ參つた頃は善く飲みましたさうですが、御客が大抵日本酒の御好きな方ばかりですから、矢張り日本酒を主に頂きます。多勢皆樣を呼んで賑かに御話し致すのが好きでして、料理や店屋からなぞ取つては可けない何でも家で拵へろと申し付

けますから、ゴタ／＼臺所で音を爲せては失禮だと存じながら、何時も手料理を差上げるので御座います。煙草は極好きで葉卷でも紙卷でも喫みますが、其中にも西洋の刻煙草を紙へ卷いて頂くのが一番好きなので役所へ出ますとき巾着の中へ入れて參る煙草が少いと『今日は煙草が少いから早く歸つて來た』なんて申しますホヽヽ、戰地へ持つて參る軍用鞄は、尉官が一個、佐官が二個、良人などは三個許されるのですが、防寒具など澤山持つて行くに及ばぬと申して、毛布三枚入る位の一個の鞄には煙草を一ぱい詰めて參りました、所が長崎縣の知事さんにも煙草を頂き朝鮮の皇帝にも埃及の煙草を頂いたさうで御座います。平生喫みましたのはリッチモンドでしたが、近頃長崎に無くなりましたので、煙にして了ふ物を態々遠方から取寄せる事もないと申して、他の紙卷煙草で間に合せて居りました。角力も演劇も好きな方ですが、名古屋に居つた頃、演劇へ參るには夕刻からブラリと二時間ばかり見に行つて御茶一杯飲まずに歸つて參りました。餘つ程變り物で御座いますよ。金澤(中將の鄕里)では謡が流行りますので、良人も時々何だか迂鳴つて居ります

▲出征中の御父子

良人は戰地でも御酒を少々づゝ頂くとが出來るので、二度ほど面會の出來た忰は、其際水筒へ分けて貰つて大層喜んだそうで御座います。良人は兩親もなく親族も極少い方ですが、兄の息子を一人世話致したのが、大學を卒業致しまして、唯今宅に居るので御座います。

▲中將の出陣

ハイ良人の出征は極火急で……二月〇日の朝突然副官が參つて、座敷で何か話を致して歸りますと、是れから出發のだから、戰地で必要な品を鞄へ入れて置けと申し置いて直に役所へ出掛け、それからチョット歸つて參つて十一時に出發しましたので、子供は學校へ參つて居て存じなかつた位です。動員令が下つてから二十四時間は猶豫がある筈のですが、小倉から大村までの電報に故障が出來て延着致した爲め、大層急になつたので御座います。良人では先發ですから佐世保へ〇

〇と申す事で大村を出發たのです、それで見送りは無論致しませんでしたが、丁度奥村五百子さんが遊說の爲め大村へ御着きでして、女史歡迎の準備に朝から出掛けられた方々は、御良人の御出立を御承知なく御歸宅の後始めて良人出征と心付かれたのですが、鴨綠江から遼陽迄の間に戰死なすつた方も御座いますので、皆樣御覺悟の事とは申しながら、實にお氣の毒で耐りませんです。

▲奥村女史の血淚

軍隊が大村の停車場へ整列した時、丁度奥村さんが荒川さんの奥さんと長崎から着かれたので、軍隊の有樣を見て愈々事が始まつたのが判り、モー一日早かつたら入越さんとも緩々御話が出來たものを嗚呼殘念な事をしたと言つて、停車場でオイ〲泣き立てられ、良人も思はず胸が迫つたさうで御座いました。奥村さんが郡會議事堂で演說されたのは却々嚴しい申され方で『長崎や大村の人達は、少しも忠君愛國の精神が無くつて外國人ばかり有り難がつて居るのは怪しからん事だ、其樣なに外國人が有り難ければ露西亞人の妻にでも爲つて了ふが宜い』と云ふやうな酷評も御座いました。私共始め將校の家內は疾くから愛國婦人會に入つて居つたのでしたが、其席で忽ち三十人ばかりの入會者が出來まして、私が東京へ參る頃は三百人にも爲りました、此奥村さんが此前に長崎へ御出での時、知事さんに周旋を頼んで置かれたところ、此度來られても餘り會員が出來て居ないので、大層知事さんを責められたさうです。奥村さんの事は隨分惡く言ふ人もありますが、何しろ老人にして彼れだけの勢のあるのは却々豪い方だと存じますよ。

▲將校婦人會

大村には將校婦人會と云ふのが御座いまして、私もこれには缺かさず出席致しました」此會は一個月に一度將校方の夫人が軍隊內の將校集會所に寄り合つて、懇話會のやうな事を致すのですが、單だ寄つたばかりではと云ふので、僧侶さんを招いて道德上の話をして貰つたのです。併し矢張り僧侶さんですから、如何して

も御宗旨臭ひ演説に爲り易う御座いました。懇話と申した所で種々な趣味の御方がありまして、如何も統一が難かしくつて困りました。一躰軍隊では、上官の命令には必ず從ふと云ふ習ひですから、公の事は總て階級的ですけれども、男の方は私交上何の隔てもなく極親密なもので御座います。所が女の方は如何なる場合にも此階級的觀念が盛で、旅團長の奥さんが御出でなさらぬ所へ私共が出てはならぬ、旅團長の奥さんが御話を爲さらぬのに私共が喋舌つては惡いなぞと詰らぬ遠慮をされて實に困りました。尤も前々からの慣例もあつたのでせうが、非常に上下の區別を致しますから、私は是非此弊風を打ち破りたいと存じて、私共も皆樣も此地では他に親類は無し、御互に兄弟同樣にして苦樂を共にしたい考ですから、何卒階級を忘れて下さいと、呉れ〴〵皆樣に申したのです。會の時の衣服なぞも、隨分心配なさる方がありますから、私は先へ立つて粗服に致して居りました。

▲號外が待遠い

出征るからには、縱令死傷を致したとて覺悟の上で御座いますが、何卒御任務に過失のないやうにと日々そればかり氣が揉めまして、號外の配達が待遠しくつて耐りません。號外賣さへ來れば買つて居ります。

熱誠の溢る丶御話に、幾度か膝の進むを禁じ得ませんでしたが、長座を謝して御門を出ると、向ふから鈴の音烈しく走け來る賣子が、號外々々と叫びつ丶一段聲を高めて——遼陽占領の號外！

中將夫人の御喜びは嘸かしと想つて心臟の鼓動が激しく爲りました。

大阪 廣岡淺子夫人

今の社會で女丈夫若しくは婦人の事業家と言はれる人は東京で下田女史、奥村女史其他二三の方に指を屈する位で大坂にこの廣岡夫人の如き御方があらうとは多くの社會にはあまり知られてゐません、けれども廣岡夫人は實に無名の女豪傑でその婦人として、精神氣魄

の大なる所ろ、又その精力の絶群なる所ろ、實に今の日本の婦人界には珍らしい御方ですからこの夫人に就て聊か聞く處ろの事柄、並に夫人の女子敎育談の一斑を記して見ませう。

淺子夫人は昔から大阪で五軒屋と稱へられた中の豪商加嶋屋故廣岡信五郎氏の令閨で、實に當代の女流には珍らしい、氣象の鋭い勝氣な夫人です、丁度維新の際各藩が瓦解する一年前、たしか夫人が十七の齢に三井丁家から加嶋屋へ嫁して來られたのです其で維新後に於ける加嶋屋一家の財政と云ふものが非常に紊亂してつて、殆んど究境に陥つた處を此淺子夫人が必死の力を奮つて、獨力で能く理め旨く整理されたのだと云ふとで、加嶋屋が今日も猶依然として巨萬の富を保て居るのは全く夫人の力と申ても宜いのです。

唯是れだけでは夫人は大阪に於ける一個商家の女丈夫たるに過ぎないやうでありますが其實夫人は女子敎育並に社會改良といふ事に就ては頗る活潑で進歩的な意見を有つて居られて、各種の婦人會や、慈善事業など夫人の盡力に依つて成り立つたものがどの位多いか、殊に女子大學の創立に就て關西地方の遊説を一手に引受けてやられたほどあつて、その公共心の働らきの盛んな事は力量ある男子すらも及ばぬ位であります。これが數代連綿たる素封家の三井の令孃かと思ふとほとほと感に堪へません。

▲夫人の氣質

性質は誠にさつぱりとした質で、大方の夫人方の樣に、人の談話に調子を合せるが爲め、無理に心にも無い事を云ふて、表面を飾るなど〻云ふ樣な風は少しでもない、可厭なとは可厭、好きならば好きと誰れの前でも構はず云ふてのけられる方で、言葉つきなぞも、ハキハキとして居て、辯舌の爽やかな事と云つたら時には英語も交れば漢語もはいり辯舌の爽やかな事と言つては、實に條理明晰、理非を立とところに辨するといふ風で、そして坐談の間に、何所か自然に相手の意志を支配する所ろがあるやうです、恰かも快刀亂麻を斷つと云ふ風の趣きが見えます、而して元來が男勝りと云は

れる位ですから、髪化粧などには丸つきり、無頓着れぬ方で、手束ねのグル〳〵巻の束髪に、衣服はと云へば、尤も絹物ではありますが、加嶋屋の奥方としては如何にも質素な服装をして居られるとの事。

▲夫人の苦心

良人の信五郎氏は大家育ちの坊様風で至極穏當な方の處へ、餘り加嶋屋一家には人物と云ふ質の人が無かつたものですから、瓦解の際の夫人の苦心は一方で無かつた、此時婦人が未だ裏若い身で、雄々しくも決心されたのは加嶋屋一家を當時の窮境から救ひ出すといふ事であつた、成程柔順と云ひ温和と云ふ事は實に女の美徳である、如何にも女子には缺く可からざる要素である、けれども此家、加嶋屋一家を今の窮境より救ひだすには、自分は區々たる外面の美なぞを衒ふて居る時でない、どうしても此家の爲に働かねばならぬ、身を犠牲にしても此一家を持ちこたへねばならぬと、夫れから一切身の廻りなどには頓着せず、種々と文明的の事業に手を出して、四方八方から喧しく起て來る攻撃を身一つに引うけ、一意財政の整理に身を委ねられた、それからと云ふ者は丸で素振りから何から變て了つた、女らしいと云風よりは、寧ろ男子に近く成られて了つたのです、けれども夫人の心では、自分は境遇上詮方なしに此樣な者に成つたがどうか娘達は自分の樣な風に育てたくないものと、いつも懇々と令嬢方に敎訓をされるさうです。

▲子弟の敎育

令嬢三人は東京に出して學校亦は良師に托して敎育をして居られる、子弟の敎育に至つては實に熱心なもので、一家の子弟は固より加嶋銀行及び商業部の番頭小僧に至るまで其智徳を研かせる爲に「早鳥寮」と云ふものを設けて倶樂部やら、敎場やらに當てそれ〳〵の敎師を雇て敎育して居られる、折々は辯護士も來て簡易な法律の講義もある、邸内にはブランコなぞの運動機關も備てあり、中々注意周到です、夫人は常に何うかして加嶋屋一家からたとひ丁稚小僧であらうとも、不正な者は出したくない、詐偽的の人物を作らへたくな

い、就ては青年の遊惰に流れるとか、放蕩者になるとか云ふものは其原因は極く小さい處からである、假令ば牛肉屋に行くとか料理屋に揚るとか、其様な事が嵩じて青樓遊びもしたくなる、遊ぶにつけては遂に不正な事もする様になるのだから、どうしても若い者には空費する時間を餘り持たさぬ様にせねばならぬ、と斯う云ふ處からいろ〳〵娯樂の道具も備へ學問も覺える様にと倶樂部會教場と云ふ様なものが出來て來たのだと云ふ事です、又當今女子の教育に就ても夫人は一風變たいろ〳〵の御意見を懐て居られるが、今夫人が女子の獨立といふ事に就て語られた一斑を擧げて見ませう。それは

▲女子教育意見

夫人曰く女子教育も近來餘程普及した様ですが、今日の教育は啻に書籍を讀むといふことのみに走つて精神的の教育方法が不完全なので、動もすれば學校へ行つた爲に却て世の所謂お轉婆となり、社會の非難を受ける様な結果になるのは、獨り自分の不幸のみならず、延ては女子教育の前途にも障害を與へる様になりますが、是れは妾等のいつも殘念に思つて居ますので必竟今日の社會を根柢から革新するまでには、まづ一般女子の思想を高めて教育ある女子の勢力が社會の一部に現はるゝやうにならねばならぬと、妾等は思つて居るのです。

▲女子の獨立

夫人又曰く、日本では女子の學問をする方には動もすると結婚は男子の奴隷となり女子の社會的生命を絶つものゝ如く考へて居る人があるやうに覺えますがこれは大間違でせう、申上るまでもなく一體何れの國、如何なる時代でも女子が家庭に大勢力を占めると云ふとは疑ひもない事實で徳川時代における大奥の勢力が政治の表面に顯はれたこと乃至お家騒動などの原因はみな女子の内部における勢力の致す所ではありませんか。

女子を以て近づく可らざるものとした時代でもこの通りの有様ですから女子の勢力は決して侮り難いもので

すこれは無教育な昔時の女子が社會に害毒を流した一例ですが若しもこの勢力を教育ある婦女が家庭に善用したならばどの位立派な社會が出來るでせう、學問をした女子は必ず社會の表面に立て名をなさなければならぬなど丶思ふのは大なる心得違です、どうしても男子と女子は何處までもその立場を異にして、社會の爲に盡さなければなりません、併し斯様に申す妾が男の爲すべき職を執つて居るではないかとの御質問もありませうが、妾の如きは世に異數な特殊の例で、凡ての婦女が皆妾の眞似をなさつては困ります、妾は廣岡に嫁いで間もなく十年の役が起り、大阪の經濟界は非常に紊亂して、莫大な損失を蒙り、店の番頭も小僧もこれを好機として銘々勝手次第に持逃をすると云ふ有様それで當時の廣岡一家の主人と云ふのは三人とも皆んなお殿様風に育つた人ばかりで、到底その整理も出來なかつた場合であつたので、妾は女の身を顧るの遑もなく、種々な世間の非難をも意に介せず、財産の整理に着手したので、それが縁となつて爾來私の手を下さなければならぬ事のみ引續いて已むなく今日に至るまで男の仕業を執つて居るのであります。無論女子にした處で、良人の身の上に萬一變つたことでもあつて一家の浮沈に關する場合にでも出會へば、須らく厨を去つてその衝に當るだけの覺悟がなくてはなりますまい是が即ち教育を受けた女子の德であらうと思ひます。兎に角是等の女子に、深い事は不用としても、せめて民法の一般位は心得て置かなければ、非常に不自由を感じ、時としては非常な損失を招く様な場合があらうと思はれる故、是非學校の科目中に加へて貰ひたいと思ふて居ますと言はれました。

只十磅

サー、ヘンリー、ベスミーアが結婚しました時には天にも地にも只十磅の金があるばかりそれで鍋も買はねばならず釜も買はねばならずと云ふ始末でした　たがベスミーアは今が結婚の時期だと信じましたからして揃う事なく一所になりました、ストロングと申します米國の金満家も矢張り赤貧洗ふが如き上に御母さんだの弟妹だの自分が養はなければならぬ人が澤山あつて此の上細君を貰ふては差詰め食ふ　に困るだらうと思はれましたが　家政上又生理上必要だと思ひましたゆゑ百難を排して断行して仕舞いました　太閤様が月漏る伏屋で御祝言をなさつたのも思ひ出されて大人物の用意のあると　ころ誠に床しう存じます

家庭雜感

巖谷小波

▲前途尙遼遠

遼陽は己に占め、旅順もまさに陷れんとして、玆に日露戰爭の、第一期を了はらんとするに當り、我が聰明なる　天皇陛下は、總理大臣を御前に召させ給ひ優渥なる勅語を下だし給ふた。今に初めぬ事ながら、國家の爲め臣民の爲めに、飽くまで大御心を盡させ給ふ事、難有しとも辱しとも申す言葉を知らぬのである。さりながら、此度の勅語の御趣意を、私かに察し奉ると、忽ち背に汗を催うし、面を染めねば成らぬ所がある。

見給へその御趣意は、「戰局の前途尙遼遠なり、堅忍持久益々奉公の誠を竭せ」と、云ふ所にあるのでは無いか。

申すも恐多き事ながら、一旦彼の大國を敵手にして國家の運命を賭けるまでの、大戰端を開いたからは、その前途の遼遠にして、堅忍持久の必要なる事は、初めから解りきつた話で、誰しもこの覺悟は無かる可らず、否、十分あつた筈なのである。

然るにその戰局の僅に第一期を了るか了らぬに、上御一人をして、特に勅語を下だし給ふまでに、大御心を盡させ給はねば成らぬ樣にしたのは、抑も誰の罪であらう。

凡そ働いて居る雇人に向つて、「コレ、よく働かねば成らぬぞよ」と、主人の言葉を掛けるのは、畢竟念の上に念を入れるのであらうか、將たその雇人の働き振りに、意の滿たぬ所があつた故であらうか。余は已に前號に於いて聊か此點を警告した心算である。今や此の勅語を拜戴するに當つて、いよ〳〵恐懼の感に堪へぬ。

▲淸き敎訓

此間まで萬歳の聲に迎へられ、日章旗の風に送られて、戎衣嚴めしく戰地に向つた、我が幾萬の同胞は、頃日白色の病衣に包まれ、赤十字の旗に護られて、續續內地へ歸つて來るのである。

彼等は砲煙彈雨の間に、幾度か生死の境を出入して念頭寸毫の自個を顧みず、滿身國家の犧牲に捧げて、遂にかゝる負傷を得、乃至病毒に罹つた者、國民は正に彼等に對して、十分感謝の意を表し、慰勞の擧に出でねば成らぬ。

されば我が貴婦人の團體は、夙に篤志看護婦として、一々彼等を停車場に迎へ、繃帶の卷替へ、患部の手當に、溫い同情の限りを示めして、少しも勞を辭せぬのである。

思ふに彼等が停車場に着して、天の使にも類ふべき此等同情者の貴婦人に、親しく懇切なる手當を受ける此の一瞬時間の感情は、蓋しその一生を通じて、決して忘れ得ぬ所であらう。

而もその感情ほど、淸らかにまた美しく、人生の最も高尙なるものは少い、隨つて又彼等自身の、之に依つて精神上に受くる敎訓は、實に貴いものと云うて可いのだ。

否、彼等自身に止まらず、社會も亦之に依つて、少からぬ良訓を得るのである。思へば婦人の力なるものも亦偉大と云ふべしである。

▲注意力を養へ

注意にも二た通りある。消極と積極と、電車に乘つて巾着を抑へるのは、掏摸に取られぬためなので、かう云ふのは消極の注意と云ひ、隣棧敷の客の着附を見るのは、時の流行を知るためで、かう云ふのを積極の注意と云ふ。

以上はほんの一例であるが、由來何事にまれ消極にのみ傾き易い、日本婦人の常として、隨分注意深い質で居ながら、それが兎角消極にのみ偏して、積極的の注意力に乏しいのは、まことに氣の毒なものである。

尤も前の例に云つた、隣棧敷の客の着附に依て、時

の流行を知らうと云ふ場合には、決して鈍からぬ眼力を持つて居るが、その他の大切なる事物に對しては、却つて輕々に見過すのが多い。
例へば町を車で通つても、兩方の商店に注意して置けば、よし其時に用が無くとも、他日必要の起つた時に、オヽ、あの品はたしか何町にあつたと、直ぐに用が辨じるでは無いか。
更に進んで、人と應接する場合にも、よくその言語や動作に、注意しておくと不注意で過ごすとで、後日其人と交渉事件の起つた時、大いに便不便がある。
其他讀書は云ふまでも無く、雜誌新聞の記事などにも、常に注意を怠らずに居れば、必ず其の効果はあるので、不注意に慢然と讀過ごす程ならば、寧ろ初めから讀まぬ方が、時間の經濟にも成ると云ふものだ。
然るに何事にも不注意の人は、自家の仕た事さへ忘れてしまひ、「藏納紛失」「置忘」を、何度となく繰返へし、耳に挿んだ鉛筆を、一生懸命机の下に捜して、餘計な手間を費やすのは、馬鹿々々しさの限りでは無いか。
要するに、注意と不注意の差は、經濟と不經濟、便利と不便利、やがては愉快と不愉快の差と成る而も事物に注意すると云ふ事は、白痴、魯鈍で無い限り、必ずしも難い事では無いから、人は常から心がけて、事物に注意するの習慣をよく、養はねば成るまいと思ふまして一家の主婦たる者に取つては、尤も大切な事であらう。

▲人は使ひ樣

馬鹿と鋏は使ひ樣で切れると云ふが、下女や下男も、正に使ひ樣で役に立つもの、まことに人使ひと云ふものは、決して易さしいものでは無い。
雇人が大勢だからと云つてその割に用事が捗取らずまた細君に下女一人でも、隨分多勢の客をあしらひ得るのは、畢竟使役者の上手下手にある。
なまじ人數が多く成つても、その擔當が明らかで無いと、兎角責任をなすり付け合つて、互ひに背を盗ま

うとするから、却つて萬事にソツが多く成る。これに反して臺所を、只一人に委せておくと成る程忙しいは忙しいが、何事も皆自分の頭に來るから、存外拔目無く働くものだ。

之を要するのに、此等雇人に對しては、その責任を明かにし、その用務に忠實ならしめるのが主人の腕と云ふものであらう。

一旦甲に云ひつけた用を、次に乙に命じたり、昨日は丙に委せた事を、今日は丁に受持たせるのは、或は競爭心を起こさせると云ふ、方便に成るかも知れないが、多くの塲合には、啻徒らに彼等をして責任を重んせぬの惡弊を、自然養ふに過ぎないのである。

おとなしいのは氣が利かず、利發な者は陰日向があり、口上の巧いは手足が動かず、手ばしこいのに麁想をする。兎角十分なのは無いものであるが、それでもその長所に依つてその向き〳〵に之を使へば、立派に役に立つてゆく、またその當人等に取つても、大いに得意であらうから、隨つて用事も捗る様に成る。かくてこそ、初めて置き榮へある雇人と云ふべしだ。

然るに子供嫌ひに傅役をさせ裁縫好きに荷物をさせて、偶々子供の機嫌を損じ、芋を焦げつかせてしまつたと云つて、これに小言を喰はせるのは、却つて彼等の怨を買ふ上に、更に主人の不明をも吹聽してしまふも同じである。

されば人を使役する程の者は、まづ宜くその下男下女の、氣質を究め、働振を察して、彼等が長所と短所とを、豫め心得置くべしだ。

▲叱り損ふ勿れ

『劇しい親の叱り損ひ』とは、よく世の親たる者の、一面の弱點を喝破した句では無いか。

蓋しこの句は、只の親に對してのみならず、兄たる者にも姉たる者にも、また人の主たり師たる者にも、よく應用が出來るのである。

元來叱るだの、小言を云ふだの云ふ事は目上の者の目下に向つて、容易に用ゐ得る權能であるが、それが

容貌であればある丈、十分これに意を用ゐて、何卒濫用の無い樣にしたいもだ。

浮世話の題目にも『小言幸兵衛』とか云ふものがあつて、巧みに小言家の眞相を寫すが、それ等は極端の寧ろ滑稽なるものだが、實際でも之に類似したもの、決して無くは無いのである。

尤も小言にも種々あるが、口汚い叱り樣、聲高の小言ほど、聞いて聞苦しきものは無く、またその割に効驗の少いものはあるまい。

況んや權能の濫用から、深く事實も究めずに、所謂る叱り損ひをやるのは、只効驗の無い斗りで無く却つて威信を損じ、果は輕侮を招く事に成る。

また川柳子の嘲る所に、『美しい女房叱るが自慢にて。』と云ふのがある。成る程世の亭主なる者には、無暗に女房を叱りつけて、以て得意がる不心得者もある樣だが、此等も多くは叱り損ひで、夫の威信を保つ上に、決して得策とは云はれぬのである。

若し夫れこれが位置を轉じて、妻たる者の夫に對し口喧ましく小言を云ふに至つては、お座の醒めたる限りと云ふべく、少くとも我女學世界讀者は、所詮夢想だも及ばぬ所と信じて、茲に小言を云ふ必要はない。

▲毛布に詩歌書を添へよ

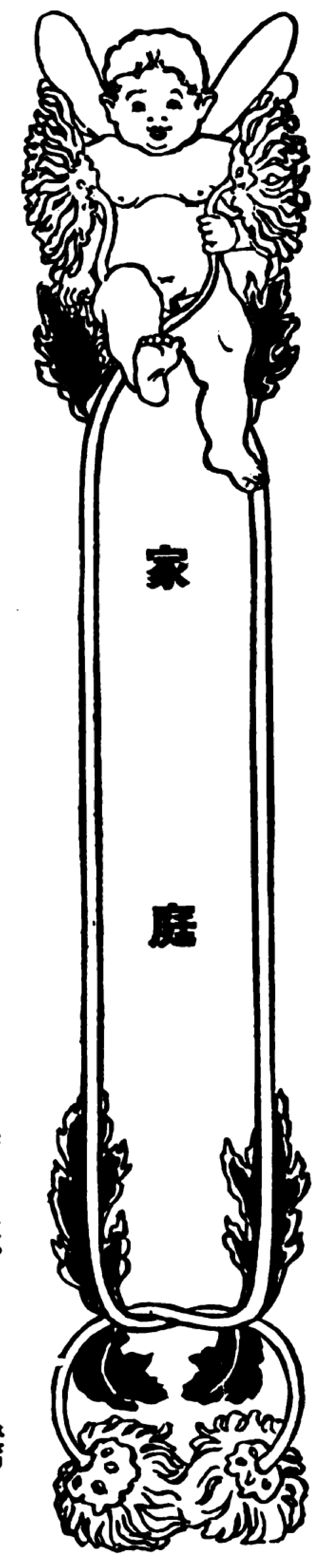
節漸く寒冷に向つて、我が同情深き國民は、後援會なる名の下に、出征軍人に毛布を送るの、一大美擧を與す事と成つた。

されば之に贊同する者は、持ち合せの毛布は云ふまでも無く、わざ〳〵新しいのを買ひ求めてまで、爭うてこれに應ずるのである。

但しこの寄贈の毛布には必ず一隅に白布を縫ひ付けて、これに氏名を書く規定であるが、余を以て云はしむれば、此には只に氏名のみならず、情を籠めた詩歌俳諧などをも、隨意書き添へ得る事にしては如何か。

さすれば天涯の異域に在つて、此の温き贈物を受る者の、偶〻此等の吟詠を誦して、感更に深きものあらう。

ましてその筆蹟の、女性の手に成つたものであつたら、その毛布はよし一枚でも、温かさは二枚三枚にも優して、遙かに嬉しからうでは無いか。



嫁の選ばれ方

嘉悦孝子

嫁の選び方は所々方々で大分説かれましたが、嫁の選ばれかたと申のは、まだ何處でも唱へられたやうに覺えませぬ、選ばれかたとは勿論これから嫁にならうと云ふ女子の立場から、選ばうとなさる殿方なり、其親なり、兄弟なりに向つての希望、云ひ分と申やうな事であります。私は嫁の選び方がだん／＼八釜しくなつて參つて、むしろ我儘、勝手、自由とでも申たいやうに世間が變つて來て居ますのに、嫁に選ばれやうと云ふ女子の方で、これに備ふる所がないのは、甚だよくない事であらうと思ひます。イヤよくないと申よりは女子に氣慨のないことが殘念です。一生の苦樂浮沈が男子によるとのみ思ふて、自からの運命を自から招かうと云ふ女子のないのは、誠に殘念です。

そこでこれから嫁に選ばれやうとする諸孃の爲めに、其選ばれかたについてまづ／＼私のざつとした考をのべて置きましたら、又おひ／＼に此「選ばれかた」と云ふ問題について、委しい研究が致されて、諸孃の幸福が亦得られやうかと存ずるのです。

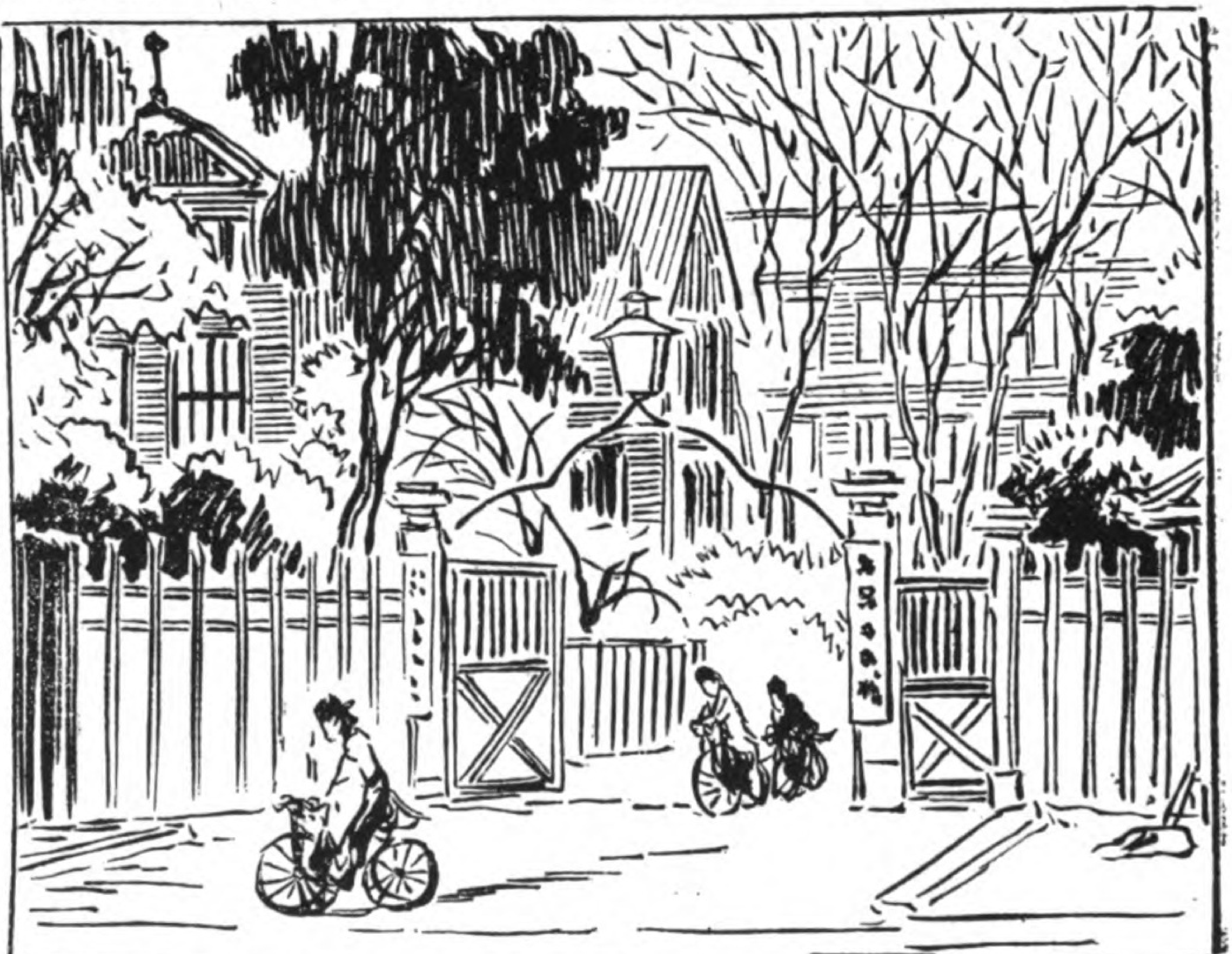
從來の習慣ではありますけれども、嫁に選ばれんがために、寫眞をと云はれて、直に差出すのは第一によく

ないことゝ思ひます、寫眞で嫁をきめやうとする男子ならば（尤も寫眞は第一番の瀬ぶみで、次いで形式上の見合はありますが大がい寫眞でよいはきつときまるのです）、先づ選ばれる方で罷り下りたいものです、又選ぶ方では顏が十人並すぐれて居て、學問があつて、淑德があつて何うしてかうしてと申さるゝのでありますが、さていよ〳〵となれば、學問や淑德よりも、容貌好しならば、まあ大かた纏まるのが世間の通常であるやうに思はれます、そこで寫眞見合と云ふことが、萬事輕便主義の當世に流行致してまゐりました。けれども寫眞を見てそれでこれならばと心を動かすやうな男子方ならば、迚も自信ある女子の道伴れとしては取られないやうに思はれます。

それから、これも寫眞見合と大差はありません、則ち或る席上一回の見合です、私はこれもやはり選ばれる方で嫌だと云つて欲しいのです、席上僅かの時間で何がわかりませう、よしわかるとしても其は眞面目な表面だけで心の中胸の底迄分るものではありません、かやうな見合で氣に入つたとて、早速貰ひたい、迎へたいなど申込む男子の方ならば、其御好意は誠にありがたいのですが、まあ貰はれたくないと云つた方か安全なやうです、寫眞の見合よりは少しはよいやうでも、矢張心細いのです。愈苦樂を共にすべきが夫婦ならば今少しは何とかあつて欲しいのです、少しは愼重の態度も取つて、此方の平生から何も彼も充分に知つた上なほ進んでは少しは交際もして見て、又此方にも充分考へる餘地を與へてもよさそうなものと「選ばれ方」に少し心を留めて居る女であつたら、かならずそう考へるに違ひはありません、又自信あり自重もある女子ならば、一度の見合で滿足して貰はうと云ひ出すやうな方であつたら最初から對手とも思ひますまい、同時に云ひ知らぬ侮辱を受けたやうにも感じませう、人間の大禮結婚の大事をかやうに輕卒に遂行しやうとする人の愚かさは申までもないとして、これは全く女などはどうでもなるもの、妻は夫に對して絶對的に服從すべきものと云ふ、陳腐な我儘な舊式の思想を以て、冥

冥裡に自分より最も以下に取扱つて居るからで、又男さへ都合がよければ（素より男子のかだ〳〵の都合よきやう出來るだけはいたす積りですが）女の方では好き嫌ひを云ふ權利がないやうに考へて、對手方たる女子に對してば自由もなければ何等の權利もないものと見做されて居るためだと思はれるのです。

それで、これから結婚をしやうと云ふ男女に對して私の望んで已まないのは、愈結婚をしやうと決心する迄に少くも半歳か一年の時間を費して、互の思想を交換



日本女子大學校（高田豐川町）

し意志を疏通し主義や趣味や其他結婚した上で、其爲めに氣まづく思ふやうなことが、生じ易い事柄につきて十分の研究を重ねて、其一生にこれならば必らず幸福であると云ふ豫想を造つて見たいと思ふのです。嫁を選ぶ人がこれだけの愼重なる覺悟を以て致しましたならば、選ばれる方でもどれほど賴母敷か知れません私の嫁の選ばれ方と申のは一言すれば、上に申すやうな時間をかけて研究した結果と同樣な効力を有する女子の態度を指して申すのであります。で選ぶ方で輕

輕しくなさるのには最初から應じないのが本當だろうと思ひます、結婚は再びし三度することの出來ない人生の一大事であれば、男子の方では愼重でなくても女子は飽迄愼重でなくてはならぬのです、さうするのが敎育あるこれからの女子の態度でなくてはなるまいと思ひます、寫眞や席上の見合位で此大事を決するのは狂熱の所爲とでも申たいのです、時として輕躁なる靑年男女の間に交換される熱情と云ふが如きものは此人生の一大事たる眞實なる結婚には、非常の害惡たるを免れないのです、結婚は情熱に支配されないで、飽迄理性の導く所に從ひたいと思ふのです。

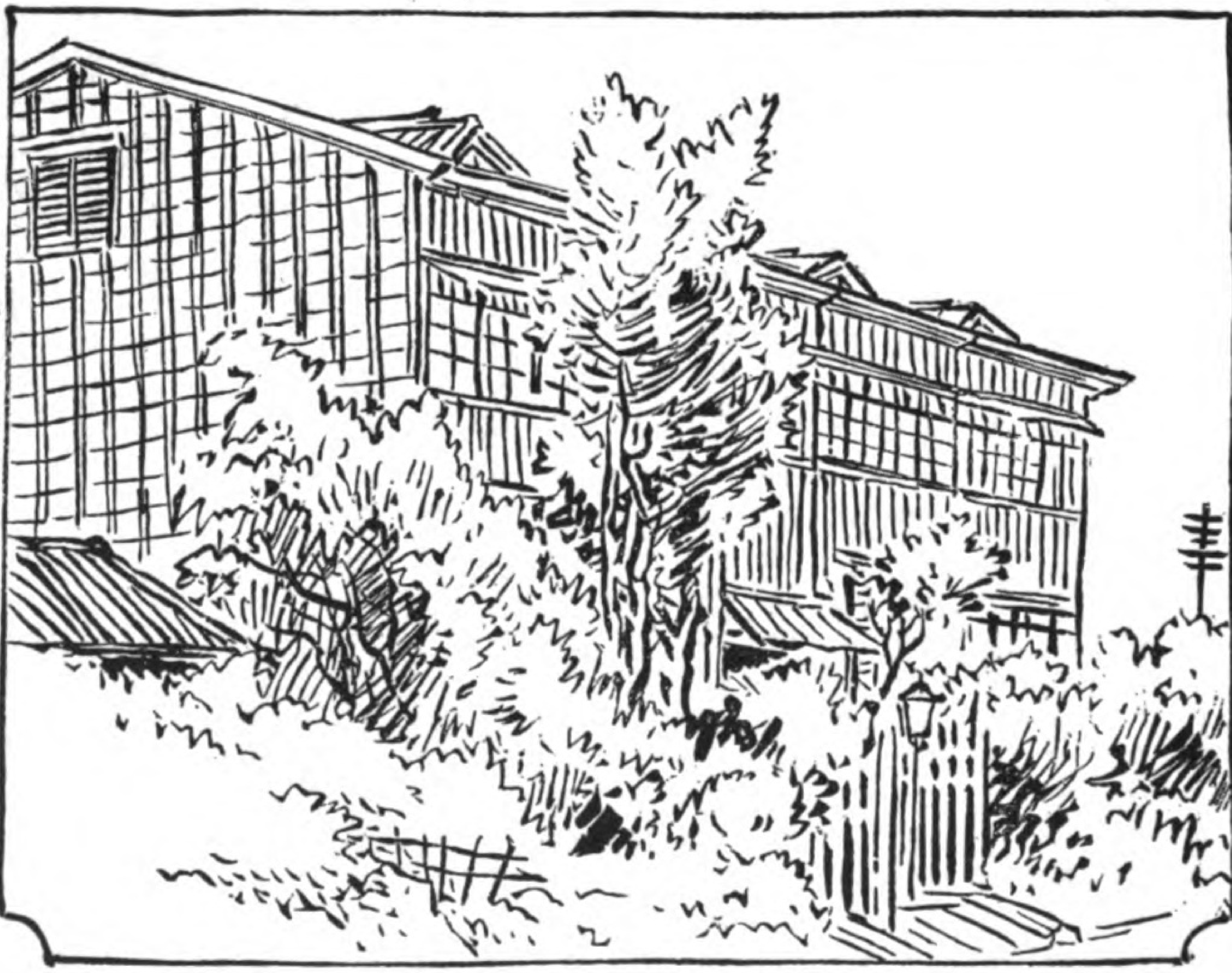
それで嫁の選ばれ方には自づからそれだけの覺悟がなくてはならないのです、選び方が間違つて居た場合には、選ばれ方でこれを改めることが出來るやう、選ばれ方さへ立派であつたら、下手な選び方をする事が出來なくなり、男の氣儘な考を掣肘して其結婚に對し女子に對する間違つた觀念を正道へ導くことが出來るだらうと思ひます。

結婚前に於ける自由交際といへるには、或は何等かの弊害が伴ひはしないかと心配する人があるかも知れません、厭はしい彼の自由結婚とやらの種が蒔かれはせぬか、此交際の爲めに有爲の靑年が誤り、立派な處女が悲しい目に逢ひはしないかなど氣遣ふ人もありませうが、私の所謂結婚せんとする男女相互の研究の爲めにする自由交際には、一定の目的があり限劃があり、殊にそれだけの覺悟を以てするのであつたら、斷じて左樣な弊害はないと信じます、私は結婚前に此研究期と云ふものを設けて或る期間男女相方の自由交際を計したいと思ひます、此研究期があれば、最初に於ける寫眞や席上の見合も全然排斥する必要はなくなると共に時としては却て便利になることもあらうと思ひます

私はあてどもない靑年男女の交際には不賛成でありますけれども、既に双互の思想や感情や主義や理想や其他双方の一生を圓滿にすべき凡てのものを研究する目的の下に親や兄弟の監督を以て嚴肅と親和との交際を保たしむる爲には全然賛成しなければなるまいと思

ひます。若し親や兄弟が監督する事の出來ない塲合には所謂名譽夫人といふが如き者を中間に置いたらよろしからうと思ひます、此嚴肅なる交際が持續する事の出來ない程に不健全なる思想を以て居る男女ならば論外です、私は少くとも教育ある女子には斷じてさやうな危險はないと思ひます、此事が行はれましたら、嫁の選び方、選ばれ方共に、計策を要せぬことになります。否此無策は最上の策略でせう。

近年離婚といふことが年一年殖えて來るやうですが、これは最初結婚に對して思慮の精到を欠いたからではありますまいか、結婚といふことを餘りに小説的に決行した結果ではなからうかと思ひます、結婚は人生の眞實事であつて決して空想ではありません、架空の事ではないのです、又結婚の取結びが輕卒に失して取返しのつかぬ結果を釀したものが此離婚の悲しい現象だとすれば、今の社會に行はれる輕卒なる見合法の如きは其最大の原因といはなければなりますまい、嫁の選び方、選ばれ方の不都合から來たものと斷せざるを得



三輪田女學校（麴町四番町）

ないのです、嫁を貰ひ又は貰はるゝに死んだ形式や、親の命令のみに任して置くのは誠に宜敷ないと思ひます、親だからとて自身のことを人に任して置くことが出來ませうか。

嫁といふ文字は他から呼ぶことでありますけれども、其嫁たるべき當局の女自身に餘程考へねばならぬ事です、私の嫁の選ばれ方と申のは、この考を指したので御座います。要するに、其選ばるゝ時既に一生の運命が定まると覺悟をして、十重にも二十重にも注意をせねばなりませぬ、すでに行かうと決する一刹那に夫たるべき男子に對して、組し易しとされるか、されぬか、尊敬されるか侮辱されるかが決するのですから、おいそれとは行かないのです、第一に我苦樂を共にするに足る人であるかないかを具に研究せずに承諾を與へるやうでは、まだ嫁の選ばれ方に長じた女とは云はれませぬ、其選ばれ方の巧拙によりて直に其女の賢愚識無識がわかるのです、故に私は申ます、女子二十歳を越へて後ならでは決して結婚すべからずと。

家政二十四時

河西環

▲買物の心得

食物の材料を買ふ時の心得としては、第一に材料の撰擇、第二に品質の鑑別、第三に價錢、夫から數量、これらの上に十分の注意と相當の智識を要することで、例へば同じ程の窒素分を含んで居る雞卵二個と牛肉二十匁と牛乳一合五勺、此中どれにしやうとか、此魚は目と肉の彈力の工合から落ちてから幾日位のものだとか、一度分の豫算がこれ丈、家内が幾人だから、これとこれを此丈にしやうとか、其判斷決定の良否は中々輕く見べきものではない、從つて之に關する巨細の注意は無益ではあるまい。が、今暫く此の如き複雜な問題は避けて一つ二つ狹い問題に立入つて見やう。

●●●●體積と代價　一體物の代價は其分量に從ひ體積に比例すべきことと言ふまでも無いから、凡て材料の買入れ

には秤器を使ふが一番正直ではあるが、さてそこに習慣といふことがあつて、單に數と目分量で賣買されて居るものがいくらもある、是に於てか、妻君の數學的頭腦が巾着の重みに關係し、一家の口に影響を來す、同じ雞卵買入について例を取らうか、こゝに長一寸三分の卵と一寸五分の卵と二種あるとして、其代價、前の方が一つ二錢二厘、後の方が一つ二錢八厘とする、さてどつちを買つたが得だらうか、妻君數學の嗜みがあれば、二分ほか小くなくつて六厘から違ふなどゝいふ算勘はせない。直ぐに胸算用で 13×13×13:15×15×15=2197:3375 とやる、前のが二錢二厘なら後のは三錢四厘弱、之が二錢八厘だから正當よりは六厘から安い、大い方を十個下さいと言ふに違ひない。凡て同じ形で大さの違ふものゝ體積は、相當する部分の長さを三度懸けた數に比例する規則で、八寸の鯛と一尺二寸の鯛とでは一寸三倍、直徑二寸の大根と三寸の大根とでは二十七本と八寸で同じ分量同じ價値になる、尤も形が違へばさうは行かぬが、同じ形のものならいつもかうだから、目分量で買物をする時は此心得が是非必要でなければならぬ。

三乗九々

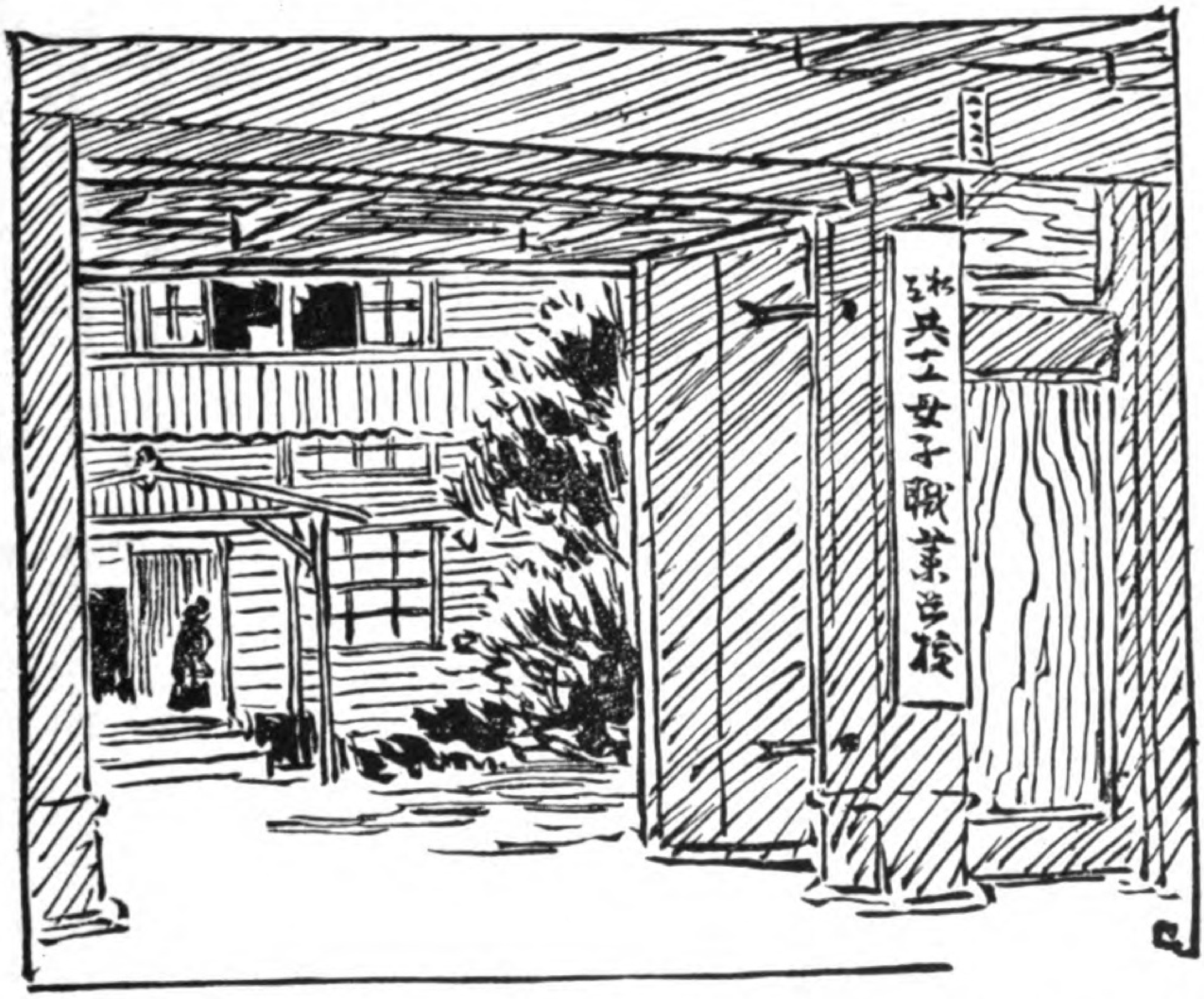
一が　一	二が　八	三が　二十七	四が　六十四
五が百二十五	六が二百十六	七が三百四十三	八が五百十二
九が七百二十九	十が　千	十一が千三百卅一	十二が千七百廿八
十三が二千百九十七	十四が三千廿四	十五が三千三百七十五	十六が四千九十六
十七が四千九百十三	十八が五千八百卅二	十九が六千八百五十九	二十が八千

●●●●●**初物喰の弊**　金のある人が金のかゝる料理を食べるのは別段言ふべき事は無いが、さりとてつまらぬ虛榮心や好奇心から、金錢を殺して使ふに至つては、良妻の資格を疑はねばならぬことになつて來る。例へば、世間には、無闇に初物々々と、初物ばかり食べたがつて、茄子一つに一二圓を惜まず、片身の鰹に鯛十枚の

金錢を投じて人に誇りたがる輩がある。誠に愚な淺薄な話しで、いくら金錢に事缺かぬからと言つて、さりとは冥利といふこと知らぬ罰當りと評するのは亂暴だらうが。かう言へばとて、なにも頑固に、珍らしきを好む自然の性質を曲げよといふでは無い、賊や賄賂で取つた金でない以上は、今日買ふ初鰹を明日に延して其差金一圓を外の必要有益の使途に充てる程の心得は思想の健全な妻君方には必要ではあるまいか。

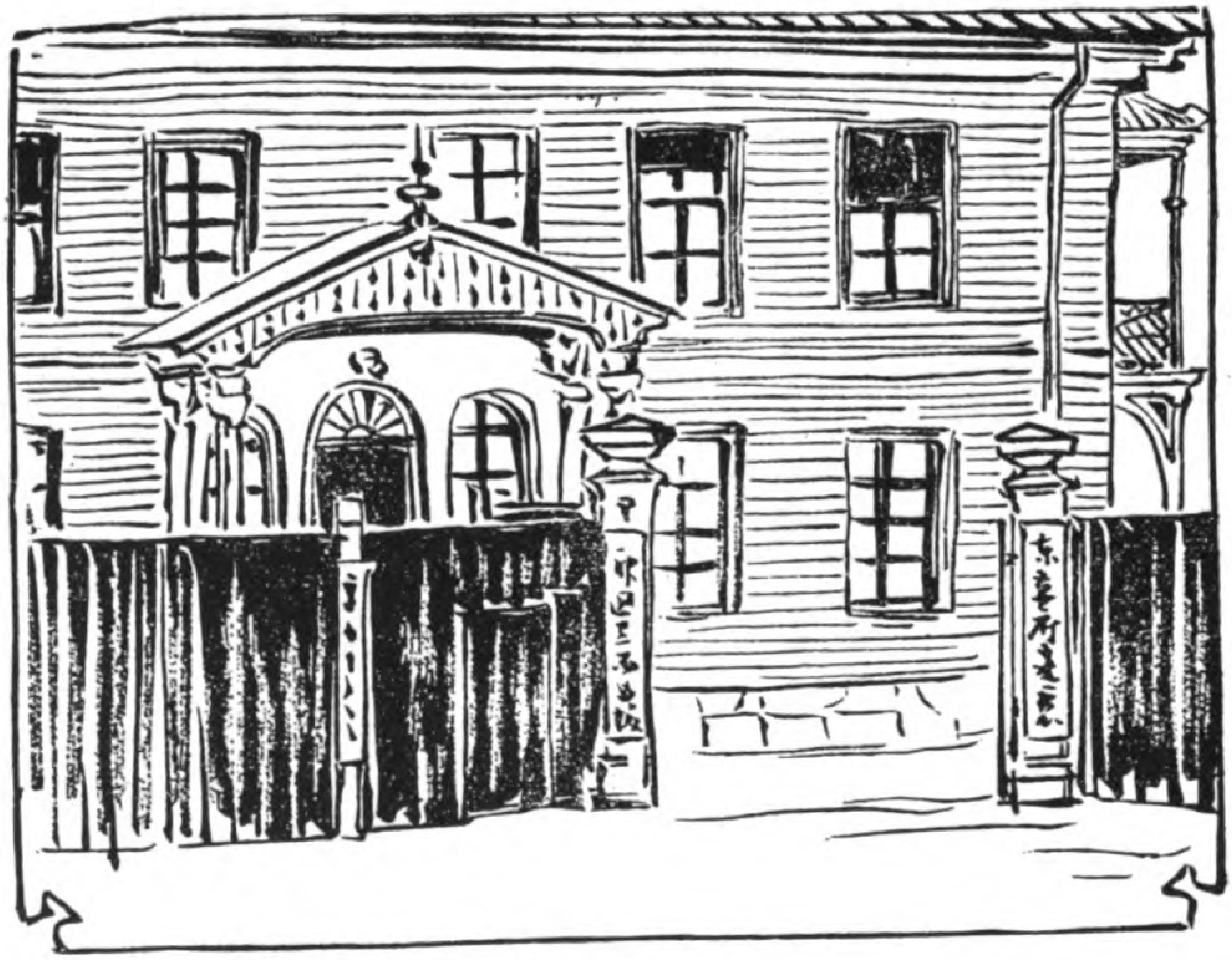
▲料理用器具

材料も揃つて晝の料理にかゝる其前に一言料理用器具について述べて置きたい。料理器具に最も注意して避けたいのは、銅鍋銅匙銅湯沸しなど、銅を以て造つたもの、及び銅と他の金屬の合金、即眞鍮唐金類で造つたものである。誰も知つて居る通り、銅の器は、第一煮えが早い。其理は、銅は熱を導く力が銀に次いで强い物質であるからで、火に懸ければ、直ぐに暖つて、早く煮え、從つて炭が得で手數と時間が省ける。夫から銅の器で煮たものは腐りが遠い。(此理は即ち銅器禁止と同じ、後で説明する。)



女子職業學校（一ツ橋外）

夫から、銅器は鐵のやうに鐵氣が出ない。質が柔かだから磨き易い。磨いて赤い美しい色になつて氣持がいい。夫から今一つ、銅は柔かな上に粘り氣の強い金屬だから、取扱ひを荒くしても、凹むばかり、土鍋や鐵鍋のやうに割れる心配が無い、のみならず、不用になれば潰しが利く。此等の理由で、銅は今迄勝手元に歡迎された。が、銅といふ金屬は、もと／＼激烈い毒物で、之か身體へ入れば段々銅中毒といふ病氣を惹起して、容易に癒らないのみか甚しきは爲に死を招くことになる。銅の鏽、即緑青といふ、其名の通りの色の粉の大毒であること、從つて、緑青の付いて居る銅器を使ふことの危險は知つて居ても、煮る物の質、別けても酸味のある物などに逢へば、錆びのない銅器でもその銅は溶けて煮物の中に交り、血へ交るといふことに氣の付かぬ人が少くない。實例を擧げやうならば味噌汁、銅鍋で味噌汁を煮て、其味噌汁を調べて見れば、其中には（必ず私は必ずと斷言する）容易に分る程の分量の銅分が入つて居る。これはどんな味噌



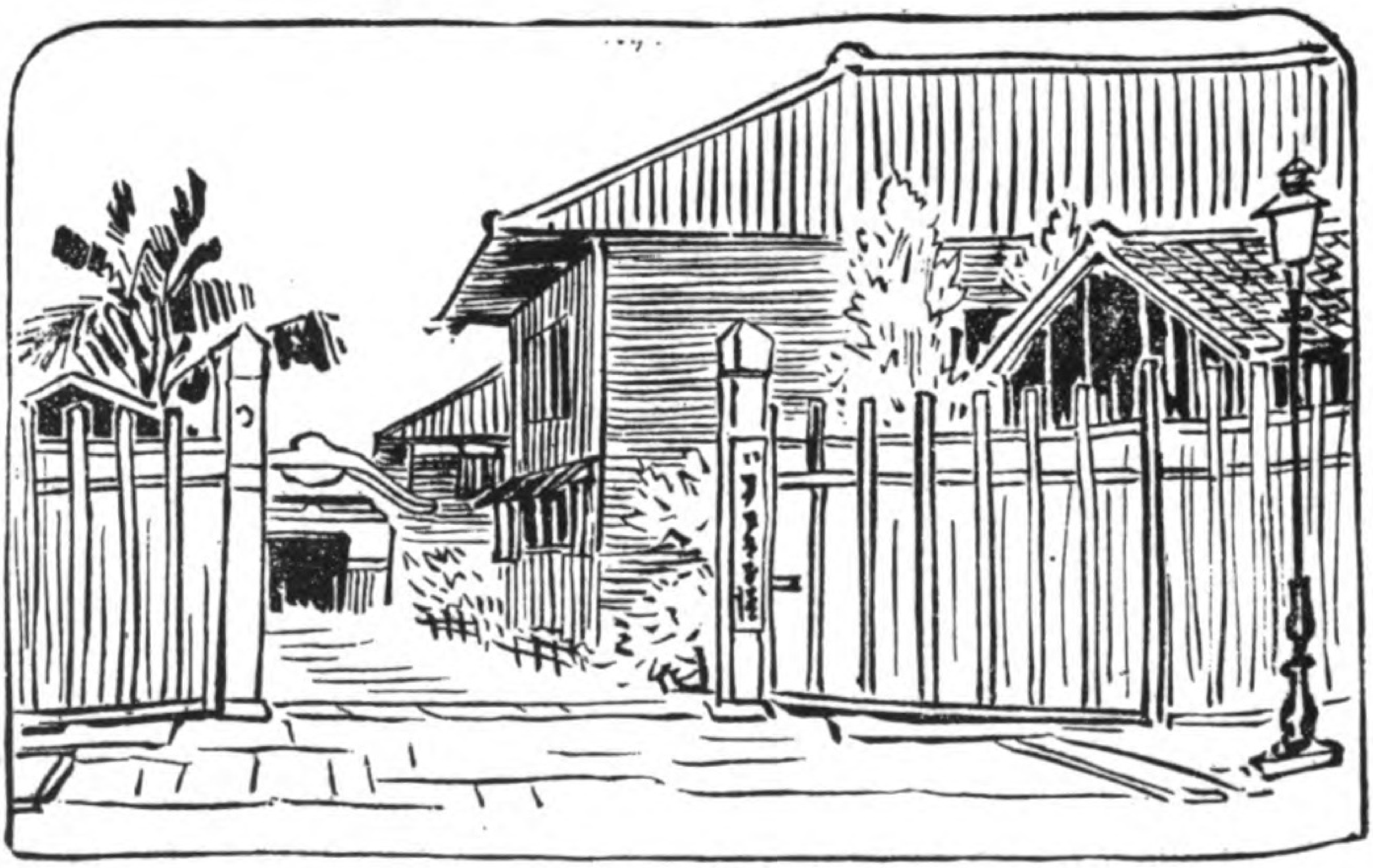
共立女學校（神田橋外）

汁にでも必ず多少の酸味を含んで居ると同じく確かな事だ。夫から更に、世の中の物質は、殆ど凡て幾分は水に溶けるといふ事實がある。其分量は極々僅かだらうが、此僅かの量が猶生物の生命に影響くから恐ろしい。例へば清いガラスの器に蒸餾水を入れ、これに「オイグレナ」といふ綠藻を養つて、十分繁殖した時、其中へ極注意して磨き洗つた銅貨を一つ糸で吊して一寸入れ、器の底へ當つたら直ぐ引上げる。そうして顯微鏡で見て居ると、銅貨の通つた途に當る藻は段々赤くなつてしまふ。枯れ死んでしまふ。藻を出して、器をよく洗つて、更に水と生きた綠藻を入れて置く、暫くすると、先に銅貨の當つた底の部分から、同じやうに赤く死んで來る。何故綠藻が死ぬるか考へて貰ひたい。人の身體は銅毒に對して綠藻程抵抗力の弱いものでは無いが、銅が如何に毒物であるかはこれで推し考へることが出來やう。銅鍋で煮た料理の變りにくいのは、銅毒の爲め物を腐らす細菌が死ぬるからで、銅鍋料理の味のよくないのは、綠青のやうな毒分の交つて居る証據だ。料理に銅器は大禁物、銅藥罐の口から水を呑んで、綠青毒に中てられた人はいくらもある。

食器に銅が忌むべきであるのみならず、鉛も宜くない鉛の器は無いが、鉛分の入つた器はいくらもある。其鉛分の容易に溶けて食物に交つて來る虞ある器は、銅器具錫唐金器と共に、料理屋宿屋など、及び賣店には法律で使用發賣を禁止されてあるが、素人家では、氣が付かずに使つて居るものが多いのみか、取締の屆かぬからか、こういふ器を平氣で賣つて居る店が少くない。其器は？鉛分を多く含んだ琺瑯を被せた鐵鍋土鍋。此琺瑯といふ物は、南京玉と同じ種類のガラスで、普通の窓ガラス、即ち鉛ガラス、鉛丹のやうな鉛を含んだ物質を入れて造へる普通ガラスより、一層多量の鉛分を含ませてある。鉛分の多い程火に解け易くて製造が容易だから人は病まうが死なうが自分さへ儲かればよいといふ連中の製品には實にひどいのが少くない。さてこんな琺瑯を被せた器で物を煮れば、特に酸味でもある場合には、此琺瑯は著しく溶けて、鉛分は食物

に交り、之を食べれば、段々に鉛中毒の症狀を惹起して、あたら壽命を縮めるやうのことにならぬとも限らぬ。恐るべし／＼。

銅器は毒、琺瑯鍋も其琺瑯を吟味して買ふ譯に行かねば危險なり。さて器は何が一番よからうか。安い所ならむき出しの鐵鍋、鐵は食物に交つても、味が少し惡いばかり、却つて血を增す効能があるから恐るゝに足らず。若し一層上等のものを欲するならば、近頃はアルミニームの器が出來て居て、七八年前なら百圓もかゝるものが、僅か七八十錢で買ふことが出來る。これ



立敎女學校（築地明石町）

は第一無毒で、奇麗で、錆びにくゝて、煑えが早くて、味がよくて、落しても割れなくて、輕くて、此上無しの物、久く使へば或は鐵器よりも安い勘定になるかも知れない。一體アルミニユームといふ金屬は、粘土から電氣で分け取るものだから、今後電氣の應用に改良進步があれば、製出は夫につれて容易になり、從つて高價といふこれの唯一の缺點も除却される譯だから、久しからずして一般に此無害安全美麗廉價なる食器を使用するやうになるだらうと信ずる。

家政のくさぐさ

小供に對する過度の心配

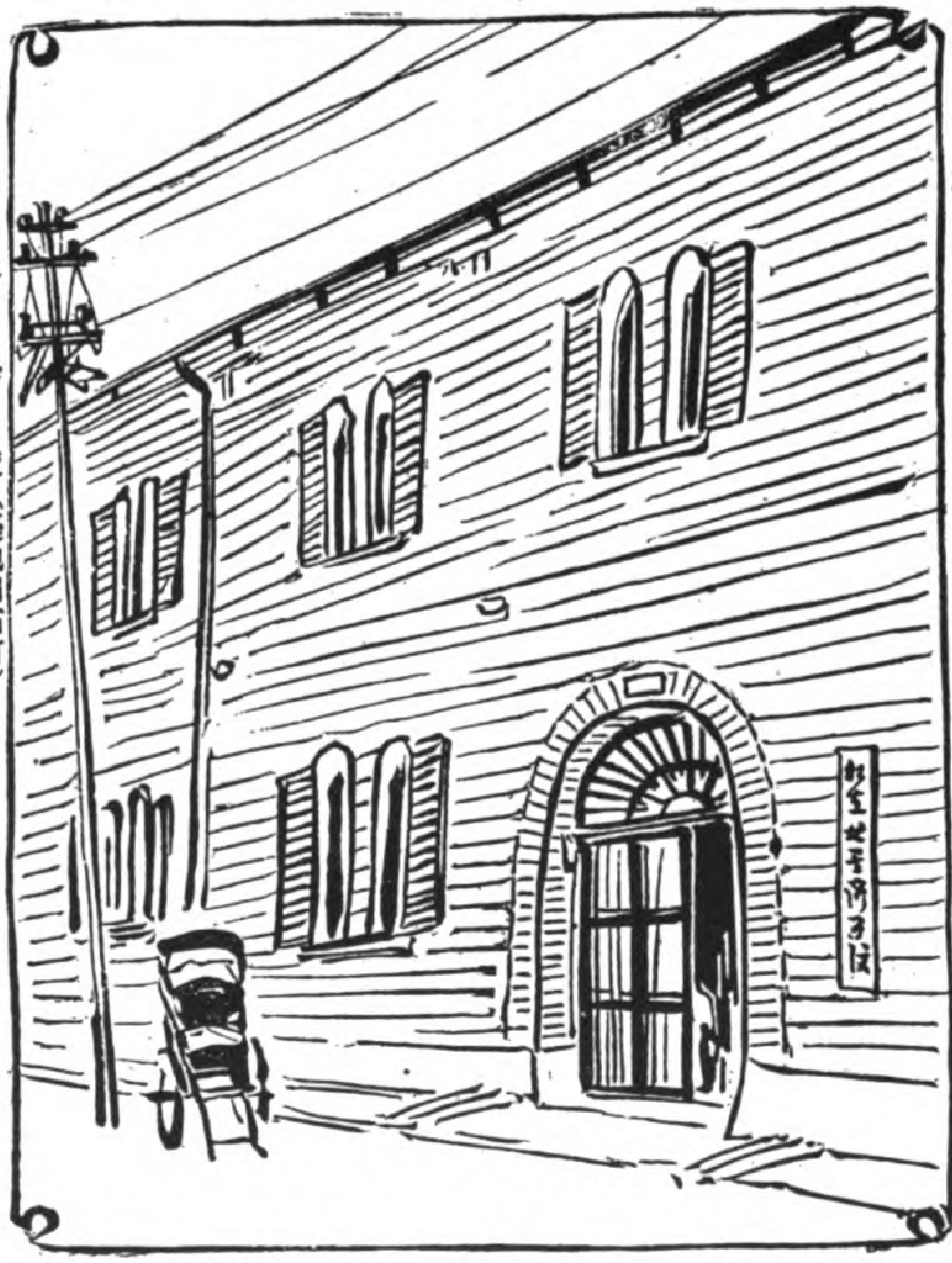
凡て人間は彈力性に富んだ者ですから、小さく押へれば小さくふくれ、大きく押へれば又大きくふくれる、特に小兒は大人よりも尙一層此彈力性が强い。扨て吾吾が小供を養育するに當つてや丶もすると餘計な心配をしますが、ソレは甚だいけません。親の心配は却つて小供の惡癖を增すやうなものであります。例へば日本の習慣として少しばかりの怪我をした時世間の親達は驚いて小供を慰めますが、そうすると却て小供の恐怖心を增して其れ程痛くない事でも大變痛いやうに感ずるやうになつて來ます。斯樣な場合には少しも驚かず、靜かに負傷の輕重を撿じて其傷が小ければ、是れを放任して置き、若し大なれば靜かに相當の手當をしてやれば小供も大に安心して無暗に泣き叫ぶやうな事はありません。元來小供は親達から過分の慰藉を得やうとして泣き叫ぶものでありますから彼等が不斷泣いたからと云つてそれを一々驚いだ日には限りがありません其證據には若し親達の居ない時には何程の怪我をしても少しも泣き叫ぶ事はないのです只親の顏を見た時に始めて泣くのを見てもその眞情は知れるのですですから我々は斯樣な場合に成べく平然とかまへて小供をして自ら其苦痛を忍び勇氣を保つ習慣を養はせねばなりません。

元來親の情として成丈け小供に怪我のないやうにと思ふのは最もであるが。併しよく考へて見れば寧ろ少し位の怪我をした方が却つて小供の爲であるかも知れない、なぜかと云ふに若し少しでも怪我のない時は彼等は遂に一生苦痛と云ふことを知らずに居るかも知れない是れが誠に將來不幸の基となるのである一體人間は屢々過失をした方が身の爲である又寒い日に逢い痛い目に遭ひ辛い目悲しい目をして來なければ眞實に人間普通の常識が發達するものではありません古人の言

に冷たい寐床に臥た者でなければ、人情の味を解しない、と云つた通りあらゆる苦痛を經て來る方が其身の一生の爲である、それを親達は餘計な心配をして大切にするは甚だ宜しくない事であります。

▲小兒と睡眠

小兒は大人と比較して、睡眠の時間を餘計に與へなければなりません、何故かと申すに、小供は大人に比較して餘計に運動をするからである即ち運動は睡眠に依つて養はれ睡眠は運動の結果であるから、此の二つのものは何時も平均させて置かねばなりません且つ晝夜の別が天然自然にある如く、晝は働き夜は安眠し、休息するのが身體健康上の第一であります、何故なれば晝間は空氣が熱氣を帶びて居るから、吾れ／＼の疲勞した五官を十分に休ませる事が出來ない、然るに夜の空氣は冷かであるから疲れた身體を眠むらせるには適當であると言はねばなりません。



女子語學校（築地明石町）

しかし又一方から云ふと、此世の中は極めて繁劇なものであるから、とても此法則に從がつて行くのはなか／＼むづかしい。時には夜中不意に起きて働かねばならぬ場合もあり、又徹夜し

て事務をとらねばならぬ場合もあり、又は夜更けて床につき眠る間もなく鶏鳴に床を離れねばならぬ場合もあるから、斯る際に少しも不快を感せざる丈の習慣をつけて置くのは必要である、そこで此習慣を養ふには小供の時より始めて段々と慣して行ねばなりません。次に又小供をして最初から粗末な寢床にねかせる事は甚だ大切な事柄である、何故なれば粗末な布團にねかす習慣をつけて置けば後日どんな苦痛にも堪へるものである、凡て何に限らず、不自由な生活にならされた人は安樂にして來た人よりも世の中の快樂を感ずる度が強くて、其の場合も多い、何故かと云ふに樂をして來た者は始終物に對して不滿足な感を起すものであるけれども、不自由に慣れた者はどんな場合でも不足とは思はない物です、例へば幼少の時から絹布の上にばかり起臥した小供は絹布の布團でなければ寢る事は出來ないけれども、若し始めから粗末な寢床に寢かしつけた者はどんな粗末な布團の上でも快よく眠るものである、故に何事に限らず小供には成るたけ不自由の生活をさせるのが其人一生涯の身の藥である、そしてこれが又教育上に大切の事柄であります。

素人の療法

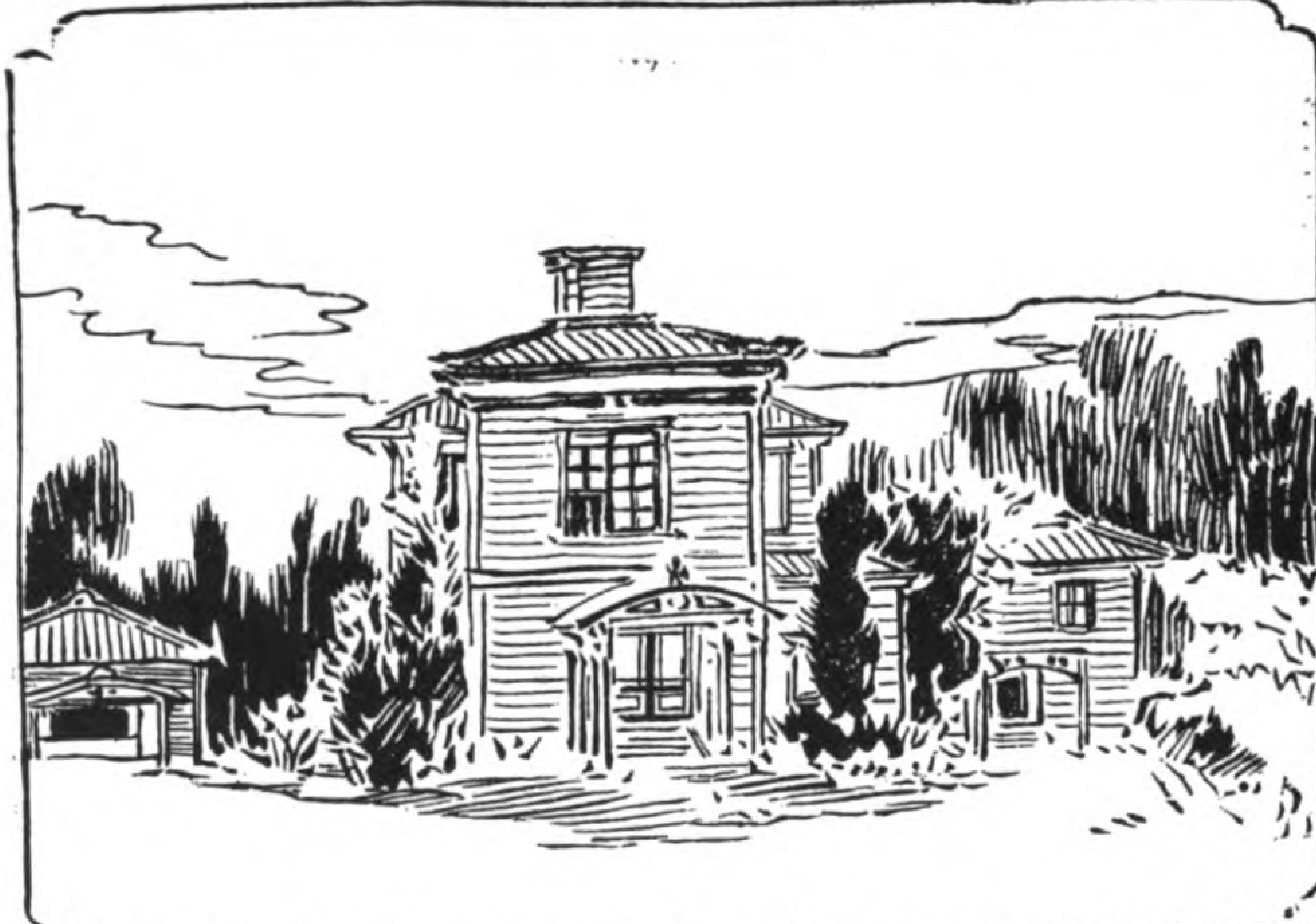
人數多き家内にては常に一人位の病人怪我人は絶ゆる暇なきものなり、大病なれば勿論醫師の診察を要すれども、聊かのことに一々醫者を招くなどは、文明流の家庭とは言ひ難しかゝる家にては少しく普通の醫療法を心得をかば大に手間と費用を省ぶくを得べし。

▲小供の咳

一年の内最も多く、病人を生ずるは春の初めと秋なりその内にも今年の如く氣候定まらざる秋は、老人小供のためには大なる注意を要すべし殊にこれより最も冒かされ易すきは小供の咳なり。

咳は小事として捨て置き易すけれど咳よりして氣管支炎となり、それより轉して肺病となり、其他不測の病

に變わり易すきものなれば、通常の感冒の如く忽にすべからず之を醫するに發汗の法は最も安全にして且つ有功の法なれども二三才の小供は活動を好みて靜づかに室内に暖氣を取るを欲つせざるもの多ければ小サジ一杯の龍腦チンキをコップ一杯計りの水に混じて罎の如きものに入れをき毎一時間に小サジ一杯づつ之を與ふべし、若し右の藥品を求むるの便なくば吐根シャリベッにてもよし、又フラチルの片を樟腦油にひたし、胸部に置くは益あり、是れ痰を吐き盡くさしむるの力あるものなり、若し此事かなわずば單に綿片のみを置きても多少の益あり、感冒



明治女學校（巣鴨）

によりて咳をなす小兒を外の寒氣に觸れしめ或は室内の風の流通甚だしき處にをくなど、暖を取るの用意をなさずして醫者を招くは無益なり、感冒の時は凡て皮膚の氣孔を廣大ならしむるの藥を用ゆる故に、もし寒氣に遇はしめば平素よりは反て感冒し易すきものなり、かゝる時には一寸の保護は一尺の醫藥に勝るものなることを知るべし。

▲寒冒の豫防

寒冒は百病の基と云へば輕き病とて捨てをかば不測の大患に至る事あるべし、四期の内特にこの頃よりは人々暑さになれて薄衣しなから夜中夜具をぬぎなどするより氣候俄かに變ずるの際

寒冒となること多し、若し寒冒に罹りたる時はコップ一杯位の熱き牛乳を飲みそのまゝ床に臥して發汗するを第一法とす、又感冒中と雖も入浴は避くべきものにあらず、唯た浴後冷氣に觸るゝことを恐るゝなり、されば湯より上れば早々床に入りて汗を出し、汗の出走る迄は堪へて床中に居るべし、これ尤も手輕にして又過ちなき療法なり。

▲咽喉加多兒

咽喉加多兒の如きは此頃より屢々起る病氣なれば、かゝる時のために兼て醫師より鹽酸加里をもらひおくを要す、もし愈よ喉頭何となくいがらき樣に覺へなば、是れ咽喉加多留の徴なれば右の加里を微温湯に溶解せしものを幾度となく含み、喉に當る樣にガラ〳〵と口中にて音をさせて吐出し、又喉の外部は濕れし手拭にて卷き、その上を乾きたる手拭にて卷きおくべし若し鹽酸加里なくば只の鹽にても可也。

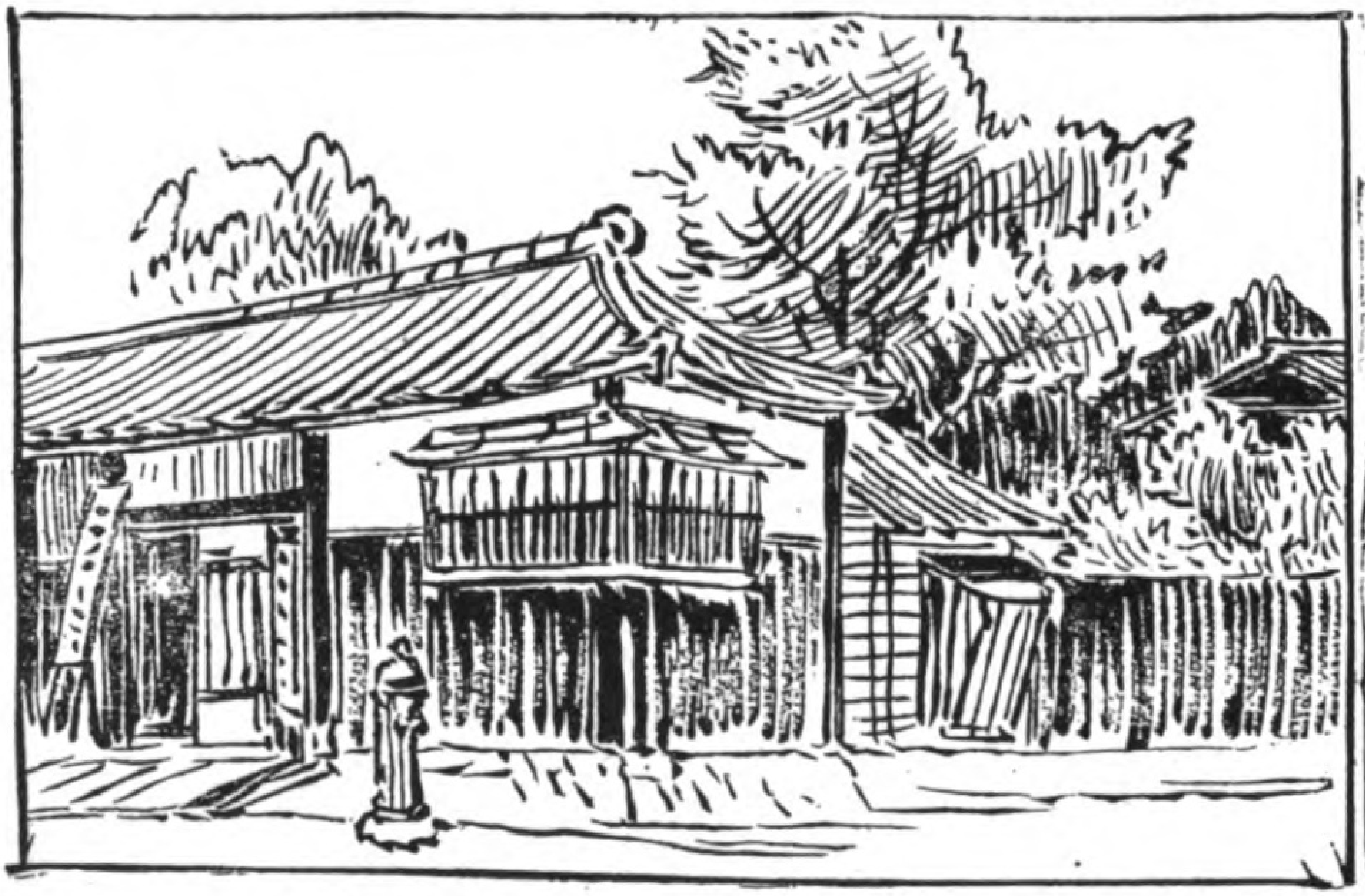
育兒の心得

寢起時間に一定の制限を立つる程、小兒の養育上に便利なるとはなし、先づ滿三ケ月迄の兒には午前は五時頃起床するの習慣を付くべし、起きたらば直ちに衣服を改め、口中を濕ひたる布にて拭ふて、乳を與へ、然る後は清涼なる空氣の中を散歩して小鳥の囀づり、小狗の戯れ、その他凡て天然を樂しむの風を養はしめ、入時に至れば乳を與へて朝の眠りに就かしめ、十時に至らば入浴せしめて、再び三度目(十二時に至る迄)の眠りを取らしむべし。午後は四時哺乳しそれより又少しく戸外の空氣に觸れしめ、六時より夜の睡眠時間迄は成るべく醒めしむべし。かくて六時に乳を與へて後は、夜中十時頃に一度乳を與ふべし、其後は若し強ひて乳を求むるならば朝迄に一度、哺乳をなさしむるの外は決して乳を與へざるの習慣を養ふべし。さすれば哺乳時間の外は安す〳〵と眠りて更らに起きざるに至るべし、若し夜中も晝の如く哺乳するの習慣を付く

る時は稚兒の健康のためのみならず、母の健康に大害あるものなり人間は凡ての動物の爲す如く、稚兒も夜中は眠るべきものに作られたる事を忘るべからず。

▲哺乳の時限

制限なく乳を與ふる一般の風習より之を見れば、稚兒の哺乳に時を限ると云ふことは容易ならざるが如く見ゆれど、そは間違ひなり、生れて一二週間の間は嬰兒の需めに應じて、何時にても哺乳せしめて可なれど、その後は二時間毎に一度づゝの割合にて、一日の中に朝六時より午後六時迄に六七回、それより後は夜中一度乃至二度に限り哺乳せしむれば、一は嬰兒の健康のために善良なるのみならず



成女學校（麹町下二番町）

時間と手間とを省くに於て又利益を見るべし、凡て習慣を付くるには最初を最も肝要とす、殊とに嬰兒は僅か二三日の間にして全く習慣の付くものなれば、その間に尤も注意して啼きたればとて決して情に引かされて規則を破るべからず、一度習慣となれば、其後は決して時間外に乳を求むることはなきものなり、生れて四ヶ月もたちたれば、時間を漸く延ばして、誕生過ぎて食物を食する に至りては、毎日三時毎に一度とし、夜中は午後十時を限りとして已後は與へざるをよしとす、かく習慣の付きたる上は夜中に乳を求めて啼くが如きことは決してなきものなり世の進むにつけて、人は段々規則

的となるものなれば小兒も褓襁の上より規則的の習慣を造ること肝要なり。

▲褓襁の事

小兒生れて六七ヶ月もたちて、少しく動き始むるに至りて、褓襁を着くる能はざるに至れば、母親乃至保母は注意してフラチル若しくは柔らかき木綿を縫合せたるものを兒の腹部に巻き、留針にて襦袢に止め或は紐にて結びて腰の冷ざへる樣にすべし、小兒の腸胃病は概ねこの注意を怠るよりして來るもの多し、やゝ成長して後に夜中小兒が告げずして小便し爲めに夜具を濕ほす事あり、これを厭ふて、中には蒲とんの上に油紙をしきて、その上に小供を眠むらしむる家あれど、そは反て腸を冷し小便を促がすの憂あるものなり、斯る際にはフラチル或はラシャの類を以て油紙に更ゆべし水氣を彈きて夜具の濕ふを防ぐのみならず、又小兒の腹部を暖むるが故え、小便の保ちをよくして一擧兩得の益あるべし。

▲嬰兒の入浴

母若し眞にその兒を愛さば嬰兒の入浴を人手に委ぬべからず、小兒を入浴せしむる時程その兒の健康に就て觀察し得る機會はなし骨の違ひし所、腫物の出來し所或は外に現はれずして内に痛ある所などは、この時に見出し、且つ察することを得るなり、されば小兒一生の健康の基礎は正にこの時にありと云ふも不可なしさて其入浴の時に心得べき緊要の事柄を左に

▲前掛けのこと

嬰兒を入浴せしむる時、一枚の大なるフランチルか、若しくは厚き西洋手拭の前掛けを用意すること肝要なり、寒中は殊更入浴の際之にて包み、手拭諸共に湯に入れ又湯上りの時は之にて拭ふの用に供する也、尤も極寒には別にフランチルの湯上りを作り置きて稚子の入浴中之を暖め湯上りの際之にて拭ふを可とす。

▲時間と温度

我が國にては熱き湯に入るの風習あれど之は健康のために良からず、殊に皮膚薄弱なる嬰兒の爲めには大害ありと知るべし、嬰兒の爲めに適當の温度は通常華氏

の寒暖計にて九十度(人肌より少しぬる加減)を以て最良とす、而してその入浴時間は大抵十分間を超へざるを度とす、湯より上りたる時は成る丈早く拭ひて、柔かき切にて輕く五体を摩擦し、少しく赤くなりたるを度として止べし是その皮膚を強固にして風邪等に罹を防ぐに良法なり。

▲嬰兒と鹽湯

若し稚子の虚弱なるを憂ふる人あらば、その子の入浴の時コップ半杯位の鹽を入て洗ふべしかくすれば壯健を増すこと意外なり小供の入浴はいづれも小盥を便利とす。

▲浴後の乳



精華女學校(角筈)

嬰兒を湯より上げて着服せしめたる後は乳を與ふべし兒供は入浴によりて大にその食慾を増すものなり、若し善良に生長せし嬰兒なればそれより三四時間は睡眠する者なり。

▲入浴の定時

老幼を問はず人間の身体よりは絕へず廢物の出づるものにして夜中体内より出でし廢物を翌日までそのまゝに置ときは身体の氣孔を塞ぎ健康に大害あるものなり況して稚弱き小兒にありては、新陳代謝の作用著しきものなれば、絕ず入浴せしめて、務て身体の老廢物を洗去を必要とす、生て三十日までの小兒は毎日二度位は使はす

べく、三十日過ても成可ぐは一日に一回の入浴は必要なり。入浴と灌腸は育兒に必要の手當と知るべし。

氣鬱症の治療法

男に疳癖、女に氣鬱と兎角婦人は（特に東洋の婦人）祖先傳來の氣鬱症に罹り易きものなれば、病膏盲に入らぬ内に治療すべきものなり、空の天氣は變り易く人の氣分は狂ひ易し、別して年若の折りには誰しも其經驗ある者なり、此氣鬱の病は風邪の肺炎に化ける樣に往々恐ろしき大患を惹起すものになれば病の徵候見へたらば早速治療せざるべからずさて此病の治療法につきては古來あまた名醫輩出せられしも一人として療法の發明ありしを聞かず、唯爰に英國シドニースミス氏の處方こそ適切の者なるべし。左に其梗槪を紹介せん。

一、氣鬱し、心沈み、世の中何となく面白からず覺ふる時にはあまり、遠き將來の事を思はずして思ふ所は一日限、せめて夕飯の頃まで位を思ふ事。

一、吾憂鬱の情を成る可く人に語る事（蓋を閉せる釜は破裂の患あるがごとし）

一、成る丈忙しくする事。

一、詩歌演劇（尤も喜劇を除く）音樂又はマジメなる小說を避け又は感情的の人等に遠かる事。

一、成る可く蟄居せずして外に出づる事。

一、居間を立派にし現今の境遇を愉快にする事。

一、己を敬し己を好む友人等と成る可くしば／＼相會する事。

一、少しづゝ成る可く其の身自身の懶惰に打ち克つ事

一、室內に火鉢の火を絶やす可からず（夏なればイザ知らず）夜は燈火を熾んにすべし。

一、自ら處する嚴に過ぐ可からず、自から己を見下ぐ可からず。

一、己れの運命を多くの人の運命と比較し見る可し。

一、決して宗敎上の常習を中絶す可からず。

一、少し寒しと云ふ位の溫度にて水浴をなすべし。夙起に早眠を務むべし。

一、茶や珈琲を控ふ可し。

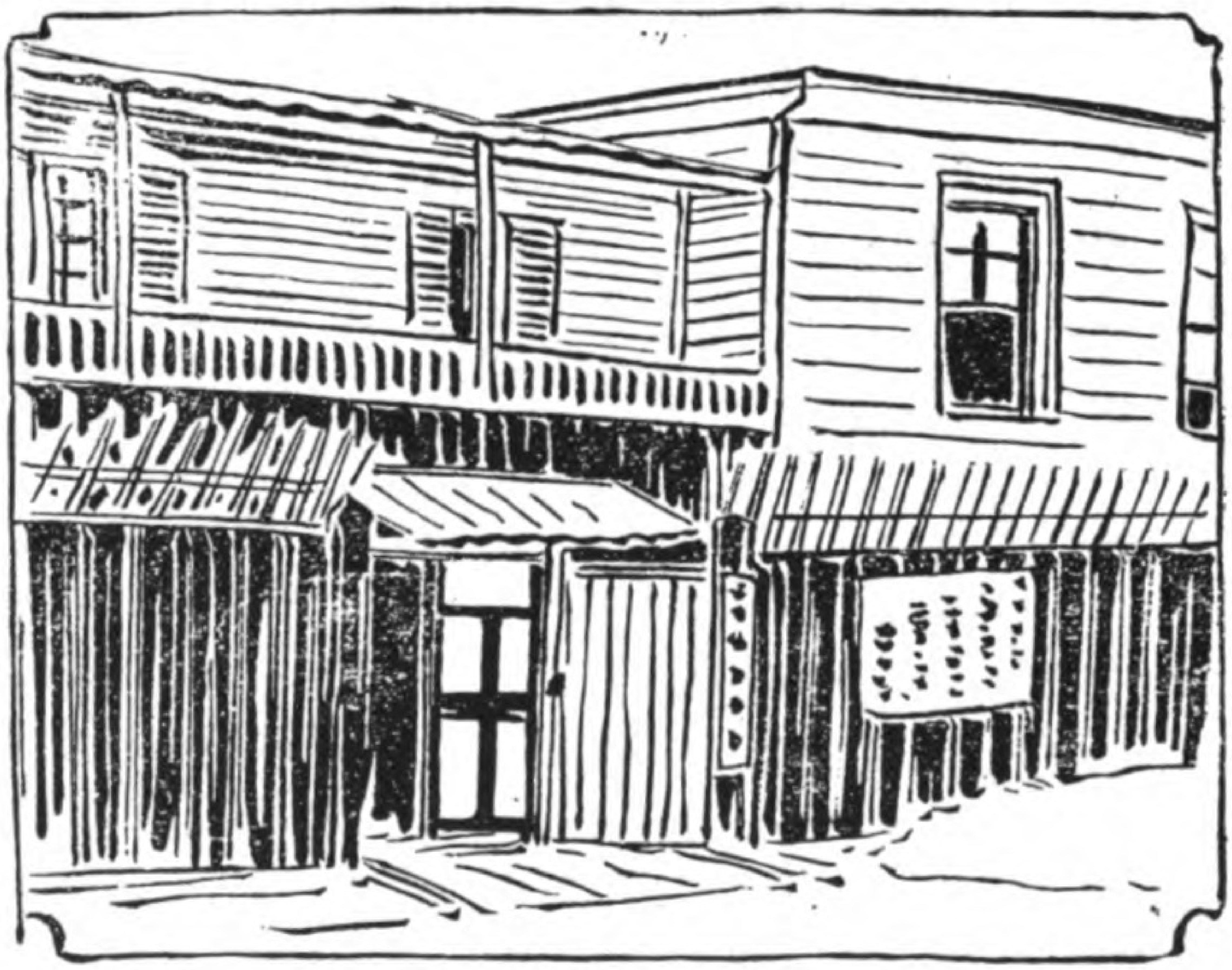
育兒實驗

落葉女史

小兒に就て少しく卑見を申述べたいと存じます、私はまだ嫁しませぬから自分の小兒は御在ませぬが、今年四歲に成る弟が御在まして、昨年母が病死いたしましてからは其の養育は私が引受けまして朝夕怠らすに注意を拂つて居るので御在ます。

間食と申ものは全然不衛生で有ると申事を常々女學世界なり又他の家庭雜誌だの或は親族の醫者からも聽いて居りますから、私の家ては可及的間食を禁じて居ります、然し何分小兒の事ですから、朝起きるから晩寢るまで、玩具やお友達と遊び通しと申譯には參りませんので、午前と午后とに時間を定めて、輕いビスケットの樣な物を私自身に分量を決めて與へる事にいたして居ります。

其所で甚だ困りますのは、宅へ來客のある時大抵客は小兒にと云つて饅頭なり、菓子なりをお土產に持つて參るものです、是は甚だ愛相に成つて可い樣ですが、其實餘り貰ふ方では結構では無いのです、その樣な方は屹度、さ、坊つちやんお土產つて小兒に直接に渡すものです、それが甚だ困るのです、小兒の事ですから今是を開けては不可ないの、食べては惡いのと申用捨



島海裁縫女學校　(神田小川町)

は御在ませんから、其場て、すぐ蓋を開けて中のお菓子を、つまんで喰べます、此方が客へ對して失禮なり又躰の爲惡いと思つて菓子箱を片づけると小兒は泣きますし、客は又折角坊つちやんに持つて來たのだから上げて下さいと申されます、いたしますと本統に困りますのです、成る可小兒の有る家へは菓子の樣なもので無しに、珍らしい玩具か何かを持つて行くのがよう御在ます、その方が小兒も嬉びますし、親達も却つてつまら無い菓子なんか貰つて禮云つて、そして小兒の衛生に惡い事に成る樣な譯ですから、決して喜びはいたしません、よし又據なく菓子など持つて行くにしても小兒の居ない間に、そつと渡して坊つちやんに頂げて下さいと云つて置けば意は充分足る道理では御在ませんか。

それから又小兒はよく大人の談話して居る所へ來たがるもので御在ます、大家に成りますと別に小兒の養育室と申ものか御在ますし、又幾何も間數が有りますから其樣な不都合はありませんが、手狹な家に成りますと、どうも思ふ樣には成らないもので、尙ほ教育が六ケ敷のです、未だ小さな時分は何も分りませんが、四歲五歲上からに成りますと、そろ〳〵人の話が分りますから面白がつて聽たがります、其際に當つて親たり兄姉たる其の養育者は自分の言行を謹むの必要も起るので御在ます、よく世間の人達の事を伺つて見ますに親にその心得の無い方は小兒の前だらうが何だらうが些つともお介ひなしに、人の惡口、家政の不如意、或は卑猥な言行を敢てする人か御在ますが、其樣な人に育てられた小兒は必ず早熟で、小癪なこせ〳〵した、少しも可愛氣の無い性質に陷つて仕舞ますのです、能ふ限り來客の前へは小兒は出さない事にして、止むを得ない場合には出しましても、大人の談話は成る可高尙な優美な神の樣な小兒が聽いて居つても愧しく無い樣な事柄を執つて頂きたいものて御在ます。

なりにふれて　　岩橋よし子

秋の田をわが見にくれば色づける早稲の穂末にいなごとぶなり

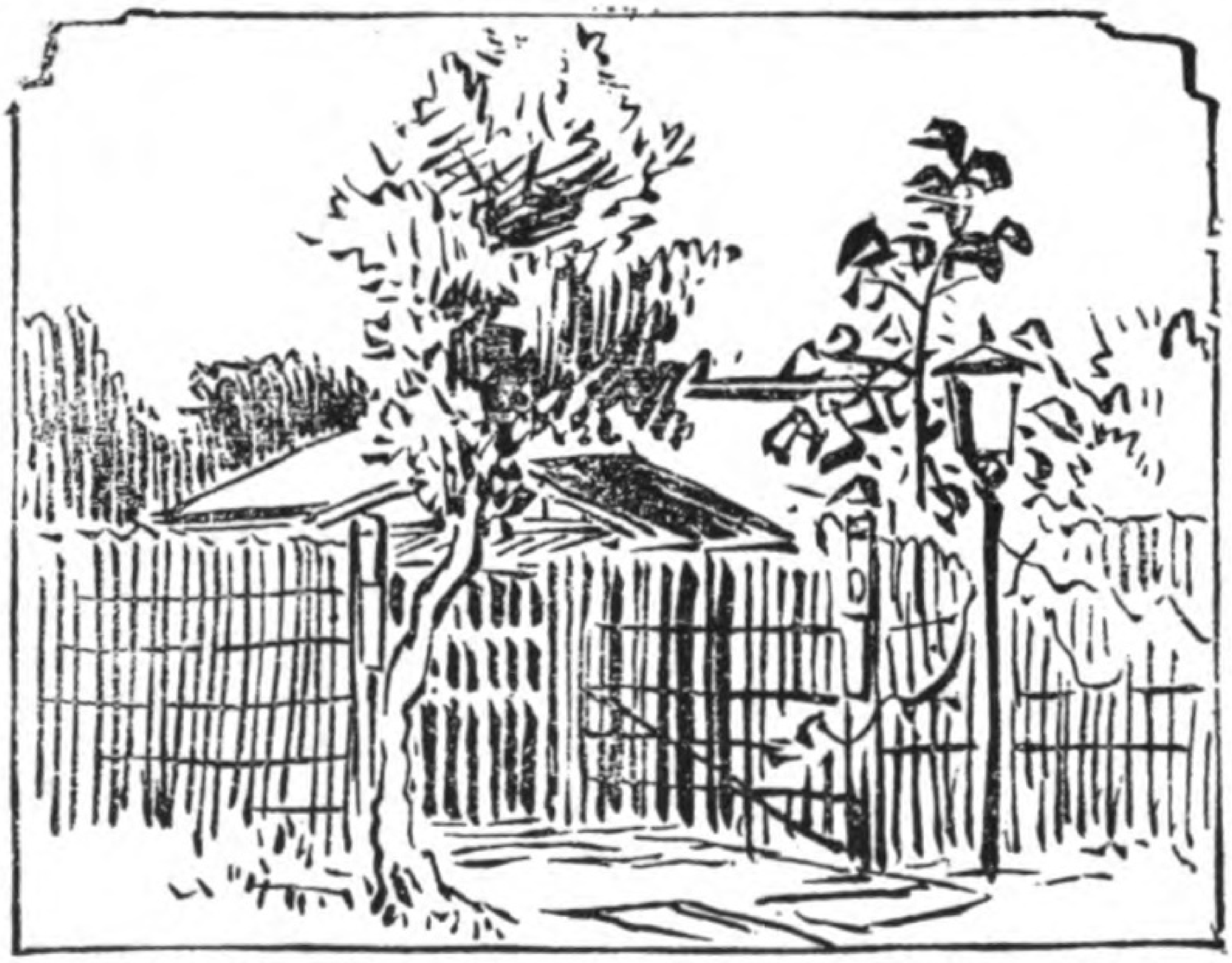
家庭のいろ〱

さだ子

一家の經濟
（下女の不必用）

家庭に於ける經濟の整理程世にむづかしいものは有りません、少しでも油斷をすれば直に所謂おあしの本性を表はして遠慮も容赦もなく、其嚢中を逃げ走つてしまいます、きのふ一圓あつたおあしが、もう今日は無くなつたと驚くだけが馬鹿な話で、何にこんなに使つたかと調べる頃にはもう財布は空になつて居る。

日本の經濟が西洋に比べて低いと云ふのも其大元は皆一家庭の經濟の低いからでありますから、中々忽にして置かれるものではないのですが、今迄所謂經濟思想の發達して居ない日本の亂れた家計を整理して行く事は容易では有りません、私は如何にもして少しづゝでも之を改良して行き度いと心掛けて以來日夜心を用ひて居ますが、中中思ふ樣に行きません、其處で此頃は大きな帳面をこしらへて夫れに其日有つた事は勿論其日の献立も、買物も、皆つけて置いて、常に其結果に注意して居ますが、今迄何の頓着もなく只有るだけを皆使つて來た人達には、（之は今現に必要なるもの之は今無くてもすむからなど云ふ考へがなく）何でも欲しいものを買ひ込むと云ふ風ですから、種々考へて金錢を用ふるのは誠に窮屈の樣に思はれると見えて、隨分儉約と



高輪裁縫女學校（三田）

吝嗇とまちがへられて困る事が有ります、中々豫算などゝ定めて置いても兎角其外に出たがるので、此頃は時節がらでもあり、下女も止めて自分で一生懸命に働いて居ますが、下女が居ると居ないとは經濟上非常な差の出るものであります。

種々家事の都合で如何しても下女を必要とする家もありますが自分で働けると云ふ人の家では、なるべく下女は置かないで自分が働くのが宜いと思ひます、例外もあるでしようが下女程無責任なものは有りません、斯ふしたら家の爲になるだろうとか、斯ふしたら損だから止うとか云ふ氣はまづ無いと云ねばなりません、

私の隣りの家の下女はよく之れを證して居ます、まづ毎日井戸て米をとぐのに大抵其跡に行つて見ると五勺や一合はこぼれて居ない事はない、近所の人は皆あきれて居ますが、何につけても斯う云ふ風であります猶其上に正月と盆とには東京の風として大抵反物の一反位はやらなければならない、之を奮發して自分でするのと比べると大變なちがひであります、まづ第一日々遊惰に暮して居る事は出來なくなるのが最宜いので、私は只何もしないで居る事は大きらひで、澤山用事のある方が誠に嬉しい、今日は之々をし樣と希望を以て起き出でた朝は誠に樂しく着々と仕事の片が付いて行つて、從つて自然に時間の貴い事もわかり、甚だ愉快であります、小人閑居して不善をなすとは昔から云ふ事ですが、全く其通りで仕事が澤山あれば從つて惡い感情などを起す暇がない、又仕事をしまつた後でも之々の事が出來たと思へば實に愉快で、決して不善な考へなどは起りません、下女が無ければ自分で買物にも行かなければならない從つて品物もよく吟味して價も割合に安く買ふ事が出來ます。

斯く注意に注意して出來るだけの儉約をしたつもりでも、月末になつて勘定して見ると多くは豫算より越して居るには實は失望します、今米國の下等社會の人の家庭經濟の有樣に就て聞きました事を一寸書いて見ますに、實に秩序整然として慈善の事業にも身分相當に出す事を得猶其上に多少貯蓄迄する餘裕のあるのを以

て見ますと、如何に其經濟思想の發達して居るかゞわかります、假に同等の位置の日本人と比較して見ますと。

一ヶ年の收入　四七八弗四六の内

其支出として

弗 一〇七五五	肉類、卵、バタ	弗 二四三	家具費
一六八五	茶、珈琲、砂糖	三二〇	生命保險及組合費
一〇五四	野菜	二五五三	慈善及快樂費
四[illegible]六四	米、メリケン粉	一四六	書籍及新聞
八八七七	其他の食物	一〇六	病氣
四〇〇六	家賃	八八七七	其他
一六五四	燃料及點火	合計	弗 四一九〇二
三三四九	被服費	殘額	五九六二

日本人一ヶ年の收入賃金百八十圓の人

四二圓〇〇	家賃	二五圓二〇	總菜料
四八、六〇	米代	三、六〇	煙草料
一五、二四	薪炭油	一三、〇〇	交際費
六、九六	醬油、酢、味噌、鹽	九、〇〇	敎育費
一七、四〇	雜費合計一八〇圓		殘額なし

我國下等社會の人々は到底所謂宵越の錢は持たぬを以て名譽の樣にしたのは、昔なら夫でも宜かつたでしようが之からは如斯な事では仕方が有りません。

家庭の內職

此頃は時節がらとて軍人の家庭には勿論少しでも暇のある人は大抵相當の內職をするのが多いので私も夜分は別に之と云ふ用もないから何か無いかと種々聞き合して見ました世間には隨分聞いて見れば種々の仕事もあるものであります、編もの、本の中折り、下駄の表を編む事、團扇に縫ひを置く事、其他にもいろ〱あります、編物は隨分面倒な仕事であるが報酬は極く僅かで朝から夜十時頃迄必死になつてしても十錢取る事は甚だむつかしいので其上肩が張つて中々慣れる迄には容易な事ではありません。

本の中折は誰にでも出來る仕事で之もつめてすれば、一ヶ月に三圓位は取れます、絹張の團扇に縫ひを置く

事は少し稽古した人であればさほどむつかしい事はなく、一本十七八錢の無地のものに簡單な花鳥を繡ふて夫で五六十錢に賣れる（外國に輸出する時には）から之は隨分有望な仕事で美術學校の生徒方の內でもする人が多くあるそうです、下駄の表を編むのは一寸むづかしく先十五日位は其道の職人に就て習つて夫からでなければ自宅で出來ないのですが、之は最報酬は澤山で半ケ年も續けてして慣れると一ケ月に十二三圓迄は取れると云ふ事であります。

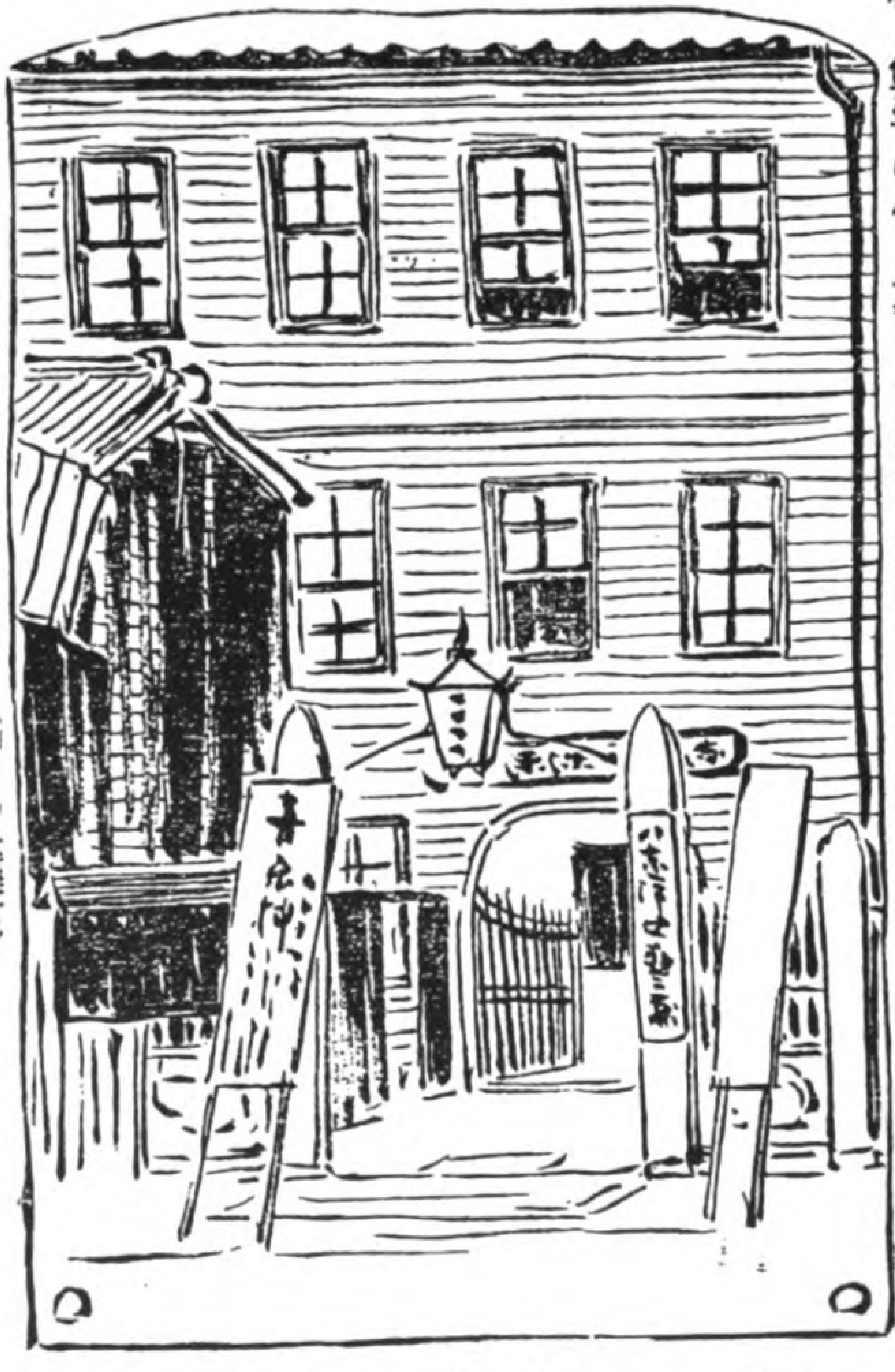
併しまづ內職をする前には其職の如何に依らず如何に勞力を要するものかと云ふ事を、豫め覺悟して置かなければなりません、何でも金錢を得る道は容易でないと云ふ事は今更云ふに及ばぬ事で有りますが、此內職をして見ると一層よく解ります、何の內職でも初めの約束は如何にも望ましく考へられますが、扨實際して見ると中々うまく行かなくて失望するものですから、よく〳〵初めに考へて一旦定めた上は極めて固い決心をして夫からかゝらなければ必ず途中で嫌やになるものであります。

子供と貯蓄心

昔は錢の勘定を知らぬを以て此上なき名譽の樣に思つて居た遺風は、今猶多少殘つて居て、子供に金錢を持たすは誠に下品なものとして卑しめる人々は猶少なくありませんが、之果して害になりましようか私は然うでないと思つて居ます今日實業に商業に大に進步發達し樣とする我日本國の將來の國民が斯樣な有樣では到底賴み少ない事では有りませんか、金錢は如何にして得られるものか夫を得るに困難な事を幼い時から知らして置くのは誠に益ある事と思ひます、私の家でも何か之を知らしたいものだと存じ、子供には小さい內から金錢をもたして置き又何か用事をした時には其報酬として少しづゝ與へて居ました處が、中々初めの內は貰へば直にお菓子を買ふとか、緣日に行つてはくだらない事に皆使つて仕舞いましたが、此頃は漸々貯蓄と云ふ事に付て樂しみを感じ出したと見えて、以前なら

ば欲しいと思つたものも容易には買はず、偏に財布の中の金錢の多くなるのをのみ樂しみにして居る樣子で有ります、併し之は種々弊害の伴ふ事で只金錢の溜めたさのみに氣を取られて、學校の必要なものを買ふ爲に貰つたものも買はずにしまつて置くとか、甚だしきは不必要なもの迄必要品だなど云ふて父母にねだる樣な心配が無いとも限りませんから、其處はよく氣を付けねばなりませんが兎に角子供の内から貯蓄の必要な事と金錢ば容易に得られないものだと云ふ事を敎へて置かねばなりません。

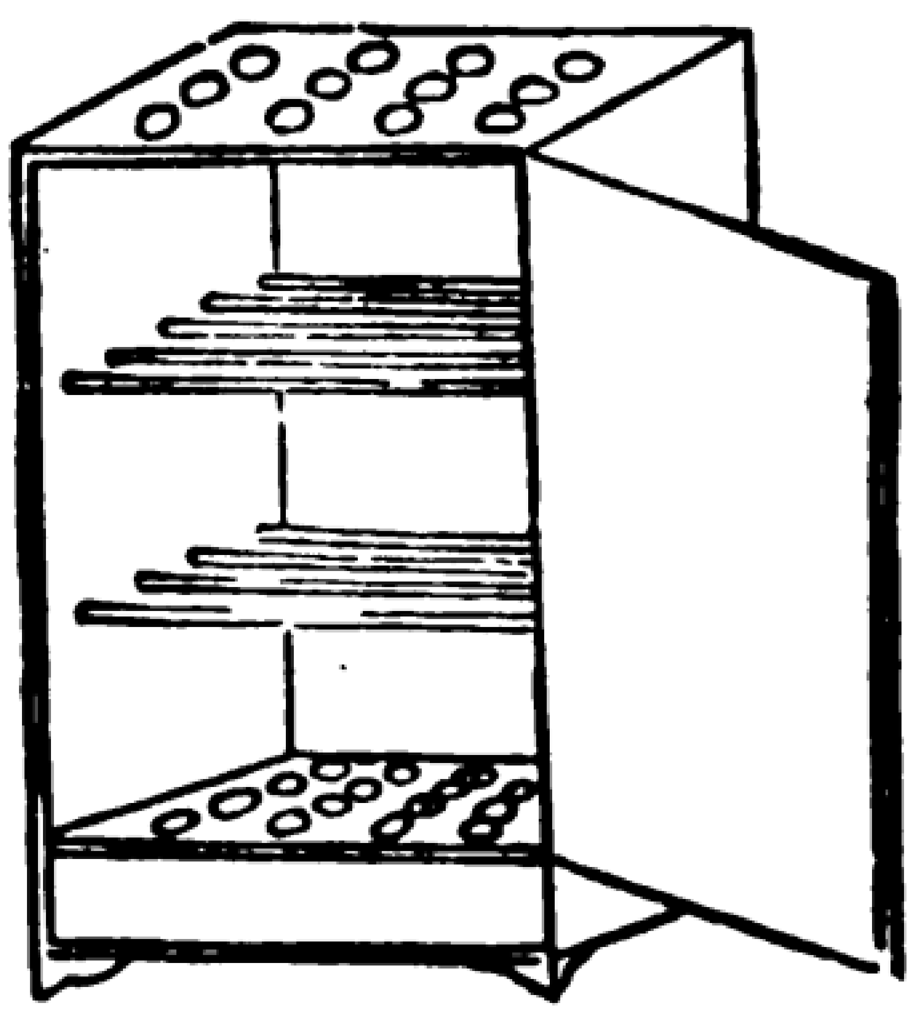
又凡て今迄何事も無頓着に育てられ、已に惡習慣が付いて居るものは之を改むるに誠に困難であります、今日一般の家庭敎育は今猶殆ど無視せられて、兒童は只學校にさへ出せば夫で宜いかの樣に思つて居る人が甚だ多いのでありますが、少し家庭で兒童の敎育上に心を用ふるならば、學校で家庭通知簿とか、成績表の下に印をおさせるとか云ふ事は不必要な筈で有りますが斯程迄にしなければ其大切な兒童に就て注意をしないとは未だ〳〵心細い事で有ります。



東洋女藝學校（神田仲猿樂町）

輕便パン燒器械

馬口鐵にて巾八寸高さ一尺五六寸位の箱を作り、圖の如く箱の上下に十數個の小孔を穿ち孔の所は上下共に二重板となし引手を付けて之れを引けば孔をふさぎ押せば孔の明く樣に作るべし箱中の棚は二段乃至三段に作り（澤山作りてもよけれど餘りその間挾きに過ぐれば火氣の透徹不充分にて結果好からざる故高さ一尺六七寸の箱ならば棚の數は先づ二つ三つを適度とす）棚には火箸ほどな鐵の棒を渡して箱の横面に打ち付けをくべしさてこの器を以て物を燒くには先づ焜爐に火を入れ其上に箱を置き箱内の温まるを待ち、燒かんと欲する物品を棚の上に並べ再び戸をしめて十五分間燒くなりパン、ビスケット、茶碗蒸等を燒くには棚の上段を可とし、肉類菓子類は下段を良とす。



箱の上下の丸形は孔なり

器を作るに注意すべきは箱の戸を堅固にしめ得る樣に作るにあり、戸の間に隙多ければ火氣消亡して出來惡しく、且つ物を燒くに長時間を要するを以て炭の消費も多し、製造代價は一圓四五十錢にて上るべし、この器を一つ作りをかばパン菓子、ビスケット、茶碗蒸、カステイラ、蒸肉等何にても造作なく造るを得べく便利の器物なり。

秋季總菜の取合

▲炙り物

○鰤の一夜鹽に牛房の太煮（太煮牛房は太き牛房五六分ほどに胴切にしよく〳〵煠で丶味淋四分、醬油三分水三分の割にて上に上るほどに入れ半分ほど煮つまりたる時葛をとき入れませかへし煮あげて青海苔をふりて出す）

○鰆を骨切にして胡麻の油にて付燒、葱味噌。

○舒魚を披き白焼にして卸し生姜生醤油。

○鰹魚を小賽に切り柚子醤油つけ焼（ふるせのかつほ小賽に切り糀に柚子の皮をすりませ醤油にてとき付焼にして小串たけて出す。）

○きわば鮪傳法焼（葱の白根を纖にうち、炮烙にしき火にかけ、少し焼たる時、鮪を刺身のやうに作り上へならべ、焼きて色の代りたる時器物に取り煮かへし醤油をかけて出す）

○タナゴ、土藏焼（脊より剖きて中骨を除き味噌をこめ、紙にて胴を卷きて焼く）

○鱠の利久焼（醤油に粉椒をまぜてつけ焼にするなり）

○鴨のすき焼太根のねぎに焼胡椒。

▲揚物

○茄子の皮をむき横に厚く切りて精進あげ。

○藤豆のすじを取り二つ位づゝよせて精進あげ。

○百合の根を剝して三つほどづゝよせて精進あげ。

○せんまいを茹で二寸位にきりよせて精進あげ。

○紫蘇の實の穗のくきをのこし一本づゝ精進あげ。

○生姜の根を四つ割にし、莖を一寸ほどつけ精進あげ

○莟松茸を立に薄くきりて一切づゝ精進あげ。

○鱧を骨切にし細くきりて天麩羅。

○タナゴを三枚におろし天麩羅。

○鮒を細くきりて天麩羅。

○このしろの骨を取り身を敲きよせて天麩羅。

○伊勢蝦の皮をむき首を取り尾をつけて天麩羅。

○ひらめを蒲鉾に仕立衣なしの天麩羅（鮃の肉を敲きて山の芋と温飩粉と鹽少し入れてすりませ銀杏、木茸數こまかに刻みてませ丸湯婆の大さに取り衣をきせすにあげて小口切にする也）。

▲浸し物

○藤豆をゆで黒胡麻醤油。

○茄子を剖きてくるみ醤油（蔕の處ろ庖丁を入れて丸焼にして引さくなり。胡桃醤油は炒りて皮を取りて擂り醤油に砂糖を加へ擂り交せるなり。）

○水菜を湯煮して辛醤油。

○黄菊の花を散らしざつと湯をとをし、唐がらし酢。

○紫蕨の太き莖をそろへて辛し酢。
○餘ませゐんぎん斜めにきりて酢醤油。
○萵苣を亂切にし生姜細にきりませて酢醤油。
○蓮芋を小口切にして酢醤油振り胡麻。

▲香の物

○達磨漬（丸漬瓜の季生を二つに割中身を取り甘鹽にして壓づけにするなり形ち手遊の達摩に似たり。）
○茄子の芥子漬（末なりの小さき茄子の蔕を去鹽を辛目に二三日つけザッと日に干し茄子をつけたる鹽水にて掻き、麹を入れよくすりませ、壺などにつけこみよく押つけて目張をして蓄ふ又茄子を酢にてかき麹をませ醤油を入れてつけ込むもあれど是れは長く保ちがたし。）
○紫蘇實の鹽づけ（あまり實が入りすぎれば取扱ふ中に實こぼれて臺ばかり離るゝ故少し前方に取り、穗をはさみ穗の中に小さき虫居る故鹽水にてよく〳〵洗ひ斯くして水を切りて蕃椒を丸のまゝ混て漬込むなり）
○冬瓜の味噌づけ（冬瓜を皮共に割り、膓をよく取り一と鹽して輕く押をかけ一夜水を取り布巾にて水氣をぬぐひ皮をむきて味噌につけ、味噌水たまりなば味噌を取かへて他の味噌につけ斯くする事三四回に及べば水も出なくなるなり、いつまで蓄ふるも味ひ變る事なし水の出る内は油斷する勿れ。

右の外秋の漬物にては牛房の味噌づけ、生姜の味噌づけ、山葵の粕漬、柿の粕漬、醍醐づけ等なり。

▲飯

○はつ茸めし、（莖を去り、味淋、醤油にて味をつけ、らん切にして岡交にす）。
○栗飯、（ざつと燒きて澁皮をとり、三つ四つに割り、飯の上にならべ鹽をふりて炊く。）
○芋めし、（皮を剝きて大賽に切り飯の半熟したる時うち込む、鹽加減第一なり。）
○ごもくめし、（常の飯をこわ目にたき、鯛の身を細く切り松茸を薄く切り、サガラ麸を長めにきり、各々味淋醤油にて煮、鷄卵を炒り慈姑と蓮根を煤て薄くきり鹽と味淋にて煮、餘まきゐんぎん煤でゝ細かくきり、

同じ如くに煮、赤漬の生姜を細かく切りいづれも飯の上にならべて出す）

○鱧めし、（骨を去り薄く小口切にしよく湯がき飯の火を引く時上にならべ清汁の加減よく葱の小口切卸し生姜香料にて出す）

馬鈴薯調理いろ〳〵

馬鈴薯の皮をむきてザツトゆで、厚さ二分位の輪切りにして牛の脂肪の沸騰せる中に入れて暫時後取り上ぐれば淡泊なる美味を得べし、これは肉食の添物として欠くべからざる食料也。

又丸のまゝうでゝ皮をむき鉢にてすりつぶしたる後適宜の砂糖を加へ之に寒天の汁を加へて重箱に入れて放冷おかば一種淡泊な、美味き羊羹となるべし、小兒の多き家などにては羊羹に代へて食後などに與ふべし。

▲また之を山葵をろしにて擂り箱様のものに入れ水にてふり盪し其上水を棄たる後天日に乾かせば上等の澱粉を得べし又饅母を此澱粉に和して指につかざる程に捏ね後水にて少し柔かくし之をブリキの器に入れて炬燵の上など温度八九十度（人肌）位の程度の所に置こと二十四時間にして玉子の黄味を加へ別項のパン焼ストーブにて燒かば好きパンを得べし。

▲又ジヤガ薯の皮を剝たるものを賽目に刻ざみ、暫らく水の中に入れ置やがて取り出だして淡き鹽湯の沸騰せる中に投じ、能く煮へたる時湯を去り、別に葛を鹽と砂糖にて加減し是を乳にて煮、汁様のものを作り右のゆでたる薯に掛けて食膳に供すれば、淡泊にして滋養あり。

▲次に今一つ輕便なる調理法は馬鈴薯十二三個を湯煮して能くつぶし味噌漉にて漉して塊を去り、未だその温みの冷めざる内、少量のバタ、一サジの鹽、コツプ半杯の砂糖及同量のパン種を入れ捏ねるに適當になる迄うどん粉を入れ能く捏ねて花形に切り、暫らく温たかき所に置き、膨脹するを待ちて火の強よきストーブにて燒くべし、輕ろくして味のよきビスケツトを得べし。

秋の庖厨

△豇豆のスープ

まづ乾したるさゝげ五合を用意し、之を掩ふ丈けの温き水にて一夜浸し翌朝二升五合程の水を以て共に鍋に入れ煮始め、之に鹽豚二百匁を加へ置き三時間ばかり煮てオランダ三葉小量と、胡椒を入るべし、斯くて又三十分間を經て火より去り、スープ鉢に漉し取るべし

△雛鷄のスープ

まづ幼稚なる鷄をよく掃除し、肉骨共に六つ程に切りハムと共に一升の水にて煮一時間の後胸邊の肉を取り出し殘りの水を換へ、肉汁悉く出で來り條の如くなるまで煮て之を濾し鹽胡椒を入る、さて前に取出し置たる肉を細かに敲き切り之に小量のパン粉を混じ玉子一個を溶かして入れ手にて小さき玉を作り前のスープの中に入れ五分間熱して食用に供す。

△海老のクロッケ

まづ湯煮したる海老の肉を取り細かく切り鹽と胡椒を入れ全量の四分の一ほどのパン粉を交へバタ大匙にて二杯を加へ、之を細長き玉に作り、扨玉子の溶きたる者に浸し、パンの粉を付け鍋に油を沸立て黄色になるまで揚ぐべし。

△サツマ汁

これは佛蘭西のサツマ汁とも稱すべき田舍料理なり先づ一斤ほどの牛肉を賽の目に切り四合計りの水に入れ鹽砂糖を加減して沸騰せしめ、上に浮みたる脂肪をヒにてすくひ去りその中へ蕪二三個葱五六本ジャガ薯二つ三つ胡蘿蔔一本、其他大根サツマ薯、里芋何にてもよし小さく刻みて共に入れ二時間ほど形の破れるほどに煮るを度とし、粗き布袋に入れて絞り出し汁はスツプ皿に入れ、袋に殘りたる肉と蔬菜は平らなる皿に入れて蕃椒の粉をかけ膳に供すべし。

△米のスチウ

肉牛斤計りを五分位の大さに切りて二合の水に適宜の鹽、砂糖、胡椒少量の酢を入れ合せしもの丶中に右の肉を入れ、又一握の米を其中へ入れて二三時間火鉢にかけて煮肉の柔かくなりし頃皿に移す。

衛生顧問

(問)二十五歳の女子遺傳の毒にて絶えず濃い鼻汁出で且つ臭氣あり、嘗て專門醫の治療を受けたれど根治せず何か療法ありますまいか。(横濱の愛讀女)

(答)强く鼻をかむことを避け小さな海綿を以て鼻中を拭ひ常に温室に居り、時々温脚浴を行ひ、依的兒を嗅ぎイヒチオールを外用 即ち鼻中に塗て御覽なさい。

(問)赤鼻の療法詳しく伺ひたし。(十九秋子)

(答)女學世界第四卷第十三號の顔の話に詳しく說いてありますから御覽下さい。

(問)洗ひ藥を用ゐずして子宮內膜炎を治す方法ありますまいか。(愛讀女)

(答)九月發行の女學世界の子宮內膜炎の條に書いてある洗藥を除きたる他の療法を施されよ。

(問)私は年中頬が眞赤で、殊に寒中は紫色になつてほてるのです、何うかその療法を敎へて下さい。(十七歳外七人女)

寒い風や熱い火の傍に觸れぬやうにし、

蘆薈約剌巴丸

を毎月一週間程宛續けて毎日二回、一回二丸宛お服みなさい。

(問)身體横幅ひろくなり不自由に堪へず、且つ顔が非常にあかくて困ります、何卒其の療法を敎しへて下さい。(本所のゆづる女)

(答)前の答の藥をのみ、且つ餘り肉食を取らぬやうにし、十分に運動を試みて御覽なさい。

(問)顔が赤くて便秘で困りますその療法を敎つて下さい。(福島の愛讀女)

(答)前答の通り。

(問)頑强なる淋毒性僂麻質斯病にて不幸を歎じをり候あはれ好き治療もがな。(大阪YY生外三人)

(問)沃度曹達〇、三　苦丁一、〇單舍八、〇　水一〇〇、〇右一日三回分服

を連服するが可いでせう、但し沃度曹達は漸次增量するが肝要である。

(問)二十二歳未婚の女月經時になりて、下腹痛みて甚だ困難せり不治の病でせうか。(妻女)

(答)太抵は婚姻出產すれば治るものであるから左程憂ふるに足らず。

(問)いつも產後非常に髮毛抜けて困ります何か善き豫防法無きや。(横濱の愛讀女)

(答)產前に攝生を守り安產するやう圖りをれば從つて抜けず、併し多少は誰にも抜けるものなり。

(問)一、前以て產婆に診て貰ふ必要あるか。二、腹帶は必ず締むべきものなるか。三、散步をすると胎兒が下る事あり病的にあらぬか。四、男女の何れなりとも勝手に生す方法は如何。五、房事は何月目より嚴禁すべきや。六、飲食物は如何なるものを用ゐて宜しきか七、仕事は如何なるものを忌むか。(肥前大村の五月女)

(答)一、新式を心得てゐる產婆(醫師ならば尙よし)に診て貰ふこと甚だよし。二、必要なし。三、診察せねば分らぬが善き徵候に非ず。四、生兒男女の原因に至つては、漢法醫の空漠たる議論を除く外未だ學者間に詳らかになつて居らぬ、故に天の與ふる所に任すが可い、若し勝手に生す方法あらば我が日本の如き男尊女卑の國にあつては男ばかりになつて了ふであらう。五、房事は五ヶ月以後は禁ずべし。六、飲食物は可成淡泊とした滋養品がよし、令へば鯛鱚鰈の如き海魚や飯豆腐の如き物などは至極適當なり。七、仕事の種類は千差万別數へきれぬが、兎に角重い物を持つとか、激しく身體を動かすとか、或は精神を費す事などは宜しくありませぬ。

(問)一、出產後翌月直に一週間の月經ありて後すこしも無きは、如何なるわけにや、若し妊娠にてはなきか二、六週間内に妊娠することありや。三、時々左の横腹に痛みを感ずるは如何なるわけか。四、本年五月生れの子便通いつも下り氣味にてよく消化ぬもの下る醫療をつくせども治らず何かよき法無きか。(京橋かつ子)

(答)一、出產後は月經無きが普通なり、然るに月經ありて其の後又無きは多分妊娠でせう。二、勿論あり。三、漠然たる問であるから診察せねば分らず。四、消

化ぬもの下るとあるからには固形物を食させらるゝのでせう、固形物を與へておいて醫療を如何ほど盡すも功なし母乳牛乳水飴卵黄より外に何も與へずに左の藥を用ゐて御覽なさい。

含糖百弗聖〇、五　硝蒼〇、三
　右三包に分け一日三回、一回一包づゝ

(問)僂麻窒斯の原因及び豫防法併せて治療法を問ふ。
(山口縣の田中友子外六名)

(答)曾て一日醫者欄に詳しく説いたことあれど、問者が多いから、今又要旨を單簡に述べませう。原因は感冒、濕潤の住居、淋疾、産後の不攝生、滋養食品の缺乏、隙風に度々逢ふことなどから本病を誘ふものである。豫防法としては乾燥の地に移り身體を温包し、滋養食品を取り、適度な運動をすること肝要である。療法としては、按摩法、電氣療法を施せば仲々功があります内服藥は初期には、

撒曹四、〇　薄荷水二〇、〇　單舍八、〇
水一〇〇、〇　・右一日三回分服

を與へて大功を奏するが、長く服むと惡心を催ふしたり、耳鳴、眩暈などを發すから、慢性のものには、屢々温浴を命じ、痛む局部には、コロ、ホルムや依的兒などの麻醉劑を塗り、内服藥としては沃度曹達を前答にある如き處方で用ゐるか或は、格魯失鳩謨丁幾一、五

沃剝〇、五　單舍八、〇　水一〇〇、〇を一日三回分

もよい、但し沃度劑は漸々増量する必要があります。僂麻質斯は何れも温浴(特に鹽浴)按摩、體操法が功あるものである。

(問)一、中年の女子生來さしたる病氣も無きが、俗にいふ「蟲がすく」とでもいふべきものか硯墨を食ひ、其の味如何なる美味も及ばざる樣子にて之を制止すれば隱れても食ふ、併し身體別に異狀無し。二、又壁土、紙を好んで食ふ者もあり、これは多少顏色は惡しけれど病氣とては無し、如何なる方法に依らば制止するを得べきか、若し制止するを得べからずとせば捨ておくも差支無きか御敎示を乞ふ。(赤木ゆき)

(答)往々さういふ人無きに非ず、嘗て或る者隱れても

醬油を吸ひ、それが爲に離婚せられて種々不幸なる境遇に遭ふも止まず、自らも神佛に誓つてまでも止めんとすれど、一週間を經ざる中に、如何なる神罰もあらばあれといふ氣になる、依て様々醫療や祈禱などした末、余に相談したから、余は其の本人に向つては致し方無しと答へおき、其の親に斯う命じた「醬油を一切嚴重にかくしおき、本人にも將來必ず飮むなと戒められよ、さすれば本人は飮みたき餘りに私かに其の在所を探すに相違無い、其の探すべき所即ち戸棚とか或は押入とかに、別に故と醬油をおき其の醬油の中へ此の藥を入れおかれよ」とて吐根といふ藥を與へたり。親は早速其の命を實行せしに計略圖に當り、之を飮むと嘔氣を催し不快の念に堪へぬ、そこで再び余に診察を請ふたから余は特更に丁寧に診察したる末、これは多年生醬油を飮んだる中毒なりと答へたり、本人歸つて又も私かに他の在所を探して飮みたり（これも豫てかくあらんと、それにも吐根を入れておきたるなり）今度は嘔氣に加へて嘔吐甚しく苦痛困難非常なりければ、これより後は醬油を見てさへ厭な氣持になり、遂々飮まぬやうになつた例がある。されば此の例を應用して何か一工夫あれ醬油は無害なれど墨汁或は壁、紙に至つては畢竟害あること疑ひ無し、早く矯正せられよ。

（問）一、極暑極寒の節になると癪をおこし「みぞおち」に恰かも錐もてもむ如き痛みを發す、其の應急療法敎へ下され度。二、蛔蟲の根治法を御敎示賜り度候。（一患者）

（答）一、勿論醫者の皮下注射藥を乞ふが正當なれど、其の醫者の來るまでの治療をして日本酒二勺程をグッと一飮にせられよ仲々功がある。二、すべて生食せぬやうにして、左の藥を御地の醫者と御相談の上服まれたし、

ラパル末一、〇　甘汞〇、五　珊篤寧〇、〇六
白糖一、〇　右分三包一日三回一回一包宛

を三日程連服して御覽なさい。

（問）野菜物を能く煑て食はねば蛔蟲がわくといふことを聞きましたが、如何なる徑路を經て野菜物に蛔蟲がゐるのでせうか。（岡良女外二人）

(答)我が國は人糞を肥料に用ゐますから、其の糞中にある卵よりして蛔蟲のみならず十二指腸蟲や絛蟲等も生ずるのであります、かう申すと其の人糞中には何うして出來たかといふ疑がおこりませうけれど斯る問題は恰も其の親〳〵と遡れば人間の源は如何といふやうな六か敷議論になりますから衛生の範圍を離れます。

(問)年中顏に小さき(できもの)が出來て困ります何卒治療法を敎へて頂きたい。(廣島縣女外貳十百人)

(答)衛生顧問欄を設けて以來この種類の問と髮毛に就いての問程澤山あるのは無い、されば本誌顏の話(下)に詳しく述べてある面皰雀斑等を熟讀せられたし。

(問)二十一歲の女子鼻と咽喉がわるくて困つてゐます何卒治療法を敎へて下さい。(女學世界愛讀者外數人)

(問)十月發行の本誌顏の話(中)に鼻の加太兒の治療法を書いてあるから、それを見られよといふのであるけれど此の患者の病狀書は如何にも詳しくて而も丁寧に楷書で整然と書いてあるから、それが嬉しくて今一度詳しく述べませう。屢々劇しく拭鼻ことを禁じ、精神を安靜にし、肉類を食して能く運動し、發汗をするやうに温脚浴をしたりして、何時も寒さを感せぬやう注意し、(重曹二、〇食鹽一、〇水半合)を以て度々含嗽し、イヒチオール五、〇依的兒・酒精各一〇〇、〇を吸入し、その他、撤酸〇、五、單寧酸、硼酸各四、〇を鼻中に塗布するがよし、右の樣にすること、三ヶ月程續けて尙治らぬ時は、耳鼻咽喉科の醫師に診療を請ふより外に道は無い。

(問)齒を白くする最も良き方法を問ふ。(何女外數人)

(答)毎朝重曹を齒につけ指頭にてこすり、更に左の藥を以てブラッシを用ゐ磨き、其の他毎食事後及び寢際には微温湯を以て含嗽すること肝要である。

沈降性炭酸加爾叟謨	五匁
炭酸麻偶涅叟謨	三匁
鹽酸加里	一匁

右三品よくまぜて用ふべし。

(問)第四卷第九號の毛生藥は何日位調製なし置くも宜しくありますか。(靈女外一人)

(答)何年分娩間合しておいても差支ありませぬ。

(問)私事毎月二度宛月經ありますが何とか治療法ありますまいか。(京都某岡生外二人)

(答)月經過多症でせう。御地の醫師と御相談の上、左の藥を内服せられよ。

機那皮煎(四、〇)麥角煎(〇、五)一〇〇、〇稀鹽酸一、〇單舎八、〇　右一日三回分服

(問)分娩期日を知る法あるものでせうか、果してあらば敎へて頂きたし。(東京の妊婦生外三人)

(答)確然たる月日は分りませぬが豫算法として申せば最後の月經の月より三を引き、日に七を加ふるのである令へば五月一日が最後の月經であつたとすれば5−3=2、1+7=8、即ち來年の二月八日頃であるやうなわけである。

(問)別にこれといふ病もありませぬが、特に身體を強壯にしようといふには鐵劑などの藥を用ゐねばならぬものでせうか果して然らばその鐵劑などの藥名分量を敎へて下さい。(男約生)

(答)藥は病氣に用ゐるもので、無病者には不必要なものである、假令ひ病氣と雖も攝生療法等にて治れば其方が善いのである、況んや無病者に於ておやである、されば自然の法則に從うて衞生を實行せられよ。

右の外色々の質問が澤山ありますけれど、この雜誌の前號及び次號を讀まるれば自ら了解出來るから畧しました。

注意

これに書いてある問題は文章を略してあるけれど之を眞似ずに詳しく認めて下さい

今度の衞生顧問の葉書等はすべて本鄕區森川町一番地表北裏八十一號なる糸左近方へ送られたし。

▲質問心得

(一)楷書にて書かれたし。(二)方書を忘れぬ様にして下さい。

(三)漠然たる事を問はぬやうにして下さい、例へば「胃病で困ります其の療法」とか「私瘦せますが如何」とかの如し胃病の中にも色々あるし瘦せる原因は千種萬樣殆んど大抵の病氣は悉く瘦せますから。

(四)面白半分の問は答へず例へば「月經時には神佛の前に出ても罰は當りますまいか」などの如し。

(五)葉書に[illegible]た墨つて鉛筆で書いたのは不明瞭で分らぬから答へず。

(六)其の問が次號の一月讀者に出すのは答へず。

(七)餘り複雜で三四頁を要さねばならぬ樣な問は他日又載せようから直に答へぬことあるべし

婦人衛生

姙婦の養生

女醫者

普通姙娠の徴候に四通りあり、第一月經閉止、第二惡阻(つはり)第三乳房肥大、第四覺動(子のうごくこと)是れなり。

△月經閉止

懷姙の第一の徴候は毎月必らずあるべき經水の閉止することなり、一定の法を以て言ふ時は強健にして不斷月經の調ひたる者は懷姙すれば其次の月より經水の止まるものなり、故に婦人によりては一二週間前より既に懷姙しても平生經水の定まれる時日の來るまでは少しも心付かず、時限來つて其樣子なき故始めてこれを悟ることとあり。

然れどもこゝに又この徴候と實地相違することとあり、第一少き婦女にして月經未だ通せざる前に懷姙する例あり、又兒に乳を呑ませ居て未だ月經を見ざる際に孕むこともあり、又懷姙してもその始め三四箇月程月經を見る例も又なきにしもあらざるなり。

さて婦人は兎角懷姙せざるに懷姙したりと思ひ誤ることあり、そは何故ぞといふに月經の止まるに隨ひて誠に能く懷姙の徴候に似たること出來るに由るものなりまづ月經止まれば、さてはと心配し、それより他の種種の徴候見ゆるなりたとへば腹部肥大し腰眠れて痛を覺へ、胃の作用變りて食氣常の如くならず、隨ひて風氣腸胃の內に集まり、一種の感覺を起すを以て本人は此を誤りて胎兒の動くと心得るものなり。これ等すべて時日を經過して自然に其の誤りなりしを悟るに至るべし。

△惡阻(つはり)の事

懷姙すれは、兎角惡阻といふ病を起すものなり、其景況は目醒めたる時には、常に變りたることなけれど、床を離るゝ時に嘔氣始まり、それより粧飾する間、絕

えず心惡しきなり此事は懷姙して直ちに起ることあれども多くは二三週間の後に始まり、懷姙の末の六週間または二箇月にて稀になるものなり、大抵始めには難義を覺ゆれども終には全く愈ゆ、即ち懷姙の始五ヶ月は何程か絶へずありて其後胎兒の動くことの知らるゝ時分に止むものなり。

若し胃の作用を失ふこと甚だしき時は全く懷姙と別物なり、然らば如何なる時に此の嘔氣を以て懷姙の徴候なりやといふに、元來懷姙より來る嘔氣はそれのみにて外の病の生ずる事なく、總體の模樣却つて常の如くにして食氣等も平日に異ならず、唯不意に氣分あしくなり、忍びかねて一間に退ぞくや否や胃中に在るものを殘らず吐き出して忽まち又快くなるものなり。是れ眞の胃病ならざるが故なり。

△乳房の肥大

懷姙の後滿二ヶ月を過ぐれば乳房の眞中なる乳頭の處微しく痛み、ひき張りて色づき氣分惡しきものなり、其後程なく乳房の模樣著るしく變はり漸々大きく堅くなりて乳頭突き出で、その根の周圍の色變りて乳暈といふものを生じ月重なるに隨ひて乳汁を分泌す（しぼり出す）この變化の生ずることに遲速一樣ならず、或は懷姙の後直ちに生ずることあり、中には虚弱なる婦人にして尤も遲く臨月の前に至りて生ずるものあり。

△懷姙中の運動

懷姙の初より六七ヶ月に至る間は戸外に出でゝ時々適宜に運動し、室内にありても過勞せざるほどに家事を扱ふことと何れも肝要にして此れが爲めに母の身のみならず其子までも健康を致すべし、蓋し戸外に運動すれば身體を健全にし、室内にて事を扱へばその職務と行爲と朝夕循環して閒暇に苦しむこと無きにより自然に精神の和暢を得べし。

されど戸外運動にも程度あり、彼の衆庶の雜沓せる市街、觀覽場などに徘徊するは宜しからず、其他何事に限らず劇しき感動を起し、心意を勞する事、情慾を恣ふさしむる事などは悉くこれを避くるを肝要とす婦人の中には平素往々懶惰に日を送り、又は空氣の流通惡

しき室内に居りて只管食慾をのみ縦まゝにし口腹を飽かしむるものあり是れ甚だ忌むべき習慣にして母子營養上に害ある事なり、是に反して戸外に出で、適宜の運動を取るは、精神を爽快にし、胃の消化をよくし、姙娠中母子の營養に最も益ある血液の循環を旺盛ならしむるものなれば、適度の運動は姙婦に必要の事と知るべし。

△白帯下の心得

懷姙中の時として白帯下の起ることは珍らしからずこれ多くは續けて子を產みたる者にあることとなりこれに處する二樣ありまづ姙娠の始め數ヶ月の手當は若し漏泄物の量少き時には冷水にて朝晩屢々局處を洗ひ、毎朝全身を拭ふのみにてよし之に反して漏泄物甚しく些少の散歩にも不都合なる時は一日に三四回づゝスポイト(水銃)にて冷水を膣内に注ぎこむべし。

さて水銃にて注ぎたる水の膣中に止まらんことを要する時には平臥して臀部を枕にて持上げ、その流出を防ぐべし、右の手當了りて後六十度より六十五度までの冷度の坐浴を六分間行ひ日中には少くも三四時間平臥し居り舍利鹽一二匁許を服して緩下劑とし、腸の閉塞を防ぎ毎朝灌腸を行ふべし、白帯下のある時は局所より體中にある諸物皆悉く脫落るかと思ふほどなれば、右の手當を用ひて平臥し居る事肝要なり、然る時はタトヱ速かに全治せざるまでも四ヶ月の末より五ヶ月の始まで大に快癒に趣くべし、若し白帯下の起ること烈しき時は必らず羞恥の情に妨げられて醫師を忌むやうなる事あるべからす、兎角十分の手當を施さゞる時は終に流產の恐ありと知るべし。

右は始め數ヶ月間に處する手當なるが、猶末數ヶ月間に處する手當は冷水にて陰部を洗ひ、又は微温湯を膣内に注ぎこめば大に驗あり、その上緩下劑を服して常に腸の閉塞を防ぎ且つ平臥し居る事肝要なり、是は漏泄物の出づる源の部分が子宮に壓迫らるゝことを防ぎ漸次に漏泄物の分量を減ずるの効あるべし。

△下痢の心得

懷姙中便秘と反對なるは下痢症なり、尤もこの下痢は

往々秘結の爲に來す事あれども、子宮の刺衝を腸に及ぼしその蠕動機烈しく增してそれより下痢を生ずるを常とす、下痢に二種あり一は大便の通じ方平生よりも緩きのみにて其外は異りたることなく、舌淨潔にして食氣常の如し、此時には藥を用ゐずして食物に注意すれば治すべし。二は大便水瀉し、色黒くして甚だ苦痛を覺へ呼吸苦しく舌に苔を生じ物の味惡くして食氣なく多少、消化機能の常度を失ふ是れなり、此時には左の水藥を三四時間ごとに用ゐてよし、

大黄　八瓦

吐根　一瓦

イノンド水　一叮

若舌の苔去り大便少しく常の如くなりたらば、橙皮、健質亞那などのエキスを一日に三回一酒盃づゝ飲むべし下痢の長く續く時には體をフラネルに包み暖かにし置くを好とす、その方法はフラネルの帶地を柔らかに下腹部の周圍に卷くべし。

右甲乙二症何れの藥を用ゆる時にも大切に心掛べき手段あり、是れ他にあらず即ち食物を愼むことにして、まづ其分量は適宜を保ち物品は淡泊にして成るべき丈消化したる後に腸内に糞滓を存すこと少きものを撰むべし。

若し卒に下痢を催ふしたる時には初めは麥の粥汁（粒を去りて）を用ひ、それより少しく整ひたらば米粥を加へ、肉漿、鷄卵の半熟等加ふるもよし、決して固形の食物を取るべからず。

△便秘の注意

便秘は懷姙中、普通の病なれど極めて用愼すべきものなり、これは子宮中に生ずる活動力が漸次に增加し、幾分か子宮を大にし、直ちに直腸を壓迫し其作用を弱らしむるより來れる病なり、さてこの便秘は嚴重に注意してよくこれを防がされば漸次に腸に熱を生じて懷姙の始めには流產することあり、又臨月に及べは多分の塡塞物ありて、出產に困難する事一方ならざるべしさてこの豫防法は朝起がけと、正午とに十分間坐浴を試むべし、若し斯くして效なき時は朝浴の代りに大麥

一合を粥に煮て其の上汁を以て灌腸すべし。猶それにても効なき時は蓖麻子油大食匕一盃を夜中に飲むべし。大抵は緩和するものなり。

△懷姙中の痔疾療法

懷姙せる時には兎角痔を病むものにして是れ便秘、下痢等より來れるなり、就中便秘より來れるを多しとす其輕きものは腸の健やかになるに隨ひて直ちに治するものなれど重きに至りては爲めに大苦痛を催ふすことあり、痔の起りは懷姙の始に擴がりたる子宮の抑壓より來れることあり、然れどもこの症は頓て覺動（子のうごく事）の頃に至りて子宮の下腹に上る時はその抑壓止むが爲に自然に治するものなり。

姙婦の痔を病むはその狀二類あり第一は腸の內外に生せし小さき腫物にしてその發したる後早く潰れて出血するにあらされば直ちに固結したるものなり第二は只腸の外にのみ生ずる一個の腫物にして周圍大きくこれを細に分けて看れば顆粒狀なれども合せて看る時は海綿の如く色づきて外面より時々出血するものなり。

痔の起因種々ある中に便秘より來るもの最も多く、其初めまづ腸の中に糞類滯りて堅くなり、大に腸を刺衝するに由る、その部分に血液溜り、血管次第に廣がりて終に痔を發するなり、懷姙すれば他の時よりも便秘すること多きを以て平日よりは此病に罹り易きものと知り便秘せざる樣注意すべし。

此病は至つて解り易く、その狀は下腸熱く壓重を覺へて塡塞せらるゝ心地し只常に下腸は膀胱の和緩あらん事を欲するものにして一時出血すればそれにて當分苦痛を忘るゝなり。

若又痔の下腹の外に出づる時は體中の動く處ろ又突出たる處ろそれに觸りて痛みを覺ゆるのみならず、大便の通づる時にも又困難なること一方ならず、況して人車に乘り運動などする時にはその苦痛一層烈しく刺衝せらるゝ甚しく、爲に熱氣を持ち、その處ろ腫れ上り、紅色又は紫色となりて甚だ痛み耐へ難きに至るべし。

右病の手當二樣あり、一は全身の爲に施すもの、一は

局處の爲に施すもの、まづ勉めて大小腸の作用を快活にする方法を用ひてその根原を絶ち、緩下劑をかけてよし。その法は蓖麻子油を一食匕づゝ度々飲むべし、これに次ぎては旃那、硫黄、麻掲失偏亞を合せたる緩下劑に如くなし、即ちその分量左の如し。

センナ　二オンス
黄硫華　一オンス
炭酸マグネシア　二オンス半

右の藥を服するの外は暖き粥汁又は冷水六オンスを以て灌腸すれば多分の益を得べし、尤も灌腸器はゴム管にて患部に觸れぬ樣にすべし、但し藥を用ゆる毎に便秘の度を許り夜半に及びてその藥の利くやうに服すべし、これは若し朝利くやうにすれば終日家事に奔走する折り腸に刺衝を催ふして頗る難儀を覺ゆるを以てなり。

若し又患部の腫れて痛み堪へ難き時は水蛭十個位をつければ大に輕快するものなり。蛭の痕は洗ひて水巴布を施すべし。

痔の疾病起りし時は食物はなるべく脂肪分の少き淡泊なるものを撰び、且つ分量は少く、品質柔かにして消化よく糞滓となりて腸を通過すること少きものを食ふべし。

兎に角懷姙中に痔起りて手當を成し能はざれば速に醫師の指圖を受くべし、愁いに含羞て敝匿し、患部を增大せしむるは不覺といふべし。

△浴法の事

姙娠中浴を取るは尤も藥となるものなれば適當の方法を以て是れを實行すべし。

浴法に三種あり、全身浴、灌漑浴、坐浴、全身浴は、成宜く微温湯にして、體に心地よく、十分間位入浴して全身温氣を覺ゆる位にてよし、若し淸水の外鹽を入るれば一層身温まりて効能あるものなり。

灌漑浴は七八十度、體温よりも少しくぬるき鹽湯を全身に灌漑、後フラネル等にて拭くをよしとす、扨て又坐浴の姙婦に効能ある事は既に大醫の證明する處ろにして姙婦養生中の重なるものなり、此法は尋常の盥に

温湯四五寸許を入れ其中に臀を据へ腰より下を湯に侵るやうにして西洋手拭を擴げて下腹部に巻きつけ五分間位身を暖むべし。

トラホームの話

一体このトラホームといふ名稱は病症の狀態から起つたもので、粗糙或は荒糙といふ事を意味する語で瞼の裏が粗糙となる處ろから附けたのであります、これを日本に飜譯して粗糙性結膜炎又は顆粒性結膜炎と申します、俗間ではこれを、擦り目、血眼、或は裏眼とも申しますが、皆病の症候から銘名したのであります、即ちこの眼病は、瞼の裏につぶ〳〵を生ずるので、その少さいのは粟粒位で大きいのは米粒位にもなる、で平性ならば、平かで、滑らかであるべき瞼の裏面がでこぼこの粗糙となるのですが、眼瞼をひッくり返して見ると、その顆粒の色は灰白色或は帶黃赤色で、その數の少ないのは數個位、また多いのとなると眼瞼の裏一杯で、丁度覆盆子のやうなのもあり、或は鷄冠の肉芽面のやうなのもあり、また柘榴の實のやうになつたのもあれば、蛙の卵のやうになつたのもある、甚だしいのになると實に目も當られぬ有樣です。

トラホームの初期は別に眼に異狀を覺へませんが、時としては何か小さい塵でも這入つた樣な感じがする事もあり、又眼をこすつたり、頻りに目たゝきしたりして、何となく眼の容子が變になるか、或は又眼脂が出て眼がかすみ、球が赤くなり、痒み、ほてり、疼痛、瞼腫れ等の伴ふて起る塲合には眼球の赤味は一層ひどくなる、或は又急に瞼が腫れて下垂れし頻りに羞明を感じ、涙が流れ、粘液が出て、甚だしい、灼熱、疼痛などを覺ゆる事がある、されど多くは極めて徐々に來る病症で始めは大抵痛みもなく、痒みもなく、霞む事もない塲合が多いので病人自身が病に感染した事を知らず、久しい時日を經て、續々發症即ち角膜病（俗に黑球の病）等に罹つて其困難のあまり、始めて醫者にかゝつて、稍々トラホームの有る事を知るといふ樣

な例がある。
尤も當時は學校醫に依つて、又徴兵檢査の際に軍醫に依つて發見せられる事が多い、併し如何ほど徐々に來るものでもよく注意すれば大抵は知れるので何となく眼の中に異様の感じが生ずる、自然に瞬きをする數が平常よりも多くなるとか、眼の疲勞を覺へるとか、かすみ易くなつて、知らず〳〵幾回も、手で擦る様になるとか、又寢起の際内眦部、又は外眦部に多少粘液の塊が附着してあるとか、何かで少しく眼の狀態に異なる所があるけれども、輕症の患者は餘程氣を附けなければ知る事がむづかしいです、大抵、始めのほどは百人が百人まで氣が附かないでゐるので、其間に病氣の方では得意になつて、やう〳〵眼の組織に病毒が深く浸入し病症が烈しくなつてから、據なく眼科醫に罹るといふ有様でこの時は病勢既に進んで、容易に治し難くなつてゐるから、一朝一夕に治ず事は出來ません、甚だしいのは遂に病毒が眼の組織を破つて、いろいろの障害を續發し、盲目にしなければ止まないのです、けれどもその重に來る障害は角膜(俗に黑眼)に星を生ずるので、それが爲め段々霞が増して、物が見え惡くなり、その度が嵩んで盲目になるといふ不幸を招くのである。
譬へ盲目に成らぬまでも一度角膜に星を生ずると治つたにした處ろで、生涯多少の障害を殘し視力の減少を來す事を免がれない、さればトラホームといふ眼病は實に恐ろしい病であります。
全体すべての眼病中で盲目となる數の多きは、濃漏性結膜炎(俗に風眼)が第一でその次がこのトラホームであるから、實に恐るべき病症と言はねばなりません。
知らぬもの丶中にはこのトラホームは近來始めて發生した眼病のやうに心得て騷ぎ立るものもあるが全体トラホームは古くより世界各國にある眼病で元來亞細亞洲に多いのでありますが本病の一番多い國は埃及で次は亞刺比亞第三に來るのが支那と日本です。畢竟これは衞生思想の幼稚なためであると笑はれても致し方ない次第であります。

されば一般國民の衛生思想さへ發達すればトラホームを撲滅する位何の造作もない事と信じます、併しながらもし之に反し今後ますく蔓延するといふやうな事になつては遂に國の生産力を減少しなければ止まんのでありますから、どうかして衛生思想を鼓舞しこの不健全な病を驅逐したいものです。

然らばその撲滅法如何と申すのに、既に感染したものに對しては完全な治療法を施すべき事いふまでもありませんが、最も必要なのはその豫防法で、全体このトラホームは傳染症ですから人々の衛生思想が發達し、各人それぐ豫防の注意を加へたならば之を未發に防ぐ事が出來るので、完全なる治療法と豫防法とこの二つが併行して行はれたならば、これを撲滅する事は決して難くはない全体世人が押並べてトラホームと稱する中には數種の別がありまして——急性トラホーム、慢性トラホーム、また眞正トラホーム、假性トラホーム或は類似トラホームなどでございます、なほ同じ類似トラホームの中にも、また學校トラホームとか、軍隊トラホームとかの名もありまして、これを病理的或は解剖學的に區別しますれば乳嘴性トラホーム顆粒性トラホームなど申します、この顆粒性トラホームと申すのが眞正のトラホームでありまして必らず、一定の時日を經ぬと全治せぬのであります、一定の經過とは假令は第一期、第二期、第三期、第四期などと申しましてこの順を追はなければ決して治癒せざる頑固の病症であります、近頃新聞紙上などトラホーム即治云々などいふことが善くありますが、今日眞正のトラホームを即治し得るほどに醫術は進歩して居りません、若し即治し得るとすればそれは眞正のトラホームではなくして類似症のものでありませう、その多くは濾泡性トラホームと稱し、假性の症または慢性濾泡性結膜加答兒とか、或は濾泡性結膜炎等を治癒したのをトラホームを即治したといふの類ですから皆さんは新聞の廣告などに欺むかれぬやうよろしく御注意を願ひます。

猶トラホームに就て眼科専門の大家井上通泰氏の豫防幷に攝生注意を左に紹介せん。

▲トラホームの豫防幷に攝生

本病の本性は、未だ其何物たるを審にせざるも、其傳染病たるは疑ひ無し。殊に本邦は其流行地にして、年々歳々此病の爲めに惱まさるゝ者、其數實に夥し。統計は示して曰く、眼科諸病の患者を合せて、其三分の一以上は、トラホーム、幷に之れに由て生ずる續發症なりと。而も本病は其經過頗る長きが故に、患者能く忍耐を仕遂ぐる者少なく、稍々輕快を得れば、忽ち治療を休止するを以て、病の甚だ峻烈ならざるにも拘はらず、不良の結果に陷るに至る者頗る多し。

本病は其始めに方りては、不快の感を生ずること薄きが故に、患者往々自ら覺らず、反りて人に由りて發見せらるゝが如き者あり。此の如きの初期にありては、之れを治すること難からず、隨ひて經過も、甚だ長きを取らしむるに至らざるも、惜むべし。患者の多くは、初期の苦痛を感ずる重からざるを侮り、來りて醫治を請ふ頃には、其經過旣に久しきに亘りありて、又容易に治すべからず。又よし本病は治するとするも、多くは眼瞼内翻、角膜溷濁、結膜乾燥等の障害を遺して、視力の減少を來たし、甚だしきは、遂に失明に陷るものあるに至る。而して此間、殊に畏るべきは、旣に幾多の人に傳染せしめたるも知るべからざるにあり。

故に學校衛生にありては、數々専門醫を聘して、嚴に生徒の檢査を行ひ、病者は之を未だ甚だしからざるに救ふとともに、健康者の爲めには、之を未然に防がざるべからず。若し不幸にして一旦本病に罹りたる者は、片時も早く専門家の治療を請ひて、全癒に至るまで其療法を持續するを要す。若し然らずして、自覺症狀の輕快、或は眼瞼面の外見治癒するが如きの狀あるに安んじ、遂に治療を怠るときは、數月若くは數年を出でずして、必ず本症を反覆し、一度は二度に、二度は三度と、反覆を重ぬる毎に、益々其經過を長引かしめて遂には前にも記せるが如く、明を失ふの不幸に陷いるに至らん。されば一度本病に罹りたる者は、其療法を執るの決心は、最も堅固ならざる可からず。是れ本病の特に大に恐るべき所以なりとす。

▲攝　生

本病に罹れる者は、成る可く清爽の空氣中に在りて、殊に塵埃及び烟を避く可し。されば幼年の患者にありては、其母姉若くは保姆等は、篤く之れ等の事に注意し、風塵を冒して外出等せしむべからざるは勿論、炊烟も避けしむ可く、喫烟も且憚る可し。又頭部、殊に眼部に充血すべき總てのとは、(設令ば辛き飲食物等)避けしめざるべからず。殊に最も注意すべきは、眼の使用なり、夜中書籍等を見せしむべからざるは言ふ迄もなく、能ふべきだけは、人工光線に對せしむべからず。而して患者に使用する手拭、目ふき等は、常に之れを清淨にし、手を洗ひ爪を切りて、爪の垢など貯しむべからず。

▲豫　防

本病の患者を發見せば、患者の眼邊に觸るゝ者には、成る可く他人の觸れざるを可とす。若し能ふべくんば其洗面の金盥より寢具までをも異にするをよしとす。殊に手拭ハンケチ等の如きは、是非とも區別せざるべからず。又小兒の被服は、常に清潔ならしむるを要す又小兒に限らず、大人に限らず、入浴時に於ては殊に注意し、湯水の眼内に入るを防ぎ、且其手拭等は、必ず之を洗淨すべし。之れ湯水傳染の媒介をなす恐れあればなり。大要は此の如きも、猶、

▲心　得

として別に玆に言ふべきは、患者の目は時々之れを洗ふを要す。而して之れに觸れたる器具物品は、最も簡便なる消毒法として、煮沸又は燒却すべし。又患者に分泌あるは、最も傳染し易きの時機なるを以て、衆人の中に出すべからず。少なくも分泌止みて、結膜に顆粒の消失せし後ならざる可からず。

終に臨みて一言すべきは、幼童中、眼に充血せる者甚だ多きに過ぐるの事實にして、幼年者は、少しく不快ぐらゐに頓着無く遊嬉するを常とすれば、或は父母たる人も心付かずにありたるべきか。尤も、幼年者の成長時は大抵の疾患には打ち勝つべき程の勢力を有する者なれば、彼の充血の割合よりは重き疾病を得るには

至るべからざるも、若し一度病毒の侵入するとあらんか、感染し易きは健康眼の比にあらず。之れが保護者たる者は、宜く深く注意して、該兒の顏面、殊に眼部に觸るゝところは、總て常に清潔ならしむることを忘る可からず。

衣服の衛生

松岡義質

冬は來た。背戸の籬に殘んの菊花は一輪二輪の秋を止め顏に咲いて居ても、裏畑の柹に霜の痕いちゞるしく散るや紅葉の木枯に吹き落されたそれからは、どの樹も見る影の無い悄然とした梢に、旅鳥の思案投首な態奈う見ても無慈悲な冬の豫言としか見えない。で今日より如何にして襲ひ來む寒さを防ぎ、如何にして身の温を取らう、衣服、住居食物について相應の心得が無ければならぬ。

冬の衣服は體温の放散を調保し、外氣の寒濕を節防する爲めに用るものであるから、襲着して、又た温度濕氣の不導體もて作らねばならぬ、而してこの目的に適ふものは、第一が毛織物で、第二が木綿類、絹布。

▲衣服

こゝに最も多く注意すべきは襲着である、如何に寒中とて餘りに度はづれの厚着はよろしくなひ温保に過ぎて發汗を增加するのみならず、爲めに皮膚を虛弱にするから寒冒に侵され易くなる、また輕衣に過ぎると風邪をひく、就中哺乳兒と老人は生活機能の鈍いものであるから、殊更らこの點には注意を要す。

次ぎには仕立方である、これも狹きに過ぐるは、身體の諸部を壓迫する虞があつて、血液の循環不良ならしめ、淋巴腺炎を喚起することがあるから、衣服は成可く寛濶がよい。

それから衣服の着色である、これは主として修飾の目的から出たもので殊に婦人などには其擇好みが多いが室内では兎も角、戸外ではこの色と熱とに大關係があ

つて冬季には努めて黒いものを用るやうしなければ熱の吸取に非常な損德である。又染料をもよく〳〵吟味しないと近來は化學的の藥品を以て染色液を作ることからして、時に局部に觸れて炎症を起す事がある。

又日本人は肌衣の洗濯を屢々せぬから脂肪が附着して自然種々の疾病を招き易い恐がある故、設令へ汚れて居ないからといつても、襯衣股引の如き直接身體に觸る丶衣は、少くも一週に一度洗濯しなければならなゐ

第五には借着を厳禁せねばならぬ、又古着を買つて着るのもよろしくない、これは傳染病の媒介となる、設令へ絹物で無くも決して恥とする處は無いのであるから、新らしい、清潔なものを求めなければいかぬ。

最後に雨天などの折り、生乾のものや、濕つたものを我慢して、着る人があるが、之れ大なる不心得で、かかるものを身に纏へば、第一に皮膚の氣孔を閉ざし、また彈力を失つて居るから、温の傳導が强くて風邪をひくことがある、要するに衣服がわれ〳〵の生活に必要なだけこの衛生も厳にしなければならない。

▲帯

日本の婦人は兎角この帯を大切にする傾があるが、またよく堅く結め度がつてならない。若し腹部を壓迫することが太だしいと、食物消化の上に諸種の障害を來たし、また呼吸に困難を生じて、胸部その他の內臟に畸形を招き小兒などには害となる。

▲夜具

睡眠中は諸臟器休息の時で、隨つて體温の發生も少なく、加之夜間の外氣は、冷かなもので、温を失ふことも亦甚だ多い。のみならず、寒氣を受けても直ぐに知ることが出來ないからして、往々寒冒に侵され勝である、故に夜具は衣服よりも温暖なものを用なければならぬ。

また寢衣も無論清潔を貴び、仕立は成るべく寛裕と長く、そして白い下着をつけ、時々洗濯して、少したりとも垢を止むるは宜しく無い。又夜具の上着下着にもこの注意を應用して、白布で覆ひ、度々これを洗濯して旅行、外泊の時にもその品を用ゆるやうにすれば宜

に清潔を保ち得るばかりで無く、これ傳染病の豫防となる、これは春夏秋冬、いづれの時節にも用たいものです。

▲頭　巾

元來われ〳〵の頸部といふものは、血管多くして温の放散を保ち、加ふるに皮膚と衣服との間に生じた温暖の空氣を外に出す所であるから、殊更にこれに温保する必要は無い。處でこの頭巾だの襟捲などは、得て習慣になり易いもので、一度これを用ゆると再びそれを廢することは困難であるがその結果は第一に皮膚の抵抗力を弱くし随つて寒冒にかゝりやすく、假令へこれ迄は松柏の如く健康であつたものも、その爲め遂に蒲柳の人となる、婦人の頭巾なるものは、別して不必要のものとして、今後その流行を來たさぬやうするのが衛生上に利益だ。

▲履　物

靴は元來西洋から來たもので、日本の人には在來の習慣上言はゞ不適當のものであるけれども學校その他、西洋風の建物の家では、これを用ゆる方が便利で今では大方の人々が之を履くやうになつた。故にこれからは靴を履くのに左の注意を要する。

一、足の運動を妨げるやう製して、壓迫を感ずるが如きは最もよくない。

二、殊に小兒は、この壓迫からして種々の損傷を生じ爲めに足の畸形を招くことがあるから、普通靴足袋二足を穿き得る位に製すべし。

下駄は贅澤てふ考からでなく、その平生でも桐製のものを用ゆるが良い。これは輕快なばかりで無く、質の軟な點よりして、身體に反動を來たすこと少く、且つ濕氣を防ぐ、またその鼻緒は出來得るかぎり柔軟なものを撰ぶがよい。

草履は實の處衛生上に缺點多く、ならば全廢もしたいのであるが、わが國古來の習慣上、及び輕便な點からして用ひらる、併し宜しく製品を吟味し、成るべく柔軟なやうに作らせ、鼻緒も寛裕さして濕潤せぬ風にせねばならぬ。

食物の衛生

元來われ〳〵が食物を要する理由は、體內の消耗した物質を補足するのである。それ故喰ふ處のものは、身體を構成する物質の含まれたものを撰ばねばならぬ。乃ち窒素、酸素、水素、硫黄、格魯兒、マグチシューム、鐵等の含まれて居る食品――言ひ換へれば水、蛋白質、脂肪、含水炭素、塩類とこれだけの營養素ある食品が必要である。就中水は最も吾人の生活に必要なもので、第一食物の消化と吸收を助け、またその不溶解物を溶解して汗又は尿となし、常にあと仕まひ迄する、そして設令へ斷食をして居る人でも、これを用て居たならば、優に一ケ月餘の生命を保つことを得るのである。

又蛋白質は、體內に入つて筋肉、神經系等を形成し、よくその機能を保ち、及び脂肪を耗すの力がある。

脂肪は含水炭素の代用物で、消耗を補足した剩餘は、組織に沈着して肥滿を得させる。

含水炭素とは澱粉、糖類、植物纖維素等を總括しての名稱で、燃燒性であるが故に先づ體溫を發放し、あらゆる機能を活潑にする外、一方に於て、蛋白質の消耗を制限するの作用を持つ。

塩類は又體內に入つて一部溶解して滋養物となり、他の一部は固結して骨質の養分となる。

これ等の營養素は、學理の示す處によると、廿四時間中に大人の需用平均水二千七百瓦乃至二千八百瓦、蛋白質廿五匁強、脂肪五匁弱、含水炭素百十九匁弱、鹽類適宜……と恁んなもので、田原博士はこれを說明するに、左の如く三四の例を作つて示された。

（一）

鷄卵二個、味噌五匁、小松菜廿匁、百合廿匁、鯛卅匁、人參十五匁、鯖卅五匁、白米四合、

（二）

牛乳一合、味噌五匁、葱廿匁、馬鈴薯廿匁、大根十五匁、牛肉六十匁、白米四合、

（四十七）

豆腐廿五匁、豌豆十五匁、湯婆三匁、鷄卵卅匁、平目魚廿五匁、胡麻油一匁、味噌十匁、白米四合、

斯の如く、食物は主として化學的分析上多量の營養物を含有したものでなければならないことは、今更らいふまでも無いが又食後に滋養分の吸收せらるゝ量をも攷へなければならぬ。乃ち米と麥との蛋白を含む量を分析して見るに、米は百分中六、六で、麥は九、九である。けれども食後に吸收せらるゝ量を度る時は、米は七十五分であるが、麥は四十分である。

一　茶及珈琲

疲勞後、食後、及び精神沈鬱の折など、これを用ゆれば精神の爽快を呼び、血液の循環を良好にする等、その効太だ少くないが、若し一度量を過ぐすか、その濃いものを呑む時は頭重、頭痛等を來たし、心悸亢進して不眠に苦む等の害を招く。

二　糖類及香味

是を適宜に用ゆる時は滋養と嗜好の兩者を兼ねて、亦食餌に缺く可らざるものであるが、元來糖類の吸收は他の食品に比して遙に遲緩であるから、随つて多くの時間を胃中に停滯し、爲めに醱酵して酸を生じ、胃粘膜之に刺戟を蒙るが故に、胃加答兒を發し、遂には不治の難症にも陷る事がある、さればこれ亦多量に用てはよく無い。

次に味噌と醤油であるが、これはわれ／＼の膳部に日として上らぬことは無い、けれども是れ、只だその内に含まれた塩類を應用するに過ぎずして、而かも多量に用ゆる時は、決して糖類にも劣らぬ害を招くものであるから、成るべくは、物の味を附するに止むる位がよろしい。

然れども爰にまた滋養無くして、ある他の事より多少の必要を見るものがある、それは乃ち香物で、これは食慾を催進し、消化機能を亢盛する効を持つて居るのだ。併し胡椒だの唐辛の類はあまり多く用てはならぬこれ亦胃を刺戟すること太だしいが爲めに、同じく消化器を損ふ恐れがあるからだ。

三　各種の飲食物

まづ、冬に入つて寒氣の漸く嚴しくなるや、吾人は第一に獸鳥の肉類を思ふであらう。實にこの肉類は、人身の保護に必要な各成分を含むで居る爲め、筋肉を屈強にし、体温を增進する効があるが、これを喰ふには少くとも左の注意を持たねばならぬ。

一、屠殺後廿四時間を經たるものを食料とすること。
二、沸騰した煮汁の中に投じて、餘りに長く煮ざること。
三、猶更らに是が肉質を柔軟にする爲め、煮汁の中にオレフ油若くは重炭酸曹達を加ふること。
四、結核、脾脫疽、啖毒等の傳染毒、及び旋毛蟲、條蟲等の寄生蟲の有無を攷へ、必らず煮沸して喰ふこと。
五、罐詰の物を喰はんとする時は、仔細に罐の兩端を檢め、其凹隔せるものは、細き金屬製の棒を以て是を打擊し、その濁音を發するものを擇ぶべきこと。

次に牛乳も、冬に入つてよりいよ〳〵脂肪多くなり、最も飲用に適するやうになる。併しながら、近時結核症の流行は、漸くその盛りを告げて來たから、飲用者は必らず先づ、攝氏の百度以上にこれを煮沸して、黴菌及び不潔物の混在をゆるさず、且つ成るべく新鮮のものを擇むで、一度に多量を用ゐず、食前の空腹な時に、少量づゝを數回に用ゆる。

牛乳に次いて、卵類亦吾人に有要の食物であるが、魚卵及鳥卵は、時に及むで間々得難いので、日常概ね鷄卵を採る。併しながら、如何に滋養品であるからといつて、是を主食とすることは到底得難いことで、若し強てしかせねばならぬとならば、少くも分量十五匁のものを、十五乃至廿個は用ゐなければならぬが、副食として用ゆる場合はたゞその情況に應じて、適宜右の範圍內で見はからつてよろしい。

	水分	蛋白質	脂肪	灰分
卵白質	七八、〇〇	二〇、〇四	—	一、六〇
卵黃質	五二、〇〇	一六、〇〇	三〇、七〇	一、三〇

魚貝類は、獸鳥肉に比して、概ね消化し易い處からして、副食物として賞用されて居るが、種類、季節等の如何によつて、時に有毒性のもの無にしもあらずだ。故にこの類のものを喰ふ人は、よく〳〵その調理法に意を用ゐ、殊に刺身を喜ぶ人々は、これ等の點に鑑る所が深くなければならない。その化學的成分は左の

如くである。

種類	水分	蛋白質	脂肪	灰分
鯛	七七、九〇	一七、六五	三、〇七	一、三八
鰤	七〇、二五	二一、三九	六、七二	一、六四
鰹	六九、二四	一八、〇九	一一、五三	一、一四
牡蠣	八九、八九	八、四五	〇、八九	〇、七七
鰻	七三、〇〇	二四、五八	〇、四四	一、九八
蛤	八四、一二	一三、一九	〇、八一	一、八八

以下植物性食物を少しく説明せんに、東洋人の主食たる米と麥とは、最も含水炭素乃ち澱粉に富み、蛋白質脂肪等他の滋養分に乏しい。然れどもこれは、副食物にその缺を補はしめ、充分に咀嚼して、唾液と混和し然る後に嚥めばよし。又豆類は蛋白質に富むものであるが、これ所謂植物性蛋白質で、至つて消化し難いが故に、僅に大豆を以て製した豆腐と、小豆のよく煮たもの丶外は、一切これを用ゆるを喜ばぬ。野菜類でも、青菜の如きは、纖維の外何の滋養分も無く、殆んど用ゐるに足らぬやうであるが副食物として、一日も欠く可らざるもの。これその久しく野菜類を攝取せぬ時は、スゴルブトてふ一種の疾病を起すが爲めで、其他の大根、蕪、百合、馬鈴薯等は、澱粉に富める上に消化よければ、大に用てよい。以下例によつてその分析表を掲げやう。

種類	水分	蛋白質	脂肪	含水炭素	纖維	灰分
大根	九四、五五	〇、七三	〇、〇一	三、七〇	〇、五二	〇、四九
蕪菁	九四、〇〇	一、六二	〇、〇七	二、八二	〇、七一	〇、七八
甘藷	六四、二四	一、四八	〇、〇八	三一、二八	〇、九七	〇、六三
百合	六九、六三	三、三四	〇、一一	二四、一五	一、四二	一、三五
京菜	九五、二八	二、一一	〇、一六	〇、二一	一、一六	一、〇七
馬鈴薯	七五、〇〇	二、一〇	〇、二〇	二〇、七〇	一、一〇	〇、九〇

轉じて當季の果實をたづぬれば、糖分と酸類とに富み、これを適宜に用ゆれば胃腸の機能を鼓舞し、時に醫療の目的に用て賞すべきものがある。けれどもその未熟なものは、直に採つて喰ふをは出來ぬ。

種類	水分	糖分	酸類	蛋白質	纖維質	灰分	不溶解物
葡萄	八四、八七	一〇、五九	〇、八二	〇、六二	〇、三三	〇、五八	二、五三
林檎	八二、〇四	六、八五	〇、八五	〇、四六	六、四七	〇、五六	五、〇〇
枇杷	八四、〇〇	六、五七	一、四六	—	〇、一六	〇、六〇	六、七〇

海藻は、浅草苔を除くの外は、いづれも不消化物である、菌類は恐るべき毒素を含むもの往々にしてあれば、まづは用ゐざるに越したことは無い。

夫婦の同情

夫婦の間柄に於て何物よりも肝要なるは「思ひ遣り」の一事なり、如何なる夫婦と雖も、此の「思ひ遣り」といふ一事に重きを置かざるは、決して滿足なる夫婦といふべからす。夫婦の間に於ける幸福の程度は互に「思ひ遣り」の程度を以て之を測量し得べし「思ひ遣り」は即ち同情同感に外ならず、されば同情同感の苦樂を共にし、一體たる可き夫婦間に肝要欠く可らざる者五種あり。(一)財政上の思ひ遣り(二)肉體上の思ひ遣り(三)學問上の思ひ遣り(四)氣質上の思ひ遣り(五)精神上の思ひ遣り是なり。

第一、(財政上)貧者と富者との結婚が終り迄幸福なるの例は極めて少きものなり、富人の子女到底貧家に嫁して忍ぶ能はず、忍び能ふも家政其緒に就かずして家族の安樂を來すこと能はざるべし。而して富みたる人は富まざる人の心を思ひ遣る能はず。其間に暗黑界生じて親密を害せん。

第二、(肉體上)如何なる聖人と雖も既に結婚すと云へば、肉體の快樂に關係あるが故に、男女肉體の强弱非常に度を異にせば、生活上何の得るなく、爲に身體の衰弱を促すとあり。情慾の間に不滿足を感ずるとあれば、亦夫婦間に於ける障礙物となり、遂に總ての事に於て互に同感同情を感ずると薄弱なるに至るとあり。殊に注意すべきは肉體强弱の不平均よりも、醜美の不平均なり、醜美の懸隔は夫婦の間に不平均を生ずる顯著なる分子にして、美者は自ら誇る可く、醜者は自ら恨まざるを得ざるべし。

第三、(學問上)妻に學問の有ると無きとは、子女の發達に著しき感化を有すると明にして夫婦の間柄に於ても成るべく學問上の同感同情を保つこと必要なれば、夫婦の間學問上に全く思ひ遣りの出來ざるが如き、差異あるを惡しくとす。例へば妻には學問上の智識なきに夫には妻に知られざる學問上快樂の領地あるときは、妻は其無能を卑下し爲に双方幸福を大に減せらるべし。

第四、(氣質上)男子と女子との間に於ては其好惡氣質に甚だ異なる所あり。此點の夫婦間に同感同情を得るは大切なることなり、夫婦氣質の相衝突して不和を來すもの世間其例甚だ多し、夫は物に熱情にして妻の冷淡なるは永く幸福なる家庭を成し難し、その精神上の同情同感に至つても又同じ。

家庭月令

十一月――小――霜月

（一日）市中各呉服店にて此日冬衣を賣出す。（三日）天長節。（五日）より七日まで九段靖國神社に招魂祭あり、忠勇なる將士の英靈を祭る。（八日）フイゴ祭……鍛冶職、鑄物師、飾師等稻荷祭をなし、酒肴を供へ、蜜柑を撒く。（十五日）小兒の祝日……三才の男女、五才の男兒、七才の女兒を携へて產土神に詣て、親戚の家々を廻る、小兒の親は其の夜親類知已を招きて祝宴を張る。（二十三日）新嘗祭。

（氣　節）「立冬」「小寒」。風向北に轉じて冷氣次第に加はり、晴夜には霜結を見る、衣服は袷衣に合せ羽織、外套を用ふる候となる。

（農　事）農家は稻を刈り收めて、之を扱落し、麥蒔を終る、其他豆類の蒔付、苗木類の植付、果樹の刈込み、菜蔬類の收穫等にて大多忙を極む。

（園　藝）柑類の收穫、葡萄、桃、杏等移植の好時季。

（食　品）伊勢蝦の味噌和へ、鴫に松露の清汁、コノシロの鹽燒、目鯛、むつの煮付、菊びしほ、ほうれん草の煮浸しくわゐ、生海苔。

（行　樂）郊外運動、遠足の好時節、菊は香露國にして最も愛すべく、紅葉は二月の花よりも紅にして最も賞すべし、銃獵は田圃山野ともに鴫を最とし、鴨、鳳も亦た打つべし、此の月東都に酉の祭と稱するものあり、酉の日に鷲神社を祭り、老若群集、熊手、栗餅、八頭芋等を買ひ、來ん春の福を祈る料とす、一の酉十一日、二の酉廿三日。

（日曜日）六日、十三日、二十日、二十七日、（祝祭日）三日、二十三日。

海外事情

泰西 婦人界逸話

紅陵生

▲婦人國▲

往昔小亞細亞に、黒海の岸に沿ひ、セルマヅーン河に跨つて、婦人ばかりで成立つた一帝國があつたといふことは、ヘロドタス。ポーサニアスを始め、上代の有名な歴史家達が確信して書き記して居るところであります。此の婦女國民は名をアマゾンと呼び、日本の昔話にある彼の女護の島など云ふものとは大違ひで孰れも女丈夫の揃ひで、全く男子なるものを一人も容れないで、立派に一國家を組織して居たものださうでありまして、今日でも勇婦、女傑のことを西洋でアマゾンと呼ぶのは、全く此國民のことに因んだのであります。

さて此國民は何ういふ風であつたかといふに、彼等は弓矢投鎗を以て身を固め、又アマゾン斧といふ名を取つた一種特別の斧を持つて居て、彼等が勇武の振舞其首領等の豪膽なる事蹟等夥しく、四方の諸國を恐れ戰かしめ、次第に其領地を擴げて、數多の國々を征服したとの話であります。これは曾古代の歴史家ばかりでなく、近代の學者でも固く信じて居る人が多く、現に當時の此國の紀念標、紀功牌などが澤山殘つも居てそればかりでも十分信を措くに足ると云て居ります。

全く男子の扶助を借らず、婦人ばかりで、市府を建て、之を支配し、軍兵を起して之を統率し、政務を行ひ、武力を以て四隣を征服したといふことは、今日の世の状態から推して考へると、如何にも信を措きがたいことでありますが、併し決して出來得べからざる事ではありません。此アマゾン國に就ての夥しい譚の内には無論小說的の虛構談も澤山あるでせうが、上代の歴史家の說に據り、又紀念標、紀功牌等に據つて考へると、まんざら無いことを虛構つた話とは決して云ゝことが出來ぬのであります。

縱令婦人のみの一國を組織らぬとも、此古代アマゾンに劣らぬ婦人の勇武の事蹟は、近代にても世界各國に少なからぬことで、殊に歐州では、中古時代に騎士といふ結社が盛んになつて、豪勇の氣風が社會一般に行き渡つた時、婦人も亦大に此氣風に感化せられて、盛んに戰陣に立ち交り、全く男子と同樣の役務に服しました。又十字軍の當時には、婦人の從軍したるもの夥しく、夫と共に武裝して戰場に出で、いとも勇ましい働らきをして戰死を遂げたものが澤山あります。中には婦人のみで數方隊を作り威風堂々として進擊し觀る者をして往古のアマゾンを想ひ起させたとのことであります。

羅馬の大將ルシアス、アントニアスが英國に攻め入つた時、英國方には數多の婦人が最勇猛に戰うて羅馬方を惱ませ、それが爲めにアントニアスは更に本國へ援軍を送るべき命令を發するに至りました。其時アントニアスの手紙に、命を惜まぬ敵の女軍の勢ひ殊に當り難き由を記して居ります。此時英國方には五千人の婦人が出軍して居り、いづれも敵愾心が燃えるやうで此敵に復讐し得ずば、屍を野に曝すの覺悟で戰かつたとのことであります。

其外婦人にして城砦を守り或は攻め、若しくは軍を統率して戰場に偉勳を樹てた豪勇の事蹟は東西ともに少からぬことで、婦人の武勇が男子に劣らぬことが知らるゝのであります。まして開明の世は、昔と違つて婦人の智識も男子と同等に開發せらるゝやうになり、權力も次第に擴張せられて行くことでありますから、縱令昔のアマゾンのやうに婦人のみの國家は出來ぬまでも、婦人が國家の主權を握るやうになる時代が向後或は來るかもしれません。

▲結婚と國法

婚禮は人生の大禮でありまして、國の文野を論せず一般に重んぜられて居るところであります。昔希臘の共和政治が興つて後、國法を以て婚禮を奬勵し、適當の時期になつて婚禮せぬ者は冷遇せられました。スパルタ國の法律は殊に此點に於て嚴しかつたです。アゼ

ンスにては、司令官、講演者等を始め汎べて國務に與る人物は必らず既婚者たるべき國法でありました。

結婚の時期なるものは昔より國々によつて一定して居ませぬが、概して早婚を禁じ、スパルタにては、體力發達の頂上に達するまで結婚を許さなかつたですこれは生るゝ子の强健を期したもので、アゼンスでは三十五歳に達するまで結婚を禁じた時代があつたさうです。又希臘の諸國は大半各市民は其市民間同士で結婚し、其他と緣組みすることを許さず、又結婚は必らず兩親の許可を受けねばならぬ法律でありました。

羅馬では、道德上と政治上の見地から、結婚は極めて重要視せられ、婚者には相當の賞を與へ、獨身者には罰金を科しました。此法律を始めて定めたは羅馬建國三百五十年の頃であつて、猶これでも法に從はぬもののあるを見て、是等の輩は國籍を削ると云ふ法を作りました。

アウガスタス帝の代になつて、いよ〱結婚を奬勵し、婚後多くの子を產んだ者には種々の賞を與ふる方針を執りました。其他御婚者にはいろ〱の恩典がありまして、劇場などでは、既婚者は上等の席に坐らせられ、其他萬事につけて未婚者の上位に置かれ、又役所などに對する種々の手數を免ぜられました。それより二三百年の間、婚者には矢張此特典が與へられてありましたが、コンスタンチン帝の代になつて、此法律中數ヶ所を改正して、獨身者に罰金を科することを廢しました。

▲上代結婚の變風

婚禮には國により時代により、種々の變つた風習がありまして、今日でも未開國には滑稽な奇風が行はれて居ることでありますが、上古バビロン國の結婚の風などは餘程變つたものでありました。バビロン國の法律として、汎て女子たるものは、結婚すべき年紀になると、或定めの日に、或場所へ集まらねばならず、そして未婚の男子も亦其日其處へ集合することになつて居りまして、茲に呼び賣りをする人が居て、寄り集まつた娘を一人々々男子の群集の前へ引出して糶賣りす

るのであつて、何の事はない、嫁の競賣市場を開くのであります、呼び賣り人は先づ最先きに容貌の一番優れた娘を出し、十分糶りあげさせた上に、これが賣れてしまふと、跡も矢張り容貌の好い順に一人づゝ出して糶賣する、それで金の有る者程美人を擇ぶことが出來る譯でありまして、貧乏な男子は迚も標緻などを好む譯には行きません、醜婦を以て滿足せねばならぬのでありますが、併し醜婦の方へは反對に先方から金が付いて來るのであります。それは呼び賣り人が美しい娘を賣つてしまふと、這度は一番醜い方から順に出して、これにどれだけの金を付ければ引取るかを聞き、一番少い金高で引取らうと云ふ者の方へ落すのです。

斯ういふ具合に美貌の女を賣つて獲た金を醜女又は不具の女に分與してそれ〳〵羅賣りで緣組みを極める規則であるから、全く品物の取引と同樣で、勿論愛情など〻云ふことは始めから眼中に置いたものでなく、又親たる者も自分の思ひ通りに娘を結婚さすと云ふことは固く出來ないのであります。尤も取引の濟んだ跡で、双方和熟しなかつた塲合は、代金は償還せられることになつて居たさうです。

▲競馬結婚

右は遠き昔しの事で、誠に不自然極まる野蠻な風習でありますが、これは現今のことで、又强ち野蠻とも云へないですが、兎に角一種異つて居るのはラプランドの結婚であります。此國では男子たるもの、兩親又は友人間の承諾を得ずして結婚することは決して出來ず、そして若し壯者が或娘と結婚しやうと云ふ塲合には、一般の風習として、先づ其娘と壯者と二人に競馬をさせ、双方の友達等を招いて之を見物させるのです何の必要で這んなことをさせるかと云ふに、之は娘の方からも其壯者を愛して居るか否やを試驗する爲めでありまして、競馬塲では、初め娘の方が全距離の三分の一だけ先きへ進み出て居て、競走を始めるのであるから、若し當人が故意と後れやうと思はなければ、決して追付かれる氣づかひはないのです、それで若し娘が當り前に馬を驅けさせて、最後まで壯者に追つかせ

なかつたら忽ち事は破滅で、其壯者は決して其娘に結婚することは出來ないのでありますが、若し又娘が眞實其男を愛して居て夫に持たうと思ふならば、初めのうちこそ、男の心を試すために故意と急に駈けて居ても、最後まで進まぬうちに、歩を弛ませ、又は突然佇立りなどして壯者に追越させるやうにするのです。此風習があるから何人も氣に染まぬ結婚をすることは決してありません。ラプランドは今露領になつて居る貧しい國でありますが、人民が夫婦間の愛情には極めて富んで居るのであります。自由結婚などと唱へる國でも、内實は强制的の結婚が猶隨分行はれて、夫婦間の不熟和等の多き世の中に、此ラプランドの婚禮の如きは、其主意に於ては誠に美風と云つて可いのでせう。但其方法は競馬よりは今少し輕便なことにしたら好さゝうなものと思はるだけです。

▲美人禁制

佛蘭西が革命騷動で、士民皆狂氣のやうになつて居た時、巴里市に於ては、市廳へ美婦人の入るを禁ずると云ふ布令を發しました。それは何故かと云ふと、當時革命黨が天下の政權を握り、王黨の面々を捕へて獄に投じて居たので、其れ等の王黨の人々に緣故ある貴婦人等が、其釋放を歎願するために續々市廳へ押しかけたが、容貌美はしい婦人に哀願せられては、心を動かされて當事者等が偏頗の處置をするかもしれぬといふので之を禁じた譯で、醜女ならば來ても差閊へが無いとになつて居ました。此布令が出て程經て後、市會の代理人ハーパートなる人が、市廳が此法令を遵行しないで往々美婦人の入るを許すことを告訴しました審判の席にて被告市廳吏員等の一人は種々に陳辯し、自由の國土に於ては公衙なるものは何人に對しても一樣に入るを許さなければならぬ筈のものだといふ事、又人の趣味は十人十種であるから、同じ婦人でも、一人には醜と見做されて入るを許され、一人には美として斥けらるゝ場合のあるべき事、又人は老若美醜の別なく用務は一樣に有り得る事、結局公衙にては、斯かる法令の遵行は、到底不可能であることを述べたてた

が、此陳辨は更にハーバートの心を動かさず、彼れは又更に告訴を新たに起したので傍聽席なる婦人連に大滿足を與へました。其時の傍聽席は婦人のみにて充たされ、過半は老女で、外も皆一同容貌のすぐれぬ人ばかりでありました。

▲スパルタの母と羅馬の母

我子等が戰場で討死したと聞いても涙一滴溢さぬのみか、却つて大に喜んだといふ上古のスパルタ國の母親等の豪氣は、後世から歎稱を受けるところであります。しかしこれは所謂大義親を滅すで、國家の爲めに私の情を犧牲にしたもので、眞に骨肉の死を悲しまぬといふは人情でありません。殊に骨肉の情も親の子を思ふ情より深きはなく、又母親は其溫柔多情の女性の習ひとして子を思ふ情は父親よりも優つて居るが世の常であります。人前では涙一滴見せずとも、陰では泣くのが當然でせう。眞に心の底から子の死を歎かぬといふ母親は強ち感歎すべきものではありますまい。昔でも羅馬の母親等は、右のスパルタに劣らざる勇武の國柄でありながら、おしなべて、スパルタの母親のやうに子の死に冷淡ではなかつたのであります。ハンニバルとの戰爭に羅馬方が大敗したといふ報知が羅馬の市へ達した時、男女の群集は雲の如くに市門に集ひて、我敗兵の歸來を待ち受け、いづれも骨肉の安否如何にと憂慮の色は面に溢れ、殊に婦人連は皆一しほ心配の樣子であつた。やがて軍の歸着した時或婦人は、死んだものと想つて居た我子が無事に歸つたのを見て市の門口で跳びかゝつて抱きつき、あまりの嬉しさに其場で死んだとのこと。又或婦人は我子は死んだと聞いて力を落して家へ歸つたが、死んだと云つたのは間違ひであつて、程なく其子が家へ歸つて來たのを見て悲しみと喜びとの劇變の爲めに、これも氣絶して死んだといふ話があります。

名所秋夕　　佐藤やす子

さびしさも果こそなけれゆふづく日尾
花に沈むむさし野の原



牧師の平生

武田藍涯

若し圓滿なる美しき家庭を天下に索めたならば。先づ基督敎牧師の家庭の上越す者は無からうと思ふ。亦然うあるべき事と信ずる。日本に居ては無神論を唱へ。基督敎に反對したる學生が。一度歐米に行き熱心なる基督敎信徒の家に寄寓し、溫平たる其の良風に感化せられて終に洗禮を受けるに至つた者は少くないのである。基督敎信徒は常に言ふて居る。「神を信じたる利益は數々あるが、一身を淸め一家を齊へ。更らに進んで一國の風俗習慣を矯正するの力は此敎を措ては蓋し他に少からん」と。成程我等局外者から見ても稍々其の誇張する所に近い者を見るのである。中には鳶烏の如き傳道者にしてだらしなき生活をする者の無きにしもあらざるべけれども。之等は水平線以下の者として措て論せず。之より余が竊かに觀察したる牧師の家庭を寫し出さん。

▲牧師夫婦

家庭に於ける二柱の神は夫と妻である。耶蘇の先生の家庭にも亦た此の二神在して靈驗灼著なること、敢て世間と異なる點はない。夫婦揃ふて始めて家庭である。鰥寡孤獨の徒が幾ら大勢集合したりとて、合宿所と言ふを得べきも之を眞の家庭とはいへぬのである偖此の夫妻は其の釣合を得て居らぬと双方の不幸である。殊に牧師は尊き神の御敎を傳へて罪惡の中に沈溺せる人類を救ひ出すといふ最も聖き職分なれば。其の身は淸くして且つ正しく博愛仁義を旨とする小基督たるべきは勿論なれども、之に連添ふ妻たる者も其の學術智識に於てこそ其の夫に及ばずとも。其の信仰精神に至ては決して夫に讓らざる程ならねば牧師の成功は

殆んど難からうと思ふ。今の牧師夫妻を見るに此點に於て聊か缺然たる所なきか。何故なれば牧師中一流の人物と言はるゝ人は相應に横文字も讀める。其品位思想の高尚なる所は帝國大學のプロフエツサア以上の者もある。其の中流の人物にても確かに中學校先生と腕押をして敢て敗を取らぬのである。又中には米國に行き神學若くは哲學を研究し學士博士の稱號を得て歸りたる者もある。名實相合ふや否は兎も角も。座頭が京都で印を取り檢校となつて歸ると同一で。其の人に確かな折紙が附くのである。マア中流以上の牧師連は何所へ出しても押しも押されもせぬ人物である。が。其の細君に至つては殘念ながら牧師の半身たるべき素養に乏しい者が多いのである。誂への夫に出來の妻、釣合はぬは不縁の本。とならずして圓滿に治まる所が此の宗旨の難有所である。さて不完全ながらも此の二者が經營する所の家庭は誠に圓滿である。何がさて「姦婬の故ならずは如何なることとありても一體と成つて離るべからず」といふ出雲の神より一段嚴かなる律法の下に結婚したのである。天にも地にも只一人を互に思ひ思はれて居るのである。米の飯と女は附て廻るなど云ふ途方途轍もなき考は毛頭もないのである。是等の夫婦は互に愛し互に信じ。又何事も九分九厘までは同等である。此の家庭には稍々共和政治が行はれて居る。何事も平等主義である。其所で牧師の平生の勤めとは何であるかといへば。日曜日の說敎と信徒の訪問及び宗敎上の諸集會へ出席することである。其他は信仰上知識上の書物を讀み若くは說敎の材料を蒐むるためにも考へもする又書物を讀みもする。故に牧師は只僅か一週に二度の說敎をするのみで誠に閑散なもの丶樣に思はるゝが。其の實中々そうでない。說敎なども政談家が時事問題を擔いで地方を廻るとは違つて。五年も三年も一つ所で相手替らず主替らずで遣るのであるから、餘程の勉强家思想家で無くては會員に滿足を與へることは出來ないのである。其所で細君たる者は能く家政を料理し夫をして聊かも顧慮することなからしめ。思を他に馳せざらしむる樣爲すが第一である

尙ほ細君の勤めとしては頻繁なる來客の取扱ひ。矯風會王女會婦人會への出席病人の見舞。之も亦た容易の業にあらず。如此夫婦打揃ふて神に事ふる時は不平も怨嗟もなく。相依り相助けて荒野をも越へ激浪をも横きることが出來るのである。完全を求むれば得る所少かるべきも。而かも牧師の家庭の如きは稍々模範的家庭に近いと謂つて可からう。

▲生活の程度

米國のブルークリン教會の牧師ビーチャアは年俸三萬弗であつた。英國のメトロ



秋の農家（一）

ポリタン教會の牧師スポルジヨンは年に二千五百磅の俸給を受けたといふことを聞た。又我邦に來て居る宣教師は大槪年俸千二百弗であるが。之に比べて見ると我邦の教師の給料は甚だ少い平均したら年俸僅か四五百圓であらう。大阪の宮川經輝氏が月給百圓？之が最高額であるそうだ。東京で名の聞へて居る海老名彈正、小崎弘道、植村正久、本多庸一、平岩恒保、高木壬太郎諸氏の如き人々も百圓以上ではあるまい。斯樣に收入が少いから衣食住も甚だ質素である。出る時成るべく車に乘らぬ算段をし。流行の衣服は着

ぬと云ふ覺悟。毎日粱肉に飽くなどは思ひも寄らぬことである。トテモ世間並に花見遊山に車を聯ねて飛ばせ。晝食は梅川とか八百松とか云ふ仕掛に行かないので、外から見ると甚た面白く無さそうであるが。併しそうでない。大にそうでない。温かき空氣は確かに其の中に通つて居る。一家團欒の樂は正に其裏に籠つて居る。世間中人以上の產ある者の平素の行狀を視るに、朝飯を家にて濟せば晝と晩は必ず外で喰べるが例である。稀さか巳が家で食事することとありても、妻子とは食卓を共にせず膳部も丸で異なり。獨り別に旨き物を喰べて平氣で居るが之では頓と下宿住いであるホーム生活の常態ではない。若し之れを外國人が見たならば定めし異様な感を起すであらう。此の夫婦は喧嘩でもしたか仲が惡るいのか知らと餘計な心配まですであらう。何れの旅店にも風呂場の入口に御泊料上等一圓、中等七十五錢、下等三十五錢と云ふ工合に貼出してある。尙は其上に特別上等一圓五十錢とか二圓とか書たのもある。今の紳士が巳のみ上等若しくは特等の取扱をさせて。妻子は下等の三十五錢而かも其を直切つて二十五錢乃至二十錢位の待遇をさするとは甚だ以て謂れの無い話である。不味と汚きとは是人の欲せざる所也とは孟子も言はなかつたが。女と子供はまづい物を嗜むもの也と云ふ生理上の原則あることも嘗て聞たことが無い。古の王者は民と樂を同くした一家の主人も家族と樂を偕にすべきである。中古のお大名御前樣然たるは余の甚だ取らざる所で。今にそういふ型は流行るまいと思ふ。牧師の家庭は丸で其と正反對で、一ツの食卓へ家族一同寄つて集つて同物を喰べるのである。主人まづき物を食すれば子供も同しくまづい物を喰べ。適々客ありても客にのみ鰻丼を出して家族は香物で茶漬といふことはしない。何なりと細君の心盡しの手料理を客も主人も妻も子供も同じ食卓で同じ樣に喰べるから。之では客も眞に心持が善いのである。適には其家の子供が徒らで卓上を攪き廻はしなどして少なからぬ迷惑を蒙むることもあるが。之は除外例として先づマア愉快である、たとへ珍味はな

しとも夫婦老幼卓を圍んで談笑しつゝ食事をする味はひは又格別。ホームの愉快は玆に在る。人生の愉快も玆に在る。家族に煮豆を授けて己一人鯛の刺身と云ふ樣な罪は牧師は決して作らない。斯樣に公平なるが故に常に浪風靜かに治まるのである。

▲家の體裁

牧師の家は敎會堂の傍に建つるが當然である。寺院に庫裏があると同く。西洋では必す會堂に屬して居る。日本でも附屬したのもあり。せぬのもある。大體間數は五六。疊數三十枚位を普通とする。其の收入に依て多少差等はあるが



秋の農家（二）

數寄を疑らした家などは絕へて無い其所で其主なる一室を書齋兼客室としたるもあり又は別に一小室を書齋としたのもある。室內の裝飾等も甚だ質素にして床の間の如きも別に名畫の軸物もなく。書畫會に於ける走り書きの花鳥か若しくは鐵舟、海舟の書た粗末なる幅或は石版摺の山上垂訓の如きもの。扁額は十字架上の基督か。名畫の寫し主の晩餐の圖か。其他壁間にはクリスマスカードを所々に吊す位のみ。兎に角先祖傳來の寶物にても無い限りは別に之ぞといふ書畫又は美術品は無い床の買物等も甚以て價貴

からさる者が多いのである。併し其牧師に多少風韻あれば其心掛けによりて可なり體裁よく室内の裝飾を存して居るのもある。尤も牧師連中には風流韻事に心を傾けたる隱居的淸閑人は無いのである。槪して言へば世間の金の冥利を知らぬ出來星身上の俄か紳士が狡猾なる骨董屋より授けられたる僞物や。西洋の女郎屋は斯くやと思はるゝ程のこて〳〵したる妙な歐風裝飾よりも何所となく瀟洒たる所があつて奥ゆかしい。が。どの點から見ても牧師の生活は甚だ以て粗末である。併し其の粗末な所が價値である。尊い所である。世間の市場へ出せば高く賣れる人物が、安い月給で傳道する其の名譽も利益も犧牲として神に事へる所が身上である。中には却て敎會へ高く賣り附けたる品もあるが之は萬が稀なる例外である。余が知れる數人の牧師は學術品性共に群を拔ける立派な君子なれども。人はパンのみにて生る者にあらずとの聖訓を遵守し。薄給に甘じ財用の足らざるを嘗て憂いたことがないのは余が常に感嘆措く能ばさる所である。只牧師連か他の人々

に比して富む所の者は本箱の中であらうと思ふ。試に帝國大學を卒業したる學士と云はるゝ人々の書齋を窃かに窺ふて見ると僅々たる數冊の古びたる横文字の書而かも在校中の敎科書と合本したる數冊の雜誌に過ぎぬのである。斯樣な學者が多いのは實に心細い話では無いか所が牧師は能く書物を買て讀む。衣服は買はずに新刊の書を購ふて讀む。思想の潮流につれて行くことを考へて居る。余が知人の如きも常に能く讀書さる故に年は老ひても心は若い。體は古びても思想は新たである。其所で普通牧師の所藏する必用の書名を揭げて見ると。新舊聖書神學、組織神學、比較宗敎學、敎理歷史、敎會歷史、基督敎證據論、哲學歷史、聖書註釋其と各派々々の敎會史。是等は是非一通り有たねばならぬのである其他維新前後の敎育を受けた人は相應に和漢の書物を有て居る。亦ショーペンホーエルなどと言ふてチト筋張る人は難かしい理窟張つた哲學書をも有つて居る。是等の人は妻子よりも寧ろ書物を愛すると云ふても善いかと思はれる程である。此他には今

茲に更めて記すべき特殊の事は無いのである。

▲家族日々の所作

牧師は先以て大人君子の風ありだが。其割合に朝寐坊の人が多い。之で早起であつたら申分なしだが。惜いかな其一を缺て居る。併し之は些細なること深く咎むるに足らずとして。牧師褥を離るれば盥嗽し。書齋に入りて天父に向ひ已の爲め家族の爲め。教會のため。其より進んでは日本國家の安寧。世界一般の平和を祈るのである。朝餐の卓に臨んでは家族に代つて感謝を



秋の農家（三）

爲し其から夫々箸を取るのである。其の感謝と云ふのは今日無事に起き出で家族と共に神より賜はりたる肉體の糧を分つことを神に感謝するのである。其から聖書之友日課表と云ふ者がある。之は新舊約聖書を一年三百六十五日に割附けて信徒に讀せるのである。其日の所を家族と共に輪讀し。讃美歌を唱へて其日の御保護を神に禱る。之は其家々の便宜により時間に規定は無い。抑々此の小さき家族の祈禱會。之が此の一家内の生命である。凡ての美しき事は皆な混々として此集

りより湧き出でるのである。一家の和樂も教會の親睦も活動力も此集りに胚胎して居ると云ふても差支は無い。牧師の家に讃美の聲が聞へず。家族の禱りが途絶へるなれば其の牧師は口を動かし眼を動かす精神なき器械人形である。數萬言の説教をしても鳴る銅や響く鐃の如くである。其から牧師は讀書するとか。信徒を訪問するとか、何か其日を有用の事に費すのである一日の勤め終りて家族寝に就かんとする時は亦一室に集りて讃美歌を唱ひ其の夜の御保護を神に禱り、安心して眠るのである。何と人間の生活も斯様にしたならば始めて安心立命を得らるるであらう。余は曾て旅先きで西本願寺の僧侶某に遇ふたが。此僧も朝起ると袈裟を掛け香を焚きて默禱した。宗教家は誰も此の嗜みが無くてはならぬと思ふ。或る神を知らず基督を信せざる青年が偶と牧師の家に宿ることになつた。イザ寝るといふ時。牧師と其妻とが神に禱りたる中に其の青年の保護を神に願つたので。此青年は驚いた是迄親類や他人の家に宿りたることもあるが。其身の安全を神に禱つて呉れたのは。此家の外には無いと。非常に感じ其より道に志し。終に信者となつたさうだ。牧師の家では先祖の位牌を祠らずして其父母の肖像を敬重す。五節句も本の形のみにして敢て祝はず。勿論婚禮と葬儀は教會に於ける大禮として最も鄭重に最も厳粛に取扱ひ。正月は世間並であるが訪禮も答禮も只第一日丈けで二十日正月までも便々と引延ばす様の事は決して無い。また「クリスマス」とて十二月廿五日を耶蘇降誕の日として信徒は皆な之を祝ふ。西洋では此日を元日よりも最も大切にし、凡ての勘定も其の前日に方附け其日には教會に於て祝會を開き。各々知己朋友に贈物を爲し。人望ある牧師は贈品堆を爲すと云ふ程である。又各々の家にては慣例として七面鳥を殺して此の日を祝ふが。併し日本の牧師は未だ大晦日の勘定は濟まぬ年の内に陽氣に祝ふても居られぬといふ風で。矢張舊慣によりて正月を大切にする。之も亦致方のなき次第である。牧師も一年三百六十五日暇の様で忙がしく。忙がしさうで暇らしく。細君も亦從つて

其通りである。嗚呼牧師の家庭も亦妙なるかな。

▲敎會との關係

牧師の家庭と敎會とは自ら別問題の如くなれども。其間密接の關係あれば茲に其の槪略を書くこととしやう。牧師と敎會とは師弟の如く又兄弟の如くである。牧師が爲す所の日曜日二度の說敎は一は信徒の信仰を暖め宗敎上の知識を與へ。一は未信者に宗旨の大要を悟らしめ之をして悔改めさせんがためである。去れば牧師の講壇に立つ其一言一句凡て聽衆の生命に關するものなれば用意なくして上るべきものでない。孔子の太廟に入って事毎に問ふは其職を重ずるからである。ルーテルが講壇に立て戰慄したのは其任務の大切なるを感じたからである。其故に說敎に能く心を用ゐる人は一週の間能く心掛けて居る。耳目に觸るゝ所の者を皆な其の材料とせんとするのである。大說敎師ビーチャアは山の高きを見ても水の清きを見ても宇宙森羅萬象皆な採て以て說敎の材料としたといふ。然るに一週の間ぼんやりして土曜日の夕刻より急拵への說敎の如きは牧師自らに自信が無い、力が無から聽衆を感動さすることは到底



秋の農家（四）

出來ない筈である。良牧師の教會を思ふのは其家よりも切である。此節東京などでは無さそうであるが。以前は牧師が教會の中に何か憂ふべきことある時は、飄然去つて深山に入り。其教會に神の力の降らんことを禱りたることも間々あつた。斯様な事を爲るが間違か否かは暫く置き。其頃は何れの教會も燃るが如き勢であつた。今や即ち然らずである。何れにしても牧師は教會の事を常に心配して居る。寐ても覺ても忘れぬのである。から教會も之を師父とし兄として之を敬愛し之を尊信すべきである。或教會は牧師と會員との間が甚だ親密にして、如何にも美しく。之丈けでも神の榮を顯はして居るのもある。又或教會は其の信徒の中に代言的の人物もあり。又無闇に稍理窟並べ立てる變人もある。概して教會員には筋言ひが多いからつまらぬ事を混雜々々言ひ立て、牧師を困らし。終の果てには榮轉願を傳道局へ持出すのもある。縣會と地方官との衝突と同様で斯うなつては必ず牧師の敗けるが常である。斯様な逆襲を受けては牧師も中々溜つた者にあらず。平和の神を信じ。口常に平和を唱へ「人爾の右の頰を打たば左をも向けよ」との敎へを信じ。絶對的非戰論をも唱へまじき平和論者が時としては已が師たり兄たる牧師を苦しめ。或は其の妻君に不行屆きの點がありとて婦人等打寄つて之を窘め。時として婦人會の席で之を辱かしむるが如きことさへありたりと云ふに至ては實に言語同斷沙汰の限りといふべきである尤も之等は千百中に一つもあることならんが。御國を來らせ玉へと常に禱る信徒の團體に斯の如き兆候の少しも無からんことを希望するのである。或る教會では一人の牧師が幾十年も死ぬまで教會を牧することが出來る。又或る教會は五年若くは六年を期限として牧師の任地を更迭するのもある。之は各々利害得失のあることにて是非することは出來ない。要するに牧師其人を得れば十年も尙短く。其人を得ざれば一年も尙長し牧師も信徒も基督の十字架を我身に負ひ互に忍耐し。互に寛容し。人の益を圖り人の惡きを念はず只々天國を此世に打建つるを惟努めば。蓋し天父の嘉する所と

ならん。

以上は牧師の貧き家庭を僅かに窺ふたる管見のみ。豈に敢て其の全班を盡せりと云ふを得んや。

(官省)雇吏の生活

彌生女史

有福に生活して居らるゝ方々の收入支出を公開せらるる御方はいくらもありましやう、私は近所の某省雇吏の生活を其主婦から聞きましたから、大略を發表して江湖新世帶の方々の御參考に供したいと存じます、

主人は某省の雇吏で日給被服料辨當料を合せて十五圓の收入なるが其内六圓を控除して自から貯蓄し一圓か一圓五十錢を自分の小遣金にして居ります、それですから生活費として主婦に渡すのは僅か九圓と云ふことです、これに長女が某工場より受取る收入の内八圓、次女が某工場より受取る收入の内七圓、本年高等小學を卒業したばかりで某官衙の給仕となつた長男の收入の内五圓を加へたもの總計二十九圓であります。

二十九圓の收入で夫婦と二十歳前後の女子二人十五歳と十歳の男兒都合六人の生活でありますが、これが地方ならば決して困難と云ふ生活ではなく、寧ろ餘裕のある生活でせうけれども、東京の眞中ですから隨分困難なのです、そこで今一寸支出の內譯を御目に懸けませう。

家賃四圓五十錢	米代八圓五十錢
野菜四圓	魚類三圓六十錢
湯錢七十二錢五厘	酒七十五錢
炭　一圓	薪七十錢
醤油六十錢	味噌三十錢
砂糖三十錢	鰹節二十錢
石油二十錢	新聞三十錢
長男月謝一圓(夜學)	次男月謝二十錢
紙筆墨二十錢	間食六十錢
水税十三錢五厘	

總計二十七圓八十一錢

二十九圓の收入で二十七圓八十一錢の支出と申せば、毎月一圓十九錢づゝ殘るやうに見えますが、此一圓十九錢の內に一切の臨時費が含まれて居るのです、毎月吳服屋から五圓、十圓の買物する方々は衣服を通常費として居らるゝは申す迄もなく、却て衣服を臨時費とするは道理に背いて居ると思し召さうが、貧乏な生活では如何しても衣服を通常費とすることは出來ません他の費用を通常費と致し、通常費の剩餘で衣服を拵へるのです、一圓十九錢の內に衣服も蒲團も親類其他の交際費も膳椀茶椀ランプ履物等などを補充して行く費用も含んで居ると話されては誰でも淚を溢さぬ譯に參りません、主婦が人力車に乘つたことの無いのは不思議でもありますまいが、一里二里の親類へ急用で行くにも電車にさへ乘らぬとの事ですから隨分辛らいことでせう、一番辛いのは富める親類などの婚禮とか葬儀とかに列するとき平常着の少しましぐらゐな所謂チヨクヽヽ着で出掛る事だと聞きました。

前述の通りな生活向ですが、主婦は何から何まで現金買ひにして居るさうです、長男が役所で取る辨當も其度に五錢づゝ持たせて遣るくらゐで、醬油は小買にはしませんが、毎月六十錢づゝ積んで四個月に一樽買ふので通にせずとも濟むとの事、臨時費は通常費の剩餘を以て充てると云ふは前述の通りですが、如何しても必要缺くことの出來ない物を臨時に購求しました時は其月の日々の野菜間食其他を節減してこれに充て決して來月に繰越すといふ事をしません、魚や野菜は賣に來る商人から買はず、夜店へ出掛けて手輕に買ひますから、一個月には餘程の經濟になるさうです。

それから子女の日課を申しませう、子女は却々勉強なもので、午前七時から午後六時まで工場に勤め、歸つてから十時頃まで裁縫の稽古に通ひ、休日には終日家に居て母の敎を受けるのですが、裁縫の月謝などは自分の僅かな小遣錢の內から拂ふので、履物なども母に少しも心配を掛けないといふ事です、而して僅かでも殘ればそれを銀行へ預けて置くさうです、長男は僅か

五十錢の小遣の内から幾分づゝを靴代に積んで居ります又夜は英學塾へ通ひ、毎朝出勤前によく復習して居ります。

長男が某官衙の給仕になつた時、洋服を拵へるのに父の貯金の内から借りたさうですが、月賦で返却すると云ふ約束であつたさうで、毎月五十錢づゝ返却して居るさうです、昨年主婦が半年ほども病臥したのに主人が藥代を出して與れないので、主婦は自分の從弟から若干の金を借りたのを二人の娘が殘念に思つて、自分達の年末の賞與金



秋の農家（五）

を悉皆母の從弟に返却し、前掛一つも求めなかつたとは傳へ聞いた人々誰でも泣かぬものはない位でした、嗚呼嫁入盛りの身で、日々骨身を碎くばかりに働いて嫁入仕度をするでもなく、年末賞與金で春着一枚拵へるでも無い、其父君が餘り殘酷なやうにも思はれますが、斯る家の子女こそ、後には必ず幸福の花を開き、貴重な實を結ぶのでありませう。

序に一寸申しますが、此家の父なる人は性來飲酒の悪癖があッてその爲め主婦の苦辛も屢々水泡に歸し

家計がうまく參りませんでしたが、近年子女が成長して母親の苦辛を察し大に同情して小さな口から異見をきくやうになツて追々父親の酒癖も薄らいで參ツたとの事です、斯る家の子にこそ末の幸福は宿るのです。

東北　婦人の生活

齋藤鹿山

東北といふと白川以北一帶で甚だ世界が廣くなり過ぎる故、其中の何處か一個所を選み出して、婦人の生活の狀態を御紹介いたしませう。

私の產地は秋田であるから、世界を秋田に定めますが、併し秋田といつたところが南北七十里東西二十里餘もある廣い地方であるので、南の端と北の端とは、著しく風俗、習慣を異にしてゐる又言葉つかひさへも全く異つてるといふ事を御承知願ひたい。

「エヅメ」

この地方で嬰兒が產れると、產婆が來て取揚げる、產湯を使はせる、胞衣の始末を附ける、なにやかやの事は、つまり何處も大同小異で、別段取立て、書く程の價も無い事であるが、玆に一ツ他と異るだらうと思ふのは、產れた儘の嬰兒を「エヅメ」といふものに容れる事である、其「エヅメ」といふものは縱が曲尺で貳尺三四寸に橫が貳尺內外で高さが一尺二三寸斗りある桶で前面の方は一二寸斗り低く造つてあつて、前と後とに各麻繩の曳手を着けてあるところのツマリ搖籃である、又所によつては冬分は飯鉢を納れて置く櫃入れの樣な藁細工のもあるが、寒村僻邑といふ方の向は總て藁のである樣だ、其所で私が一寸思ふに其「エヅメ」といふ言葉は、元はイヅメで、其イヅメは飯詰といふのから轉化したのでは無からうか知らんと、斯う思ふそれで、元が皆藁細工であつたのが、段々生活の度が進み次第、藁ではケバが散ばつて可ないといふところから後に桶に改造したのであらうと。

底で其『エヅメ』に嬰兒を寢かすには、底へ灰を布いて其上に藁屑を納れ、其上に『モク』といふものを納れるのであるが、其藁屑と『モク』とは言ふまでもなく防寒用で、底へ布いた灰は、桶底へ尿の滲るのを防ぐ用意であるところで、其『モク』といふのは一體何だとの御疑問が起るでせうが、是は八郎湖に產する一種の藻を乾燥したもので、磯臭い樣な何厭な臭氣



秋の農家（六）

はあるけれども、防寒の効に於ては毛皮にも劣らぬ程である、それ故下層の人々は此『モク』を編んで蒲團を造り、之れを寢床として居る向も少なからずある、又男鹿地方から年年早春の漁季に北海道へ出稼ぎをする人夫等は皆此『モク』蒲團を持て行くので、貧民は此『モク』の爲めに何樣に助かるか知れぬ。

話題は『モク』の爲めに横道に入つて仕舞つたが、それで嬰兒をば幅の狹い長い蒲團に包ん

で、顔斗り出してシャンと其「エヅメ」へ入れて置て、啼出しでもすると、桶の底へ棒か何かを突込んで、左右に揺り動かして居るといふ仕誼だ、秋田人の骨格に後頭部の張り出した所謂才槌頭の多いのは、赤兒の時に、此「エヅメ」の中へ仰反けに入れられて、項のところを押えられた結果だといふ説もあるが、或は然うかも知れない。

「モッペ」

冬季になると防寒の必要から中流以下の婦人は、「モッペ」といふ袴の一種で裾口を狹窄たのを着るのですが地質は一般に紺地木綿を用ゐるのですが、仕立樣にもマチを高くして、裾口の方へ自然と窄くしたのと、それからマチを低くして膝から下を急に細く仕立たのもある、是は角力の呼出奴が着る立附袴に似て居るので慣れた眼からは別段不思議にも見えぬなれども、初めて見た人は、何とも言へぬ異樣の感に打たれるといふ事だ、それで是はモッペといふ地方もあり、モックラと稱してる地方もあり、秋田市ではデタチと稱へて居る、米澤にはモンペといふのがあつて男女に限らず之を着るさうであるが、それは紺地でなく、必ず縞物で造つて腰板をつけてあるし、且つ仕立方も多少違つてる樣です。

個樣な變挺なものを着て居ながら、それでも何處かに形の好いとか好くないとかいふところがあると見えて誰さんのモッペは形か好いから、今度借りて模型を取つて置かうなんて事を言つて居る、少い女なんぞは、其鯉口のところへ赤いメリヤスか何ぞの線を一寸取つて着いてるのも少からず見える、是は勿論餘程めかしたつもりで。

尤、此「モッペ」も強ち女にのみ限るといふでは無く、商家の丁稚なんぞは、冬になると大方是れを着いて居る。

風呂布

風呂布には別に不思議も無い、北海道の果から台灣の端まで、物を包むに用ゐるが風呂布。

けれども、玆にいふ風呂布は、それとは違つて、女が

頭を包む爲めの風呂布なのだ、尤是は中以下の野良稼ぎをする女の日除けに被るので、地質は木綿の紺飛白又は紺絞りを用ゐ幅は三布で中々の大風呂布だ、それで其被り樣はといふと、其大幅のものを對角線に二ツ折とし、或はお高祖頭巾の樣に被ぶるのもあれば、又すツと乙被りにするのもあるが、冬ならば防寒の爲めといふ言譯けも有ふけれど、夏の炎天に身體の皮の要ない程の日中、平氣で此風呂布を被ぶつて野良仕事をしてるなんぞは、中々御苦勞千萬の次第であるのに、御丁寧にも其上に又菅笠をかぶるのだ、是などは隨分異裝ではある樣なれども、畑の中でせつせと稼いで居る風呂布姿にも野趣捨て難きところがあるなどといつてる者もあるから世界だ、併し世は廣し人は多し、服裝の千差萬別數え盡すべくもあらずだから、中流、上流の風俗に見慣れて、此風呂布姿の野婦を笑ふのは五十步にして百步を笑ふの類かも知れぬ。



秋の農家（七）

「ハッピ」

「ハッピ」は法被の事か如何か判らぬが、中年以上の女は「ハッピ」といふものを着る、是は袖無羽織でツマリ

ちやん〳〵であるが、是には絹物を用ゐ、黒八の襟をかけるが、中には色々の小切れを龜甲とか、松皮菱とかに縫合せて拵えたのも見える、勿論餘所行きの着物ではない家庭に在つての一寸とした防寒服である、田舍では近所隣りが親戚同樣に親しいから、此『ハッピ』姿で以て隣や向へチョコ〳〵遊びに行くなども珍しからぬことだ。

手拭

手拭は、手を拭ぐべき筈のものを、さは無くて、佛壇を拜むとき、お寺詣りの時に婆さん連中はよく是を被るのだが、是が習慣となつて、素頭で人樣の前へ出るは不調法であるかの如くに心得、婚禮や法事の席へは取つて置きの新らしい手拭を被つて坐はるのを禮と心得て居る始末だが、或人は斯ういふ事をいつた、女といふものは罪障が深く、凡人の眼からこそは見えね、佛樣が御覽遊ばすと、頭に角が生えてるから、それで其角を隱す爲めに手拭を被ぶるのだと、蓋し人の群るところは埃が立つて髮が汚れるから、それを防ぐ爲めに手拭を被ぶつたのが習慣となつて、了には却つて禮式の一端かに心得る樣な事になつたのでもあらうか、兎に角可笑しい事だ。

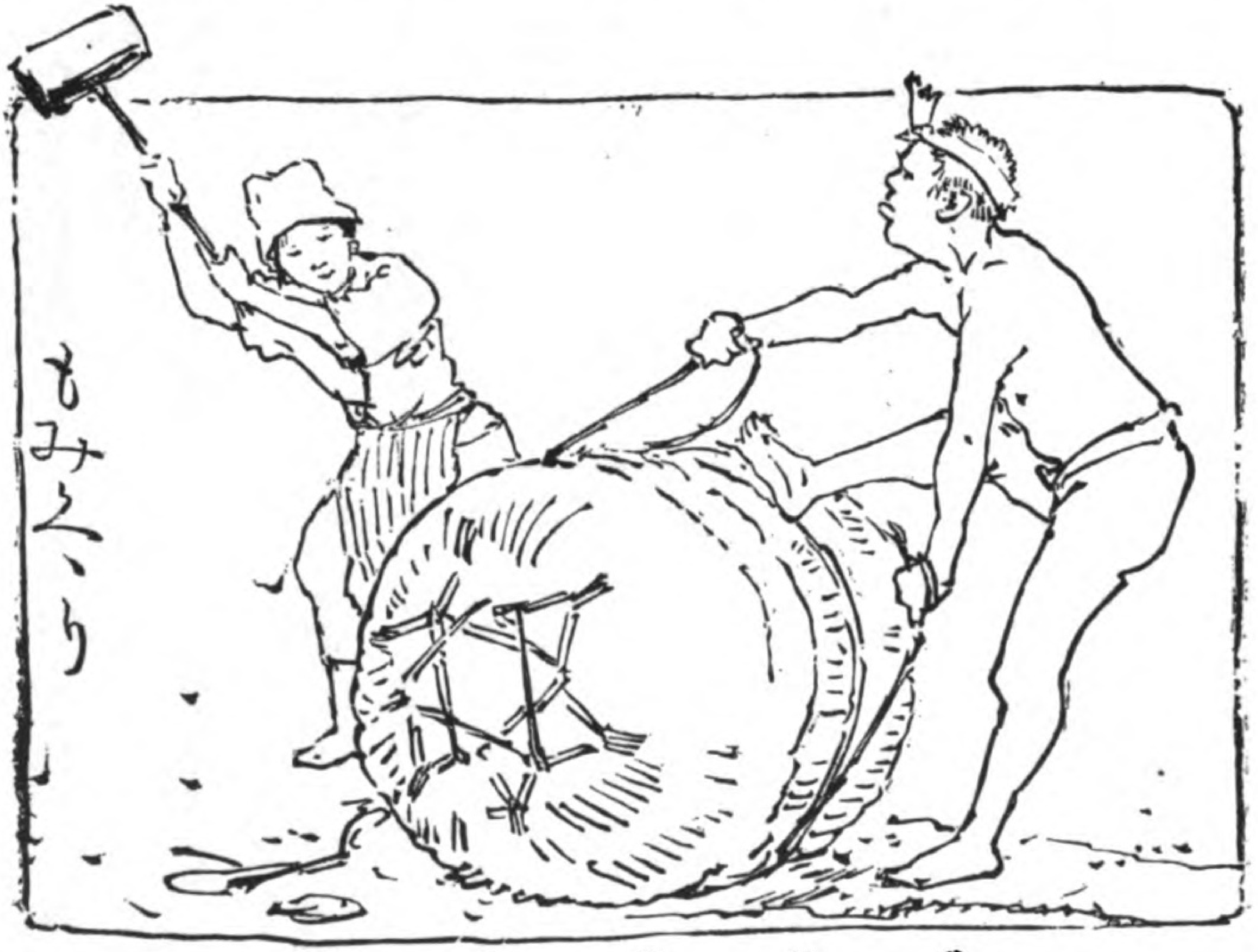
裾端折

女が十七八になると、着物の裾を端折る習ひがある、尤其端折るのは上衣の袷なり綿入なりが一枚丈で其下の方はゾロリと下して居る、それであるから、上着、下着とは言はずに、上張、不端折といふてる、モッペなども隨分異樣の打扮ではあるが、此裾を端折る風は他地方人の眼からは尙一層異樣に見えるといふことである、總て物事は必要によつて起り、又改まつても行くべき筈であるとして見れば、此裾端折りの風は抑何たる必要より起つた事であらうか、マサカ容儀を整える意味合からの端折りでもあるまい、處が習慣の目といふものは不思議なもので、ゾロリ着流して以て庖厨の立働きをして居ると『オヤ〳〵あの人はビシヨ無いこと……』といふ、ビシヨ無いとは、だらしがないの意である、此風は其地方と雖も、禮裝として認めて居

らぬことは言ふまでも無いけれども、佛參や其他餘所行きにも、此端折姿へ絆纏を引掛け、前垂を〆めて、中には例の手拭を姉樣被りにしてソロリ〳〵押出すのであるが、其前垂も亦、餘り氣の利いたのでなく幅一布半であつて、双子縞もあれば、紬縞、絲織等種々である。

『ボッツ』

『ボッツ』とは蓋し帽子の轉訛であらうか、是は何の譯は無い、着物の片袖を千切ッた樣な仕立で、極めて單純なものである、袖に似た形である爲めでもあらうが



秋の農家（八）

袖『ボッツ』ともいふ、是も冬季に女の子供が用ゐる防寒用の被り物で綿入になつて居るから、又綿入『ボッツ』ともいふ、双方の耳のあたりのところから、幅凡二寸斗りの紐を附けて、前へ∪字形に垂れて居る、此紐は、年齢に隨つて、赤、紫、紺青等樣々のメリンスで『ボッツ』の方は飛白の木綿もあれば、縞のもある裏は大抵緋金巾などである、女の子供が冬の日外へ出て、雪をいぢつて遊ぶ時などは必ず此『ボッツ』を被ぶる、妙齢の女

は近頃餘り被らぬ様だが、婆さんなどの是を被つてるのは折々目撃される、ツマリ是は、防寒用としてのみの被り物であつて、色氣の乏しいところからでもあらう。

脚絆

此脚絆は旅行用の脚絆ではなく、是も矢張り防寒具として婦人の用ゐる行燈脚絆である、十二月の中頃から翌年三月の中頃まで三ヶ月間内外も丸で雪中に封じ込められて居る寒い地方の事であるから、外見も絲瓜も要る譯のものでない、只寒くさへ無ければそれでよいとはいふ様なもの丶、女たる者が、行燈脚絆を穿いた有様と來てからは、隨分色消しの沙汰である、それでも只の良家の女なら兎に角、花と飾り色を競ふ藝者が之を穿くに到つては、可なり興の醒める沙汰である、是は裾すべりのよい様に甲斐絹を表にして裏はフランネルで作つたのが多い、しやなり／＼と押出す裾の下からチイヨ／＼と脚絆が顔を出す様は頗る異體である

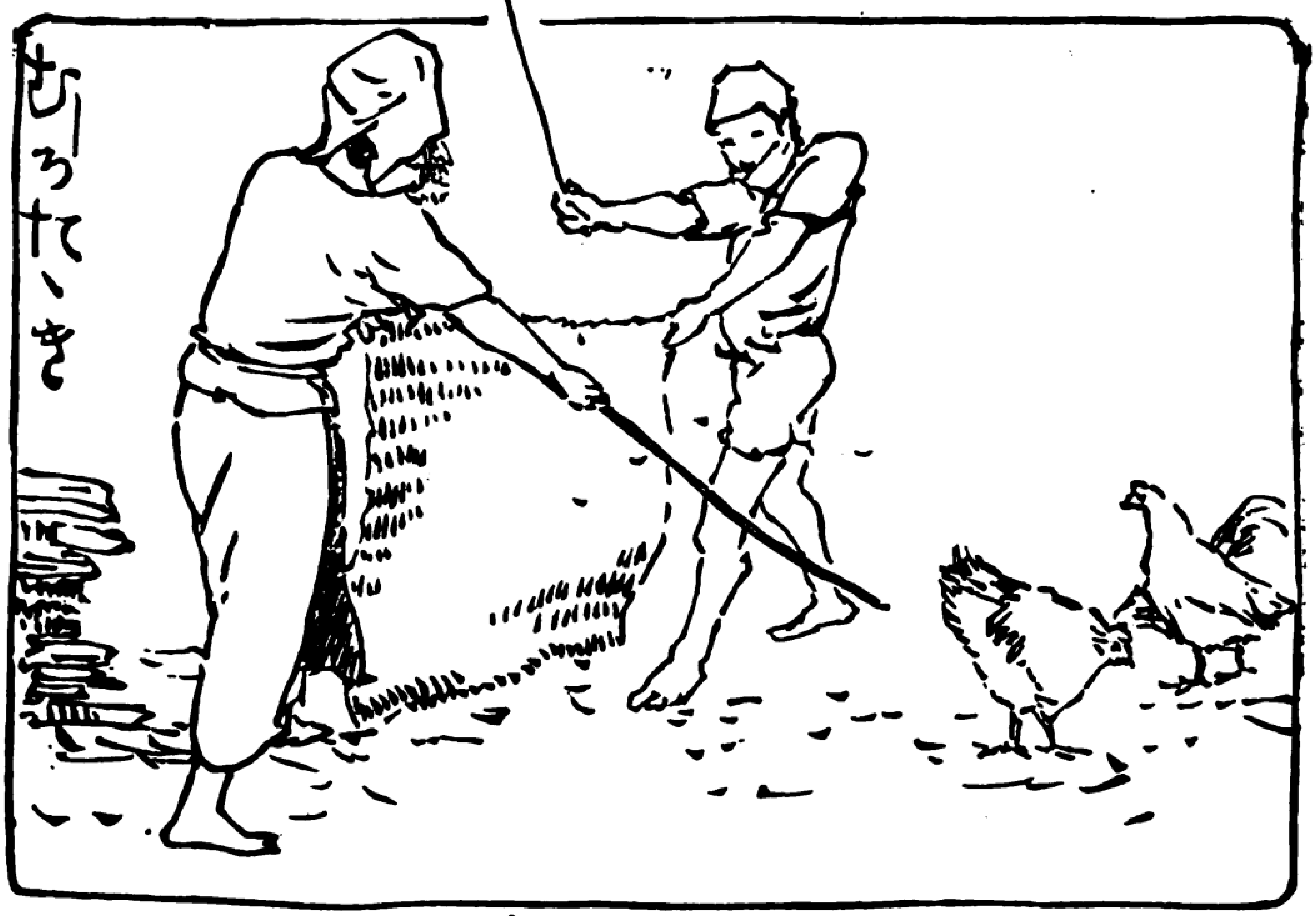
「ホ　ス」

「ホス」、是も脚絆の一種である、それで「ホス」といふのは元來アイヌ語で、つまりアイヌ人の穿く脚絆であるが、沿海の漁民は年々北海道の漁場へ出稼して、歸るときにアイヌ式の「ホス」を穿いて來たのが、ツマリ流行の基となつて今は漁民の女までが用ゐる様になつたのであるが、一體アイヌ人の眞似をするなんかは、餘り有難くも無い次第である、「ホス」の形は普通の脚絆と大差なけれども、刺子にしたり、又はアイヌ式の縫物をしたりしてあるところが普通のと違つてるといふまでの事で、此流行は、漁民の女から、段々農民にまで及ぼして、今は百姓のおねえが野良仕事に出るのに「ホス」を穿いて行く様な譯になつた。

以上は重に、衣服に就いて他に異れる點を四ッ五ッ擧げて見た丈けの事であるが、其外冠婚喪祭等の慣例儀式から、盆、正月、節句等の行事の他に異れる珍らしき事柄も、隨分多いので、一々枚擧した日には際限もないから、一先是位にして切揚げる事とするが、此記錄の結末として

男禮

の事を書いて見やう、正月は、十一日迄を大正月と稱えて、是は男の正月、十五日から二十日迄を小正月と稱て是は女の正月として置くが、此正月になると、新婚の夫は、男禮と稱して新婚と同行にて新婚の里へ年始に行く事になつて居つて其相携へての道行が頗る面白い、尤も是は中等以下の農民の事であるが新婚は當日今日を晴と裝ひを凝し、取て置きの紅であるの白粉であるの着物は是であるあれであるといふ騷で、扮裝ひ新に出來上りたる姿を見



秋の農家（九）

てあれば、塗たりな〳〵、嚔をすれば額のあたりから龜烈して落さうな白粉、抹たりな〳〵、上下の唇は笹綠をなす紅の色、左樣かと思へば頸も喉も眞黑けの木地を現し、何の事は無い雨晒のおかめの假面を着けたかと斗り、產れて以來洗つた事の無い髮は、母から讓られの柴舟、登美香なんどを粘けて取上げても、臭い香は中々失せもやらず、烏骨雞が雨に濡れた樣な、鬢髱の取上げ樣、衣裳の着こなしも、之に準じて、仔細らしく衣紋を退けても、坐れば膝の遠慮もなくはみ

出す、それで兎に角準備も出來、手土産物萬端の支度も總て殘る方なく整ふと、新郎は股引脚袢に草鞋の緒をしめ、鞍の上に飾布團を布きたる馬を曳き出し、新婦は、やがて之に打乘り、新郎は、いとしの妻が爲めに、馬子の勢を取つて、ハイ〱と曳き出すのである青毛が面綱に懸けたる八房の鈴は、首を振るごとにガラツン、ゴロツンと響いて、見返れば今出た我村は次第に霞に薄らぎ、杜の梢の其上には大き小さき紙鳶の高く低く空にかゝりて、一トしきりの追風は、いとしの妻が頰のあたりを掠め來つてなまめかしき、白粉の香を後から新郎へ浴せかけるであらう。

馬曳いて行く新郎を田郞作といはば言へ、馬に騎つて居る新婦の、芝居で見る田舍娘をソツクリであらうとも、双方の間には心を隔つる雲も無く、平和の馬は平和の人を騎せて平和の人に曳かれて行くのである。

明月

曉未だ全く霽れず、午に至つて天氣漸く佳、濕度亦た人をして單衣に堪へしむ、夜に入れば明月天に在り、皎々千里無月に泣きし中秋の空、晴れて嬉しき今宵かな、と諸の聲誰の家より來る、まど居して酒打ち飲む家もありけり

琴の指南所

謂々生

▲琴の株

◎こゝに琴の指南所といふのは一絃琴以下すべての琴曲を敎へる場所ではない、花といへば春、月といへば秋に限れる如く、琴といへば箏と思はるゝやうになつて居る所より『箏の』とすべきを殊更に『琴の』としたのである、云ふまでもなく十三筋のである。

◎一絃琴（即ち須磨）二絃琴（即ち八雲）の指南所は草を分けて搜せば、少々はないでもあるまいが、七絃琴などゝ來ては、指南所は扨置き、其曲をすら、萬人中一人も、聞いた事はない位であらう、即ち箏は琴の株を九分九厘奪つたものと見て差支ない。

▲遊藝屋の等級

◎琴の指南所は、遊藝稽古屋の一つで、もしこれ等稽古屋に等級があるものとすれば、上等に屬すべきもの

である、この等級は、學ぶ人の身分から割出したもので、其他に甲乙のある筈はない。



秋の農家（十）

◎琴は其音が單調で、兎も角も厭味がなく、其形と、之に對した姿がよいので、上流社會に用ゐられ、先づ九尺二間といふ程でなくとも、小さな家では不釣合の樂器のやうに思はれ、且は三味線のやうに手輕に取扱へぬものであるから、下層社會には遠けられるやうになつて、全く三味線を學ぶものとは正反對になつて居るから、琴は中流以上に玩ばれ、其の指南所の門戸が華やかになる所以である。

▲琴の果報

◎三味線は唱歌（淨瑠理等をも含む）が主になつて居るが、琴は唱歌が景物になつて居る、故に三味線の稽古所には、唱歌ばかりを習ひに行くもの半を越ゆれど、琴の指南所に、唱歌ばかりを習ひに行くものは、まづ一人もないと云うて差支ない。

◎素より琴は三味線に比較して、音樂上の價値は到底同日の論ではないが、中流以上の人に玩ばるゝ果報を持つて居るから、この指南をする人まで、三味線の師匠より高くとまッて居る。

▲一種の對客術

◎三味線の師匠は、習ひに來るものより、遊びに來るものゝ方を、經濟上歡迎せねばならぬ狀態であるから、一種の對客術を心得ねばならぬ、琴の方は、お孃樣九分を相手であるから、木へ竹を接いだやうなお世辭の入ることもない。

◎また三味線の方は、習ふ側の子供などは、看板へ對して申譯、それでなくば弟子客を呼ぶ看板として、多くは遊びに來る弟子を相手にし、淫聲鄭聲に夜を更すより、午前十一時立膝つきの楊枝くはへ、甚だ自墮落な風俗をつくるのであるが、琴の方は、お孃樣連が早朝より峰の松風を演じて、日沒以前に稽古を休むのであるから、見るにたへぬなどゝ云ふ事は、一度も見た事はない、以上が兩稽古所の十中九と見て大なる違算はあるまい。

▲世辭掛

◎敎へさへすればよい、覺えさへすればよいものでもないと見えて、兩方とも相當にお世辭が入る、餘計に心附が欲しいのと、餘計に習はせ遊ばせて貰ひたいの競爭である、併し世渡りの上より弱味は敎へる方にあり、勢ひ味方がほしくなる、そこで弟子客に茶を出すものを世辭掛とするのであるが、三味線の方は若いのでなければ行かず、琴の方はお婆アさんで事が足る、同じ音樂の稽古所でも、琴の指南にはこれ等の心配は極めて少いやうである。

▲因緣は盲目

◎藝が身を助けるといふ不幸は、三味線の師匠に多く身を助けるに足らぬ藝を歎ずるは琴の師匠に多い。

◎琴の師匠となれる人は、幼少よりの志願が多く、其因緣は盲目より得たので、按摩になるよりはと思付いたのが始まりである。

▲習ふと聞せる

◎琴の稽古をするに、多くの師匠は男の弟子を取らぬ
これは女の弟子が多いので、其親達に對しての政略で
これを天秤にかけて算盤の取れる弟子は、男にても差
支ない。

◎月謝は五拾錢より壹圓、束脩もこれと同じ位の金子
に、菓子折の一つも添へる、少し姿婆氣のある人は、
相弟子となるべき人々へ、花簪其外思ひ付の品を、
稽古初の印にとて披露する。

◎たゞ習ふ丈ならば、月謝の外に、月浚と稱する師匠
の餘祿仕事のお附合に、月謝相當の出金をするのみに
て、大した入費を要せぬのである。

◎習ふより聞かせるになつて、師匠の思ふ壺へ這入る
のである、藝を聞かせたい弟子客がなければ、師匠も
あまりがんばしくないのである。

▲臨時收入の一

◎月浚いといふのは、毎月一回弟子客を集めて、習い
得たものを復習するのである、否復習といふよりは、
復習したのを發表するのである。

◎誰も同じことで、同額の金を出すにも、二度に三度
に分ける方がよいと見えて、五十錢の月謝に、五十錢
の月浚料とすれば、初めより月謝一圓として、月浚は
師匠の義務とした方がよからうと思はるゝのであるが
少しでも濟崩しにしたいのが多くの人情らしいのであ
る。

◎この外に二季浚ひ、彈初め、彈終ひ（納會といふ）
などの名目をつけて、弟子筋の甲乙により、自宅又は
貸席料理屋を借り、師匠は臨時の收入が得られる。

▲臨時收入の二

◎月謝外の收入は月浚ひ、これを大仕掛にした彈初め
彈終ひ、二季浚ひであるが、其外に二年か三年に一度
大浚ひと稱するものを催すのである、この時に於て習
ふものより、聞かせたい弟子客が入用なのである。

◎師匠は諸種の名目のもとに弟子の演藝會を催し、高
き手拭料辨當料を取りたるに足れりとせず、浚ひと稱
するものゝ大小により、同業者を呼集めて、聞かせた
き弟子客に合奏させ、それに對する報酬を同業者相互

の餘祿として、假に十人の同業者を招きて、之に滿足せしむる報酬を、聞かせたき弟子客の藝より拂ひ得るとせば、十人の同業者よりもかゝる催しに招かれて、少からず袂を膨らせて歸るのである。

▲臨時收入の三

◎琴の師匠は諸種の臨時所得の外に、傳授の等級をつけて、一昇階何程と徵收する。

◎その階級は、初傳、中傳、奥許、皆傳といふ風に出來て、別に變つた敎へやうをするでもなきに、六段は初傳を取りしものでなければ、また四季の友は中傳、松竹梅は奥許の後でなくばなどゝ云ひて、藝は上達しても、其傳を受けねば敎へず、其傳を受くるには階級によつて、少からぬ金を徵取せらるゝのである。

▲收入の號外

◎琴の師匠は、上品に藝を敎へると云ふので、上等の家庭へ招かれる、毎日習ひに來て自分の琴の糸を耗すに引替へて、一週に一度か十日に二度位で、普通のに幾倍の報酬を得、これ等の人々を、いざ鎌倉といふ時の楯とする、誠に虫のよい考を持つものである。

◎いざ鎌倉といふのは、殆んど定期の大浚ひで、此時に後幕天幕等の相談を持込み、當日の會費以外に少からぬ金を徵取する、これは師匠を自宅へ招くほどの弟子客あらずとも、琴の稽古でもさせて、稽古所に巾を利かせたいと思はゞ、それ等の出費も覺悟せねばならぬ、これは師匠の號外收入で、其多寡は師匠の甲乙によるので……、その甲乙とは、藝の善惡によるべきであるが、藝はそれ程でなくとも、不思議によい弟子客を得るのがある。

▲尺八屋との聯絡

◎琴屋の演藝會には、三曲合奏で賑やかにする、三味線は琴の師匠で出來ぬものもないから、師匠自身、または同業者の加勢を待てばよいのであるが、尺八は尺八の師匠連を味方にして置かねばならぬ、而己ならず尺八の師匠は琴の師匠に引立られねば、過半の收入は殺がれるばかりでなく、今のやうに繁昌はせぬのである、自然進んで味方になりに行く。

◎琴の稽古所に女の弟子客が多い如く、尺八の稽古所には男の弟子客が多い、尺八を稽古するは、尺八を吹くを樂むのでなくて、琴といふ相方を求め得るを樂むのが多いのである、これが尺八師匠の繁昌する所以である。

▲内弟子

◎何につけても金の世の中で、盲人も身分のよい方には少くて、藥價の餘裕なき貧家に多い、盲人の藝は、今ではそれ等を敎育する學校も出來たのであるが、以前は、按摩になるか、琴三味線の師匠になるかで、そのうち心掛のよいと云ふのが、琴の師匠を志願する、貧家の盲兒が、贅澤藝となつて居る、琴の師匠となるべく先づ其藝を覺えねばならぬのであるから、これは容易なことではない。

◎それ相當に手蔓を求めて、無月謝で弟子入をする、通うて習ふ位では進歩が遲いと云ふので、内弟子となる、無論食はして貰ふ、して見ると、この内弟子を敎へる師匠は慈善に富んで居るやうに聞ゆるが、なかなかさうではない、それには相當以上の義務を負はせて算盤に乘る仕掛になつて居る。

◎斯うなれば、師弟といふより主從になつたのであるから、盲目師匠につかはるゝ盲目弟子、其の見當の違ふこと殆んど滑稽に類する事あり、目顏で知らすといふ事、出來ぬ人達であるから、感じた事一々口から出る、自分の目の見えぬ所より、人目も何もあつたものでない、師匠はガミ〳〵怒鳴る、弟子もブツ〳〵云ふその間に眞似ほどの稽古をして、師匠は金で敎へる弟子客以上に覺えねば滿足せぬのである、これは實に辛い、浮世の辛酸は多くこのあたりに見るのである。

◎盲人同士の師弟、たゞ音を探るのみで、姿勢などは自然頓着せられぬので、初めて琴にかぢり付いた形などは、甚だ格構のよいものではない、それから物に成るまでの苦勞は一通りや二通りでなく、漸く物になりさうになると、師匠も稽古の手助けや、臨時收入の道を得るやうになるのであるから、はじめて心をこめて稽古をする、而して弟子の藝が一人前になつた所で、

これ迄の報酬として、更に幾年かを師匠の家に小さくなつて、師匠に餘計の收入をさせねばならぬ、また弟子自身も、さア藝が出來たからとて、すぐに格子戸が張れるものでないから、師匠に對する義務年間に、其の準備をするので、其の準備のよしあしで、他日の繁昌が略定まるのである、

▲家元と名取

◎普通遊藝の師匠となるには、夫々流派家元の門弟となり、家元より名を貰ひ、即ち名取といふものになる、琴の方では名を貰ふとは、少いが、家元と普通師匠の、關係にはすこしもかはりはない、今の所琴の流派は生田、山田の二つであるが、東京にはその氣風に合はして開かれたる山田流が多い、其頭領株は山勢、山登、中の島、山喜、櫛田等で、山田流の琴の師匠にこの五家の中の門人と稱せざるものはない、例へば山勢の門人に小山といふものがあり、その小山の取立になつた師匠は、看板をかけるに山勢の門人といふことになる、大師匠なるものは家元で、普通の師匠は家元から見ると門人といふことになる、家元は一つの株で前に述べた傳授料の如きものを、師匠が取立てる時には、其免狀は家元の名によつて出され、家元に其の幾分を納めるのである。

▲月謝に就て

◎一體に遊藝師匠が、種々の方策をめぐらして弟子客から屢出金せしむるは、要するに藝人となれば小綺麗な扮裝もせねばならず、隨つて入費も少からぬのであるに、其の月謝なるものがあまり廉であるから、生計上餘儀なくせられる、さればといひて、他の臨時收入に屬するものを、月謝に書入れることになれば、三分の一の弟子客もつかぬから仕方がない。

この以上記する所の外は、ある一部の秘事に立入らねばならぬを以て、女學生諸君の見らるゝ雜誌なれば、これにて態と筆を洗うことにした。

品質の長く持つもの

寄宿舍の賄方「前の度に買つたあの黑いメメ子、彼を又もう少し下さいよ」
商人「黑いのに何で御入り用ですか」
賄方「長く持つから子」

日　常　の　心　得（日英對譯）

Don't take any hard exercise or reading within half an hour before and after diet. Take a rest quiet, but avoid a slumber.

食事の前後凡そ三十分間は激しき運動又は讀書をなすべからず、靜かに休息すべし、されど眠に就くはよろしからず。

Exercise 運動。　Slumber 睡眠、假睡。

Take bath often, and keep your body clean.

時々入浴して身體を清潔におしなさい。

Clean 清潔なる。

Don't eat any extra food except diet.

間食若しくは買食をしてはなりません。

Extra 外の、別の。　Except diet 常食の外に。

Don't take water at rendom, or wantonly.

生水を妄に飲むではいけません。

Rendom 放縱、放まゝに。　Wantonly 過分に。

Keep your mouth shut, breathe through your nostrils.

常に口を閉ぢ呼吸は鼻にてすべし。

Breathe 呼吸する、生活する。

He fell sick at school, and is now in bed.

彼の人は學校で病氣に罹り今床に就て居ります。

I have been gradually getting better since.

病氣が段々治り始めました。

Since 爾來、爾後。

I want you to feel my pulse.

私の脈を見ていたゞきたい。

Pulse 脈搏。

I have taken a cold.

僕は風を引きました。

I am very sorry to hear it.

それは嘸御難儀で御座りませう。





支那

史上の婦人（上）

大町桂月

●支那歴史上の婦人にて、氣の毒なるは、西施也。呉王の心をとらかさむとて、越王之を献ず。呉王果して其色にまよひて、國を亡ぼせり。越王、また取りて其宮に入れたり。かくては、また國を亡ぼさむとて、范蠡之をつれゆきて、湖水に沈めたりき。東洋にては女子が男子の玩弄物となること久し。政略上にも利用せらる、西施の如きは、即ち是也。悲惨なる哉。詩人、范蠡をあざけりて曰く、

西施若解亡呉國、越國亡時又是誰

●西施は、絶世の美人也。心配事ありて、顔をしかめけるに、その美、言ふべからず。醜女之にならひて顔をしかめけるに、醜愈醜也。西施の顰に倣ふといふ故事、之より出でたり。西洋の女の笑顔の寫眞多けれど、やはり美也。日本の女、その眞似して、笑つて寫眞をとるものあれど、そは所謂西施の顰に倣ふものなるべし。

●西施にもまさりて、氣の毒なるは、王昭君也。漢の元帝の時の宮女也。後宮に宮女多きことなれば、天子一々見ること能はず。今日ならば、寫眞にとるべき處、古は寫眞なければ、畫工に寫生させて、天子之を御覽になり、御氣にかなひたるを、近く侍らせければ、宮女各畫工に賄賂を贈りて、よくかいてもらはむとせしが、王昭君は、賄賂をおくらざりければ、素顔よりも惡くかゝれたり。匈奴の王、漢と和睦して入朝し、美女を得て、妻とせむことを乞ふ。餘り美なるは惜しく、さればとて、醜なるも不可也。王昭君、終にその選に中りて、匈奴王の妻となりぬ。匈奴王歸國

せむとするに臨み、二人にて朝廷にいとまごひにゆく。この時、元帝、はじめて王昭君を見けるに、實に當時肩を比すべきものなき美人也。啻に美顏なるのみならず擧動優美に、辭令も巧にして才色兼備す。元帝大に惜めど、今更せん方なし。悉く畫工を殺せり。昭君、胡地にゆきても、漢を慕うて止まず。胡地は沙原のみなるが、昭君の死後。その墓にのみ靑草生ひたり。稱して靑塚といふ。後世の詩人、いたく之を悲み、明妃曲とて、昭君の事を咏せる詩、頗る多し。白樂天、昭君が漢の使者にことづてするに托して、あはれにも昭君の心を咏じて曰く、

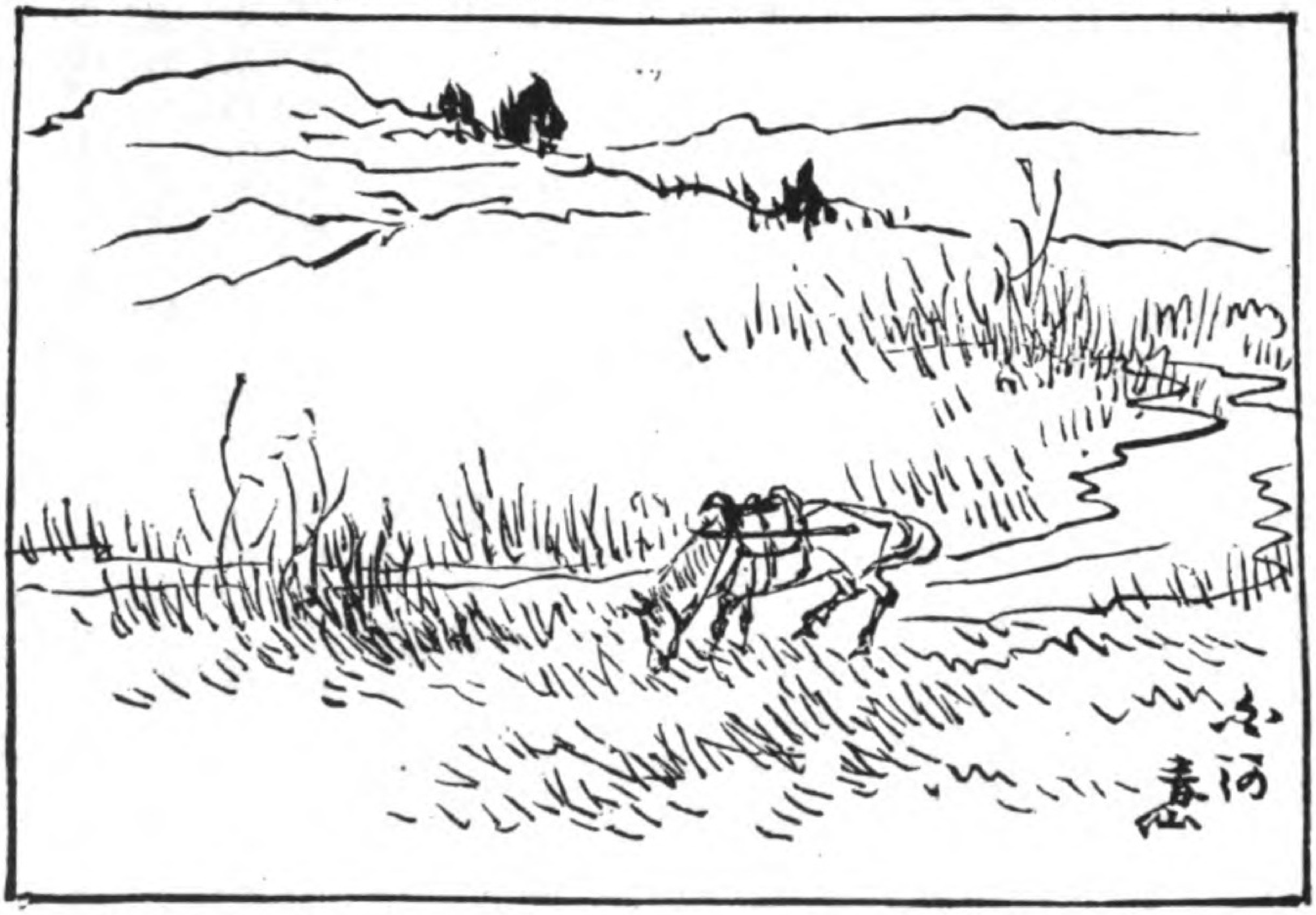
君王若問ニ妾顏色一、莫レ道不レ如ニ漢宮時一、

●支那にて、美人として有名なるは、西施、王昭君の外、趙飛燕、二喬、陰麗華、楊貴妃など也。醜女として有名なるは、宿瘤、無鹽、孟光など也。

●趙飛燕は、漢の成帝の皇后也。李白が楊貴妃を咏ずる詩の中に「借問漢宮誰得レ似、可憐飛燕倚ニ新粧一」とあるもの、是也。趙瘦楊肥の語あり。楊貴妃は體ふとり、飛燕は瘦せたり。體輕く、腰弱く、行步進退をよくせり。飛燕とは、その身の輕きより名づけたり。其妹も召されて、昭儀となり、姉と共に帝の寵をうけたり。妹の美は、少し姉に劣れども、弱骨豐肌、笑語に巧也。二人とも、色、紅玉の如く、當時またとなき美人なりき。飛燕、顏は美なれど、心は美ならず。或時、許皇后と班倢伃とが、帝及び後宮を咒咀すと讒言す。帝、班女を拷問しけるが、之に對する班女の言こそ面白かりけれ。「死生は命也。富貴は天也。善をなしたればとて、鬼神必ずしも之に福をさづけ給ふとも定まらず。邪をなして、之に祈るは、わけの分からぬと也。鬼神もし知るあらば、君を咒咀するやうな惡人の訴を聽くべくもあらず。もし知るなくば、訴ふといへども、何等の益もなきなり」迷信の外に超脫して、達人の俤あり。帝も感服して、いたく憐憫せり。後世班女の恨、班女の秋扇など云ひて、夫の愛の衰へたるとの故事となりたるは、此女の事也。愛の衰へたるは此女のみならず、飛燕も後には、少し衰へて、その妹

の趙昭儀のみが愛を專らにせり帝、俄に崩御す。或は卒中なるべし。されど、昭儀が害せしならむとの嫌疑をうけて、昭儀終に自殺せり。最も愛せられしもの、最も悲慘なる目にあへり。世の中は、何が幸やら、不幸やら。

●二喬とは、喬氏の姉妹也。共に美也。曹操ひそかに未來の妻となさむと思ひしが、一は呉の君に嫁し、一はその大將に嫁せり。杜牧咏じて曰く、『東風不與周郎便、銅雀春深鎖二喬。』赤壁の戰、東風烈しくして、火攻するに便なりければ呉の大將周瑜が大勝を得たりしかど、もし然らざりしならば、



呉敗れて曹操は、二喬を銅雀臺につれゆきしならむとの意也。後漢の光武皇帝も、曹操が二喬を得むと思ひし如く、陰麗華を得むと思へり。曰く、『仕官當作執金吾、娶妻當得陰麗華』。然るに、執金吾どころか天子となり、陰麗華をも得たりき。

●楊貴妃は、白樂天の長恨歌によりて殊に有名也。長恨歌にて見れば、楊貴妃はいかにもかはいさうなれど、實際は、顏こそ美なれ、其行は醜也。もと唐の玄宗の子の壽王の妃なりしが當時比類なき美人なりければ、玄宗大に喜びて、之を奪へり。玄宗も玄宗なれば、楊貴妃も楊

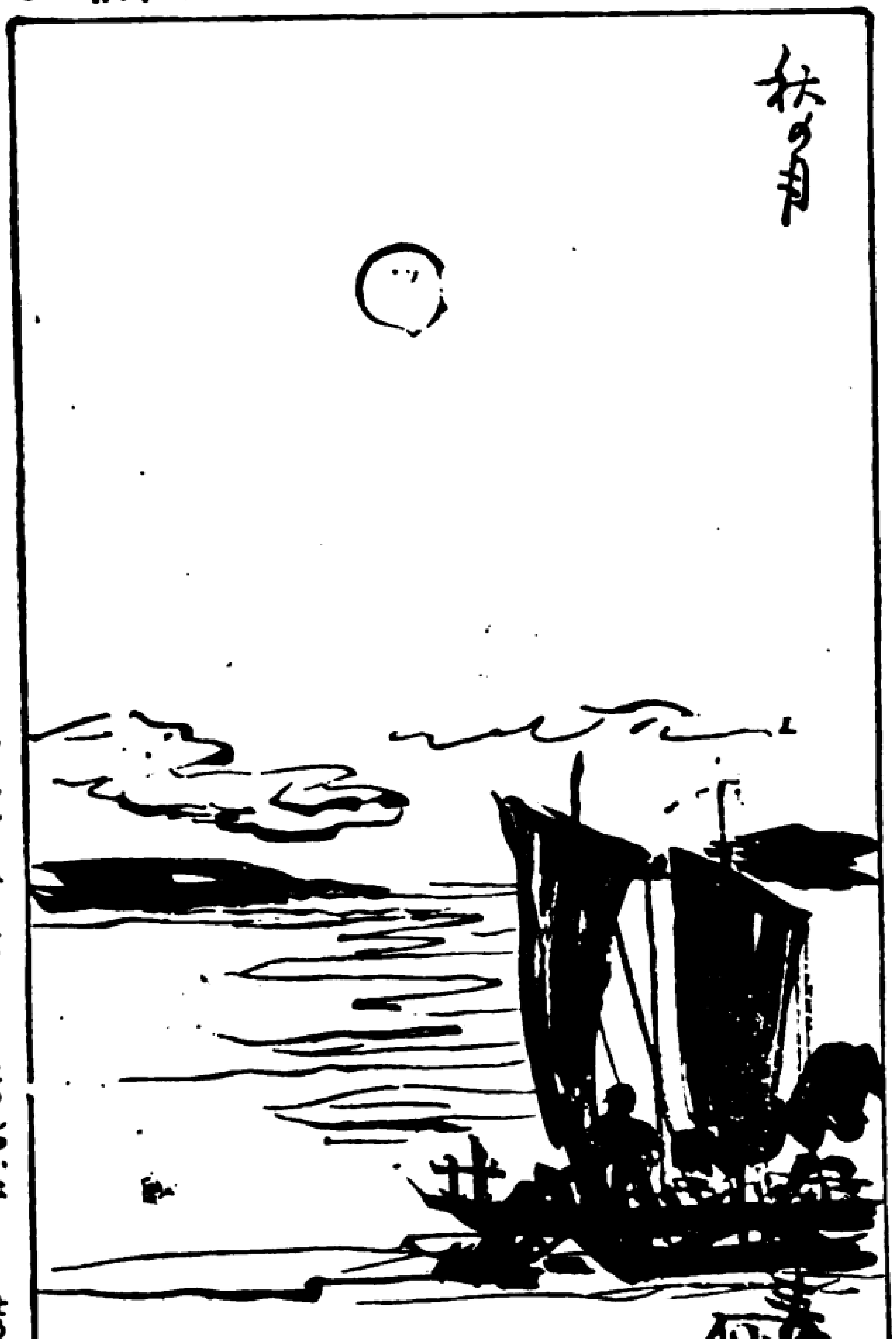
貴妃なり。壽王は太子ならねば、一生うかぶ瀬なしと思ひしならん。父子二代に事ふるは、よく〳〵の女也かゝれば年齢は、親子ほどの相違あり。玄宗の晩年、安祿山と醜聞あり。祿山叛し、玄宗出奔しけるが、馬嵬といふ處にて、宿恨破裂して、軍兵、天皇の前をも憚らずして、楊貴妃を殺せり。

●宿瘤、無鹽、孟光は、醜女として、有名なると共に、また賢女として有名也。齊の閔王、出遊して、東郭に至る、百姓みな出でゝ觀る。醜貌を名に負ひたる宿瘤のみは、知らぬ顔して桑を摘む。王怪んで問ふて曰く、『百姓、老幼となく、みな來り觀るに、汝、いかなれば、ふりむきだにせざるぞ。』『妾の父母、桑を採れと命せり。大王を觀よとは命せず。』王曰く、『面白き女也。たゞ瘤あるが惜也。』『婢妾の職は、心を一にして事ふるにあり。堅く守る所あれば足れり。瘤ありとも、女の傷にはあらず。』王終に曰く、『賢女也。』後車にのせてつれゆかむとす。宿瘤曰く、『父母の命をうけずして、王に隨ひゆかば、これ奔女也。王は奔女を用ゐ給ふか。』王耻ぢて、あらためて使者をやりて之を聘す父母、喜んで手の舞ひ、足の踏むを知らず。湯に入れよ、髪を結ひなほせよ、衣服はあれやよけむ、これやよけむと騒ぐ。宿瘤曰く、『容を變じ、服を改めなば、王に識られず』とて、王に逢ひたる時着たる平服にて使者に隨ひてゆけり。閔王之を后としけるが、果して賢にして、齊國爲めに振へり。王令を下して、宮室を質素にし、池澤を塡め、膳をへらし、樂を少くし、後宮に華美の裝をなすを禁じて、國庫充實し、兵力强く三晋を犯し、秦楚を恐れしめたり。これ閔后の力也。閔后死して後、燕の爲めに七十城を下され、閔王弑せられて、國殆んど亡びむとせり。

●無鹽とは、村の名を負ひたるものなるが、本名は鍾離春也。獅子鼻にて、目深くへこみ、髪はうすく、色は漆よりも黒く、古今無類の醜女也。四十歳に至るまで、誰も娶らむとするものなし。終に自から齊の宣王の宮に至り、後宮に事へむことを願ふ。宣王方に漸臺に酒宴しけるが、左右之を聞いて、口を掩うて大に

笑ふ。されど、王、召見す。無鹽、齊國の危きこと四箇條をのふ。王大に悟り、且つ喜び、無鹽を正后となし、心を入れかへ、舊弊を一洗して治を圖りければ、齊爲に大に振へり。

●孟光は身體肥大にして黒く、力は石臼をあぐるばかり強くして極めて醜也。然るに、あれもいや也、これもいや也と、聟えらびして、三十までも嫁せず父母『さらば、誰がよきぞ』と問へば、梁伯鸞の如き賢人の妻となりたしといふ。伯鸞聞いて、奇として、之を聘す。孟光人並に盛粧して嫁す。伯鸞、不機嫌な顔して、取りあはず。孟光其故を問ふ。『われは布衣荊釵、共に深山に隠るゝに足る人かと思ひて卿を娶しに、卿の装飾、



大に我が豫期に反せり。』『妾は別に隠居の服をも用意せり。』とて、容装を一變す。喜んで曰く、『眞に伯鸞の妻也。』孟光、賢にしてよく夫につかへたり。孟光の如き女を妻とせる人は、幸福なる哉。

●宋弘の如き人を夫とせる女は、幸福なる哉。弘は、後漢の光武帝に事へて、大司空たり。帝の姉、湖陽公主新に後家となれり。帝爲に夫を擇ばむとす。其意のある所を知らむとて、それとは無しに諸臣を批評す。公主曰く、『宋公の威容德器、群臣及ぶなし。』さらばとて、公主を屏後にすわらせて、弘を召し、問うて曰く、『諺に、貴くしては交を易へ、富みては、妻を易ふといふことあり。これ人情なる乎。』『臣

聞く、貧賤の交は忘るべからず。糟糠の妻は堂より下さず。』帝、公主を顧み曰く、『事、成就せず、斷念せさせ給へ。』

●司馬光の如き夫をもちたる女も、幸福なるべし。光の妻、子なきを憂ひ、光の爲めに一妾を買ふ。光、顧みず。我に氣象するにやと疑ひて、妾に言ひふくめて他出す。妾、その言に從ひ、粧をこらし、媚を呈して、書院に入る。光、顏をしかめて曰く、『夫人留守也汝入るべからず』とて、追ひ出せり。

●賢人肌の人は、男も女も概して品行よく、豪傑肌の人は、男も女も概して品行惡し。唐の則天武后は支那史上に、殆んど其比を見ざる女中の豪傑也。性、明敏、文史に渉獵し、權數ありて、よく人を用ゐたり。狄仁傑をはじめ、賢士多く之が用をなせり。かく非凡の人なるが、その代りに、子の弘を殺し、王皇后、蕭淑姬を殺し、唐の天下を奪ひて、自から皇帝となるなど、姦惡此上もなし。支那は、今の西太后の如き、女のゑらもの、代々多けれども、武后最も傑出す。その惡も亦傑出す。而して七十歳以上になりても、なほはじめ僧懷義を寵し、後に張五郎張六郎の兄弟を寵して不品行たることも亦傑出す。はじめ唐の太宗、その美なるを聞いて、之を宮に入れたり。時に年十四也。太宗崩せし時、年二十四、尼となれり。高宗忌日に寺に至り、香を行ふ。尼となれる武后、高宗を見て泣く。あゝ、この一滴の涙、唐の天下を流しつくさむとせむとは、神ならぬ高宗の、いかでか知るべき。さるにても、玄宗は嫁を妻にし、高宗は父の妾を妻とせり。唐には、不倫の天子多かりしかな。高宗病み、武后代りて政を執り、世、二聖と稱せり。崩後、大に其姦惡を逞しうせり。六十七歳より、八十二歳まで、十六年間自から皇帝と稱し、姓を武とし、國を周とせり。その死ぬる少し前に、張柬之等、やうやくの事にて、唐室を回復せり。美人としても、才女としても、寡婦としても、すぐれたるが、その姦惡は、日本の女性には見るべからざる所也。

●高宗の次の天子の中宗の后、韋氏も、智略あるこ

と、武后にゆづらず、不品行、武后にもまさり、終に帝を毒殺するに至りては、罪惡、武后より一層大也。后、終に殺さる、よい氣味といふべし。

◉日本の史上、余がにくらしと思は、弑虐を行ひたる蘇我馬子也。過去の報なりとて、之を見のがしたる聖德太子も亦にくむべし。之を除いては、男も、女も、どく〱しき人なし。支那には、毒々しき人少なからず。男にもあれば、女にもあり。韋后、武后、その甚しきものなるが、呂后の如きも、亦どく〱しき者也。漢の高祖、戚夫人を愛し、その生める趙王如意を立てむとせしことあり。されど、呂后、計を用ゐて、その生める子、立てり。惠帝、是也。高祖崩ずるや、呂后直に如意を毒殺し、戚夫人の手足を斷ち、眼を去り、耳を聞えぬやうにし、



口をもの云へぬやうにし、之を厠中におき、惠帝をして之を見せしむ。帝はその母とは異なりて、善良なる人也。餘りに蠻虐なるに驚きて、哀哭し、爲めに病を得たり、支那にて、燒餅やく女を七去の中に入れたるは、呂后の如き女あればなるべし。

◉私有を欲するは、動物の天性也。從つて燒餅やくは、男にも、女にも、普通の事也。晉の賈充はじめ李

豊の女を娶る。淑美にして、才行あり。豊、誅せらる。李氏之に坐して流されたり。充、更に郭槐を娶る。武帝位につくに及び、李氏赦されて歸る。帝、充にさとし左右の夫人を置かしめ給ふ。されど、槐は大の燒餅やき也。之を承知せず。充乃ち李氏の爲めに別に家を建て、居らしめ、往來せず。槐、李氏に逢つて見むと思ひしが、充とゞめて曰く『彼れ才氣あり、卿往かば、耻をかゝむ。往かざらむに若かず。』槐の生める娘、太子の妃となり、槐、大に得意也。得々として、威儀を盛にして行く。李氏出で、迎ふ。槐覺えず脚屈して再拜せり。これより後、充出づる毎に、その李氏にゆかむことを恐れて、人にそのあとをつけさせてきゝたゞせり。

●妬忌なること、槐にまされど、人情を解して優美なることも、亦槐にまさりたるものを南康公主となす公主は、桓溫の妻也。桓溫、蜀を平げ、李勢の妹を蜀よりつれ來りて妾となし、いたく寵愛せり。公主之を知り、數十婢をつれて、刀を拔いて之を襲ふ。たまたま李氏、髪を梳る、髪長くして地に垂れ、姿貌端麗也。公主が刀を拔いて來るを見れども、毫も驚かず、徐ろに地に下りて髪を結び、手を斂めて、公主に向つて曰く『國破れ家亡びて、もとより惜しからぬ身、不本意ながらも、こゝに來れり。今日殺さるゝは、却つて本懷也。』神色閑正、辭氣悽惋也。公主、刀を擲ち、前んで之を抱いて曰く『われ卿を見ても、かはいらしくて、たまらず。況んや内の爺夫をや。』よく之を過せり。かゝる處に、人間が動物以上、人情の美を有するを見る也。

●茲に殊勝なるは、宋の鮑女宗也。鮑蘇の妻にしてよく姑に事へたり。蘇、宋を去つて衛に事へ、三年を經れども歸らず。別に妻を娶れり。されど、女宗、つゆ妬忌の心を起さず、往來する者ある毎に、常に夫の安否を問ひ、外妻に物をおくること甚だ厚し。蘇の兄嫁、女宋にすゝめて去らむとをすゝむ。『一たび夫に見ゆれば、再嫁せざるが、女の道なり』とて聽かず。夫の留守に、益よく姑に事へたり。女宗のやうな場合に

は、去るも、不德に非ず。然るに去らず、常人以上のわざ也。宋公聞いて、之を美とし、其閭に表し、號して女宗と云ひけるも、宜なる哉。

●夏の桀王の末喜に於ける、殷の紂王の妲己に於ける、周の幽王の褒似に於けるが如き、支那にては、美人の爲に國を亡したる例、頗る多し。その中にも、幽王の如きは、最も滑稽也。王の寵姫、褒似、笑を好まず。王、百方笑はさむとすれども、笑はず。王、嘗て諸侯と約すらく「寇來らば、烽火をあげむに、兵を率ゐて來り援へ」と。寇なきに、烽火を擧ぐ。諸侯皆至りしが、寇なし。たゞ呆然たり。この時、褒似大に笑へり。されど、のち大戎、王を攻む。王、烽火をあげたれど、諸侯至らず、終に山の下にて殺され給へり。

●支那にては、後家を立つるを、女子の道德とせり。されど、その醜なるものは、顧るものなけれども、美なるものは、はたの者、寄りて、たかりて、後家の操を破らしむると多し。かゝる場合に、固く操を守りたる貞女も少なからざるが中に、高行の如きは、以て其代表者となすべし。梁の人也。早く寡居す。極めて美也。貴人爭うて之を娶らむとすれども、得る能はず。梁王も亦その宰相をやりて之を聘す。これ婦人榮華の極也。然れども、高行は、よしや王の爲めに殺さるゝとも、操は守らざるべからずとて、刀にて、その鼻をそぎて、之を謝絕す。王、其義を大とし、其行を高しとし、高行といふ號をおくれり。

●高行とは反對にして、最も多く嫁したるものを夏姬となす。九度嫁したれど、九人とも其夫死せり。運惡きにや、自から招く所あるにや。

●賢妻の爲めに、誤らざるを得たるもの、少なからざるが、今其一二を記せむ。樂羊子遊學しけるが、妻が戀しくてたまらず。一年ばかりにして歸る。妻、其故を問ふ。たゞ御身が戀ひしさにと語る。妻乃ち刀を以て機を斷ち、中途に廢するの不可なるをさとす。羊子、大に悟り、また行きて大に學べり。

珍書解說

通俗源氏物語 若紫（中）

水原翠香

○君は先參内して、山の御話奏し賜ふ、聖僧の事叡聞ありて

帝「阿奢梨にも爲べき者を、今迄公に知召さゞりける事と、尊がり且其老朽を惜ませ賜ふ、左大臣參り合賜ひて

大「御迎にと思ひつれど、御微行とあるに憚りて、若殿輩に任せ侍りつる、二三日易らかに休ませ賜へ、御送り仕奉らむと申賜ふに、否とも云ひ兼て、惹れて退出給ふ、我御車に奉りて、自己は陪乘の樣に、引入りて以敬仕賜ふ、子故の闇なる御志、哀に苦しと見賜ふ、殿にも侍受の注意して、いとゞ玉の臺と磨き給へど、女君は例の御癖にて、頓にも出迎へ賜はぬを、父大臣切に諫賜ひて、澁々に出お在たれど、只畫の姫君の樣に、人々に仕居られたる儘に、微動も爲賜はず山寺の話も、云甲斐有て打答へ給はゞ社、可憐ならめ何迄も心解ず、疎く恥しとのみ覺して、年月と共に心の隔も增るよ、と苦しくて

源「時々は普通に、夫婦らしく爲賜へかし、堪難く病煩しをも奈何とだに宜はぬは、今に始ねど、餘也と怨賜へば、辛うじて

葵「訪はぬは憂き物にやと、偸眼に見おこせたる、眉貴的美し、稀の一言に、淺猿の詞哉と打歎かれて、物もいはず、睡たげに以倣して、御帳内に入給ひぬ、女君ふとも入賜はねば、侍女輩聞え煩ふ、如斯何時も無興のみ有れば、彌彼若草床しきを、似氣なしと思へりしも理ぞかし、云寄難き事にも有哉、奈何搆てか迎取るべき、藤壺と同腹の宮の女なれば、叔母姪の血統にて、然酷似たると思ふも睦ましく、是を我物として明暮見は、慰め難き物思も、自然消ぬべし。万望と深く思しなし、其日御文奉り給へり、僧都には普通に

て、尼君には　文「以放れたる御氣色に、思ふ半も得顯はし侍らずなりつる、斯斗申にても、押並たらぬ志と、御覽し知らば、如何嬉しう等有て、中に小さく引結びて

面影は身をも放れず山櫻、心の限りとめてこしかど（少女を櫻に比してよめる也）

夜間の風も影護（アンジラレル）など有、御手跡といひ央過（アカリスギ）たる御心には、めも奇に好ましく見ゆ

尼「噫傍痛や、如何答むと覺し煩へど、只

文返「行末の御事は、等閑には思ひ奉らねど、館との御使に、御答に苦み侍る、まだ難波津をだに、果敢々々しくは續け侍らねば、甲斐なくこそ

歌「嵐ふく尾上の櫻ちらぬ間を（コノ歌花ノ上チイロザ下ニハ幼少ノモノニ御心ヲ）

心留けむ程のはかなさ（トメタマヒテモ末ニテイカヾナランモハカラレズトオモヘハハカナシ）

いとゞ影護と有、僧都の返書も同樣なれば、口惜くて二三日の後惟光を奉り賜ふ、少納言と云ふ人呼出て、委細に談らへと宣ふ、扨も懸らぬ限なき御心哉、幼稚なりしは我もみつるぞと、笑しけれど、唯々として出立ぬ、少納言に逢て、御直情を語るに、天稟多言人なれば、尤々しく（モツトモラシク）云續く、御文にも最懇々に書連ねて、彼御放書（幼者は字をば一々放ちかく也）社見ま欲けれとて、例の中なるには

源「淺香山淺くも人を思はぬに（淺香山ノアサイドコロカコレホドフカク〳〵思フテ井ルニ）

など山の井のかけはなるらむ（影チ掛ケタリ）（何ユヱニカケハナレテバカリチツトモ我心ヲタンテクレヌコトゾ）

右返「汲そめて悔しと聞し山の井の（汲ミテモ淺キヲタヤシト昔人モイヒマシタ其山ノ井ノ如ク）

淺きながらや影をみすべき（マダテサナキマヽニテハヂキニアイソカツキマセウカラ今ハドウシテモアゲラレズ）

惟光も同事を繰返しいへど、まだ無理也と、誰も〳〵いへば

「此病少し怠りて、京に歸て後にこそ萬承はらめ、今は惱しくてと辭し賜ふに、強ても云はれず歸るに、尤狂心とのみ覺したり

〇藤壺宮、惱み賜ふ事有て退出給へり、帝の覺束なく歎かせ給ふよりも、源氏君の御心惑ひ、何事も打忘れて、内裏にても里にても、物事手に付賜はず、晝夜暇だにあれば參りて、王命婦に御容体を訪問賜ふより他事なし、餘りに物狂はしき迄、覺し續けて御心や亂にけむ、我にも非らで、漫に忍びよりて、逢給ひにけり

源「見ても又逢夜稀なる夢のうちに
コンナヨリ外マタトアハレヌコヨヒノユメノウチニ
　　やがて紛るゝ我身とも欲
ソノマヽマギレテシマフヿカデキタライカニウ
レシカラム

藤「世語に人や傳えむ比なく
セケンノロノハニイヒハヤサレルデアロウ
　　憂身をさめぬ夢に做しても
アレホドイングハナモノハ又トアルマイウナツ
ラア

宮も流石に甚とやおぼしけむ

と宣はすと見て、愕然と驚き醒賜へば、是思寐の夢也けり、胸轟き汗に浸りて、思へば淺猿くも、空恐しき夢をもみつる哉、斯も爲得らるゝ人ならば、奚今迄長き年月、思ひ惱みてのみ在べしやは、及ばぬ事と思へば社、生憎に苦しかりけん、遮莫夢なりしに、少し罪輕き心持はすれど、彼六條の生靈の、河原院に顯れし例さへ思ひ出られて、若思ひの魂の、脱出には非じか、とも惑はるれば、試に夢中贈答の哥をかき附て、王命婦して秘密に奉り給ふ、宮御覽ずるより、御顏赫然又忽靑くなりて、絕入る斗泣賜ふ、命婦は驚きて奈何爲させ賜ふぞといへど、物も宣はず、手づから其文を、傍なる燈火に燒失ひ賜ひて、引被てぞ伏賜ふ、宮も同夢を御覽じて、御心甚じく騷ぎたれど、夢なりしをせめて嬉しと覺しゝ折しも、如斯正しく書附賜へれば、若眞に忍入たりしを、我現心なくてや在けむとさへ覺せど、然斗現心なくば、哥も得よまじ、醒ての後も忘れぬは、こや正夢てふ物ならむ歟と覺すに、淺猿とも何とも云はむ方なくて、惱しさも添ぬれば、疾く參内あれと御使頻れど、思しも立賜はず、眞に例の樣にもお在さぬ也けり、三月も經にければ、御湯殿に仕奉る人々、見咎め奉りて、今迄奈何奏し賜はざりける事と、驚き怡びて、御怪氣にてや、頓にも御氣色

見え賜はざりけむと、奏し奉るに、帝御嬉悦斜ならず、一層御使隙なし、七月になりてぞ参内有ける、珍しうも可憐にも御寵愛限りなし、少し勝らかに成賜ひて、面痩賜へるしも、似る物なく愛痛し、此御方にのみ御坐在て、御遊も漸次有趣頃なれば、源氏君も暇なく綱纏て、琴笛等仕奉らせ賜ふ、尤甚慎み賜へと心知れる御眼には、洩出る色氣息職きを、宮も有繋に哀と思し出るなるべし

○彼山寺の人は、宜にや出賜ひにけり、京の家尋ねて折々御消息有れど何も同じかりければ、此月頃は藤壺の御憎や何やと、御心の暇なくて、過行秋の末つかた月の面白きに催されて、久々にて六條へ思ひ立ち賜ふに、京極にて、荒たる家の樹立物古て見えたるを、例の御供に放れぬ惟光



惟「是ぞ故按察使大納言が家にて候ふ、一日物の便に訪ひしかば、彼尼公、病革りて今は頼少き由に申て候ひき

源「哀の事や、速訪ふべかりしを、奈何其時告ざりけむ、入て音信よと命ずれば即態といはせたり、少納言驚きて

少「傍痛き事哉、此頃無下に衰弱させ給へば、御對面

もならじ、去とて歸し奉らむは恐縮と、南の廂引繕ひて、迎入奉る

源「常に心には懸ながら、何も甲斐なきに控へられてなむ、御惱も宜き様に承りしを、奈何にか

少「一度は宜くて、爰に歸らせ賜ひしを、打返し重らせ賜ひて、今は限の御容體にお在とて、入て其よし申す

尼「斯忝く訪はせ賜へるを、自身御答申上られぬ事、彼度々宜はす筋は、萬に一も御心渝らせ賜はすば、無理齡過て後、必加數させ賜はれ、心細く殘し置侍るぞ、後世の障とも成ぬべきと、宜ふ細聲なれと聞近ければ、絶々聞えて、此君だに、代て畏り申賜ふ可程ならましかはと、苦げに宜ふ、哀と聞給ひて

源「渝などいふ淺きならば、奚か斯物好に申さんや、奈何契にか、始より奇しく、此世斗の事とは覺侍らず彼幼稚御聲をだに

少「何事も覺し知らず、御寐成てと申做す折しも、彼涙より登して

子「祖母君よ、彼寺に在し源氏君こそ來訪有、とく見賜へと宜ふ、少納言傍痛くて、噫高聲と止れどきかず

子「彼君見しかば、心持の惡さ慰めたりと宜ひしかばぞかしと、賢き事聞得たりと思ひて宜ふ、いと可笑けれど、人々苦慮は、不聞貌して、眞實に御訪ひ申留て出賜ひぬ。

實云甲斐なの氣息や、然有爭克敎たてむと覺す、又の日。

源「幼き田鶴の一聲きゝしより

　　　蘆間に泥む舟ぞ得ならぬ

と殊更に幼く、放書にして賜へるを、皆見愛て、此儘御手本にと人々いふ、少納言御返事奉る。

少「聞はせ賜へるは、明日をも過し難氣にて、又山寺に渡る程にて、然るは僧都の出難ければ、臨終をも彼寺にてと覺す也、斯度々の畏は、此世ならでもと宜へり」と有り、哀の事や、消む空なきといひし夕追想られて。

源「手に摘て何日しかもみむ紫の
アカモノニシテイツニナラバミラレヤウカ
根に通ひける野邊の若草
フヂツボニヨクニテイルカノ野邊ノ若草

○十月に朱雀院行幸有るべしとて、舞人等、門閥の子輩、公卿殿上人、斯道に合格は、悉撰れて、親王大臣より始、末々迄、其習禮に寸暇なし、故に山寺にも、久日音信賜はざりしが、或日思出て、態々文遣し賜へるに、僧都の返書のみあり。

返文「去月廿日、終に命畢、世間の道理なれど、更に愁傷すと有、今更に驚かれて、彼影護と思へりし人、奈何ならむと、吾幼時に思比類で、淺からず訪ひ賜へり、少納言有才女にて、拙からず御請したり、忌明て後京に歸れりと聞えしかば、暇ある夜自ら訪賜ふ、元來荒たりし所に、人尠ければ、幼人如何怖からむとみゆ、少納言泣々御光景語る。

少「宮に渡奉らむと侍れど、故姫君に無情かりしを思へば、無下に乳兒ならぬ齡にて、未他の顔色をも悟賜はず、半熟にて、大勢お在る中に交て、侮慢まれ賜はむ事、亡人も、終世歎かせ賜ひつるも驗き事、早見え侍るに、忝き仰言は、后の御心も不案、尤嬉しき折節なるを、御年よりも特に稚くて、些も可疑ならぬが、最迂心侍る。

源「其幼稚は承知にて、斯迄線返すを、猶然のみ宣ふ社遣憾なれ、其稚氣なるが、一入思はるゝを、人傳ならで申さばや。

源「蘆若の浦のみるめは難く共
スグトツマニセンナドイハヾコソカタカラメ
こは立ながら歸る波かは
我兒ノヤウニシテソダテオシヘントイフチイナムコトデハアルマイ

餘に冷眼と宣へば、實こそ畏けれとて。

少「寄波の心も知らで若浦に
アナタノオンコヽロモシラデ何ノワキマヘ
玉藻なびかむ程ぞ浮たる
モナキ人ニナニ言テオホセラルヽトモ浮藻チツカムヤウニコヾヘマスマイ

無理御事と答ふる容の、物慣たるに、少し罪許さるゝ

や奥には何か泣賜ふを、御遊敵の慰め奉るとて、直衣着たる人のお在る、宮の光來にこそと申に、走來て。

紫「少納言直衣着たる人とは宮かと、問ふ聲最可愛。

源「父宮には非ねど同じ宮にて睦まじき人也、こち寄給へといはれて、源氏君と有繋に認て、惡くいひてけりと、乳人に差よりて。

紫「將寐なむ、睡きにと乳人を引たて賜へば。

源「今更に、奈何逃賜ふぞ、此膝上に寄臥賜へかし。

少「然れば社、如斯無意識御程にてと、推寄せ奉りたれば、何心もなく居賜へり、軟たる御衣に、髪は艶々と懸りて、末總やかに美しきを、搔撫玉へば、例ならぬ人の、斯近付賜へるに、恨怖くて　紫「寐むといふ物をとて、強て引入給ふに、附て辷入りて　源「今は予ぞ思ふ可人、疎み給ふなよ。

少「將嗄うたて、何事を宜ふ共、更に聽分賜はじをと、苦がる。

源「如斯兒を、奈何爲べき、心易かれ、唯世に似ぬ志の程を見給へ、霰降荒、物悽き夜を、斯人尠にて、奚過し賜はむ、予宿直人にて在らむ、人々も近う侍らはれよ等、尤馴貌に搔抱きて、御帳内に入賜へば、怪存外にもと呆れて、人皆目を見合すれど、進出て言抗ふ人もなし、若君は恐しう如何爲やと戰慄て、美き御肌付も漫寒氣なる可愛くて、單斗押包て、吾乍も狂がる事とは覺せど、最愛懷く語ひ賜ふ、予許には面白き畫多く有、雛遊にも廣くよき所にて、庭に池有、美き花咲けり、好に任せ折て參らせん、來て見賜へ等、心に可留事を宜へば、幼心に甚くも怕す、適に寐もやらず、乳人は影護て、御帳の下に寄て侍へり、夜中風吹荒るに、君かくお在さざらましかば、如何心細からむ、同じくば宜き程におかせかしと、悄語合へり、風吹止たれば、夜更く出賜ふも、有情貌なりや、二條院に着給ひても、獨笑しつゝ臥賜へり、翌日文遣賜ふにも、かく可言も例ならねば、筆打置乍考給へり、畫添てぞ贈り賜ふ○彼處には今日しも宮渡り賜へ

り、年頃よりも一層荒増りて、いと丶淋きを見巡らして、有斯處に幼人の爰過し賜はむ、疾く家許へ渡してむ、共に遊ぶ人は多く在、乳人は曹司して侍へ等宜ひて、近う呼寄給ふに、彼餘香に、泌かへり賜へるを、有趣の薫や、御衣は軟てと心苦、宮「年頃央過たる人に添ひ賜ふよりは、我許へ渡りて、物事見馴はし賜へと申し丶を、頑に疏み賜へばぞ、他も本心置なれ　少「何かは然は侍らむ、心細く共、猶今二三年は、此儘にお座在なむ、物心知り賜ひて后に、渡し奉るこそ宜侍らめ、宮「何かは心置く、今は亡人の御事は甲斐なし、予在れば、万く试爲てんや等



宜ひて、暮るれば帰り賜ふを、心細氣に泣賜へば、宮も涙吒て、近日渡らむと返々拵へ置て出賜ひぬ、餘波慰め難う泣居賜へり、行末等は思し知らず、唯年頃離る丶折なく、綢繆し給へる人の、失賜へる悲しさに、幼き胸も充満て、例の様にも遊び賜はず、晝は然ても紛るるを、夕暮となれば、甚う屈賜へば、慰め詫て乳人も泣きけり、折しも惟光御使にて参れり。

源文「今夜もと思を、内より召あれば参られぬ、心苦しき御住居見奉れば、静心なくて、宿直人奉ると有、

少「無端や戯にても、物の始に此御事よ、宮聞召なば、侍ふ人々の疎也とぞ譴責給はむ、穴賢、稚く浮と打出宜ふなと、誡れば、夫を何共覺足ぬぞ甲斐なき也、少納言惟光に逢ひて 少「后年、可然御宿因、免させ賜はぬ樣も侍らめ、只今は最も似氣なき御事と、誰もく見奉るを奇う宜はすは、抑奈何御心にかと、思亂侍る、今日も宮渡御在て、克注意して口惜く持做勿と、呉々も宜はせつるにも、此御物好の聞えや爲と、尤煩はしく、憚られ侍る等いふ、惟光も奈何にか、心得難しと思ふ、君は幼人に通ひ賜はむも、流石に漫なる心持して、輕々敷僻物好と、惟光さへや思はむ、不如唯迎取らむと決心、一兩日經て、又例の太夫を御使にて、障る事續きて、得參らぬを、疎しとな覺しぞと、口上に申せば。

少「宮より俄に、明日御迎にと宜はせたれば、心恠しくなむ、年頃住馴し蓬生を出むは、有繫に心細くと、言葉少にいひて、尋く應ず、物縫營み、忙氣なれば歸參りぬ、君は大殿へお在けるに、例の女君頓にも出賜はず、物難解て、其處に有和琴をすがゝきて、常陸には田をこそ作れと、口號ゐ給へば、近く參りて、云々と申す、口惜き事哉、彼宮に渡りなば、態と迎へむも、嫁期の姉達を差置て、いはれじ、先じて疾く渡さむと決斷て 惟「曉彼處に可行、車其儘、隨身一兩名、命置けと宜ふ、承りて立ぬ、世に聞えても、女の心を交しけると、推量らるれば普通也、幼人偸たりと、父宮の出聽給へらむも仂なく漫なる業とは思へど、扨逸さむは殘念と思して、急行ぬ、門叩かせて、門守驚開たるに、御車引入させて、太夫妻戸を叩て聲咳ば、(エヘントセ)
(キヤフイ)
少納言聞知りて起出たり、爰にお座在と云ば。

少「何處よりの御歸ぞや、未夜深きに

惟「宮へ渡し賜ふと聞けば、其先に申べき事ありて。

少「何事にか、克熟睡てお在に、起し奉るとも、如何果々しき御答申賜はむと、笑ふを聡捨て、入賜へば

少「傍痛く、打解て人皆の寐て侍るを侘れど、耳にも不懸。

（以下次號）



生理
衛生

顏の話（下）

糸左近

注意＝何千何百通の質問あつた顏の皮膚病頭髪の話がある。

面白い話を聴いたり、樂しい音樂を感じたりする靈妙な耳の内部は何ういふ樣になつてゐるかと穿鑿するに鼓膜（前々號に述べたる）の奥は中耳と言つて、圖の如く空洞で、其の中に三つの小さい軟骨が連り續いて、其の外端は鼓膜に着き其の内端は内耳といふ部に接す。さうして中耳の底はユースタキー氏管といふ管になつて、咽喉に口を開いてゐる、この管の功用は、空氣を中耳内に入れ、鼓膜の壓迫をして、内外平均せしむるためである内耳は確い骨の中に在る空洞で、その前方には前庭といふ小麥粒程の大さある部があつて、三ッの半規管と蝸牛殼とが開通してゐる。内耳は一名迷路とも言つて、常に液體が充ちてゐる之を迷路水と云ふ、その液中に小さな嚢が浮び、嚢の中に毛樣の物質、耳砂及び聴石といふものを含む。蝸牛殼は螺旋のやうに卷いてゐて其の中にコルチ氏纖維といふ極めて細小な纖維が正しく列んで、恰も數千條の糸を回いてある美しい琴のやうである。この神から與へられた小さな琴が、萬雷の一時に落るが如き音も奏すれば、蚊が私細くやうな微かな聲も傳ふるのである。即ち空氣中に於て一體が他體を撲てば、空氣が忽ち波の樣に動く恰かも一物體を水中に投れば數多の波紋を生ずるやうである、そこで此の空氣の波動が耳道から進んで鼓膜を敲き鼓膜は其の震動を中耳の聴骨に傳ふ、聴骨は一二三順次に取次して之を迷路の液に達せしむ、是に於て毛樣物耳砂及び聴石はこれが爲に顫い動いて之を又蝸牛殼のコルチ氏纖維に傳ふ、コルチ氏纖維は其の微妙な作用を聴神經に傳へ、聴神經は遂に腦髓に訴へて始めて音響

の感覺を生ずるのである。若し此の感覺を一朝失うた曉は所謂聾者で嘸や不自由なものであらう、故に大切の上にも大切にせねばならぬ。

大切にするには第一垢を溜ぬやうにするが肝要である垢は何うして出來るものかといふに耳の脂や毛屑或は上皮塵埃などが凝固つてなるのである、少し位の間は左程に感せぬけれど澤山溜ると、所謂「耵聹堆積」といふ一つの耳病でそれが爲に耳が鳴つたり、聞き難くなつたり、色々な雜音が聞えたりするものである、併し斯うなつても象牙や金屬製の耳搔を入れて穿くつてはならぬ、何となれば、これが爲に耳の粘膜や鼓膜を傷くることがある



耳の模型



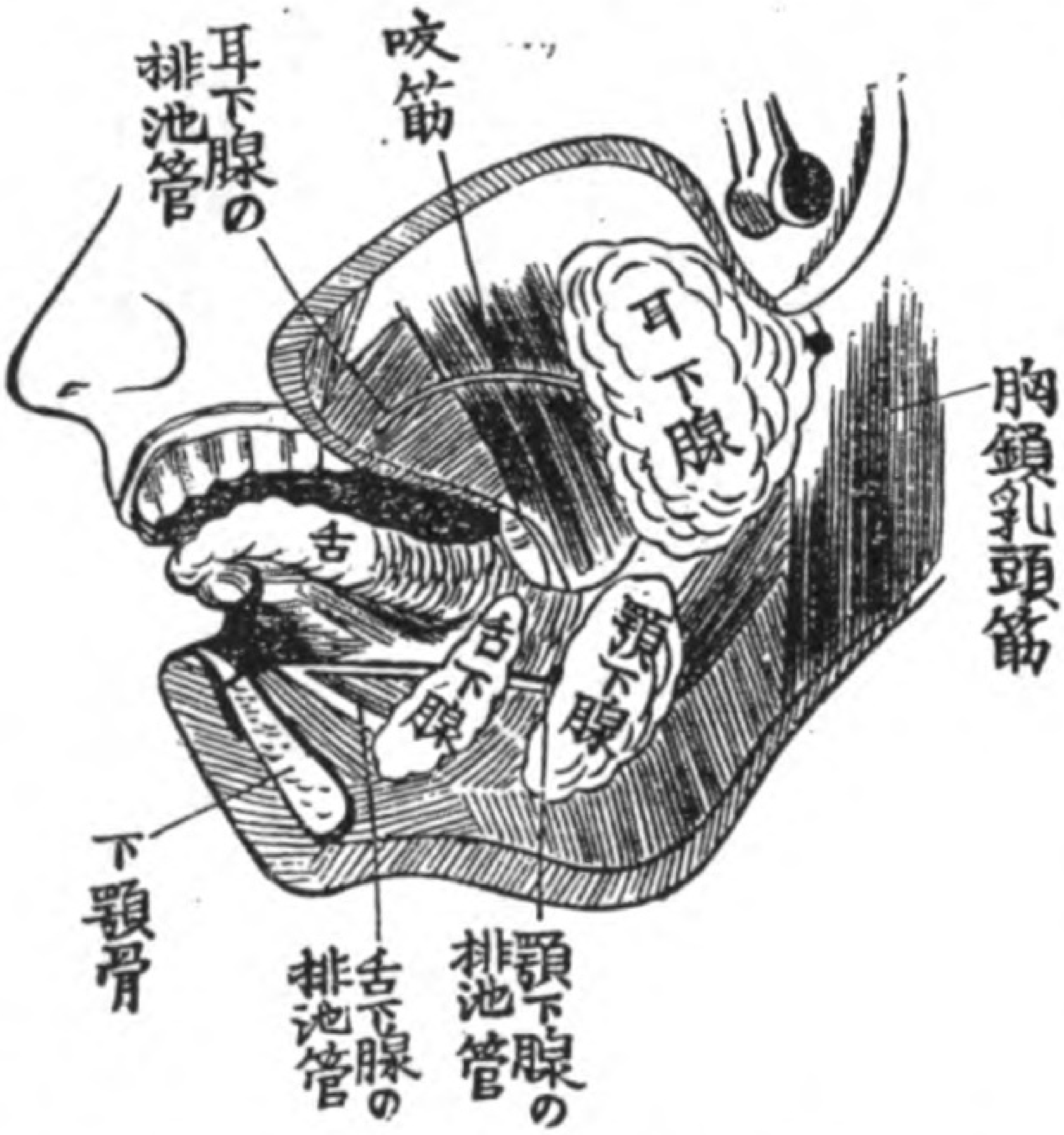
からである、さうなれば粘液或は膿汁が流れ出で所謂「耳漏」となつて容易に治らぬとのである。故に垢が溜つたら、まづ左の藥をスポイトといふ器械で注射しておいて然る後微温湯で洗はねばならぬ。

硼酸と倔里設林と
各　一、〇
水　一〇、〇

若し又耳漏になつた塲合は濃い石鹸水をこれもスポイトで洗ひ綿を入れて能く拭ひとるが可い。又蟲などの飛び込んだ時は少許の油を注ぎ然る後微温湯で洗ひ除くやうにせねばならぬ、穿り出さうとすると、却つて深く這入るものである。微温湯を注いだ時は、暫く時を經てから、頭を傾け、片足でトン／＼飛んで、流し出すことが肝

要である。すべて、耳中に注射する水は、其の温度に餘程注意せねばならぬ、若し冷たければ腦貧血を發しさりとて熱ければ腦充血になり、何れも眩暈するものである、故に其の温度は水氣を放れてゐるといふ位なのが、至極適當な所である。

次に口に就いて述べませう、眼鼻或は耳なども勿論大切なものではあるが、盲者鼻缺或は聾啞の不自由ながらも生きてゐる所を見れば、口は顔中で最も大切な部分であると斷言しても可い若し口の作用を失つたとせば、命の親たる飲食物も灌腸するより外に仕方は無いし、言語は「ン」の一音を除く外發することは出來ぬ、のみならず空氣の呼吸も鼻からするとは言ふもの丶如何にも不都合なものであらう、困ることを閉口といふは御尤な次第である。



偖、食物一たび口中に入れば第一に齒は之を嚙み碎き其の間に唾は食物と混り、舌及び頬の力に由つて之を咽頭に送るのである。

唾は泡の様な液體で、主に三對左右六個の唾線から出づ、この効用は能く口中を潤し、食物を軟かに溶し、種々の味を感せしめ、さうして唾液素といふ一種固有の成分を含んでゐて、食物中の澱粉を變へ糖分となすものである。

三對の唾線とは、耳下線、舌下線及び顎下線各々左右二個づ丶のことである。耳下線は耳の下にある最も大きな線で、其の液體の出る管は上顎の第二小臼齒に對つてある粘膜に口を開いてゐる。舌下線は舌下に在る最も小さな線で、其の出る管は舌下に口

を開く、顎下線は舌下線の後方にある線で、其の管は矢張舌下に口を開いてゐる。

食物は粥の樣に軟かな物でも、充分に嚼み砕き、充分に唾と混せねばならぬ、お茶漬さら〳〵流し込むに至つては、食物口中の變化を受けぬために、胃腸の困難を來すこと莫大なものである。口中は何時も清潔にしておかねばならぬ、不潔にするとオイジユームアルビカンスといふ六かしい名の黴菌が生ずるものである。又過熱過冷の飲食物や、酒烟草を度に過ぎて用ゐることも口中を傷むることは一通りで無い。彼の口内炎や鵞口瘡などは、不潔、過熱過冷の飲食物、酒烟草の濫用から發るものである、今更に口内炎及び鵞口瘡の病狀療法を左に述べませう。

▲口内炎

〔病狀〕口内の粘膜が紅く腫れて灼くが如くに痛む、さうして諸處に小さな水胞が出來、苦く或は腐敗の味を覺え、食物の咀嚼に甚だ困難を感じ短きは一二週間長きは數年の間治らぬものである。

〔療法〕原因を除き、屢々口内を洗ひ、頸の周圍に温巴布を貼し、

鹽剝　六、〇グラム　水　三〇〇、〇グラム(大約一合半)

を以て日に幾度でも含嗽をするが宜い、但し鹽剝は劇藥であるから、之を得られぬ場合は左の藥を以て代用するも可い。

硼酸　二、〇グラム　温湯　一〇〇、〇グラム(半合)

▲鵞口瘡

〔病狀〕口内粘膜の上層に、細小なる白色の膜即ちオイシユムアルビカンスが出來、それが次第に殖えて舌の尖、口蓋、口角が白くなり、口内灼くが如く熱し、小兒に在つては疼痛の爲に哺乳することが出來ぬやうになる。

〔療法〕葡萄酒に浸せる布片を以て、丁寧に口内を拭き、口内炎に用ゐたる藥或は左の藥を含嗽又は塗布するが可い、

重曹　二、〇グラム　水　一〇〇、〇グラム(半合)

これらの病に限らす、平常の時に於ても清潔にするは

勿論、時々右の藥を以て含嗽することは大必要である又母たるものは小兒の口内に能々注意し、己が乳房をも清潔にしておくことを夢怠つてはならぬ。これにて口に關する生理衞生を略述べたが、口ばかりで無く實行して頂きたいものである。

次は顔全体の皮膚病に就いて其の主なるものを述べ、附錄として頭髮のお話を致しませう。

普通一般の婦人は、顔色玲瓏として白く、其の上光澤があつて、しかもホンノリと頰の處に櫻色を表はし、それで一點の瘡さへ無いといふのを望まるゝけれど、これは六か敷注文である、何となれば白い黑いは天然の性質であつて、杣山賤の娘にも雪を欺くのがあれば公卿のお姫樣にも印度人的がある、病的で無い以上は已むを得ぬ次第である、醫者といふ眼を以て見れば、何れにもせよ、光澤があつて、生々として健康相なのを尊ぶのである、所がその健康相は白黑何れに多いかと言へば、何うしても後者である、然るにその立派な顔を有つてゐながら、態々危險な砒石劑卽ち亞砒酸や法列兒水を服んで蒼白くしようと試みてゐる人がある抑々亞砒酸や法列兒水は變質强壯劑であつて、體質薄弱な人がその服用方法に依つて服めば身體强壯に變じ從つて顔色も美はしくなるが、强壯な人が服めば全身營養の障害を來し、全身貧血となり、皮膚蒼白くなり精神痴鈍に陷つて、次第に衰弱し、遂に野邊一片の烟と消ゆるのである、なんと恐ろしい毒藥ではありませぬか、讀者よ讀者、新聞の廣告など見ると『白色藥を一瓶服めば、如何程色黑き人も、忽ち白色に變じ、艶麗の美貌となること他藥の比にあらず、殊に本劑を用ゐれば、にきびそばかす等を去り、きめを細かくし、皮膚のあれることなし云々』と出てゐる。併し欺かれ給ふな、或はにきび、そばかすには多少の効あらんも、忽ち白色に變ずるなどは以ての外の事である、論より證據、私は態々この廣告をしてゐる藥屋に行つて如何なる艶麗な夫婦がゐるかを探偵したるに、イヤハヤ惆れ果てたる次第なりけりであつたである、されば生來色黑き方は其の黑きに滿足して、唯其の病的に醜

いのを去る方法を講ぜられたいのである。故に余は今顔面皮膚病の主なるものを左に述べませう。

▲雀斑俗に之を「そばかす」といふ

〔原因〕不明、多くは遺傳的である。

〔病狀〕雀の卵の斑點に似たものが顔面に出來るのである、如何に白い顔でも、これあれば大いに醜いものである。

〔療法〕次の母斑の療法と同じければ之を畧す。

▲母斑俗に之を「あざ」といふ

〔原因〕先天性である。

〔病狀〕小いのは針の尖程、大いのは手掌位の黒色或は褐色の斑點が皮膚にあるのである、これは衣服で隠るゝ處にあれば、諺にこれを「陰の母斑」といつて好運の相としてゐるが、余はその理由を知らぬけれど、兎に角何の差支も無いこととなれば其の儘に保存しておくも可からう、けれど顔面などにあれば實に醜いもので不運不幸の一つである。余の知つた人に、富貴の家に生れながら、顔面の殆んど半分程これあるが爲に、學校敎育も受けず、深窗の許に天を怨んだ結果、遂に車夫の妻となつた憐なのがある、されば其の療法を左に

〔療法〕誰にでも買はるゝ通常藥で之を除き取る方法があらば、否あるかも知らぬけれど、余は之を知らぬ故に殘念ながら劇藥で申せば、

二％の昇汞水（二％とは水百について昇汞二の割合に含むをいふ）を屢々塗布すれば遂に治る、若し其の面積が大きくて而も短日月の間に取り除かうといふには、右昇汞水に布片を半日程浸し、之を輕く搾つて母斑或は雀斑の上にあて油紙を以て被ひ、四五時間綳帶しておくときは漸々灼けるやうに熱くなつて、表皮が膨れ上り、水疱が澤山出來るそこで其の水疱の根本を針の尖で刺し十分に水を泄し出し、其の跡へ澱粉を撒き、又綳帶して八日間程經てから見ると、あれ嬉しや治つたぞといふ工合になるのである。けれど一度で斯う治らぬときは再三再四同じことを繰り返せば遂に退治するのである又一度で治つても、日を經てから又候表れ出ることもある、其の時には矢張何處までも、昇汞攻で撃退せね

ばならぬ。

▲面皰俗に之を「にきび」

〔原因〕皮脂腺の口が閉づるのである、即ち不潔にしてゐるか、或は春機發動期に皮脂の分泌が多過ぎて遂に溜り積むのである。

〔病狀〕粟粒乃至米粒程の黄色或は褐色のものが、顔の中に澤山出るのである。

〔療法〕面皰壓出器といふ器械、それが無くば爪を以て脂肪を出し、然る後單軟膏をつけて一日も放置っておき、それより之を拭ひ取り、石鹸水を以て清潔に洗ひ左の藥をつけるがよし。

カオリン　四瓦　グリスリン三瓦
醋　二瓦　右よく混せて一日數回塗布

▲不毛症一度述べたることがあれど、研究の結果尙詳しく御披露申すのである。

〔原因〕(一)先天。(二)傳染病後例へばチフス後の如し或は火傷などの他病。(三)精神病。(四)寄生物。(五)老年。

〔病狀〕(一)に又全身症と局處症とある。全身症は甚だ少いが、局處症は往々あるものである、何れにもせよ生るべき所に毛が生へざるか、或は生へてゐても甚だ薄くて醜いのである。(二)は次第に頭髮などが脫けて薄くなる、但し火傷のは誰も知つてゐる如く禿るのである。(三)も(二)に同じ。(四)は左圖の如く或る一部分づゝ禿げて、遂に段々禿る面積が大きくなるので、所謂禿頭病とは此のことである。(五)も(二)(三)(四)の狀態に同じ。



〔療法〕(一)は左記の藥を順次試むるがよし。(二)の傳染病後のは身體の强壯法を謀れば、毛髮も亦隨つて生るものである。火傷のは大抵治らぬと、絕念るより外に無い。(三)は其の病氣さへ治れば毛も亦回復する。(四)は傳染するものなれば、石炭酸水或は酒精を以て能々洗ひ、矢張左記の藥をつければ治る。(五)は自然の致す所なれば却つて目出度徵候として天命を樂むより仕方は無い。

(甲)	阿列布油	百瓦
	芫菁丁幾	十瓦
(乙)	蕃椒丁幾	百瓦
	グリスリン	百五十瓦
	芫菁丁幾	十瓦
(丙)	レゾルチン	十瓦
	ヒマシ油	五瓦
	ベルガモツト	三瓦
	アルコール	二百瓦
	芫菁丁幾	二十瓦
(丁)	サリチルサン	三瓦
	ペーロバルサム	五瓦
	アルコール	二百五十瓦
	芫菁丁幾	二十瓦
(戊)	鹽酸ピロカルピン	半瓦
	知母爾	三瓦
	アルコール	二百五十瓦
	芫菁丁幾	二十瓦
(己)	ウラトリネ	半瓦
	五倍子酒精	百瓦
	刺賢垤爾精	三十瓦
	グリスリン	十五瓦
	芫菁丁幾	十瓦

右六法の中色々と試して半年乃至一年も續け、それで効無くば如何なる名醫も匙を投るであらう。

〔注意〕藥を附る度毎に、必ず石鹼水で洗ひ、能く拭き取つてから附けねばならぬ、さうで無いと脂肪が出てゐるから藥を受附ぬものである。

▲白髮症附赤髮

〔原因〕(一)色素の缺乏。(二)心配。但しこれに就いては反對論もあるが、併し非常なる心配したる爲一夜に白髮になつたといふ例もあれば、余は原因の一つとしておくのである。(三)老年。

〔病狀〕病名の通りなれば、言ふまでの事も無し。

〔療法〕滋養强壯の食物を取り、能く運動して而も精神を樂ませ、左の藥を塗布するがよし。老年の爲に霜お

く身となつたのは、可愛孫の手に抜かせておくより外に仕方は無い。

硝酸銀　二瓦　炭酸安母尼亞　三瓦
緩和軟膏　六十瓦

右よく混せて一ケ月に一回塗布　但し手或は顔などの毛の無い處に着くと黒くなるから當いた場合には鹽水を以て洗ふべし。

（問）縮毛は治りませぬか。

（答）望み無しと言つても可いが、兎に角毛髪の發育の不完全なのであるから、右不毛症の療法中にある（甲）（丙）の藥を附けて御覧なさい多少の効ありませう。但し常に清潔にすることが肝要である。

これにて顔の話は終りましたから、次は消化器の妙機及び飲食物のお話をお約束申しませう。

火の用心

ある朝牛肉の脂肪ストーブの中に落ちて燃へ上り其火筒の中に遷りて大火に及ばんとせり下女下男は皆慌わてゝ爲す所を知らず余は下女に鹽を持ち來れど命じ自ら有り合へる古毛ツトを水に浸し來りてストーブの火口に行き下女の持ち來りたる鹽をストーブの中へ投げ込み急に火口に蓋なし濕たる毛ツトを以て蓋の周圍を卷きて風の入る處を止めて無難に火を消し止めたり

科學の智識（廢物の利用法）

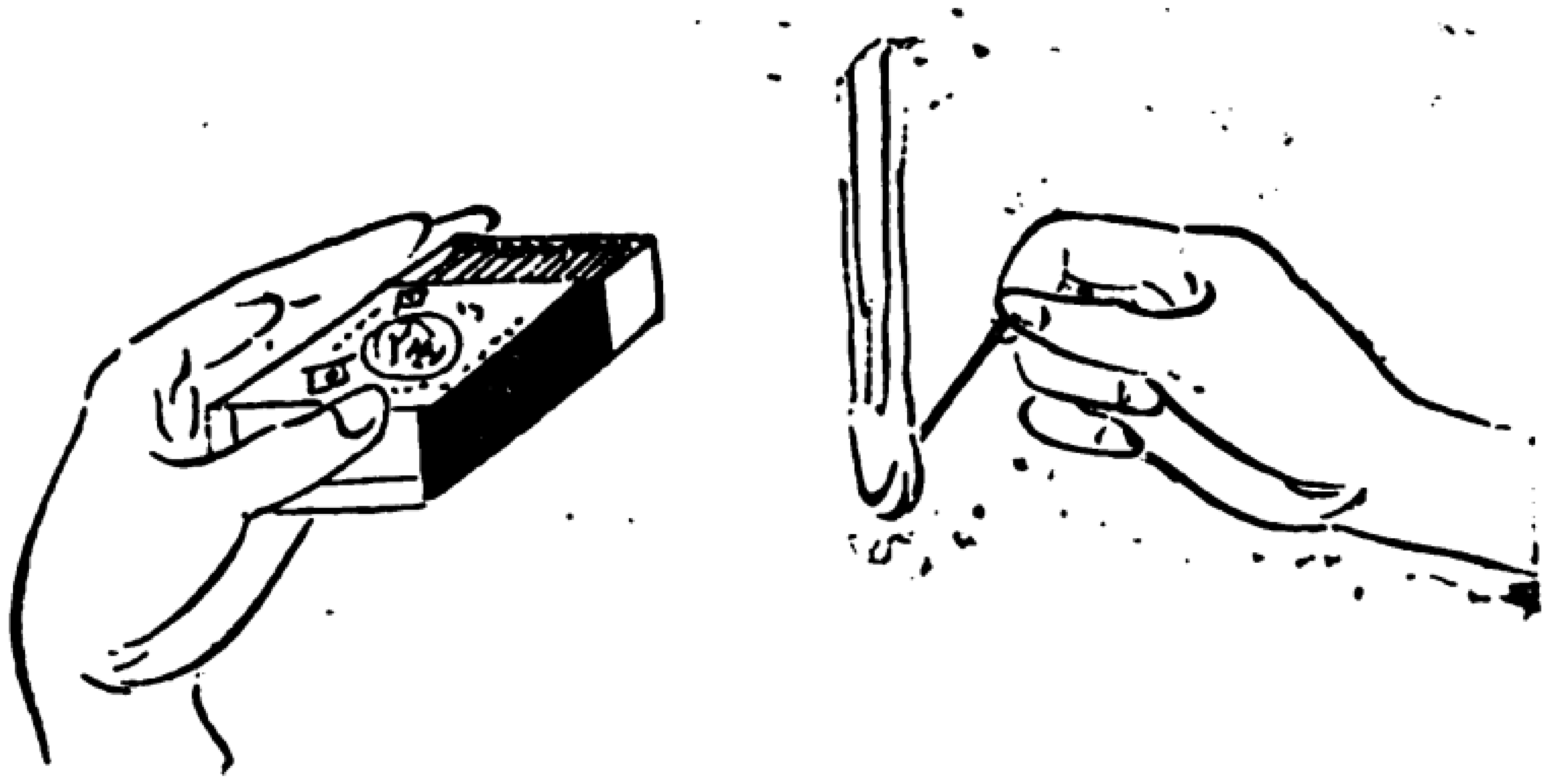
理學士　佐藤鴻南

人智の進み行くと共に、誰しも知る尋常の物を、これ迄知らざりし極めて新奇なる用に充つること發明せらる、天然に作られたるものに無益なるものはなし、動物の排泄物は勿論死後の肉骸は植物を養ふものとなるは皆人の知る處ろなれば、いふまでもなし、彼の處ろ定めず風のまに〳〵吹き遣らるゝ塵が、雲雨を喚び起すの媒となり、また天の色を立派に彩るの効あることも、又よく人々の知る所ろ也、世に不用の物あるが如くに見ゆるは、其實不用なるにはあらで人智の未だ其の用法を知らざるが故のみ、文明界製造の全歴史は即ち廢物利用の進歩なり、今日の不用物は明日の富源となるやも知るべからず、曾て三世紀ほど以前にポイルといふ人一書を著はして曰く今日人類が充分に使用法を知れるといふ天然物は、未だ一つもあらざるなりと論じたり、十七世紀に於ける此の眞理は二十世紀の今

日に至りても同じく同一の眞理を含める言葉として用ひらる丈け世の中は未だ進まざるなり、尤も人智の進歩は此の間に於て多くの無用物を價ある有用物となせるなり、或る學者の曰く物の役に立たぬと見ゆる塵芥も學術の進歩によッて世に利用の道は開かるなり、即ち役に立たぬ地位より引き上げて、金銀と同列に立たしむるは是れ科學の力なり、第一の適例は普通の寸燐なり、人生の生活に必要欠くべからざる此のマッチが今より七十三年前まで世に知られざりしとは、多くの人の信じかぬる程のことなるべし、昔の人が火を鑽り出す爲めに如何に苦辛し、又之を保存する爲めに如何に注意せしが、西歷千四百二十九年頃即今より四五百年前には頸に燧袋を掛けたる人は、其の時代の進歩したる人として貴ばれたりき、第八世紀今より千百年前の頃亞剌非亞人にてケルといふ人燐を發見せしが、一たび忘れられ、千六百六十九年に至りブラントといふ人によつて再び發見せられたり、其の時の燐は人尿より製造せられしが、其後更に簡易なる方法發明せられ、今まで顧みられざりし動物の骸骨は、マッチ製造に必要なる原料となれり、次で千八百三十三年に至り始めて世界に燐マッチの製造を見るに至りしが其製法は甚だ粗惡なるものにて製造するものも使用するものも皆其の毒に苦しみたりき、千八百四十五年に至り、澳地利の都維也納に住めるシュローテルなる人燐を油にて煮る方法を發明し、此に初めて赤色燐のマッチ製造法起りぬ、古き骨より出でゝ、日常生活の上に如何に驚くべき變化を齎し來りしか、抑もこのマッチの發明ある前には男子、婦人、小兒が各火と光とを得る爲めに一年平均九十時間を費せしと云ふ、然るにマッチの發明ありてよりこの時間は全く不用に屬して人生に益を成す事となれり。この時間の經濟を我が國の人口に當つれば一人每に九十時間は十日の勞働時間となるべく勞働賃銀を平均四十錢として之に代ゆれば人每に四圓、これを四千萬人につもれば實に一億二千萬圓の節儉をなし得たるなり。一ッのマッチにしてこの如し、これを萬物に應用すれば驚くべき事なるべ

し或る製造場の排棄物にして他の工業の材料として用ひらるゝもの甚だ多し、襤褸は此變化の著るしき一例なり、木綿及びリンネルの襤褸は紙を製造する主要の原料なり乞食の觸るゝを厭ふ程のものさへも神聖なる愛情懇切なる友情を送る爲に用ゆる紙となる、著名なる獨逸の化學者ツピヒ男は石鹸を以て各國民文明の程度を計るの尺度となせりこれ素より理ある言なれども尙ほ木綿リンネル襤褸購買の競爭が最も明らかに敎育の普及文學の嗜好を表するに加かず千八百八十七年以後の統計は未だ得ざるも其の年各國民の費す紙の量は英國一人に付き十五斤合衆國十二斤獨逸國十一斤佛蘭西國十斤伊太利國五斤の割合なり、毛織物の襤褸に至つては

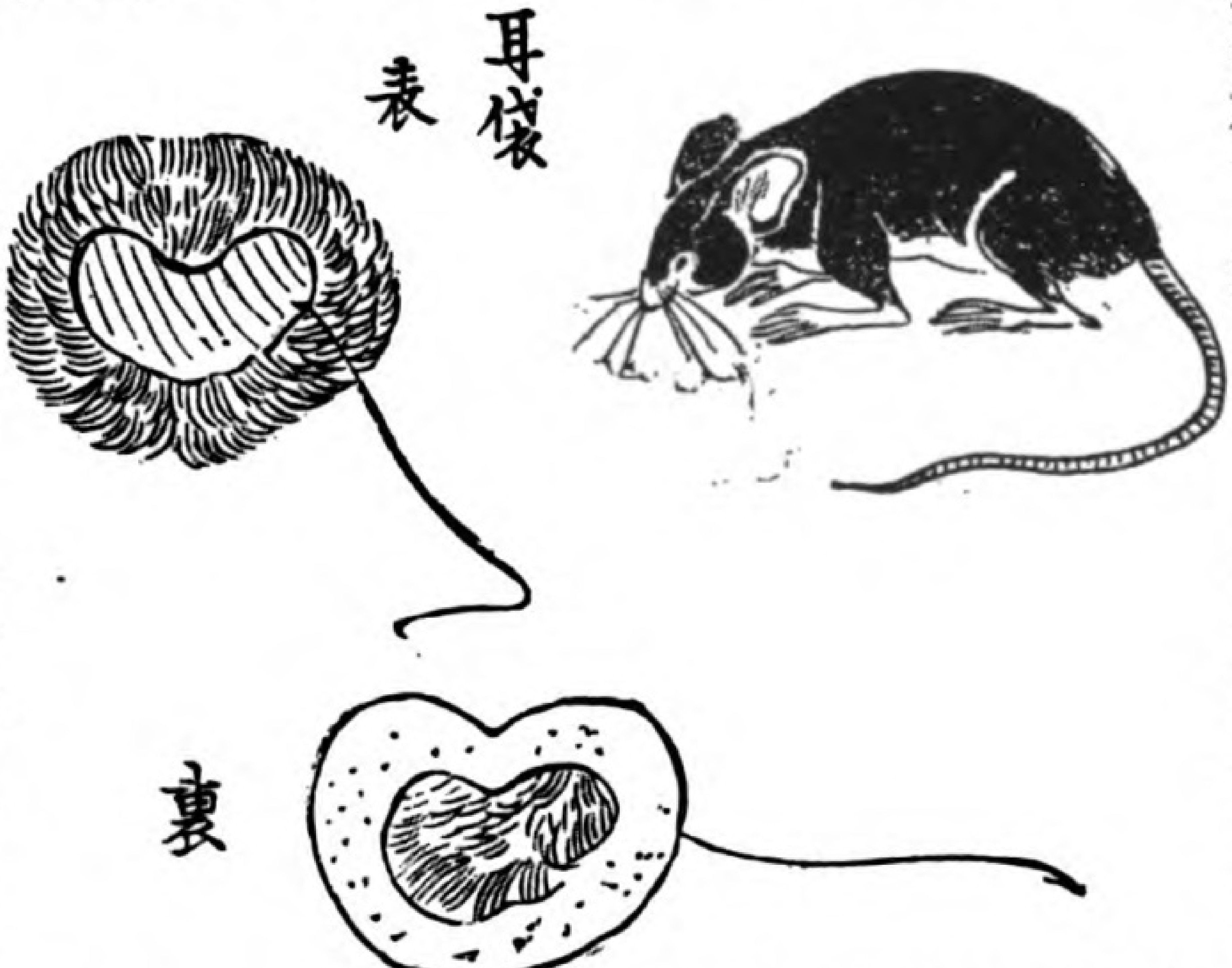




最後の用をなすまでには更に多くの日を經更らに多くの道を行くなり、英國倫敦にてはパツトレーデユーベリー、リーヅなど云ふ大なる襤褸市場ありて、歐羅巴各國より集り來る破れたる臭き古着は化學作用によつて再び世の流行を支配する美はしき織物となつて現はれ來り外見と經濟を考ふる社會一般の需用に供さるゝなり若し其の襤褸の少し大形なる物なれば「つくらひ師」「仕立直師」「細工師」の手に渡さるなり、「つくらひ師」は破れたるを縫ひ合せ原の如き形となし「仕立直師」は破れ汚れしものを新らしき物に擬へて仕立直し、廉き衣服を求むるものゝ需用に充つ又「細工師」と云ふは、それより一等上の職人にて、古き上衣の裾の部分より、小兒

のズボン或はチヨツキを作り出すなり。若しラシヤの黒服にしてつくろひの出來ざる物或は仕立直しの出來ざる程に破れたる物は之を佛蘭西、魯西亞、波蘭などに送りて下等社會の需用となるべき帽子となす、又英國兵士の古き赤シヤツは、和蘭に行きて勞働者の胸當となり、少しく新しき物は阿非利加に行きてこゝに又土蠻の王及び酋長の威嚴を示す衣服となるなり、かくて再たび用ひられざる程になりて後更に解かれ、漉かれて下等の布となるなり、而して又此の下等の布の古びて再び用ひられざるに至りて爰に始めて形ちを變じて他の細工に用ひらるゝなり、それは蹄や角の屑、或は馬の血液などを混じ、灰や鐵滓などゝ共に鐵の釜にて熔かされ、煮らるゝときはやがて人の目を眩する計りに鮮なるプルシヤ藍となりて價高き衣服の染料となるなり、扨又婦人に必要なる香水の如きもその原を質せば多くは花の油より製せられたるものなれど又酒精を消蒸器に掛くる時に出づる臭き油より製せらるゝものもある、或は厩より流れ出づる液、或は石炭の煤より製造せられたるものにて美はしき額に塗られ其の香氣其の光澤に誇る貴婦人も尠からざるなり、彼の瓦斯製造より出づる煤は川に棄つれば、川を毒し、地に埋むれば地を荒し始末に困るほどの厄介なる無用物なりしが、其が今では最も美はしき染料、最も高價なる藥品、砂糖よりも三百倍甘きサツカリン、又病毒を殺す最良の豫防藥を製するの原料となれり、この如く煤の用法は種々あれども就中最も大切なる用法はアリザリンの製造に用ひらるゝものなるべし、アリザリン（木の根）と煤とを以て赤、青、紫、の染料を製するの方法發明せられてより土耳古、和蘭の大耕作業は全く衰滅に歸せりといふ、これを以てその一斑を知るべし、扨立派なる染料、最も甘き食品にして、此の最も汚き不用物より製造せらるゝことに付きては種々雜多の奇談ありて、中には數十頁を費すとも盡きざるべし、されど、其は後に讓りて玆には一寸目先の變りたる一の話を擧げて、讀者諸君の滿足を買はん。世間種々なる動物の中にて鼠程うるさきものはなし、されどこの鼠も

用ゆれば虎ともなるべし利用すれば大工業を起すの基となるべし、先年東京にてペスト流行の際、病毒傳播の恐れありとて、懸賞にて市中の鼠狩を爲せし事あり引續いて警視廳より令を下し鼠一匹捕獲したる者には金五錢づゝ與ふとの事にて一時は各辻々の交番所の前に三十四、五十匹の鼠を見ざる事なく、一日平均一千匹に上りたる事ありといふ、斯く巨額の鼠を奈何に病毒傳播に恐れありとて、一匹五錢づつの價を拂ふて買入るゝとは政府も不經濟なる事をするものなりとて心ある者は密かに眉をひそめ居たりしが、何ぞ圖らん、この鼠こそ實に廢物利用の好資料にて、寒地の人の耳袋となるものならんとは、鼠の皮一匹にて耳袋一對づつ作れば五錢の物は忽ち二十錢の價を生ず、殊に鼠の皮は柔軟にして防寒具としては尤も適當の物なり、其の當時政府にては日露の戰爭あるものと見込を立て、この廢物利用を行ひしものか、それ共單に耳袋を製造して輸出するの目的なりしか、其邊は知らざれど。兎に角今日滿洲滯陣五十万の將士が、酷寒に向つて耳の落つるを防ぐ防寒の要具は實にこの鼠の利用よりして得たるものにて誠に偶然の賜にはあらざるべし。



右は日本今日の實例に就ての話なるがこゝに又佛蘭西の都巴里の例を話さん、巴里にては動物の骨を投げ入るゝ一の大なる洞穴あり、此所に大なる鼠の殖民地開かれ居るなり、鼠は誰しも知る如く、骨に殘れる肉を食ひ去るものなれば、投げたる骨は鼠の爲に食はれて自然に磨きあげられ、その骨は直ちに燐の製造に用ゆるに適せしむるなり。洞穴を圍める壁の下方には數多の淺き穴を穿ち、鼠は之より入る樣

に仕掛たるものなり、かくてこの穴は三ヶ月毎に大掃除行はれ、古き骨は取出され、新しき骨又投げ入れらるれば鼠は其の騒擾に怖れて穴に引込む處ろを尾を取りて引き出さるゝなり、斯くて製造始まり、鼠が磨き上げたる骨は前記の如く燐の製造場に送れ、その鼠は又皮を剝がれて最上等の手袋となり、その筋骨は煮られて砂糖の製造所に送られ、燒いて石灰となし砂糖を固むる用に供せらる、この如く科學の發明とその利用によつて無用の物が人生の必要品となること寧しろ驚ろくに堪へたりといふべし、科學は實に注意深き細君の如きなり、有用のものを節



し用ひ、無用の中に有用を發見す。彼の街上に落ちたる馬の蹄鐵が取り集められて刀劍となり鐵砲となり、麥酒の樽の輪は紫インキとなる、廣く眼を放ちて見れば天然には一も無用の物はあらざる也、余は讀者が此二三の例によつて假令悉く廢物利用を思ひ立てられずとも、せめては科學なるものは勤儉なる細君の如きものなりとの事を知り、之を師とせられんことを望む。科學の利用は實に人生生活の大方便にして若し世の中に科學の利用なくんば人生はこの世に一日も生息し能はざるものなる事を知り玉ふべし。

（完）

雜俎

女學生と結婚

一栞庵

女學生と結婚といふ問題は餘程注意せねばならぬ問題と思はれます、女學生の婚期は我邦に於て如何なる狀態に在るかを研究するは種々の方面から綜合して見なければならぬ、まづ順序を定めて說き起せば

▲本邦女子の婚期

日本に於ける女子の結婚期は少し早過ぎはし無いかと思はれる、先づ大概の家庭で子女が十五六歲に達すれば、其父母は際物を仕入れた商人のやうに、自分でも奔走を始める、出入る人々にも適當な口かあつたら周旋して與れと賴み込む、夫れで其子女が二十二三歲を過ぎると、非常に落膽して、婚期を逸したものとして悲むやうな事になります。して見ると日本で婚期と認めて居るのは、實際十六七歲から二十一二歲、卽ち僅に五年か六年の短時日をいふので。

▲女子の婚期と修養

婚期は先づ夫れで良いとしても、其肝心な女子が、嫁になるべき資格、卽ち完全な家庭を組織すべき修養はどうであるかといふに現今では唯年齡といふ事にのみ重きを置いて、其修養といふ事には少しも力を入れて居らぬ。恰も東京近在の百姓が成熟もせぬ果物や瓜類を走りと稱して賣る慣習のあるのと好一對の話で、之れを各小學校の上に於て調べて見ても直に了解される高等小學の女子部となると何の學校でも著しく生徒の數が減少して、一年二年三年となると十のものは平均三か四となる、卒業といふのは僅に其一二に過ぎ無い。尤も三年の頃から他の高等な學校に轉ずるといふのもある、小學校だけはといふので先づやつとの事で卒業させる位、一槪には言はれ無いが、其多數は高等科も三年位にして退學させ、先が短いといふので針仕事の稽古に遣る、家事の見習ひをさせる、少し都合のよい處で挿花、茶の湯の稽古でも一通りさせるとい、

のが關の山、其内忽ちにして婚期に入るといふのであるから、夫れ位に手廻しをしても、なか〳〵急がしいのであります。斯樣な風であれば勢ひ家庭を組織すべき一身の修養は不完全を免かれない、所謂未成熟の走り物に過ぎぬ事となります。

▲婚期と高等女學校

婚期が餘り短か過ぎるので、女子の完全なる修養を積むべき時間が無いのは、誠に憂ふべき傾向で、之れが爲めに國家の蒙りつゝある損失は非常に多いでせう。婚期が短いといふ影響は女子の修養を重んずる家庭にも餘程の壓力を以て其力を及ぼして居る爲めに、小學以上の高等學校としては學年も三學年を最長期とされて居る。此以上は最早や婚期といふ問題の外の或事情を有する婦人の修養所として認められて居る。小學以上の高等學校に入學させて、幾分か女子一通りの教育をしやうといふ父兄も、矢張り婚期といふ慣習に支配される爲めに、小學高等科二年生の頃から大急ぎで轉校をさせる、差引高等小學の學年に一學年を加へた位の處で、高等女學校出身の肩書を付ける事にのみ盡力する樣になります。

▲婚期を延長すべし

歐米では餘程此點には寛大なもので、平均して婚期は廿二三歳以上になつて居る、十六七歳で結婚するなどといふ事は、下等社會か、或蠻地にのみ行はるゝ風習と言つてもよい。完全な家庭を有する國家が果して健全にして幸福なる國家であるとすれば、其家庭を組織する婦女の修養に重きを置くべきであります。若し婚期を設定すべき必要がありとすれば、廿歳より廿五歳までを以て婚期とするが適當でありませう。今小學の學齡が滿六年として七歳若しくは八歳とするも廿歳までには、十二三年間の修養時間を有する事になります其内より小學校の修養年限八年を差引いても、猶ほ四五年の時間を餘すやうになる。假令今如何なる大教育家が顯はれて、女子教育の改良といふ事を唱へましても、婚期といふものに對する舊慣が改らぬ以上は、到底其目的を達する事が出來ますまい、此舊慣を俄に破

壊しやうとするには法律の力を假り來るといふより外に致方は無いでせう。

▲篤學者と婚期

志を立て、學科の深奥を究めたいといふ婦人は、先づ結婚といふ事を度外に置いて掛らねばならぬ、これは幸か又不幸かそれは別問題であるが、過日も女子高等師範卒業生の數と其内の結婚者未結婚者の數が見へたが。結婚者の數は驚く程少くなつて居りました。夫れで一般社會からは、或高等な學問を婚期云々に係らず攻究しやうとする婦人は、極めて不具者か變り者かの樣に冷視せられ、隨つて自分も意地になつて結婚問題を輕視するに至る風があります。それは兎もあれ今後は本邦にても、完全な修養を積んだ婦人を以て、健全な家庭を組織するやうにしたいものです。

秋の佳節

朝來好天氣日麗かに風和す、上野、日比谷の公園、逍遙、客少なからず、淺草公園は、奥山の見世物いづれも繁昌也、手軽飲食店相當の客あり、彼岸の中日とて汽車の便を借り、都近くの佛閣に參詣する善男、善女、いと多かり、夕方の日沒參拜は、諸處の高臺に念佛を唱へて手を合す老人も見ゆし

今の女學生

中川愛氷

◎女子大學校の生徒曰く、高等女學校、高等師範までは、良妻賢母をつくる所なれど、女子大學はそれ以上なりと、珍言と謂ふべし。

◎無趣味なる家庭を離れて學校に入れる彼等は、良妻の、賢母の、理想の、を不消化的につめ込んだ結果、それをお茶漬と同一に心得、學校の門を出づれば、良妻賢母はどこへ行く、理想は行衛不明となれる也。

◎先生曰く、女學校は感化院にあらず、生徒曰く、女學生は浮浪人にあらず、畢竟女學校の存在を認めぬ言也。

◎校舍の設立には十年の苦心を費し、教育の本旨は開校以來滯りなく忘れたるが、今の女學校の十中八九也、其結果は、無用の藝を覺えさせ、能く世間に囀らせるを優れりとなす。

◎大道を大股にあるく女學生を見て不快に感ずる人は

女學校を燒くに若くなし、女學校は、この不快の人物を造る處なり。

◎失禮かは知らねど、女は男に比べて無器用也、毎日の飯にコゲを拵へるのも無器用の一例なり、茶を點てる、花を活ける、琴を鳴らす、機を織る、物を縫ふ、庖丁を取る、皆無器用なり。

◎女を敎ふるには、温柔に仕立て、用意を密ならしめ、學藝を覺えさするやうにせばよし、無闇に良妻の、賢母の、貞操の、理想のと、振舞はすから、極めて面倒となり百日の説法、あたら口に風を引かせたるのみ。

◎學問する女生、今少し言語に注意を拂はれたし、言葉の美術的に行かぬまでも、アラ宜くつてよは、あまりよろしからず、應接の侮慢的なるは以ての外也。

◎服裝は敎師も脊廣の洋服なれば、生徒もお太皷の帶にて差支なし尤も一般に用ひ來れる袴に靴は、外觀も見苦しからず、進退に便なり、故に印刷局、郵便局、電話交換局、砲兵工廠等に通ふもの、皆この風采を學ぶに至れり。

◎學問なき女は濟度し難し、されど學問を鼻の先にブラ下げて、得意なるは猶わるし。

◎女學生の攻擊さるゝは、其罪女學校にあり、女學校の敎授に無用の口數多くして、生徒を輕薄に導けるに因る。

婦人と理想

高瀬文淵

▲日本婦人現今の地位

日本の婦人は現實といふことにばかり重きを置き、理想といふやうな高上なことには更に注意せぬやうですが、さうかと思へば、一方には婦人の地位を高めることに熱中して、種々の方面から其の問題を研究して居る者が多いのやうです。

婦人の地位は、實に今よりも數層の高い處にあられればならぬ。今の狀態では到底滿足に幸福を受けることは出來ぬので、どうでも其の地位を引上げて相當の處に置きませんでは、その弊を受けるのは、獨、女子にのみ止らず、社會一般の狀態を改善することが出來ません。

社會は男子ばかりを以て組織されたものではなく、その一半は女子を以て編成されてゐる故、婦人の地位が卑いときには、社會は片輪になつてしまつて、到底圓滿な狀態に進むことはむづかしい。進步といふことは、男子も女子も等しくなければならんですが、獨、男子ばかり前進し

て、女子が隷屬するやうでは、社會は已の形になつて墮落してゐるばかりで一齊に其地歩を進めることは出來ぬでせう。

▲家庭に於ける婦人の勢力

男子は多くは外に出て繁雜な仕事をしてゐるので、家庭は實際女子に支配されてゐる、その家庭の王者たる女子の地位が卑かつたならば、随つて其家庭の品位を下げる道理です。

すでに家庭の王者であるから、その勢力は小兒の教育の上に及び、有形無形の感化を以て、次代の國民となるべき者の進歩を阻害することになつては、最早、婦人それ自身の問題として置く譯にはゆかず、國家の利害問題として、どうでも滿足な解決を與へなければならん。

▲法律の保護

國家の法律は、婦人の地位を保護することに盡力し、すでに、身分法の上からは、容易に離婚の出來ぬやうになり、財産法の上からは、夫が專斷に妻の資産を處分することのできぬ次第になつたが、これだけではまだ十分に女子を保護することは出來ない。

▲女子の資産

そこで、社會は、女子をして多少の資産をもたせることが必要になりました。今日の狀態では、資産を保護する法律よりも、先第一に保護すべき資産が女子にないから、父兄は女子に多少の資産を持たせることに盡力すべきであるが、婦人の勢力が今のやうな狀態では、その資産を維持してゆくことが困難で、夫たる者をして一指だも其の資産に觸れさせないといふことは、容易ではない。

▲女子の教育

そこで社會は、女子に高等の教育を受けさせることになつたのです。作去、今の一般の女子教育は、只管、良妻賢母をつくるといふ目的なので良妻賢母たる資格があつたら、故なく男子から離婚されることはないでせうが、そればかりでは婦人の地位が十分に高められたといへない。

女子教育の行はれた結果、良妻賢母を得ることはできるが、これは男子を主位に置き女子を副位に置いた從來の社會組織から割出したもので婦人が只社會の副位にあるといふばかりでは、その地位は、十分滿足な境に達したとは言はれません。容易に離婚の宣言を受けないといふ安心を得たばかりでは、まだ榮譽ある地位に上つたのではないから、出來得べくんば、男子をして、寧ろ婦人を欽仰させる位にしたい。

▲財産果して賴むに足るか

さて、男子の欽仰と景慕を受けるまでになれば、女子の資産も自身の手で擁護することが出來るのですが、今の一般の妻女のやうに、その夫から無限の勢力で支配されてゐるやうでは、たとへ法律の保護はあつても、女子の資産は安全に維持してゆくことは出來ますまい。

それに、財産は限りのあるもので、いつ事情ができて、浸くなつてしまうかも知れん。さういふ賴みかたい財産を賴みに婦人の地位を保たうとするのは、實は危險極まる次第で、一朝資産を失つた後は、忽、非常な窮厄に陷らなければなりません。

財産は婦人の爲に有力な保障に立たぬばかりでなく、資産に固執するのは寧ろ一般の婦人の習ひで、この習俗はたまく以て婦人の地位を引下げて、泥塗の底に墮すといふ危險な性質を具へてゐるので、これは、婦

人を保護する仕方の上から見るときには、考へものと謂はねばなるまい

▲婦人が財産を重んずる原因

畢竟、財産は、婦人が其の子女を養育するに日夕缺くべからざるもの故、婦人が財産を重んずるのは餘儀ないことでせう。子女を養育することについては、夫にもまた責任はあらうが、實際事に從ふは妻女ですから婦人が家を思ふ情は、これを男子に比較して非常に深いです。

▲婦人の體格の弱き理由

婦人が子を育てるといふ役目の上から、自然に物質的生活に心を役するやうになつたのは、實に氣の毒千萬な次第で、これは男子が十分の同情を以て憐れんでやらればならぬ譯です。

この物質的生活の中心に立つ一般婦人が、財産にはかり目を着ければならぬ役廻りになつたのみか、彼等は子女に乳を與へ、その心血をかきむしられる結果として、肉體的にさへ充分に發達することが出來ないので、その身長は男子に劣り、その體力も男子に及ばず、しかも、そのかぼそい身體を役し、そのかよわい體力を用ゐて、尙且營々として子女養育の勞に當らねばならんのである。

婦人が懷胎すると同時に、齒の健康を失ふといふのは、どういふ原因から出たのであらうか。

その齒の主成分たる石灰は、胎兒の發達を補はんが爲に消費せられ隨つて、齒の弱くなることを免れかたい所を見ても、婦人の身體が子女の爲にどれ程の害を受けるものであるかが判りませう。

▲婦人の王國

體格では、到底男子と對等の地位に立てぬとすれば、婦人はそれ以外の天地を見出して、こゝに立脚の根據を定め、その王國の女王となつて、下界に照臨すといふ手段を取る外はない。

その、さもしい、見すぼらしい家庭に一生を埋めてしまひ、營々として貴重の光陰を送るのは、決して上乘の策ではない。

されとて、家庭を見捨てよと勸めるのではない。その可愛い子供やいとしい夫のある家庭を天國のやうに暖め、物質の苦痛に充ちたるこの下界の缺陷を補ふために、婦人は一個の天使となつて家庭に臨むといふことが必要である。

▲物質界と理想界

この世界は、理想と物質との二つを以て造られてあるので、人はこの二つの天地に跨つて自由な生活をするがよい。

物質世界とは、即、目で見、耳で聞く、この世界のことですが、纔に目をねむつて默想すれば、そこに極めて美しい天地が存在してゐるのです。此の物質世界では、時として人と人と相戰ひ、相食むことがあるのですが、彼の理想の世界には、かりにもそんなことはありません。

▲有限と無限

物質世界では、何故に、人と人と相食むでせうか。それは、物質の分量に限りがあるからです。限りなき人慾を以て、この限りある物質を爭ふ絡には、互に相奪ひ、相食むやうにもなるのです。

この有限の物質と對立して存在してゐる無限のものが、即、理想です。人の思想には、限りがない。眼を擧げて見れば、直に幾千萬里の外の天地が、胸中に映る。眼を閉ぢて觀れば、直に幾千萬年の前後の世界が

心の中に湧いて來る何と不思議ではありますまいか。

▲肉と靈

物質生活から見れば、五尺の身體に過ぎんのですが、理想生活から見れば、實に人間の精神は廣大無邊のものでせう。

人には、かやうに物質的の身體があるばかりでなく、また理想的の精神もあるのですから、婦人はよろしく、その物質の牢獄を脫して、この理想の天國に遊ぶがよい。

▲理想の影（一）

彼の音樂を見なさい。あれは、天國の理想の影を人の音聲の上に現したものですから、おぼろげながら、無限の理想を窺ひ得るのです。

たとへ山海の珍味にせよ、飮食物は、純然たる物質的であるから、一つものを二人以上で食ふことはできぬが、彼の音樂は無限の理想を顯したもの故、一人で聽くのも數百千人で聽くのも、その樂みに變りはない。

▲理想の影（二）

繪畫もやはり、理想の影を物質の上に現したものです。これを萬人で翫賞してもその樂みの盡きない理想が如何ばかり人に歡樂を與へるか、これを見ても判るのです。

▲造化天工の妙

この理想は、そもそも何者が造つたでせうか。春の朝に咲誇る櫻を見れば、そこには固有の理想があつて、幾たびか我をして嗟稱せしめねば措かん。秋の夕に染出だす紅葉を見れば、そこにも亦其の理想があつて我が感情を振蕩せしめるに足るに

▲物質と人慾

物質的の生活資料には、限りあるが、それを限りなき人間が集つて取り合ひ奪ひ合ふので、今の社會の人々は、物質的の餓鬼となり奴隸となつて狂奔し、叫びの聲を擧げてゐるので殆ど救ひやうのない混亂の狀態にあるのです。

この物質的文明の傾向は、愈社會を競爭の渦中に投じ去るのみな、さうなくてさへ斃れる婦人をして非常に苦しめで居るのですから、よろしく是を救濟する方法を講じなくてはなりません。

◎女夫波を讀みて

妾は小說が大好きで以前は紅葉さん露伴さん涙香さん、弦齋さんの御作をよく拜見したものでございますが、近頃でよい御作だと感心いたしたものは蘆花さんのほとゝぎす、と撫汀さんの女夫波でございます。どちらの方もよく婦人の眞情が顯はしてございまして誠に私共の若い折りにあつた事柄を其まゝ寫されたのかとおもふばかり、一々考へ當る事ばかりでございます、これまでの小說はどうかすると猥らな事があつて若いものにはいかゞと思はれるのが多いのですが、この小說に限つて猥らな事は少しもなく、若い女が讀んで差支ないばかりでなく、前途の事に就ていろいろ戒しめになる事があらうと思つて妹などにも見せて居ります、どうか女學世界にもこんな小說を時々出して下さい、

娘を持てる母親

時局彙聞

內親王殿下の御近狀

あはれ畏きかな、高輪御殿にお在します常宮、周宮二方の姫御子には、竹の園生のやんごとなき御身なるにも拘らず、征露の大御いくさに就きて、甚く御心を煩はさせ玉ふと洩れ承はるだに、いとも畏き事なるに君と國とに身を獻げたる將卒の英靈を永遠に祀らせ玉はん大御心より、御邸內に忠魂堂と云へるを設けさせられしと承る事の勿體なさよ。

忠魂堂の由來　抑も此の忠魂堂の由來につきて御養育主任佐々木伯爵の語られしを傳へ聞くに、同御邸は元細川家上屋敷の在りし所にして、今は昔、元祿の忠臣義士と呼ばれたる大石良雄以下十七名の者、當時暫らく同家に御預の身となり、後こゝにて切腹を仰付けられたるが、在りし昔の俤こそ變はれ今も尙ほ邸內に其の舊跡ありて、傍らに四阿の設けられあるぞ、不圖兩殿下の聞召して以來、忠臣の事蹟を賞でさせ玉ふあまり、御思召を以て寸餘の木標に其氏名を御手書遊ばされ、四阿に祀られしものなるが、今年木更月征露の事起ると共に召に應じて走せ參じたる將卒の內、此の附近に宿舍せる者は、同御邸內に大石等の舊跡あるを聞傳へて、出征前拜觀の光榮を得たしと願ひ出づる者多く、而も是等の將卒は過去の忠臣義士を偲びて國敵征伐の此際いかで君に報ゆるの心大石等にあやかりたしと口々に言ひ合ひけるが、いつか四阿に祀らせ玉へる御手書を拜し奉りて、こは勿體なき事なり、かかる難有き有樣を見るに付けても、我々は君の爲め國の爲め古人に劣らぬ勳功を致さでやはと、兩殿下の御高德に感泣したりとなん、夫より端なく此事の世間に洩れて、誰云ふとはなしに「忠魂堂」の名高まり、剩つさへこたびの戰役に兵勇の戰死を悼ませ玉ふ大御心より御學問の餘暇戰死者の氏名戰死の場所、月日等を其都度交々御手書遊ばして之を四阿に祀らせ玉ふに、忠魂堂の名愈々高く、今日にては四阿にては狹隘なれば

舊御座所の一隅に階段を設けさせられしとなり、あはれ戰死者の名譽はもとより、其の家族の面目いかばかりぞ、捧ぐべき辭もなからんかし。

御日課　今ま兩殿下の御日課を承るに、毎朝五時御起床遊ばされ、御食事前に御邸を御散歩遊ばし、八時三十分より御學問所に入らせられ、午后二時まで、歷史、修身、文章、語學、算術、地理、習字、國史、繪畫、音樂、化學、漢文等の諸學科を修め玉ふとぞ、御教授役には下田歌子、三田守眞、堀江義子、坂正臣、野口小蘋、納所辨次郎、佐野安、秋山四郎の諸氏上り居れるが、お二方とも美事なる御成績にして、午后よりは又た以上の學科につき御復習あそばすとの事なり餘りの御勤勉にはおつきの人御健康に障りはせずやと窃に御心配申上る程なりと承はるぞ、いと畏し。

郡司大尉の夫人

去る頃英國軍艦アルゼリン號が北方より來りて函館に寄港したる時、艦長ニウゼント氏は我國民に厚き同情を寄するの人とて、訪問の一記者に對し、今露國に捕虜と成り居る郡司大尉及び氏が親しく見たる大尉夫人の消息に就て、語つて曰く、

郡司大尉一行が捕はれたとか、占守嶋の婦女子が虐殺されたとかいふ風說が立つて、内地の方は心配されたさうですが、實に御察し申します、併し御安心なさい、大尉を始め會員の家族は皆な無事ですから……

私共は八月の三日占守島へ軍艦を寄せ、上陸致して報効義會々員の家族にも御面會致したが、當時島に殘つて居るものは婦女ばかりでした、彼是する内に郡司大尉の夫人にも面會致したが、大層親切な待遇を受けた、四方山の話の序に「大尉等の一行は何地へお出になりました」と尋ねしに、夫人の答は唯だ「北」へと云はるゝのみで、其の行先に就ては何とお尋ねしても同じ樣な御挨拶計り繰返すに過ぎない、餘り執拗くお問ねするも失禮故、話は是で止めましたが、仲々凜々しい御婦人で、男勝りの御氣象は自ら面に顯はれ、此位

膽力ある婦人でなければ良人の留主を守り會員の婦人等を統一してゆくことは出來まいと感服しました、勘察加の露人が此島を侵略し家族等を虐殺した抔の事は全く虚説で、私の行つた當時家族の方々は孰れもピン〳〵して夫々働いて居られました、一體勘察加にはチーゲルの砲臺といふのがあつても、僅か二百餘名の守備兵が居る許り、其上勘察加には海を渡るべき自國の船がない、小さい漁船位はあつても武器糧食を搭載する丈の船は沿岸に一艘もないですから、占守島の占領など思ひも寄らぬ處で寧ろ近頃食糧の欠乏に苦しみ土人の如きは却て日本より攻めて來はせぬかと安き心も無い位ですから占守島の虐殺などゝは全く懸念に過ぎません。

扨て大尉一行の行衛は「唯北へ」と大尉夫人の言はれた許で誠に要領を得なかつたのですが、九月二十七日勘察加を出發する三日前、即ち二十四日にペトルパボルスク市の長官から郡司捕虜の事を聞いたので、扨はと一驚を喫しました、自分は郡司大尉は漁業者であるからと言つて釋放を懇願して見たが、長官は軍事上の捕虜と認めてあるからと言つて頑として應じない、尚ほ再三再四引渡を乞ふたのでしたが長官は遂に承諾を與へられないのです、併し私の辭する時長官の言ふには「大尉は捕虜としてあるが、決して虐待する樣な事はない、場所こそ淋しい處だけれど、手厚く扱ふから安心されるやうに」と云ふ事で在たのです、大尉の收容されてゐる場所はペトルパホルスクより十哩を去る燈台內で、巖石峨々たる上に築かれたもの故、一帶に此地方は寂寞を感ずる計なのであります、けれど長官が確と受合つたからには大尉の虐待を受ける事は萬萬無いと信ずるし、又た虐殺された抔と云ふは全然虛說であります云々。

悲劇の極

近刊の讀賣新聞は獨乙新聞に見る所なりとて摩天嶺附近の激戰中重傷の爲め戰線外に取殘れたる日露兩士官が斷末塲に於ける對話を掲載せり眞に是れ悲劇の極の喜劇にして一讀同情の淚に咽ぶ者あり、

硝煙空を蔽ふて見渡す限り滿洲の野にも山にも殺氣充

ち充てり●露士官（地に倒れながら聲も枯れがれに）ア、苦しい○日本士官（敵士官より一二メートル離れて横はれり確りせい●露其處に居るのは誰だおいらの同僚か○日汝の同僚ではない、僕は日本軍の第十一聯隊の中尉て何某と云ふものだ●露オ、……汝は、まだ動くことが出來るのか○日自分は傷は思た程深くない然し右足はモーかなはぬ●露僕は胸をやられた、汝は露西亞語が話せるのか、汝は近邊の人に援助を求むる意はないか○日だめだ〳〵、近邊には人氣すらない、自分の軍隊は先きに進んでいつた、自分の傍には一二の死骸が横はつて居るばかりで誰も自分を認めて呉れるものはない●露ア、……二人は共に此世を去らなくてはならぬのか○日汝は、まだ氣が確じやないか●露二人は互に助け合ふことは出來ぬのか○日自分は出血が餘り烈しかつた爲め、モー寸分動くことは出來ぬ●露自分も胸の邊が岩石で壓せられて居る樣で、迚も動くことは出來ぬ、二人は何程位隔だつてるのか○日三メートル位だ、然し今の自分等の身に　此短距離も三千メートル以上に思はれる。

二人は稍や憂に沈みながら●露汝は何か食物を持て居るか○日道明寺を少しばかり持て居る、好ければ投てやらう。

日本士官の投げたる道明寺は露國士官の一メートル手前に落ちたり●露ア、望の綱も切れ果た、今は武運の程を祈るより外はない。

露士官祈禱をなす、二人は三十分許身動きせずに横はつて居たが●露（不意に）汝は既に死でゐるのが○日ナニ、死でたまるものか●露モー晝だらう○日まだ〳〵二人が知己となつてから三十分しか經ちはせぬ●露自分等二人の中で、何方が早く息を引取るであうか○日確かにそれは僕だ●露どうして、汝は、そんなに能く露西亞語が話せるのが○日自分は今を去る二年前聖彼得堡の兵學校に在學して居つた●露（聲振り立て、）汝は教授リシマノフを知つてゐるであらう○日知つてるとも●露教授の令孃ガブリロウナは僕の妻だ○日僕も一度師に連れられて居た令孃を見た大變別嬪だ●露ほんとだ、僕の妻は天使の樣に神々しい、彼女は大變僕を愛して居た、若し僕が此地で戰死したことを聞たな

らば泣くどころか必ず死んでしまうだらう。日本士官は少し疑惑の樣子にて○日汝はそんなに思ふて居るのか●露汝は、其を信じないのか妻は僕の名が戰死者の中にあつたならば屹度死ぬよ、マー見て居たまへ○日御免だ〳〵、僕はそんなことを見てゐる隙はない、汝は大層元氣がよくなつたチ●露手足は冷へて固くなるし、指は動かなくなる、汝等は何故滿洲を取らうと思つたのか○日なんだ、汝の方こそ取らうとした癖に●露アヽ……自分の皇帝は廣大なる領土を持てゐらるゝのに……アヽ自分が幼き折に附近の森や麥畠にころがつてゐた樣に此の荒れはてた地で自分は逝かねばならぬのか、妻は非常に自分を愛して居た自分が死んだならガブリロウナは必ず死ぬだらう、チー君、僕の心は妻の心だからチー○日汝は何故そんなに多く問ふのか、一體汝等歐羅巴人は何時も問ふばかりて、答へることがない、僕等は軍人だ戰と死の外に僕等は別に思ふ處はない●露然し此曠野で死なくてはならぬのか○日死は總ての最も偉大なるものだ、自分等が死だとて、まだ自分の後ちには澤山人がゐるではないか

●露僕には一人の子もない、僕が死んだとて露國は何等の利益を與へて呉れない僕の同僚は胸間に勳章を飾り意氣揚々として歸鄕するであらう然し僕に就て同情を表する人は一人もない僕の兩親は既に早く世を去た殘るは妻のガブリロウナばかりだ○日汝は實に女房孝〳〵行だがマー彼女の行末のことも考たがよい●露露帝の嘆辭や世の賞賛は自分にとりては鐚一文も價せぬ○日自分の常に考ふる處は義務の二字だ生死の標準は何時も此二字だ●露汝は妻を持つてゐるか○日自分は出征する際に妻には既に喪服を買つて與へておいた●露人は戰の爲に死なねばならぬのか○日其は僕等にとりて最高の務だ●露恐らく最後の務だらう○日皆ながそうだとは云へない。

露國士官は合掌したアーメン……遂に息を引取た○日(聲を上げて)オーイ露國の大尉……モー彼は息を引取つたと見えるな、ガブリロウナは決して死ぬ處か、必ず莊大勳章を授かつた同僚と結婚するだらう(笑聲)ホントに露西亞人は風ちがひの國民だハヽヽヽ(嘲笑的に目を閉ぢる)

流行の新柄

都下婦人の間に流行する衣裳といへば久しく下流社會の方より起りて、意氣とか粹とか云ふ風に押されたるに、近年三井呉服店にて古代模樣、元祿時代の花形扨は江戸近世の風俗抔と種々穿鑿を盡し高尚優美のものを出して復古を促したるより、流行の源は自ら下流を去つて、上流に移り、殊に其上流にて近來滅切と御殿風の再興を見るに至りたれば、彼の粹とか意氣とか云ひし姿の本元も、今は却て素人を眞似るに忙しき狀となりたり、されば各地の機業家染工家も風潮の赴く所に着眼したる爲め、本年は模樣縞柄染ともに一變して今時の人には目新らしきものを出すに至りぬ。

紋御召、無地御召の類　色合は革色、素鼠、路考茶、鐵色、焦茶、濃葡萄の類多く又流行の無地御召の中には比金襖、移ひ菊、松重など古代の色合をも見受けたり、是等は色目の變りたるに止まり新柄としては見るべきものなし、價十七圓五十錢但し無地御召の紋所に流行の紋縫ひ甚だ釣合よし。

縞御召、風通御召の類　色合は前記御召の色合と變りなく縞御召は何れも地味のもの多く栗皮茶の亂立、三筋に寄縞み、大名其他新柄の類三井白木の陳列品中に見受けたり、價十七圓、風通御召の中松屋にて木目地に色絲を經緯にし菊の折枝を現はしたると路考茶の地色焦茶の絲を以て弓矢に織出したるは人の目に付く新柄なり價十七圓八十錢。

羽二重の類　地色古金茶、濃茶地に古代唐草模樣といふ如何にも寂びたる羽織の裏地は堅氣の人には些と不向なるべし、併し派手好きの向きには胴着の好みにもよるべし、價十圓より十五圓(三井)又同じ色合にて熨斗目縞の裏地は今流行する變色羽二重無地の羽織には移りの好き樣なり、價五圓前後(白木)羽二重の褄重しは近頃の流行にて其色合は千差萬別なりしが是も儀式の衣裳と通常の晴衣等に用ふる區別を爲し錆鐵、焦茶濃葡萄、素鼠と色合も昔に復り上品のものとなりたり(松屋)價四圓四五十錢。

絹絞と高貴織は美しけれども長襦袢か胴着なるべし、價四圓以上高貴織の東コート地是も地味の色を撰みて三井、白木、松屋の陳列場に並べたるが色合は一樣ならず、人々の好みに依るべし價十二圓なり。

三井陳列場にて見受けたる金絲入白の紋御召は何れ高貴の婦人が儀式用の品なるべし、其地紋は往昔内裏の節會に用ひられたる白妙の衣に因みしものなりと或る品評博士は云へり價十八圓八十錢、白木の女帶地は唐織、精好、厚板の類を集めたり地紋は雲の立涌、唐花、唐松、龜甲などにて何れも人柄の品なり其中に潮瀬の鼠地に金絲の段織九曜

と蝶の縫ひ模様は七五三の祝ひ帶に好みもあるべし、松屋が自慢の男女羽織の裏地男ものは小柳繻子平金地に十二支の墨繪模様素にして氣高く、女のも紋羽二重鉛考茶の曙染に花卉の彩色模樣素人には艷に過ぎたり、戰爭に因みたる新柄類の數ある中に三井の博多織男帶地に山形に櫻花・海軍の碇綱を獨鈷に織出したると、松屋にある風通御召路考茶地に紅の絲を以て麻の葉を織出したるとは光線の工合にて聯隊旗に見ゆ、二品共に無理ならぬ所に味ひあり、但し風通織は價十三圓、帶地は八圓以上九圓なり又新柄の中に銘仙は三井に浮織錦城の御召類は白木に米澤の織物は松屋に集りたる狀なり・銘仙は縞柄染色ともに新らしく一時賣盡して今は豫備の品を出したりと云ふ價七圓、浮織御召路考茶の雨絣と綿城御召寂び梅の地に金絲色絲の瓢縞は愛嬌ありて良し、價十六圓、米澤織の大島風通は着尺にて十圓前後の品なるが男女共七分は羽織の好みにあり、米澤琉球子供達の學校着(四ツ身二枚)一反六圓位のものと老幼男女の平生着漣織、二芳織、新秩父の類(一圓五十錢以上二圓五十錢まで)は松屋に多く、被着ものは白木に山を爲せり此外揚樂織の羽織地・是れは書生羽織の新柄にて白木にあり價十圓前後、羽二重古代更紗染價十圓より十五圓、紋羽二重の絞價四五圓、奉書小紋染價五六圓、更紗小紋縮緬十圓前後是等の中に見るべきもの多し、總て絹物は昨年に比して變りなけれど木綿類は軍用の爲め二割餘も騰貴たり、

大坂婦人矯風會の家庭歴訪

同會●●●長林女史は出征者家族歴訪の狀況に就て語りて曰く

「出征家族の救護をなすには先づ生計狀態を取調べればなりません、これがなか〳〵困難な仕事であります、本會では先づ各區役所に行て殘らず出征者の氏名を寫して參ゐりこれを各敎會に分けますと敎會では更に會員の頭數に割付けて殘らず歴訪せしめその結果を本會に報告せしむることにしてありますが、生計に困難なるものほど住所の移動が甚だしいので、區役所の帳面にある番地通りに尋ねて參ゐつても容易に見つからず一軒の家を尋ねるに半日もかゝることがあります、又た一家の狀態を知りますには外面から見たばかりでは分りません、緩々腰を落付て談をして居ります内に女同志の心安くなり先方でも實情を打明けまして初めてこれを知りますやうな譯です、本會では資金が乏しいのと一つは人々の廉恥心を傷れる樣成るべく金錢を恤むことを控へて居りますが、夫れでも見るに忍びずして些少のお金を贈りましたのが二百十六名ありますが、これを見ても家族の救護は世間で聲の高い割合に實際行屆て居ないとが分ります

家族救護の事は萬人その必要を認め居れどもその實行の遲々たるは資金の有無よりは寧ろその生活狀態を調査するの困難なるにあり・婦人矯風會が此の方面に向つて專ら力を盡せるは喜ぶべし、

彙　報

▲**女子大學の第四回秋季運動會**　は天高く風凉しき去月二十二日の土曜日、同校構内の廣場に於て擧行せられたり、生徒諸姉の熱心なる練習の結果は各種の技に顯れて、悉く至妙の域に達し、午前午后を通じて三十二番の運動競技、とり〴〵に趣味の深きを覺ゆ、當日參觀者多く、頗る盛會を極めたり。

▲**華族女學校同窓會の美擧**　華族女學校出身者の組織せる同窓會にては出征軍人遺族慰問並に出征軍人に對し開戰以來會員各自に於て日用品を節し恤兵金を醵出し報國の義務を盡し居たるが戰局も未だ計り知られず堅忍持久を要する今日國民は一層出征軍人をして遺憾なからしめんとの趣旨に基き幹事柴田夫人は大に會員を勸誘奔走したる結果陸軍恤兵部へ五百圓海軍恤兵部へ二百圓尙軍人遺族婦人慰問會へ月額を定めて出金せり。

▲**鎌倉女學校**　白砂靑松風光明媚にして又歷史上名高き名區として知られ東京橫濱の紳士多く別莊を構へて避暑避寒の遊勝湘南第一の地なるを以て日に繁榮を加へ中古幕府の舊跡も再び人煙の稠ならんとするは相州鎌倉の地なり頃日同地の有志家田邊星野の兩氏相謀つて此地に一女學校を設立せり、鎌倉女學校といふ、昨今開校早々にして設備未だ完からずといへども行く〳〵は高等女學校程度に擴張して文部省の認可を受くべしといふ去月二日盛なる開校式を擧行せり。

▲**女生徒の軍服裁縫**　日露開戰以來軍人被服の需要夥多にして之が調製には當路者も晝夜鞅掌しつゝあるが近衛師團に於ては成るべく民間の裁縫力を減殺せざらん方針を採り主として將校家族の組織せる婦人奉公會、下士以下家族の組織せる軍人家族授產婦人會をして之を調製せしめ素人に出來ざるものゝみ裁縫店に請負はしめ居り滿洲の野漸く冬季に向ひ從つて被服の調製殊に多數を要する場合司令部よりは先に文部省に交涉し市內女學校生徒をして該裁縫の任に當らしめんとせしに文部省は熱心贊成の意を表し直に各女學校に諭達したるに各學校の職員生徒は此際何にか女子相應に奉公すべき道をと望み居れる折柄なりければ雀躍して其申込みに應じ早速被服の調製に從事し其成績頗る良好なりと在滿洲の軍人も女生徒の纎手に依り滿腔の熱情をこめて調製したる被服を着し一層溫かき心地するならん。

▲**マギー女史一行の敍勳**　去月廿一日を以て歸國の途に上れるマギー女史一行は五月以來日本赤十字社救護員と共に廣島豫備病院及博愛丸弘濟丸兩病院船に搭じて救護に從ひ克く紀律を守り熟練の技術と誠實の精神とを以て他の及ばざる所を爲し勤勞一方ならざりしが歸國に際し其功勞を表彰せんが爲め上奏御裁可を經て左の通り敍勳あらせられたりと云ふ

勳六等寶冠章
米國婦人　マンタ、ニューニム、マギー
米國婦人　メリー、イー、クラッドウイン
同　ソフイヤ、ジユー、ムエル
同　アリス、ケンメル
同　セニヴホーヴ、ラッセル
同　エラ、ピー、キング
同　ミニー、クック
同　アデル、ニープ
同　エリサベス、アールクラッ
同　アデレーナ、マクレス
勳七等寶冠章

又た赤十字社にても慰勞として一行十名に對し金二百圓宛を寄贈したるに一同は直ちに右金員を赤十字社に寄贈したるに依り同社は一行を特別會員に推薦したりと。

▲**佐世保婦人會の慰問**　佐世保婦人會にては出征軍隊の旅情を慰むる目的にて慰問袋寄贈を計畫し市內有志の婦人間に募集したる處去る七日の〆切までに總數八千六百餘に達せるより一兩日前出征佐世保要塞大隊へ一千五百袋海軍陸戰隊へ一千五百袋、出征小倉師團へ三千五百餘袋を寄贈したる由。

▲**日本橋婦人會の恤兵企畫**　日本橋婦人會にては出征軍士の勞苦を慰する目的を以て寄贈袋を製し、之を各女學校、有志間に配布し物品の投入を請ふの企畫をなせしが、豫想以上の良結果を得たるにより、不日其第一回分を其筋に差出す筈なりといふ。

▲**臺北看護婦人會の作業歌**　南溟の要鎭臺灣の首都臺北にも特志看護婦人會の設けあり、會員久子の物せる左の歌をうたひつゝ熱心に綳帶を卷つゝありとぞ、

袂の衣に紅の、心の色をつゝみたる、高砂島の女郎花、一つ園生に集ひつゝ、眞心こめて卷く布は、日每々々に幾千卷、積たて見れば時ならぬ、卯の花ぞ咲く心地する」かく淸らも温かき、人の情の籠りたる、八十卷布に猛と勇の、譽の傷まき包み、とく癒れてよ増夫ら、前途は永し二度も、三度も起ちて盡してよ、命のあらむ限りまで」御國の爲と一筋に、断る心は野の草も、高嶺の花もおしなべて、まろりおとりのあるべきを、たゞ〳〵おのが天職を、共に盡さむ國の爲め、君の裏に咲き出でゝ、匂はむ時は今なるぞ。

▲海軍將校夫人の作業　佐世保軍港海軍高等官婦人會にては開戰以來篤志看護の作業を開き二月十三日負傷者の同海軍病院に收容せられし以來其度每會員交代にて看護に從事すると共に又た繃帶材料其他の製作に着手せしが開始以來今日迄の成績は合計三千四百四十反一萬三千七百六十卷を仕上たる由元來同病院には常に相當の準備は用意しあるも一時に負傷者の入院する場合には欠乏を感ずる事あるに婦人會の此作業ありしより差閊ふることなきのみか種々として餘裕あり現に八月十日の黄海々戰十四日の蔚山海戰に於て多數の負傷者到着せし時の如き其功最も大なりし由にて蔚山沖海戰の捕虜負傷者は百六十七名なりしが我下瀬火藥の特殊なる効果は其傷部治療に非常の手數を要し一日二百反の繃帶材料とガーゼ二三百反を要せしも服膺の繃帶材料並に有志の寄贈に加へて婦人會の此製作ありしため毫も困難を感ぜざりしとのとなり其他患者床褥用補圍副木用補圍及び砂袋等の製作にも從事して負傷者の爲に盡す所多く昨今は會は引つゞき作業を繼續し居れりと。

▲女子音樂傳習所　なるもの神田區表神保町一番地一ッ橋幼稚園内に設けられたり、同會は主として女子に音樂の素養を得させん目的なりと同所規定の概要左の如し。

一修業年限　一ケ年
一授業時間　每週月水土曜の夕刻三時間
一月謝　七十錢
一敎科目　唱歌、風琴、バイオリン、音樂理論等、

▲翠雲會の筆道通信敎授　筆道の大家多田親愛翁に就きて通信敎授を乞はむと欲する者の爲に翠雲會なるもの起りたれば、由來良師無きに苦しむ地方篤學の子女の便宜を得ること少からざるべし、今同會規則の要點を擧げんに
一、就學者には翁の筆蹟を彫刻したる本會藏版の習字帖を授く
一、淸書は每月三回(五日、十五日、廿五日、)本會宛に帶封又は封書にて郵送すべし
一、郵送されたる淸書は一週間以内に翁の附點加筆を乞ひ直ちに返戻すべし
一、就學を申込まるゝには半紙二ッ折に宿所族籍何誰(戸主)方本人の姓名と生年月日とを詳記し差出すべし
一、月謝は每月金五拾錢(淸書返戻の郵便料は本會にて負擔し)を前月廿五日限りに郵便小爲替にて納むべし

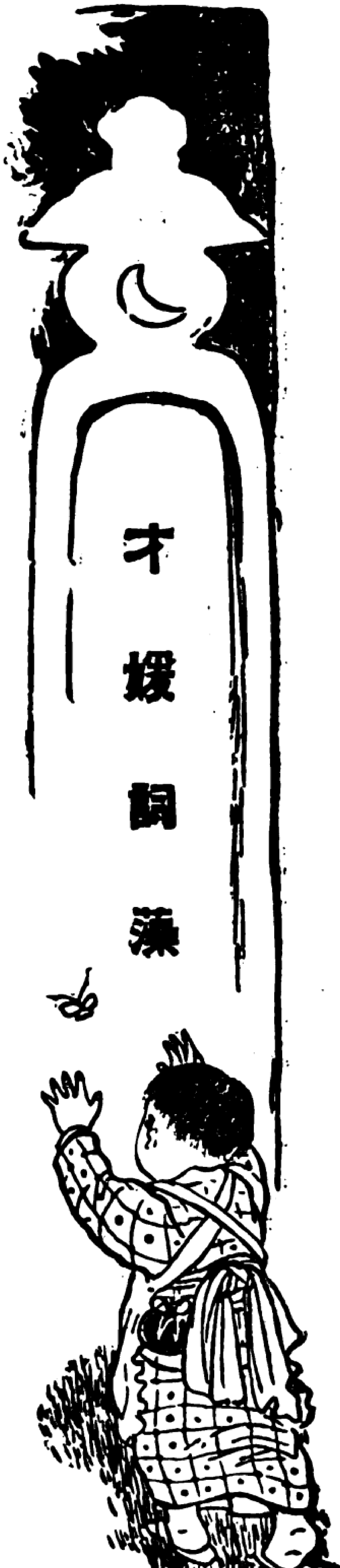
▲女子躰育俱樂部テニス場　高等師範學校敎授可兒德、府立第一高等女學校敎諭松下正典の諸氏に依て曾て設立せられたる女子躰育俱樂部にては今回ローンテニス部を神田三崎町一丁目大成學館内へ轉移し、垂々擴張之由因に上野公園内字東園及び竹の臺は男子部のみのテニス場となれり。

▲音樂部擴張　牛込區白銀町高等女子實業學校にては今回その音樂部を擴張し每日午後三時より風琴バイオリン唱歌を敎授する由。

▲女子美術學校卒業式　本郷弓町の女子美術學校にては去月卅日午前九時裁縫科卒業生の爲めに第六回卒業證書授與式を行ひたり、今回の卒業生は編物科同速成科造花科刺繡科甚繼科にて合せて四十五名なりと。

▲愛國婦人會の新事業　愛國婦人會にては東京支部の一事業として今回出征軍人の衣服を總紋し其收益を軍人の遺族に供し一面遺族に職業を與ふる目的にて昨日より牛ケ淵の本部に敎師を聘し着手したるが當分輜衣拜綺下を受負ひ其筋と直接の取引を爲す由なり。

▲愛國婦人會の布哇遊說　先頃布哇に渡りて愛國婦人會の爲めに熱心に遊說しつゝある鳥井忠文子爵は到處非常の同情を以て歡迎せられ其成績實に豫想外にて八島中佐に馬哇、布哇の兩島に遊說せしのみにて三千の會員一萬圓の寄附を得て歸られし由。



（天）　天長節　　東京日本橋區箔屋町　里村たま子

敵を前に艦を飾りて卓上は
　　菊の盃菊の酒かな

評曰。敵前の天長節、艦隊甲板上の光景を歌ふ。雄師敵を呑むの狀、與國奮起の氣、自ら言外に顯著たるものあり。「菊の盃菊の酒」の語、兼て故事を聯想せしめ得て、天長節を祝するの意、亦十分。

（地）　秋行路　　信濃　高松蝶子

しのび行く勇士の行手風さえて
　　蘆の花散る遼河のほとり

評曰。氣象雄渾、言辭之に稱ふ。
下句最も妙。十四字の中能く秋行路の意を盡すのみならず
又上句勇士の字を承けて、反面に日本古武士の氣象を示す

（人）　天長節　　東京芝公園廿一號番外三吉植方　草間愛子

國ありて二千年來ためしなき
　　君が御稜威を祝ふ今日かな

評曰。眞に征露新時の天長節を歌ひたるもの。意義に含蓄する所なきも、辭氣豪邁にして、長風萬を駕るの槪あり。

秀逸

○○菊　　和歌山市鷹形町三丁目　高内さくら

よそながらみてややみなむ白菊の
　　手折らば露のこぼれもやする

○○菊　　岐阜市櫻町三番戸　鹽谷みつ子

いとせめて匂ひのみをやつとにせむ

たどるも惜しき野路の白菊

丶○菊　新潟縣古志郡とちを清水町　ゆき子

折るもうし折らぬも惜しとしばらくは
思ひに迷ふわかれ路の菊

以上三首、此事を婦人の歌と謂ふべし。愛情非情の草木にも及ふものか。

○○秋行路　東京神田一橋通廿一　高宮安子

都いで丶哀れおぼゆる秋風に
木の葉散る也しぎも立つ也

○○秋行路　足利町　をばな

さらぬだにたもと露けき別路に
虫の音細く三日月出でぬ

○○菊　兵庫　櫻山女史

月さえて虫の音澄みて夜更けて
白菊畑露になりぬる

以上三首異巧同意義とも謂ふべきもの。秋を愛で傷ふに至らざるは喜ぶべし。
聲調共佳。

○○秋行路　宮城縣仙臺市三番町廿四　片桐きよ子

よりそひて語らむ里の川づたひ
小春日和を戀なしにして

菊　熊本　岡島かす子

愛らしき孫にひかれて老の身の
うつらふ秋をしら菊の花

以上二首。用調殊に妙。

○○秋行路　京都府紀伊郡深草村　林戸多美子

野の小路行けども秋の果ぞなき
虫の聲々花のかず〳〵

○秋行路　備中小田郡中川村　髙月靜子

ハチ草の花に紅葉に虫の音に
秋の旅路の面白きかな

○○秋行路　和歌山市新通七丁目十五　森繁尾

秋の野は行手に迷ふハチ草の
いづれ招かぬ方しなければ

○秋行路　奈良縣北葛城郡高田町　保田照子

しかすがにゆくてを急ぐ野路ながら
小萩が下にたゝずまれつゝ

○○秋行路　波津子

八束穗のこがねの浪路はる〳〵と
秋は旅路も嬉しかりけり

以上五首共に秋を寫觀したるもの。就中「八束穗」の什一種異色あり。」

「野の小路」の什に於て着想の奇警を見、「秋の野」の咏、「しかすが」の吟に於て多情を見、「八束穗」の作に於て其喜ぶ所の自ら公人的意思に富むを見る。

○菊　越後長岡千手町杉本平吉方　杉本たい

我庭に時雨ふる日を香も高く
さき出にけり白菊の花

○菊　信濃上田二九六　柳子

知らさばやまがきの菊は今も猶
あるじなけれど霜におごるを

○菊　岩代伊達郡小島村　菅野和子

霜にあひて色もうつらず香さへ
高きは菊の心なるらむ

○菊　信濃上水田郡南小川村　楠つめ

九重に匂へる菊も破れかきに
咲けるも同じ根分けなりけり

○菊　長門　美亞子

梅かあらず櫻かあらず菊それの
清きぞ人の心ならまし

以上五首異趣同巧。第一第三に於て日本婦人の貞操を見、第二に於て出征留守宅に於ける我が婦人の意氣を見、第四に於一大哲理を見、第五に於て我が姉妹の清き心情を見る。

○天長節　長崎縣南高來郡多比良村　中村なか

千代よろづ限りてほくもかしこしな
みいつ日にます今の大御代

○天長節　栃木縣河内郡平石村　武田千歳子

鶴龜も千代萬代と限りなり
何にたぐへむ君がよはひは

○天長節　三河國碧海郡上重原村一一〇　永田きん

千代八千代萬代までも大君の
御代なが〻れと祝ふ今日かな

以上三首、殆と同意義を歌ひたるものにして、前二者は着想を以て勝り、後者は聲調を以て勝る。

○菊　岡山市西中山下　橋本芳子

日の本の御國の姿そのま〻に
匂ひ出でけり白菊の花

○菊　東京四谷傳馬町一丁目三七　濱中ひさ

さまざまの花はあれども長月に
　照りそふものは白菊の花

以上氣格高きこと十丈。

〇菊　名古屋　ふち香

色香めでゝ天つ小神のくちつけし
　うるほひならむ白菊の露

〇秋行路　靜岡縣田方郡上狩野村市山　百合の家笛子

雲にのりて秋の女神のあもります
　小路なるらむ白萩の花

以上二首奇想を以て勝る。

〇秋行路　東京本鄕西片町十番地　佐久間千代

草むらにまじりし花の露や觸れし
　秋野のこみち袖にほはしき

〇〇菊　靜岡　太田美子

月清き秋の夕べに枝をれば
　花にこぼるゝ十六夜の月

〇秋行路　東京麴町　やす子

女郎花桔梗かるかや亂れたる
　野路をたどれば露こぼれかゝる

〇秋行路　駿河大宮町　菊池武子

柿の實の赤き里路をたどり行けば
　夕日流れてあきつむれ飛ぶ

以上意義も趣向も様々なれど、其好歌たるは一也。第一に於ける「にほはしき」の語、第二の下句、第三の「亂れたる」を承けて「露こぼれかゝる」と云へるなど、用語造句の妙を見る。「柿の實」の詠、實景見るが如し。

〇〇菊　島根松江市内中原町　岸崎濤子

行く水も香に匂ふらむ白露に
　流や澄まむ白菊の花

水邊の菊を詠じて、殆と至るもの歟。

〇〇天長節　信濃上水内郡南小川村　楠つめ

旭旗たてゝ今日より今日を祝ふらむ
　惠にあみしもろこしの民

〇天長節　伊豫松山市　勝田秀子

朝露もきえてあとなき國原に
　かゞやきまされ大御日の旗

〇天長節　大阪東區東高津南ノ町一一四　田中常子

空高く日の大御旗ひるがへり
　遼東の假屋君が代歌ふ

〇天長節　京都寺ノ内大宮西　三の宮つゆ子

遼東の野菊を折りて君が代を
　千代萬代と祝ふ今日かな

、○天長節　長崎縣東彼杵郡　大村すみ江

遼陽の城門高く日のみ旗
　かゝげて君が千代祝ふらむ

、○天長節　山口郡熊毛郡呼坂一五　薬村露子

遼東の荒野のはての賤が家も
　日の旗樹てゝ祝ふ今日哉

以上滿洲の天長節を歌へるもの。

、○菊　きみ子

今さらに外國人もめでゝまし
　秋をしめたる菊の花園

、○菊　石見國邇摩郡靜間村　宮内登美子

みしるしの菊も今年はことさらに
　外國かけて咲匂ふらん

以上新體の秋の菊を詠したるもの。

、○天長節　東京芝　秋浦歌子

さしいづる日のみ光りのくもりなく
　輝く御代を祝ふ今日かな

遣句妙。

○菊　河内北河内郡山田村　竹内敬子

御軍に主は徴れて今はたゞ
　荒れたる軒に白菊の咲く

○菊　京都吉田町廿一新城方　渡邊すみ子

もろともにかをりて後と誓ひてし
　きみ今何處白菊の花

○菊　埼玉縣川越久保町　松本しげ

植えましゝ菊のさかりを一枝だに
　銃とりたゝす君によせばや

以上三首出征軍人の家の菊を詠みたり。

○菊　筑前若松山手通二　木村コマ

おのづから匂ふもゆかし山がつが
　籬のもとの白菊の花

○、行路　芝公園廿一號番外吉植方　草間愛子

鳥の音は夢の如くにおとづれて
　山路しづけき秋日和かな

○天長節　東京麻布霞町六　山村くら子

君が代の聲はもれ來る學びやの
　門の御旗に風ゆるく吹く

○菊　上州桐生町幸町　飯田勝野

白菊の花の盛はのどかにて　われも千代ふる心地こそすれ

○菊　安藝國竹原町　松阪梅子

このまゝを繪筆とらんかこのまゝを　歌によまんかしら菊の花

以上の歌それ〴〵の趣あり。

ゝ○菊　和歌山市南甚五兵衛町　木本歌代

あめつちの惠の露の雫より　千歳の菊の香こそあふるれ

「天地の惠」「千歳の菊の香」等の用語、面白し。

ゝ○菊　東京京橋　千代女

われ死なばおくつき處めぐらすに　四つ目竹垣白菊の花

明治の女西行に非さる歟。

○秋行路　河内國河内川越村　櫻井喜子

罪ふかき誰が手すさびぞ露のまゝ　たをり捨てたる野路の白菊

佳調

（天長節、菊、秋行路）

● うらかれし千草をよそに香も高う月にさゝやく白菊の花　信濃　高松蝶子

● 露ながらかざして見ばやこれやこのよはいのふてふ白菊のはな　福岡　房子

● 白に黃に色香は高しきくの花今年はさらに咲きほこりつゝ　信濃　鈴織幸子

● 戰勝の國の花そと菊の花外國までも香しきかな　麹町　すみれ

● 秋たけし片山里の夕暮を與作の馬の遠く嘶く　豐後　大島菊子

● あさり得し茸はすくなし家つとに野菊のはなやをりてかへらむ　熊本　安田文子

● 虫の音も千草も枯れて唯ひとりさびしく咲ける垣の白菊　大阪　波多きく子

● 大君のあれまし日ぞ菊のはな折りてかざゝむ千代のかざしに　伯耆　柏木小はぎ

● 天つ日の御旗かゝげていはふなり君あれましゝ今日のよき日を　羽後　鈴木きま

● このあさけさし出たまひしみ光を仰がぬ人はあらしとぞ思ふ　岩代　菅野ひろ子

● 喨々の笛の音遠くなり果てゝ秋の行路のいよゝ寂しき　秋田　河野幸子

● 和歌山　谷井清子
去年すみし主やいづこかきくちて荒れたる庭に菊の花さく
● 秋田　浦井松子
ゆくさきはこゝもかしこも七草のはや秋ふけて虫の音あはれ
● 伯耆　柏木小はぎ
池水にかげをやどせる菊の花汲みかふたびにいろやあせなむ
● 備後　榊原英子
天地も打ち靜まりて君が代の聲のみ高し千代祝ふとて
● 本所　小嶋靜子
さかりなる雲井の宮の白菊は御代を祝ふる心なるらん
● 仙台　渡部光子
かりそめにゆひし垣根にゆかしくも匂ひ出でけり菊の一本
● 麻布　後　子
日の御旗たかくかゝげてことほきて君の八千代をいのるけふかな
● 宮城　渡邊しげ子
秋の野のおきわすれたる野の菊のゝさきひともとすきぞわづらふ
● 淺草　美佐保子
譽なる我國いくさきくの花外國までも香をや傳へん
● 伊豆　向井ひで
濃紅葉そめし木の間に家見へてみちおもしろき秋日和かな
● 熊本　佐武おり子
斥候のしのび〳〵に行く見ゐて秋風寒し遼東の路
● 石見　宮田登美子
此頃は行も歸るも興ありと秋の野道に語るもろ人
● 廣島　和知廣子

月さゆる松原一里風たえておしへに落つる初かりの聲
● 三重　伊藤あき子
月さえて網引のこゑの遠く遠く秋夜の舟路すごくもあるかな
● 東京　佐久間千代子
こみち行く少女の歌にたそがれて三里の花は月になり行く
● 京都　藤本ひろ子
ゆかしとや牛追ふさとの童等も殘し置きけん野路の白菊
● 京都　藤本花子
おく霜にいろだにかへぬ白菊は庭のおしへとなりぬべきかな
● 肥後　萩野てる子
かの森を左にゆけとおすはりし畑の中路すゝむしのなく
● 三重　伊藤あき子
さげ籠に紫竹みてる少女二人やれ草履かろく坂を下りゆく
● 石見　宮田登美子
彼の國も朝日のみはたなびくらしけふ大君のあれましゝ日ぞ
● 長門　田村喜代子
かりそめに植ゐにし菊の花咲きて文讀む窓の友となりにき
● 長崎　ます子
門毎に朝日の御旗ひるがへし君の千代をば祝ふ今日かな
● 横濱　寺田光子
八千草のちりて淋しき庭もせに香りも高し白菊の花
● 前橋　宮内りき子
暦なき山家も今は旗たてゝ君が代うたふ子等の聲する
● 四谷　むめ子
ふく風に人やきぬるとおどろけば園生のきくの匂ふなりけり

嚴父君の庵りを訪へは柴垣にうき世の塵も白菊の花　遠江　鈴木ゆき

小鳥うつ兄の御供し山路行けば夕日秋にさゝ栗重し　埼玉　小林恒子

鳴く虫も聲をひそめて琴の音に菊の庵の月更けにけり　赤坂　藤井みさを

祝捷の旗さし添へて君が代の千代をば祝ふ今日のうれしき　栃木　木村しずゑ

さりともと千代を祈りて父君が門出にくみの菊の玉水　東京　豊子

召集され征く人見送りてかへる野邊月照らして秋風吹くよ　周防　みよ子

きりきりすあはれになきつ僧行きてそゝろさびしき秋の山家路　岩代　きよ子

かけまくもかしこき國の祝日としつか軒にもみはたひらめく　静岡　大高綾子

草深く詩才埋るゝうらがれのうだの小窓に咲くや白菊　東京　黄田幸子

うまや路に鈴ふる馬のおとたえて紅葉もつ子の雨にぬれゆく　神戸　笹田知節

日の御旗ひらめく風になとめらのかざしの菊もかをる今日かな　駿河　菊地武子

なき母のをくつき近く植そへし黄菊白菊花咲き出ぬ　静岡　伴野[illegible]子

むしのねも名にしおひぬるなゝくさもかれて淋しき秋の野路かな　千葉　鶯子

花折りつさゝ栗取りつそゞろゆく秋の山路の面白きかな　和歌山　郭子

柴おひてかへるゆふべのすゝき原秋風さむし鹿の聲する　三重　美津子女史

大君のあれ出ましゝけふの日をとつくに人も打あふくらむ　逗子　浜子

法の師かみのりのこゑもうちたえてきくのかさむし古寺の跡は　越後　佐藤榮子

虫の音も千草も枯れて行秋のあれしまがきに匂ふ白菊　群馬　飯塚俊子

このあした重傷ひ君の御枕に菊の晴さなかざしぬるかな　芝　よし子

秋こゝに皇國の頌そ美しき黄菊白菊榮に榮ゆて　本郷　西岡古代子

九重に盛ひさしき菊の花の君が千とせを祝ふけふかな　和歌山　木本歌子

うつしゑに國の白菊さゝげつゝ君のほまれをいのる今日かな　山梨　小林まつよ

朝夕に花たてまつる姉上の奥都城ところ黄菊香高さ　長野　上石小夜子

霜ふみてみ國に立ちますあて人の緋の御袂にうつる白菊　宇都宮　牛田つや子

君か代をうたひづれつゝ諸人のあふぎまつらむ今日のよき日を

● 大和　中島美枝子
胡地遠く戸毎にかざす日の旗やきみが御稜威に吹く朝の風

● 靜岡　伴野すゞ子
さらぬだに淋しき秋の夕暮を只一人行く山の麓路

● 小石川　三宅よし
菊の香も今日こそわきてゆかしけれみかどの千代をいのるを思へば

● 浪華　ちぬ子
日は落ちて駒に水かふ鴨綠の江の風寒く旅の花散る

● 京都　安田綾子
君あれし此の日猶さらときめきて朝日照るなりマンチユリの山

● 三重　亀井露登子
八千草の花に心のひかされておきの野みちのはかどらぬかな

● 三重　亀井露登子
虫の音も弱りはてたる庭の面に千代の香たかし黄菊白菊

● 伊勢　桑名恒子
かぎりなき御世の光はうら〳〵と朝日の旗にかゞやきにけり

● 筑後　彰子
ちがやまじり眞萩糸萩咲く野路蟋蟀の手の和綿織し行く

● 駿河　菊池民子
大君のあれましゝ日ともろ〳〵はおなじ心に君が代うたふ

● 小石川　黒崎ねい
日のみはたてゝ祝はぬ人ぞなき我が大君の生れましゝ日を

● 前橋　貞子
た折らんと思へどおしききくの花心もしらぬ秋雨のふる

● 能登　眞島はぎ
何となく別れ淋しき道の邊に心ひかるゝ秋の野の菊

● 越後　としこ
つくろはぬ賤が垣根もとり〳〵に黄菊白菊匂ひ合ひたる

● 小石川　田野友枝
萩桔梗錦を分けて草枕なく虫の音もたづね行かまし

● 新潟　美惠子
力なうすすきの花のうつむきて小雨さびしき夕ざれの路

● 大阪　大道寺白合
さながらに浮世さまをしめすにや秋の山道只紅葉ちる

● 美濃　山田愛子
みいくさの糧を運びてあへぎあへぎのぼる山路に野菊花さく

● 新潟　關根すゞ
うら〳〵と昇る旭日のさし添ふて香りのやます園の白菊

● 新潟　つや子
あくがれていましばらくと見るまゝに菊の細道月になりゆく

● 水戸　榊春子
力きき秋の夕日を照らされてまがきに匂ふ黄菊白菊

● 和歌山　松下民子
色に香に花すり衣つゆふかく染井の里に匂ふ菊かな

● 佐世保　佐竹露子
なるこ引く翁の顔も笑ましげに黄金波よる日字の里路

● 筑後　なつ子
うらぶれし旅の我身を慰むと行くて千草の花かさるかな

● 栃木　高橋寧子
天降りましゝ其の日を長にくり返しつゝ祝ふけふかな

大君のあれましゝ日を武夫は遼東の野にいかにほくらん　●　越中　田邊美登子

大君のあれ出でましゝ天つ日を武蔵のまゝに祝ふますらを　●　静岡　上田新子

朝まだき起き出で見ればおく霜の中にみだれて匂ふ白菊　●　栃木　白井光子

いろに香にかずはあれども白菊の露井に姿うつしつるかな　●　滋賀　剛塚かな

なのこらのきそひ〳〵ておちくりをひろふもをかしひなのなか道　●　名古屋　原田學

こゑもなき音もしづけき秋の夜に道もの尾花つゆぞやどれる　●　小石川　栗島ちゑ子

土かひしわかせば征きて寂しげに荒れ寝の庭に菊の花さく　●　淡路　山森秋子

紅葉まつ心はあれど雨毎にうつろふ菊はおしまれにける　●　愛媛　高橋茂子

亡き夫のうゑし白菊花さきて小雨そぼふる夕まぐれかな　●　美濃　山住綾子

ゆきましゝ母のみたまをなぐさめん此の白ぎくを手むけまつりて　●　長門　下野花子

のりとりし鼎の上に御旗建て菊の佳節を祝ふ今日かな　●　美濃　松原學子

あかなくに紅葉の蔭に日はくれぬ月にかへらん秋の山路　●　伊豫　渡邊房子

和歌兼題

煤拂　（〆切十一月十五日）

都歳暮　（披露十二月五日）

枯野

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲出征軍人を慰むる詞　（〆切十一月十五日）

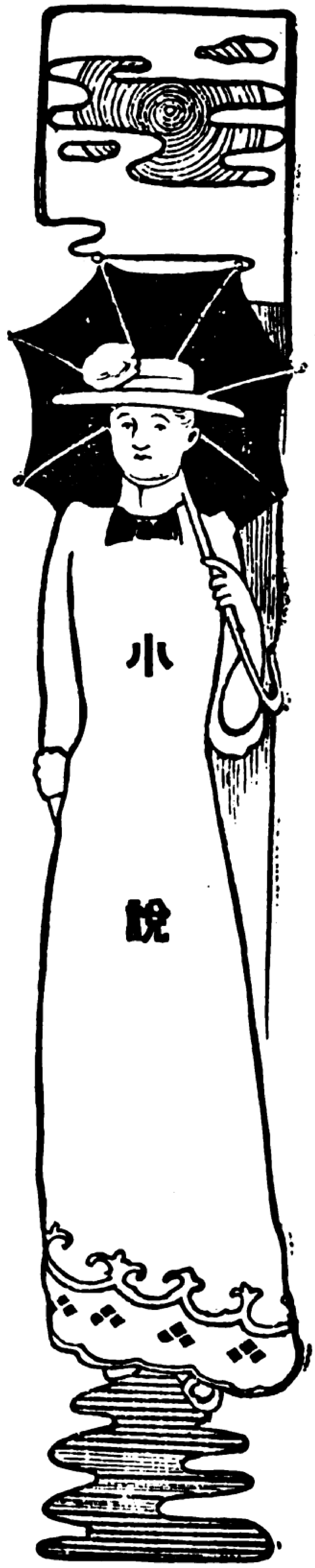
▲良家の寫眞

▲令孃の寫眞

右懸賞募集

懸賞文規程

投稿用紙　又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明　すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙縒にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず



離縁娘の一生

堀内新泉

離縁は女一生の恥、その恥を打明けて申すといふのはよく／＼の事で、まア御聞苦しくも一寸の間御辛抱して戴きませう。

その一

私の生れは京都の祇園、家は名高い葉茶屋、兄弟五人の私は中子、跡の四人は男子ばかり、世に云ふ一人娘として、寢卷の帶にも緋鹿の子の燃え立つやうな親の慈愛を、我が身一ッの上に集めて、何事も云ひなり次第の仕度放題、山海の珍味を列ねたお膳にもいやだ嫌ひと拗戻まはり、十歳を越えても手習せず、御本に向へばお腹が痛み、一日隔に欠さず來る踊の師匠や、琴三味線の法師にも無駄足踏ませて物習はず、今日はいやだと返しても、愛に溺れた兩親は、一度もお叱り成された事無く、況してや下の婢どもは、私が何んな無理を云つても、たゞ機嫌を取るばかり。されば何方に向いても思ふ事いふ事遂げぬは無く、出入の者もその通り、何事も自分の思ひ通りになるものだとのみ思ひ、お金は家に幾何もある、欲しいものは何でもすぐに私の眼の前に出て來るものだと合點して、數多の婢に冊かれ、女王さまのやうな生活を致して居りました。

けれどこれが皆、私の涙の種に爲つたのです。世の中は有爲變轉、人一生の浮沈ほど知れないものはありません、實に最う世の仕合を一身に集めて、結構づくめの生活をし、おなじ年配のお友達から羨まれて居りましたが、それがこの上も無い不幸の苗を植ゑて居たのでムいました。

『若い間の苦勞は買つてもしろ。』とか世話に申しますが、その當座は苦しくても、物に假令へて云はば、世の中の苦勞は丁度刀物を研ぐ砥石のやうなもので、世の中の苦勞に遭つて來た人で無ければ、少しも智慧が光りません。私などは子供の時から、有餘る家に育つて、苦勞に一度も遭はなんだものですから、智慧の使ひ道も知らず、身に何か一藝を覺えやうと云ふ心も起らず、事は何んでも他に命令けさへすれば捌けるものだと思ッて居たが、實に一生の不覺でした。

その二

十五六に成つても心はまるで子供のやう、毎日おいしい物を食べ、綺麗な着物や紅白粉に花の如く身を飾り、女子の生命と云ふ針も持たねば手習一ッして見やうともせず、打ふしお琴を復習ふ位が關の山、親は身を助けよとて敎て下さつたのでは無く、たゞ自ら娯む用意に琴でも覺えて置けと、敎へて下さつたその琴を、今日斯うして皆さまへお敎へ申し、それで果敢なく露命を繋ぐ身に成つたのだと時々おもひ切つては、獨熟熟後悔の涙に袖を絞るのでございます。

何故私は彼んな不自由のない家に生れたのであらう。いつそ貧しい家に生れたならば、自ら勵む氣になつて、女一人前のことも少しは覺えたであらう。假令姫君に生まれても、我が身の心がけ次第では、一人前の女として世に立てぬことはなかつたでせうが、もう回復はつきません、今日のやうな淺間しい身の上になつては、是も約り私の心懸が善くなかつたからです。言ひ換ふれば、我れと我が身の福分を破つたのでございます。

自分の口から皆樣に、こんな事をお話し申すは可笑しいやうですが、十七八頃の私の心は、自分の容貌を

飾ること許に苦勞して人から御美しいの活た人形の樣だと追從いはるゝを、嬉しく思ひ、姿見の前に我と我が縹緻を自慢する程でした。『最う片付けねばならぬ年頃。何處ぞ良い所に』と親に苦勞をかける頃になりますと、每日諸所方々から私一人の身を爭つて、一時は兩親もその應答に惱んだ程でしたが、十八の春に双方から吸ひつくやうに緣が熟して、いよ〳〵嫁入した先は、同じ西陣の名高い織物屋でした。

此家は私の生家よりも、幾倍勝つた物持で、その日其日の贅澤な生活向は、中々私の生家などの及ぶ所でない、それには太く滿足を感じましたが、父母の慈愛は天地の違ひで、生のは私を見ては笑み、舅姑と云ふ名の附く方は、私を見ては何んとなく睨むやうに思はれて『いやな家だ居にくい。歸らうか。』と云ふ氣に成りました。あゝ今から思ふと勿體ない、我儘氣儘に育つた私は、他の顏色を此方の誠意と行爲とで見事笑顏に變らせることはせず、向ふで妙な顏すれば、此方は露骨に泣いて困らせ、拗戻て〳〵口も利かず。何事も自分で爲たことのない私は、鬢にちよつと櫛入れるにも他を使ひ、氣に入らぬと云つては叱り、每日子供のやうに遊んで、心に親なく夫なく、家を思ふ考へは、微塵も有たず。今から思へば勿體ない程な兩親ながら流石に愛想をつかし『嫁も綺麗なばかりでは困る。あれでは當家の身代は讓られぬ。』と舅夫婦が差向ひで、語るのを、唐紙越に聞きました。

これを天の警めとして、少しづゝでも身の行狀を改めたならば、向ふも名譽の家、私の心掛を好しとして、一家の主婦たる資格を造つて下さつたのでせうが、夢の樣にくらして居た其頃の私に何うして左樣いふ立派な心が湧きませう。我儘一偏で押通して居りましたけれども容易に出すやうな事はいたしませんでした。で、何のやうにも、私の心の極め方次第で、立派な婦人にもなれ、その儘永く其家に居て、身の福分を保つ事が出來たのですが、冷い清水に手を洗ひながら『咽の喝きを止めることを知らぬ人。』とは私のことで、慈悲深い姑などは尙何うかして、家法に馴めやうと仕て下さ

つたにも拘はらず、一々それに背いて、自ら福を破りました。けれど、向ふからは迂濶と離縁はしませんでしたが、或る日私が拗戾て生家へ歸り、『最う歸らぬ。』と云つたを機會に、向から荷物を返しましたが、忘れもせぬ十九の夏、四條河原の納涼盛りで御座ました。

その三

離縁となつても齢はやつと十九、加之も兒は無し、縹致は少しも衰へませんでした。けれど、結婚以前と今日とでは、私の身の上に太した相違が出來て參りました。それは顏や姿は以前の儘でも、最早消らかな生娘だとは申されません。ですから同じ縁に附くにも、生娘と出戾とでは、反物と古着の違ひ一度袖に手を通した丈でも、古着は矢張古着。悲しいものです。我が身の幸福を末長く保つ爲には、如何なる苦勞にも耐へることを知らぬ私は、自ら離縁の不幸を招きました。

既に我れから前途の幸福を破つて『出戾。』と云ふ名を身に附け、自身の價値を落した私は、再縁するにしても、最早前より上の所は望まれません。世は皆私を瑕瑾物として見るばかりで、『此方へ貰はう。』と云ふ家はありません。けれど、私の生家の身代を目的にして、縁談を申込む所もありましたが、それは皆前とは比較の取れない家で、此方から膝を進めて相談に乘るやうな家では『美い姿色だが可惜いものだ。』と云ふばかりで、一人の望み手もありませんでした。これで愈愈前の離縁が生涯拭ふ可からざるキズに成つて、大切な我が身の價値を落した事に氣が付いたので御在ました。

けれど、私の持つて生まれた容貌と、名高い生家の身代とは、不束な私に猶も味方して、その翌年の春京極の呉服屋に花嫁で貰はれました。

此家も家族は前同樣、兩親に夫と三人、いづれも善い人ばかり。世の常の人ならば、『まあ仕合だ。』と喜び今度は假令何んな氣辛い思ひをしても、私の死場は此家だと覺悟し、前の不始末に自ら懲りて、何のやうにも身の行狀をば改めたのでせうが、烏は何處に行つても黒く、私はスグ我が地金を露骨に見はして、先づ

此家の生活向の生家に比べては、花の散つた後のやうに質素なのに不滿を抱き、生家を笠に着て大切な親夫を侮蔑にし、毎日女王のやうに身を飾り、三度の箸を持つ外には、何もせずうか〱として居ましたから、直樣私の無能を見て取り、『嫁の身として。針持つすべも知らぬ。』と、舅の一言、けれど慈悲ある姑は打消して、『鶴は芥堀る術知らず、大家に育つた娘は大方斯うしたもの、嫁を仕込むは姑の役。』と折ふし私を人無き所に召され、『針は斯うして持つもの』『尺度は斯うして使ふもの。』と、お煙草盆頭に頂く少女に慈母が仕込むやうに敎へられる極りの惡さ、今日まで、一家の爲に手足動したことのない私は、針に萬貫の重みを覺えて、生命も爲に縮まる思ひ厭で〱で堪らず、生家に逃げかへつて、仔細は云はず徒泣いて、生母に苦勞をかけた事も度々で御在ました。

　これでは假令大慈大悲の觀音樣を姑に持つても、所詮末永く治まりさうもない。果はその姑にも見切られて、一家は次第に波風立初め、その翌年の春、世は夜櫻の賑ひの最中に、又しても去られて生家に歸りました。

その四

歸つたのは宜が、今度は以前と樣子が變つて、生家も今では一敵國の思ひがした、それは何故か、父は昨年の夏に沒し、兄が跡目の相續人として立ち、旣に妻帶して居りました。さて煙いのは嫂、年は私の妹でしたが、世を見る眼光は私の姉で、一家の者から主婦として尊敬を拂はれてゐる、萬事女子の手本とも仕たい程の嫁、朝早くから襷外す暇なく、倦まず撓まず稼ぐので、怠情者の我には、兄の一擧一動が宛ら吭に白刄の思ひ、生家ながら實に居辛うございました。

　早二度までも離緣せられて、身の價値を下げた私はその後二年生家の厄介に成て居て、二十二歲に成りました。その中にやつと緣談は纒まりしもの丶今度は最う花嫁御では通用せず後妻として嫁つた先は、三條通の質屋。嫁つて見ると舅夫婦は未だ壯く、夫を長に男女五人の兄弟。かて丶加へて其の頃二歲の繼子さへあ

りて、實にいやな氣持でした。さて其處で夫の不斷を見ると、此處は一段身代の低いのみか、其日〳〵の家業に追はれて、以前とは雲泥の相違、小姑は揃つて意地惡く、姑は又火のやうな人、毎日朝から襷がけで、仕事を追う人、その敏捷は見てさへ眩のするほどでした。

今度私は此家に來て三日目に、以前の二人の姑の慈悲が戀しく、ひとり染々泣きました。されば何うして何時までも此の家に居られませうや。物の三月と經たぬ中、こらへ性のない私は堪へかねて、又三行半。

その五

それから母の病氣これも全く私故、其後病重く臨終の晩『お前ばかりの罪ではない。一ッは全く私の育方の惡かつた爲に、お前の身を今のやうに仕て仕舞つた。可愛さうに』と終焉の目からホロリと一滴落涙して、母は果敢なく成りました。『水を離れた魚』とは、母を亡つた時の私の身の上、生家へ歸るも恃むは母の慈悲一つであつた私は、最う〳〵何んの便りも無くなり、現在我が家に居りながら肩身の狹いことでした。

三年生家に居て、早二十五歲、兄は、誠に善く分つた人でしたが、或日私を呼び『お前は此の儘生涯家に居たからとて此方には差支は無い。一人の妹は飢させぬ併し此家の代が變つて、甥子姪子の代になると、悲しい思ひをせねばならぬ、而て見れば年老けぬ今の中、身を定めて我が子を持つのが何より上策。そこで行末望みある男を選み、一廉内助の功を與へて、倶に富貴の身になるのが、女子の功名、どうだ。その氣はないか、此許の辛抱に依つては、兄が決して苦勞はさせぬ、どうか行つて呉れよ』といふ事。

その六

さて私も今回といふ今回こそは何處までも動かぬと云ふ決心を持つて、いよ〳〵嫁いで來た先は、四條通の極めて小さな瀨戸物屋で、店に小僧がたゞ一人、女中一人も居ませんでした。私は此處に來ると倶に、兄を餘りと怨みましたが、されば云つて今度は生家へ歸ると云ふ譯に行かないので最う〳〵死んで仕舞つた

氣で、毎日馴れぬ水仕業、折しも冬で手が荒れる、その辛さは云へません。十日二十日は我慢もして見ましたが、これまで鍛へたことの無い身には、所詮我慢が出來ませぬ、一日夫の袖に縋り、

『生家の兄に相談して、切めて下女一人使はせて下さいまし』と申すと『今に乃公の力で、下女が欲しくば千人万人でも置いてやらう。それまでは成らぬ』とばかり、それで朝は未だ暗い内にたゝき起され、夜は遲くまで、何うしてこれに堪へられませう。兄は時々見えまして、襷かけた私を見ては、莞爾笑つて歸つて行く。『まあ怨めしい！』とその度每に思ひましたが、それは私の至らぬからで、この時若し一年辛抱しましたならば、兄は乾度約束を履行して、わたしの身の程無く幸福に滿たされたのでしたらうが、悲しい哉私にはその辛抱が出來なんだ爲に、一生の幸福をこの時取逃して、終に今日のお耻かしい身の上に成つたのでその四度目の夫は、兄の見た目違はづに、今日では社會に立派な地位を占めて居ります、けれど、それも是も皆な私の愚から起つたこと、今更後悔したとて何にもなりませぬけれど、せめては行先長い皆樣の爲めに轉ばぬ先の杖ともなれかしと、自分の踏んだ過失を懺悔致すので御在ます。

秋の江

菱花女史

一

江村十月、秋更けて、椎の實山にこぼるゝころ、稲穗刈り終へ風白う、井堰のせゝらぎの音獨り高くむせぶころ、銀杏長者が一人娘、染子は病みぬ。

幾日病みて、語らむに其人なく、日あたり好き四疊半の子亭に、あはれ憂き身を悶えつゝ、悲しみつゝ、幽かに聞ゆる水車の、かたりことりと單調なる遠響に、軈て逝けき冥の國へ誘はれゆくかと、染子は我れとおびえあがりさま、滲々にぬるゝ冷やかな汗して、恐

ろしの眼へハタと開きぬ。恐ろしきは女の罪とや、妾には薫様といふ許婚のありながら、好くも大それたる無分別をと是れぞ染子が病氣の種なる。月ごろ日ごろ、許婚の夫に背ける恨みと戀しき男の影慕へる情と、二つ重なりては縺れあひ、縺れあひては染子が小さき胸掻きむしりつゝ、一日々々艶に麗しかりし顔色の、次第々々に移ろひゆくは、やがて來ぬべき婚禮の日の、疾く〳〵目前に迫るなれば。今日もいとゞ思ひわづらひぬ。

「アヽ妾がこんな不埒な、女として何より面目ない、許婚の夫を見變へたなど、自分でさへ何の位良心に責めらるゝのを、それを母様や父様に、妾は如何しても薫様を夫にするのは厭で御座います、妾が薫様を夫に致す位なら、妾は寧そ死んで仕舞つた方が況で御座いますると申し上げたつて、父様も母様も昔氣質の堅いお方、那麼事しては幼少い時から堅い約束してある薫様に對して、むざ〳〵約束を反故にするやうなもの屹度お怒りなすつて、却の妾の不心得を懇々お說諭なさるは眼に見えるやう。それを妾が、たつて〳〵と剛情張つてお願ひ申せば、それこそ大變、那麼にお前が薫様を嫌ふのは、他に情人でも出來たのではないか、と彼の昔一徹のお氣性でお怒りなすつてアヽ恐い、妾、如何して其時になつて、父様、此の家は妾、何にも讓つて戴き度くは御座いませんから。皆な薫様に相續お爲せなすつて下さいまし、其代り、妾の身體だけは情願妾の自由にさして下さいまし。妾を可哀相と思召して、情願お願ひで御座います。とお願ひ申したとて、如何お許し下さらうぞ。

と云つて、たとひ父様や母様が、無理に、無理に、薫様を妾の夫と推附けなすつたつて、妾の心はもう疾から決まつてゐるものを、二世も三世も堅いお約束までした俊雄様に、いくら妾の此の切ない胸の中、申上げて、今までの事は皆な夢……夢……夢と諦めて、きつぱりお思ひ切つて下さいまし、と申上げたところで、そんな事、如何あの軍人のお氣性の勝た俊雄様がお肯きなすつて下さらうか。妾……妾にしたつて、そ、そ

りや可厭だ、可厭だ、あゝ可厭だ。え、一體もう奈何したら宜からう……。』

染子はうつら／＼机に凭れつゝ、今日此頃髪もけづらず、化粧もなさで色さへ衰へたる面差に、折柄の眼を外面へ見やれば、桃、李の木立、昨夜の風に凄じく吹きしをられて、云ひ甲斐もなく荒らけ立てる姿に今日、瑠璃碧と澄める大空の、光眩ゆき秋の日の射しそひ、十畝にあまる後園を、堆高きまで落葉散り布き、露の八千草いたいげに伏しまろび、虫の音もなく一村寂びて、遙か彼方なる鎭守の林に、燦然として渡鳥の立つ。

少時染子は夢うつゝにさまよへる樣う、なやましげの首垂るれば、後園につゞきて厨に近く、彦爺が池の家鴨に餌やる聲の、トトとさやかに聞えて、集りつどふ家鴨の羽ばたき。つるべ鳴きに鳴きつれたり。

染子は不圖幼き頃のこと思ひいでぬ。

『恰度其時妾が八歳許りだつたから、薫さんは十三位の時、薫さんと妾と彦爺と三人で、好くアノ鎭守樣の裏の雜木山に遊びに行つた事があつたが、恰度此節のやうな恁麼時に、妾は好く彦爺に背負さつて、お社の背後の、こんもりした段々を登つて行くと、右側の薄暗い、笹藪や蔓草が生茂つてる處に、一つ大きな洞穴があつて、其中に狐が澤山棲んでるんだと。其れで、だから時々行つて見ると、油揚や、お赤飯が好く洞穴の前に上つてる事があつたが、幼少い時と云ふものは何でも無邪氣なもので、一寸した事でも不思議に思つたり、珍らしく思つたり、それで其の洞穴の中には乾度、お母樣の狐や、お父樣の狐が、大勢の赤兒狐と一緒になつて、飯事して遊んでるのだらうと、左樣思つて／＼思ひつめて、何だか斯う可愛らしいやうな、懷しい樣な、そうツと穴の中を覗いて見たい樣な氣持がしたけれど、猶且恐くつて、到頭穴の中も見ずお山の上にあがつて仕舞つた事もあつたが、其時薫さんは、妾より大きかつたものだから、ずん／＼先に驅登つて仕舞つて、下を瞰して『勝つたア！』と、兩手を高く差上げたもんだから、妾は口惜しくつて／＼、爺やの

背中の上でどたんばたん〳〵暴れた事があつたが。アア彼時は、爺やも未だ腰も曲らず毅然として、白髮だつて那麼には無かつたのに、今では彼の通り皆な斑白になつて了つて、元は氣の強い、頑丈な男だつたのに、今ではお酒飲むと直に南無阿彌陀佛〳〵つて、アア人と云ふ者は年齡を老ると皆な彼んな風になるものかしら？ 父樣だつて、母樣だつて、昔は嘸お若かつた、それこそ今のやうとは違つて、もつとお身體も瑞瑞しく被在したし、お氣性だつて術と御氣丈で被在したに、今ではもう彼んなにお瘦せなすつて了ひ、何かお話すると、屹度何時でも、早く薫さんをお前と一緒にして、初孫の顏さへ見れば、それで既う親の役目は濟むんだから、それから二人は悠然西國巡禮に出かけて、八十八ヶ所のお札を頂きに行くんだなど、何だか心細い事ばかりア、本當に父樣や母樣は、夢……夢にも、妾の不埒な事は御存じなさらず、二言目には薫さん〳〵と被仰るんだものもしや妾が斯う〳〵と有のまゝ申上げて、是非俊雄樣と云ふ士官の方に嫁き度う御座いますとお願ひしたつて、そりや如何せ駄目は知れきつてる……えゝもう妾や如何したら宜からう！」

と思ひは又も廻り〳〵ぬ。

『けれど若しや是れが、萬一〳〵晴れて父樣もお許しなすつて下さり、母樣も勘忍して下すつて、それから薫さんも……何か是れも前世の約束事だらうから如何も仕方が無いッて諦めて下すつたら若しや皆樣が、それこそ妾の心をお察しなすつて下すつて、お前が其程俊雄樣と云ふ方の許に嫁き度ければ、嫁つても管はないと仰有つて下すつたら、妾や何んなに嬉しからう！まあ甚麼に嬉しいだらう。」

淋しげなる唇の上に、微笑の影かすかに溢れて、頼み少き望みにも、なほ少女の空想は限りもあらなく漂ひにけり。見よ！ 彼女のすがれぬる頰の色に、一點紅潮して、少時靈活の氣の動きけるを。

二

庭もせの落葉踏みさくみ、裾にまつはるさわ〳〵の

音、忍ぶとすればなほ萩の枯枝に袖ひかれつゝ、咄嗟おどろき振返る染子が横顔、傾く夕陽、秋風吹きぬ。懐しき情人の玉章深く胸に秘めて、人目忍ぶや忍ぶ草心みだれの氣もそゞろに、病氣の身も打忘れつ、庭下駄ひつかけ飛石傳ひに、納屋のほとりに出で來れば、屋後に聳ゆる數本の銀杏樹、風の通ひ路ところ廣くして、矗然と骨立ちて並ぶ頂きに、口惡鳥の二羽三羽、染子が姿見るより早く、嘲りの聲後にのこして、羽ばたき、消魂しう飛起てば、舞ふや金色の蝶ひらく\、夕陽をうけて散り來る脚元、餌あさりゐたる雛鳥の、ひよいと走りよつて嘴にくはへて、垣根の岸へ逃げてぞゆく。

後ろに前に心くばりながら、納屋の前を窃と通らむとすれば、六十路にあまる彦爺が斧揮ふ音、昨夜の嵐に吹きをられし槇柴の、大枝小枝はらひつゝ、一心になりて汗しどろなる、これも昔は戀の影かも、ぼんのくぼに載せたる、ヂヨン髷小さく、顔も皺びて枯木の姿憂しとも樂しとも世を思はざるを、染子が眼には何とか見えむ。

彦爺は仰ぎ見ると共に斧の手やめて、

「孃様、ハア何處へお出でなさるだねお病氣お惡いちふだが最う豪ら快うがすかえ？」

染子はアハヤ愕き、

「然あ、もう餘程快いの鳥渡其處まで、鎮守様にお參詣に行つて來やうと思ふの。」

「はア左様でがすかえ」と、暫時躊躇ひ、

「あのウそんだら歸路に笠原様にお寄んなさるだかね？」

「え、薫様のお家？　否え妾寄らしなくつてよ。」

「はア左様でがすかえ。」と何やら物云ひたげの口振。

染子は許婚の名聞くと共に、怪しく胸元轟きて、今ぞ罪犯しに行く妾を、神も佛も怒りに怒り給ひ、箇の正直神佛にも近かるべき爺をして諭し敎へしむるかと、なかく\に恐れ心抱きて、身内冷かに、唇、色變りにけり。

「孃様、俺孃様にハア申上げ度い事あるだが今ア聞か

れましねえだか。」

染子は物も云ひ得ず、微けく點きつ。

『俺、嬢樣のお爲め思つて云ふだから、嬢樣、些ッ、些ともお氣惡くなさらねえで聞いてお呉んなさいまし。』

爺は斧を傍へに差置きて、染子が脚下に小さく蹲まり振仰ぐ面悲しみの色に曇ると見れば、凹める老の眼に燦々と涙浮めり。

『嬢樣、本當に鎭守樣お參詣にお出でゝがすかえ、本當に鎭守樣なら、俺ハア何とも申上げねえだが、若しや〳〵左樣ぢや無えと嬢樣のお爲めにも好くねえだし笠原樣の若旦那樣ア甚麽にお情け無えッてお口惜しがんなさるだか、先刻も俺些ッくら水車小舍まで用あつて行つた處が、恰度薫坊樣にお目にかゝつて、先方樣云はつしやるにやア、近頃嬢樣アお病氣がお惡いとふ事だが如何なさらつしやつたか、もう直き、御婚禮の日も近寄つたゝに、嬢樣お不快いちふ事ぢやア誠にハヤ困るちふッて、大層心配して御座らつしたが。そんでノ斯う云はつしやるだ。爺や些とッて俺を人も誰れも居らない川端に伴れてらしつて、爺や、私は大變な事目に這入つた事がある實はこれ〳〵〳〵ッて、俺の顔覗いて泣出しさうな顔して仰有つたゝに嬢樣がお不快なア、私を嫌つて御座らつしやるからだ。そんで御祝言の日、一日々々と延ばしなさらうちふ御了簡なんだ、と斯ふ云はつしやるが、俺餘りの事に喫驚仰天してノ、何さ貴郎云はつしやるだよ、そんだ事があつて貴郎たまるもんで無え、家の嬢樣に限つて那麽浮いたことが、貴郎樣を嫌ふも嫌はねえも無えでは御座せんか、それこそ小唄にもある、筒井筒振分髮の昔よりッて、那麽殿御に似合はねえ邪推深え事て馬鹿らしい!つて俺笑つたゞら、若旦那樣ア眞顔にならつしやつて爺や、そりやアお前がナニも知らないんだからだ。私ア眞實嬢樣と餘所の男軍服着てゐる立派な男と、二人一緒で、歩いてる所見たゝッちふ仰有るだ。コレさ阿呆らしい、嬢樣に限つて那麽ことある筈無え、何かお前樣の眼の具合狂つてゝ、飛んでも無え餘所の人サ

見て、間違つて云ふでャ無えだか俺云ふと、私も初めは左様思つたから、後ろから密うッと尾いて丶見たが渡場の處で孃様その男と別れて、確かに此處の門サ這入る處まで見屆けたゞとハア斯ないに云はつしやるだそんで俺も、嗚呼困つた事出來たゞア、奈何したら宜かろか、嗚呼大變な事出來しちまつて、嗚呼俺ッ。』と聲顫はして、爺は手の甲に涙押拭ひつ、染子は其處にあるべくもあらぬ思ひに、蒼白き面の一際血の氣失せて、眼尻の刻み物凄じう、當途もなきところ凝視めながら、空しく乳のあたり押へてたちたる立姿の、風の吹き來ば倒れもやせむ。

『孃様、決、決して、お氣惡くなさらねえで、可えですかね、お氣惡くさつしやると俺、孃様に申譯が無えですから。』

爺は眼しばたゝきつゝ、息をきざみて、

『だが孃様、笠原様の若旦那様もお可愛相で御座らつしやらねえですかえ、そんで孃様、俺の顏見さつしやつて、涙ほろ／＼翻しなさつて、爺や私はね、お前も知つてる通り、お染様とは子供ン時からの何だもの、それを今ンなつて孃様に嫌はれちやア、衆人に對しても顏向が出來られねえし、私だつて斯様な情けねえ話無えだから、後生だに、お前が孃様にようく申上げとつて、濟んだ事だら如何も斯うもなる事で無えだから、これからア間違つた心サ起さしやないやうに、好うく孃様に申上げて呉んなされと、俺拜むやうにさつしやつて、仰有るだ、もう俺、薫坊様お氣の毒で／＼、俺もぽろ／＼涙出たゞが、孃様お願ひでがんす笠原様の若旦那様可哀相だと思召したら、情願早くお病氣をお癒しなすつて、爺は決、決して、惡い事ア申上げは致しましねえだから。』

額も埋むばかり地にひれ伏して、笑止に戰く胡麻鹽のチョン髷。

染子は我が身の今更に、燒盡さなんまで淺猿しう感じて、ア丶薫様がお氣の毒な其程にと思へば、云ひしらぬ悲しき情胸に迫り、氣うとく涙に暮るゝ折から、我が家の前にギイと帆桁動かす音して、木立の蔭にチラ

すと見ゆる白帆の影。

「千石ウ――万石ウ――何ィ重かろォよう引――ソイソイ。俺が戀サはァ――沈づウ――むまアでエ引ソイソイ。

染子が魂は遂に飛びぬ。

三

「俊雄さん、こゝに。」

「おゝ染子さん、よ、よく出て來て下すつた。」

一瞬の激辭、万感の胸臆、滿面に喜悦を漲らして、眉目麗しき一少壯士官は、江のほとり、柞の木蔭に佇立みつ、たえて久しく懐しかりし今宵の逢瀬を、嬉しやと染子が腕握りしめ、

「ま、全く貴女、よく出て來て下すつた！　實は貴女が御病氣と云ふんで、逢へず仕舞ひになッちまやしないかと、僕は甚麼に先刻から氣を揉んでゐましたか。」

染子は息急き切り、

「だつて妾、貴郎が急に彼國へお行でになるつて云ふお手紙ですもの、妾、本當に旣う喫驚しちまつて、如何したら宜からうと、迂路々々しながら漸と家内の者の眼を忍んで外へ出やうとしたら貴郎、爺やに捕まつちやつて、遂々こんなに遲くなつちまつたのよ。アゝ胸が悸々して。」

云ひつゝ衣の寬ぎ繕へば、俊雄は微笑みながら點首きて、

「や、でも好かつた。實は僕は是れつきり逢へずに彼國へ行かなきアならないかと思つてネ、實のところ大いに落膽してゐたのです。所でと、今日はいろ〳〵云つて置き度い事が有るんだけれど、染子さん、左樣やつて立つてゝ、身體に障りやアしなくつて。」

「えゝ、關はなくつてよ、大丈夫よ。」

「本當？　本當に身體に障りやしないの？　色澤が大變惡いぢやありませんか。」

「惡くつたつて那麼事どうでも好くつてよ……大丈夫よ。」と事もなげに云ひのけて、

「それよりか貴郎、本當に彼國へ被行しやるの？まア

妾、如何したら宜からう！。」

と哀れ染子が力無げに歎息すれば、俊雄も俄かに面くもらせ、

「アヽだから僕も困つて仕舞ふ。實際、如何したら宜からうか、恁麼事になる位なら、寧そ初めつから染子さんとこんな仲にならなかつた方が却てお互ひの爲めだつた……なんてね、思つてみたり。けれど今になつて、そんなこと幾干繰返したつて愚痴にしきやなりやアしない。もう明日明後日の中にや出征の命令が下るし、左樣すれば又と染子さんにや逢はれないしさ、ねえ染子さん、僕ア戰爭に行く事アさら／＼辛くア思はないけれど、僕が彼國に行つてる其間だ、染子さんだつてもう好い年頃だし、加之に銀杏長者の一人娘ぢやないか、婿や養子になりたがるものはそれこそ網の目から手さ、聞けば染子さんには幼少い時からの許婚もあるといふ、そこをだ、染子さんが否だ／＼で首振り通さうたつて、なか／＼左樣はいかれない。而して又、縱しんば僕が戰爭に征かないとしたところで、是れは比喩だけれど僕のやうな瘦士官が、染子さんのやうな御大家の婿君にやア迚も／＼得て望む可らざる事なんだし、だからね、寧そ僕は思ふのに、今までの事は夢、夢と諦めて、アヽ僕は辛いけれど、斷、斷然僕は花々しく出征しやうと思ふんだが、染子さん、あ、貴女は如何お思ひです？　如何お思ひなさいますネ。」

聲ふるはし語りつゝくる間に、士官の面は蒼めたり。染子はたゞ俯向けるまゝに、絹のハンケチわな／＼とふりつゝ。

「染子さん、貴女どうお考へ下さる？　本當にどうお考へなさるか。」

と重ねて問へど、染子は身をふるはして答へなく。

「染子さん、貴女が左樣默つてゐらしッちや困つちまふ。實は今日、却々出て來られない處を、漸と聯隊長に特別のお願して出て來たんですから、僕はどうしても九時、九時の消燈喇叭が鳴るまでに還らんけりやア……是非ともならんのですから。えッ染子さん、貴女さうたゞ、默然てゐらしちやア僕ア如何して好い

か……』

鼻すゝる聲して、染子はかすかに、

『俊雄さん、あ、貴郎、九時までにお還んなさらなきやならないの？。』

『九時まで暇がなくつて忙しい處を漸と出て來たんですから遲くなると大變、今夜こそは一秒でも遲くなるとそれこそ大變なんですから。』

『だつて妾、お話したい事が、大變にあるのよ。迚も僅の間ではあ、貴郎、後生ですから、もう一度明日出て來て下さる譯にや、い、いかなくつて。』

『さう！。』と俊雄は呻吟しながら、

『と、迚も駄目！ 駄目らしい今日出て來るのさへも却々容易なこッちやアなかつたんですもの困つちまふ！。』

と又少時ためらひて、

『染子さん、僕はつく／＼思ふのにね、軍人てもの平日見たまへ、勳章下げて、馬に乘つてゝ、一寸見ると勇ましいやうだけれど、一度戰場に出て見給へ、忽ち鐵砲丸一ッ飛んで來りや、果敢い事になつちまふんですもの……『花は櫻木人は武士』ッて、彼りや勇ましい比喩ぢやなくつて、果敢ないものゝ比喩だと、僕は今度つく／＼左樣思ひましたよ。僕だつて日本軍人の端くれですもの、出征して行きやアどうせ命は無いものとして、拔群の勳功を立てなきやならないと思つてね。實は斯うやつて染子さんにお別れに來るのさへ、軍人として耻しいやうな、意氣地なしのやうな氣がして、僕の部下の後備兵の奴の中にも、隨分妻を離縁して出て來たものさへあるのに、假にも將校でありながら、兵卒よりも未練がましい、實に／＼自分ながら耻しい極みだとは思ふけれど、どうしたもんだか僕には染子さんの事ばかり心に殘つて……仕樣がないんですの。餘り僕が意久地の無い事を云ふやうだけれど、實は僕は、今更軍人になつた事を恨むくらゐ――笑つて下すつちや厭ですよ――假に僕がね、やつぱり染子さんのやうな身分だつたらそれこそ千代に八千代に行末かけて、いつまでも／＼、染子さんと一所に暮らす事が出

來るんだにと、僕は昨夜つく〴〵寢臺の上で考へたですよ。軍人、……軍人なんて、世間の人は派手者のやうに云ふけれど、今日生きて、明日は大君のために野邊の露と消えるのかと、だから普通の人のやうに、惚れた情人と末ながく夫婦になる事も出來ず、何時でも死ぬる用意をしてゐなければならないし、僕だつても、今は斯うやつて、貴孃と手を取りやつて話してゐても、同じ秋の暮れない中、僕は此世の人でないかも知れない！　それを思ふと軍人は果敢いもの、嗚呼、嗚呼！」

染子は涙すゝりあげて、

「貴郎！　如何しても貴郎、戰爭にお出でにならなけりやならないの奈何しても？」

「それやもう無論のこと、三日以後になるか、一週間後になるかわからないけれど。」

「噫、妾、どうしたら宜う御座んせうねえ。」

俊雄が手とりて染子は限りなき悲しみに泣きぬ。

俊雄も泣けり。

夕暮の空高く晴れて、大江の彼方、一望の蘆花、紛々として雪と白く、一鳥寂寥を告げて過鳴きわたる、是れぞ詩に見る鷓鴣の聲か、仰げば星屑の光うすく、行衛に迷ふ白雲の影も、やがては消えむ夕映の色。二つ三つ、四つ五つ、落ちも得せぬ柞の枯葉の、覺束なげに夜風に戰ぐ見えて、脚元の枯むぐら、下に田鼠のさざめきあり。刻一刻、遠く連なる山々の姿も、近く澱める刈田の跡も、皆な蒼々茫々の中に包まれて、四邊の風色、更に淡として際涯も知らず、夢か、幻か、いと果敢くも黃昏れゆく底より、忽ち一道の夕靄濛々と江の面かけて湧立ちおこり、西より東、一帶の江水流るゝところ、水色を見ずして、たゞ白雲の簇るを見る。時に、地上の星かとばかり、俄かの瞬き忙はしう、里の家居に燈火射して、今、一トしきり、彼方の兵營にひゞく喇叭の聲、折柄靜けき夜の空氣推渡りつ、夕靄に融け、水面を滑り、餘韻は嚠々、長く江と共に下る。

四

蘆の花白き岸邊を添うて、ひた〳〵と流れにうかぶ浮

小舟の、
「そんなら僕はもう決心した！」
「妾も決心してよ。」
「僕の身體は運次第に任せると爲やうよ、君に捧げた命だもの、生きて還つて餘分の命があつたなら、其時こそ皆んな染子さんに上げて了ふよ。」
「妾、もう貴郎のためなら、どんな辛い事でも屹度辛抱しますわ。假令いくら薫さんに責められたつて、立派に振り通して見せますから、貴郎情願、立派な勳功を立てゝ歸つて來て頂戴。」
「歸つて來るとも！　誓つて僕は生きて歸つて來るからね。」
「本當によ、妾それを樂しみに。」
「樂しみに待つてゝ呉れ給へ。ところで。」と河下遙かに透しみつ。
「未だ染子さんの家まで來ないんだね。靄がかゝつて些とも見えやしない。」
「もう少許よ、アレ彼處の高い銀杏の木ね。並んでる處、もう直きよ。」
「彼處か、銀杏の木が薄茫乎高く見えるばかりで、靄がかゝつて好くア分らないが最う少許だ。ドレ一つ漕がうか。」
「あ、お止しなさいよ、打捨つてゝも舟が自でに流れてくわ。」
「だつて餘り遲くなるもの。消燈喇叭まで歸らんけりやア。」
「遲くなつたッて貴郎可いぢやありませんか。もう今夜ッきりねえ、アゝ本當に如何したら宜かろ、情けないわ。」
「ソレ又那麼弱い事を意久地のない事はお互ひに考へつこなしに、もう直き其處だから、僕が一番金剛力出して漕いで見やう。」
と俊雄の起ちあがれば、身を切るやうな河風一トしきり。
「染子さん、身體が病いつて、風邪を引いちや不可んですよ。ソレ僕の外套貸してあげるから、頭からすつ

ぼり冠つてゐたまへ。」

俊雄は己が外套脱ぎて、染子が身に着せつゝも、これぞ我がいとほしの女の顔の見納めかと、胸の切なさ堪えかねて、昵と見入れる染子が面痩の、扨ても窶れにけりな！　病ある身の顔は蠟の如く、髮やそゝけて鬢の後毛、涙の頰にひたと着いたり。俊雄――心今は破れて、哀れや〳〵と撞乎尻居に腕拱けば、不束の涙そぞろに差しぐまれつ。

『俊雄さん、いよ〳〵最うお別れねえ！」

腸千裂る聲もふるへば、染子は俊雄が兩手確乎と握り、膝にはら〳〵と散るは紅涙。

『…………」

俊雄はたゞ默然として。

『如何したら可いでしよ、妾や貴郞とお別れするのが厭で、可厭で、可厭で、可厭で。」

『…………」

『どうせなるなら此のまゝ、舟がこのまゝ流れちまつて、遠い〳〵人の棲んで居ない島か何かに流れ行つて了はないかしら。」

『…………」

『妾、どうせ貴郞にお別れする位なら生きてゐたつて詮方がないわ！」

何物の魔ぞ、魅入りて斯くは叫ばしむる？

染子が身はうつ蟬のもぬけの殼か、氣狂はしう叫ぶに、俊雄はおどろき、

『あ、染子さん、ど、どうぞ那麼事云はんで呉れたまへ。」

『だつて貴郞。」

『僕だつて染子さんとお別れするのは甚麽に辛いか。」

『そんなに辛けりや、貴郞もうお別れするのは止しませうよ。」

『だつて僕は軍人、日本帝國の軍人ぢや無いか。豈かそんな無分別な事は。」

『軍人だつて貴郞、どうせ死ぬのは同一事よ。」

『え？」

『え貴郞、好いでしよ、好いでしよ妾と一緒に――して

下すつたつて。」
叫ぶと共に染子は士官の膝掻抱いて泣きに泣きけり。
俊雄は眼を塞いで振仰ぎぬ。
小さき流星一つ、行方に落ちぬ。
少時が程は寂々寥々の水面を流れ〳〵しに、俄かに瀬の音澙々と蘆の間に聞えて、白き泡沫の沸り流ると見れば、船の端なく荻の洲に乗上げんとしつ、危く揺れてクルリ艫を舳に廻りながら、白き水泡と共々岸を放れて稍押流さるゝや、俊雄は愕然艫をば片手に、打見遣る其處は、早や手の届くばかりに近く染子が家。
「染子さん、さアもう遂々お家に來たですよ。」
と染子を扶けおこせば、
「呀ッ、貴郎、もう妾の家なの？　如何しませうねえ如何しませうねえ。」
と涙の眼に詰と我が家の影見きはめて、
「妾、默つて家を拔け出して來て、今更迚も歸れやア歸れやしなくてよ。　屹度家ぢやア妾が居ないつて今頃ア大騷ぎしてるに違ひないわ。」

と云ふ暇もなく、堤を傳ふ人聲喧しく罵りあひて、我が家の定紋つけたる提燈一つ、二つ、三つ飛び來たる。
「あッ、た、大變よ、屹度妾探しに。」
染子はあわてふためきさま、俊雄が蔭に隱れんとれば、
「その船、ちよつくら待つだよ。」
岸邊に提燈高く差揚げ、皺嗄れ聲に叫ぶは彦爺なり。
呀と云ひて仰様に倒るゝ染子、俊雄も周章てゝ艫掻い投捨てゝ必死になりて染子を扶けおこせば、岸邊の提燈二つに重り、
「あ、お染さんあ、貴孃、ど、何處へ行つたんです？。」
と黨の聲。
「その船此方端へおつ附けるだよ。」
「お染さん早く〳〵。お家ぢや先刻から大騷ぎで。」
「早くソノ此方端へおつゝけるだよう、ほれ〳〵艫臍が外れるだ、艫がぶん流れるだ。」
陸上も水上も周章狼狽の極、染子の顏は人心地もなく青くなりて。
「アレ俊雄さん、如何したら可いでしよ？　船を返し

て〳〵。」

俊雄、矢庭に起立らんとすれば、生憎や艪臍を外れたる艪の、船より四尺ばかり離れて、共々下へ〳〵と流れ去んぬ。俊雄はあわてゝ身を屈めんとすれど、腕押伸ばし拾はんとすれど、あはれ甲斐なし、次第々々に離れ〳〵て流れゆくを。陸にては、

「コレさお前様、遂々艪サぷん流しこくつて、其ン船如何する氣だア！」

「お染様、心、心配お爲なさるな。私今河下から船出すから。」

陸の上には人の數なほ殖えぬ。中に母君の御聲して、

「お染、お前はマア何處へ行つてたんだね、身體が病いつて云ふのに。」船の中にて、

「母様、情願御勘辨なすつて下さいまし、お詫は死んでいたしますから。」

と哀れに顫へつゝ、兩手を合せて伏拜む。

時に、彼方の兵營に喨々と消燈喇叭の響き！　俊雄は絶望の聲を放つて、

「もう駄目だ、遲くなつちやつた。」

「アレ勘忍して頂戴、妾が惡かつて。」

「詮方がない、もう詮方がありやしない、僕の武運が拙いんだ。」

陸にては狂氣の如く喚き叫ぶ母君の御聲の、

「お染、お染、短氣な事して呉れちやア不可いよ。」

「お染さん、私直ぐ救助船出すからに。」船にては、

「母様、情願不孝の罪は勘忍して頂戴よ、薫さん、妾の事は情願もう諦めて……」

染子は母上をおろ拜み、薫にも泣詫びつ。絶悲絶哀骨を刻んで、胸の痛みの堪へがたな、ひたと船底に倒れ伏せば、津々に濡るゝ涙の頰を、いとし可哀や、恐れなれやと、俊雄もそのまゝ折重りて、この世の名殘。最後のキッス。

風さむみ、鳴くは千鳥か、心あらば汝れも悼めよ。あはれ十里の秋江、此の恨み載せて何處まで逝く、更けゆく空に川霧白う、物おと絶えて流れ悠々、艪なき小舟の波のまに〳〵揺られ〳〵て。

（終）

横井氏の未亡人再嫁説を讀む

余は山陽鐵邑の一樵夫偶々十月五日發行の女學世界第四卷第十三號を繙くに開卷第一に「未亡人再嫁説」と題する横井時雄氏の言論あり、其所論の如何は余の解せざる處なるも其所論の一部に甚だ憤慨に堪へざる者あり切歯の餘江湖諸賢の垂教を仰がんとし敢て貴館に寄す記者閣下幸に樵夫が衷情の存する處を汲みて女學世界の一隅を割愛し賜はん事を切望に堪へず

横井博士は未亡人再嫁説の後段に於て左の如く立論せられたり「世人は戰死といふことを特別なる死の如く考へ一の戰死は一の夫婦の術離を意味するかの如く思ふてゐる然れども凡て誰でも其職務に斃ふるゝは皆戰死である技師が噴火山口の測量に斃ふるゝも銀行員が其勤務中に死するも水夫が波濤の間に溺死するも皆均しく人が職務の爲に斃るゝので即ち軍人の戰死も同様である然るに世人は餘り軍人の戰死其ものが花々しきため一切これに呑まれて彼等の死を一種特別のものと考へるのはよくない云々」右博士の所論に對し江湖の諸賢は果して如何なる感想を抱き賜ふ歟余は其所論の餘りに極端なるに痛嘆せずんばあらず嗚呼懐かしき故山を後にし最愛の妻子と別を告げ一死奉公の赤誠を以て戰場の花と散り歴史の玉と碎けし猛將をして俸給に眩惑さるゝ技師の測量に死し銀行員の職務中に斃れ或は水夫の波濤に溺死すると毫の撰ぶ所なしと同視せらるるは抑々何たる僻論ぞや横井先生は學者として代議士として將た基督教徒の長者として地位あり、名望あるの大家先生、其の一擧一動、一言一句は後輩の皆以て教訓とする處、先生學者として戰死なる文字に解釋を施されたる者なりや否は不敏の樵夫知るに由なしと雖、所論の全體よりするに於ては戰死の一語に斯くの如き文理解釋法を許さず、況んや今日の場合をや、余は恐る先生にして此くの如く我忠實勇武なる將士の戰死を輕視せらるゝに於ては、先生の地位と名望に毀損するなきやを、殊に其言の婦女子の最も歡讀多き女學世界に於て主張せらるゝに至りては、其放膽も甚だしからずや、由來婦女子の多くは先輩大家の所論とあらば徒らに敬服し、先入主の生じ易きを常とする者なるに、大膽にもかゝる突飛の説を弄せらるゝに於ては無智の樵夫等は層一層の激憤に堪へず、吁々江湖博雅の君子よ言論の自由は國憲の保障する處なりと雖、軍國の今日かかる言語は社會國家の爲毒の害なき者なり歟、謹て教を待つ　妄言多謝

美陽　田中生

女學世界 冬季增刊

家庭十二ヶ月

十一月十五日發行

人間社會は實利の世界、勞働の世界、多忙の世界たると同時に又た遊散の世界、娯樂の世界、閑日月の世界たり、活動の裏面には休息あり、社會百生活の反面には家庭十二ヶ月の慰樂あり、吾人は殺風景なる生活境裡以外にこの閑天地の樂趣を得て讀者と共に樂まんと欲す、懸り合ふたる日露の戰爭は前途頗る遼遠なり、彌久なり、外征の後援に務めらるゝの諸君、請ふ少しく襟を寛げて此の樂境に逍遙し玉はんことを。

目次概要

二十世紀改良家庭
西洋交際の手振
クリスマス
東京四季だより
細君日記
消息十二ヶ月
料理十二ヶ月
四季の衛生

春あそび
雛まつり
秋の聽虫
四季の服裝
家庭暦
四季の遊覽
名家年中行事
戀愛春秋

女學生日記
四季の物語
四季のなぐさみ
四季の挿花
四季の出ある記
庭園四季のながめ
田舎の正月
四季出納 錢の足

女學世界第十六號 記事豫告

十二月五日發行

▲生活狀態の改良　柳澤伯爵
▲家事經濟　棚橋絢子
▲世態說法　水原翠香
▲郡司夫人占守談　中村鈴子
▲貴婦人の嗜好　中村鈴子
▲女子と職業　羽仁もと子
▲家政二十四時　河西璞
▲小兒の食物　ドクトル川瀨元九郎
▲將軍と兵士の妻　小野田花子
▲源氏十人女蕩　田中夕風
▲支那史上の婦人　大町桂月
▲雪國の有樣　茨城藤葉
▲家庭夜話　報國生
▲動物の雌雄淘汰　紫苑女史
▲熱の話　高田濱子
▲攝生法談話會　日○生
▲社會百生活　△△

發兌元 **十月再版圖書** 博文館

第七版

大橋乙羽君著

續千山萬水

全壹冊 洋裝上製
正價五拾錢 郵稅拾錢

第廿一版

鹽井、大町、武島君合著

花紅葉

全壹冊 洋裝上製
正價廿五錢 郵稅六錢

第十三版

大和田建樹君著

雪月花

全壹冊 洋裝上製
正價卅五錢 郵稅六錢

第十版

菅綠蔭君著

成功要錄

全壹冊 洋裝上製
正價廿八錢 郵稅四錢

嚴谷小波山人石橋思案外史校訂

—(再版)—

紅葉全集

(第二卷)

●伽羅枕
●むき玉子
●夏小袖
●おぼろ舟
●紙きぬた
●戀の病

萬朝報評
第二卷には例の優艶なる伽羅枕、二人女、洒脱なる、夏小袖、輕妙なる戀の病等あり、(中略)、裝幀の美、印刷の鮮麗近時多く其比を見ず、曾て新聞雜誌等にて讀みたる故才人の作も斯く美本となれるに對して通覽すれば亦更に一段の趣味あるを覺ゆ

正價壹圓八拾錢 小包拾五錢

文學士大町桂月君著

—(第十七版)—

黃菊白菊

(全壹冊)

桂月先生の文は蠻猶を動かすこと已に久し悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如し、哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫ぶが如く、句々血を吐き、字々珠を綴る、麗にして沈痛優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品一讀すれば人の思ひを清くし、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る、讀書家の燈下、この絕好可憐の冊子なかるべからず。

正價貳拾五錢 郵稅六錢

(後付の一)

（後付の二）

書出來廣告　博文館

第八版
史記列傳講義（上巻）
城井悔庵君述
正價金二十五錢
郵稅八錢

第十五版
正文章軌範講義
石川鴻齋君述
正價金二十五錢
郵稅八錢

第十二版
祝辭演説法
博文館編輯局編
正價金二十五錢
郵稅六錢

第五版
海軍出身案内
長尾海軍大尉著
正價金四十錢
郵稅六錢

文學士大町桂月君著
（第四版）
女學訓

家庭以外學校以外の女子教育家桂月先生が獨特の奇警なる觀察を寓し趣味津々として乾燥無味なる小言の比にあらず讀んで面白きが上に女子百般の事に關して適切なる訓戒を垂れて女子教育上の指南車たり又木鐸たり世上の女子は更なり娘を有せらるる父母も必ず一本を備へ玉はざるべからず。

正價廿五錢郵稅四錢

文學士大町桂月君著
（第六版）
處生訓

今や社會は智育以外品性の陶冶を望むこと切也才力材能の人以外品性ある人士を求むるに至れり而して品性の教育は學校教育にのみ任すべからず此書や靈犀の眼縱横の筆を以て學に志し道に志し世に處する者の木鐸となり指導者となり皷舞者となり今の社會の心靈上の渇を醫するこそ旱天の雨も啻ならざるものあらむ。

正價廿五錢郵稅四錢

（後付の三）

發兊元　十月再版圖

第五版

村井弦齋君著

酒道樂

（上卷）正價金五十五錢　郵稅金八錢

第七版

博文館編輯局校訂

通俗三國志

（上卷）正價金六十錢　郵稅金十六錢

第八版

博文館編輯局校訂

水滸傳

（上卷）正價金六十錢　郵稅金十六錢

第六版

高橋光威君譯

ロビンソン絶島漂流記

正價金四十錢　郵稅金八錢

理學士龜高德平君著

（第四版）

有機化學

化學の講究の複雜にして多大の記臆力を要するは夙に學生諸氏の難する所なり此書は著者が最新の原書を參考し多年の實驗に徵し能く小冊子中に多數の事項を收容し學理に偏せず實用を重んじ初學者をして其大要を知得把住せしむるものにして務めて平易なる文章を以て記述したれば斯學を講究し此業に從事せんとするものゝ一讀すべき良書なり。

上製五十五錢郵稅十錢
並製四十錢郵稅八錢

理學士佐藤傳藏君著

（第八版）

萬國新地理

亞細亞總論
韓國◎支那◎西伯利◎中央亞細亞◎高加索◎佛領印度支那暹羅◎英領海峽殖民地◎馬來群島◎英領印度◎皮路直斯坦◎阿富汗斯坦◎波斯◎亞剌比亞◎亞細亞土耳其
亞細亞人文地理總論
亞細亞地文地理總論
亞細亞各邦地方誌
歐羅巴總論
露西亞◎瑞典那威◎獨逸◎丁抹◎和蘭◎白耳義◎英吉利◎佛蘭西◎西班牙◎葡萄牙◎瑞西◎以太利◎墺太利◎匈牙利◎バルカン半島諸邦總論
歐羅巴人文地理
歐羅巴地文地理
歐羅巴各邦地方誌
北亞米利加總論
地文地理◎人文地理◎邦土誌
南亞米利加
亞弗利加總論
濠太利亞總論

上製五十五錢郵稅十錢
並製四十錢郵稅八錢

（後付の六）

（後付の七）

女學世界冬季增刊

人間社會は營利の世界、勞働の世界、多忙の世界たると同時に又た所散の世界、娛樂の世界、閑日月の世界たり、活動の裏面には休息あり、社會百生活の反面には家庭十二ヶ月の慰樂あり、吾人は殺風景なる生活境裡以外にこの閑天地の樂趣を得て讀者と共に樂まんと欲す、懸り合ふたる日露の戰爭は前途頗る遂遠なり、遐久なり、外征の後援に務めらるゝの諸君、請ふ少しく襟を寬げて此の樂境に逍遙し玉はんことを。

家庭十二ヶ月

正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

十一月十五日發行

目次概要

●都門の四季 ●田舍の四季 ●支那の正月 ●クリスマス ●栽培十二ヶ月 ●料理十二ヶ月 ●消息十二ヶ月 ●四季の服裝 ●四季の衛生 ●四季の贈答

●春あそび ●雛まつり ●汐干がり ●花見（春の運動會） ●避暑の樂 ●木の子がり ●紅葉狩（秋の運動會） ●盆石と盆景 ●金魚と朝顏 ●室內裝飾

●盆と正月 ●婚禮と出產 ●祭禮と葬式 ●和洋宴會 ●江戶名所めぐり ●西京名所めぐり ●大和名所めぐり ●伊勢參宮めぐり ●浦島龍宮話 ●宇治拾遺物語

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界
(明治卅七年十一月五日發行 毎月一回五日發行) 第四卷第拾四號 (明治卅參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㉛
明治37年10月(第4巻第13号)、11月(第4巻第14号)

2007年7月10日　第1刷発行　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3172-3　C3321